

嶧口古墓
上古市遺跡

2020年2月

国土交通省浜田河川国道事務所
島根県教育委員会

えきぐち
嶺口古墓
かみふるいち
上古市遺跡

2020年2月

国土交通省浜田河川国道事務所
島根県教育委員会

序

一般国道9号の浜田市三隅町～益田市遠田町間については、緊急時の代替路線の確保、医療・観光・物流活動の支援を目的として、中国地方整備局浜田河川国道事務所では山陰自動車道の一部である三隅・益田道路を事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は平成29年度に実施した浜田市三隅町地内に所在する嶮口古墓、上古市遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。

嶮口古墓では江戸時代の古墓や江戸時代～近代の加工段を確認しました。また、上古市遺跡では弥生時代から中世にわたる多量の木製品が出土し、当時の三隅地域に居住した人々の生活と技術を解明する資料が得られました。本報告書がこの地域の歴史を解明する基礎資料として広く活用されることを願っております。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

令和2年2月

国土交通省中国地方整備局
浜田河川国道事務所長 安野 聡

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、平成 29 年度に実施した一般国道 9 号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

発掘調査を行なった罫口古墓では、基壇や加工段を確認しました。また、上古市遺跡では弥生時代から中世にわたる多量の木製品が出土し、石見地方西部における人々の生活や技術を解明する上で貴重な成果が得られました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

遺跡の調査や報告書作成にあたっては、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所をはじめとする諸機関、多くの地元の方々に御協力をいただきました。関係の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和 2 年 2 月

島根県教育委員会
教育長 新田 英夫

例言

1. 本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成29年度に実施した一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

嶺口古墓（島根県浜田市三隅町古市場 514-1）	789㎡
上古市遺跡（島根県浜田市三隅町古市場 462）	500㎡

なお、遺跡は従来「角落し遺跡」として調査されていた（島根県教育委員会『海石西遺跡 角落し遺跡 廻り田遺跡近世山陰道跡（馬橋地区） 神出西遺跡 一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』2018年3月）。調査の結果、遺跡の範囲が小字名よりも広がることが確認されたことから、本報告をもって名称を「上古市遺跡」に変更する。

3. 調査組織

調査主体	島根県教育委員会
平成29年度事務局	萩 雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋 聡（総務課長）、池淵俊一（管理課長）
調査担当者	間野大丞（調査第3課長）、是田 敦（調査第4係長）、伊藤徳広（企画員）、久保田一郎（企画員）、松山智弘（嘱託職員）、川崎英司（調査補助員）、世良 啓（調査補助員）、佐伯幸俊（調査補助員）、大田晴美（調査補助員）
平成30年度事務局	椿 真治（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋 聡（総務課長）、守岡正司（管理課長）
調査担当者	角田徳幸（調査第2課長）、間野大丞（調査第3課長）、久保田一郎（企画員）、松山智弘（嘱託職員）、飯塚由起（調査補助員）
令和元年度事務局	椿 真治（埋蔵文化財調査センター所長）、和田 司（総務課長）、守岡正司（管理課長）
調査担当者	宮本正保（調査第2課長）、間野大丞（調査第3課長）、久保田一郎（企画員）、松山智弘（嘱託職員）、飯塚由起（調査補助員）

4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、大畑建設株式会社（益田市大谷町）に委託した。

5. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。（五十音順・肩書きは当時）

田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）、中村唯史（三瓶自然館企画情報課調整幹）、箱崎和久（奈良文化財研究所遺構調査室長）、山根正明（元松江市史料編纂室専門調査員）

また、以下の方から御協力、御助言をいただいた。

榊原博英・藤田大輔（浜田市教育委員会）、久住猛雄（福岡市埋蔵文化財センター）、田畑直彦（山口大学）

6. 挿図中の方位北は、測量法に基づく平面直角第三座標系 X 軸方向を指し、座標系 XY 座標は世界測地系による。レベル高は海拔高を示す。
7. 本書で使用した第 2・3 図は国土地理院の 1/50,000 地図及び 1/25,000 地図（益田、仙道郷、三隅）を使用して作成したものである。
8. 本書に記載する土層は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に従って記述した。
9. 発掘調査に伴って、出土木製品の保存処理を次の機関に委託した。
 - 平成 29 年度 一般財団法人大阪市文化財協会
 - 平成 30 年度 一般財団法人大阪市文化財協会
 - 令和元年度 一般財団法人大阪市文化財協会
10. 本調査に伴う自然科学分析（軟 X 線観察・植物珪酸体分析・花粉分析）及び樹種同定は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託し、その成果を第 5 章に掲載した。
11. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は伊藤・久保田・是田・松山が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、各調査員・臨時職員・整理事業員が行ったほか、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。
12. 本書の執筆は、第 1 章～第 2 章を久保田、第 3 章及び第 6 章 1 節を久保田・間野、第 4 章を間野・松山、第 6 章 2 節を松山が担当した。第 5 章は各節ごとに執筆者を明記している。
13. 本書の編集は、間野、久保田、松山が行った。
14. 本書の編集にあたっては、DTP 方式を採用し、Adobe 社の Adobe InDesign CC・Adobe IllustratorCS5・CC、Adobe PhotoshopCS5・CC を用いて作業を行った。
15. 本書掲載の図面、写真、出土遺物は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町 33）で保管している。

凡例

1. 遺構の略号は下記のとおりである。

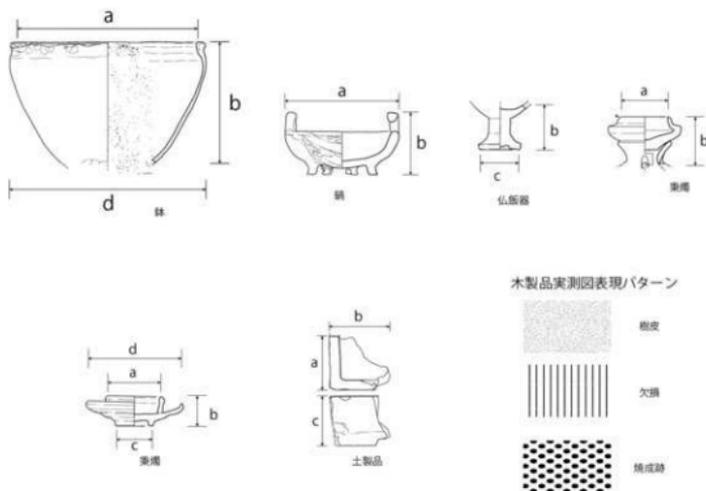
SK：土坑 SD：溝状遺構 SX：性格不明遺構

2. 本文中・挿図中・写真図版中の遺物番号は一致する。

3. 埴口古墓については、遺物観察表の法量の計測値は、下図における a,b,c,d 各部分の計測値を記したものである。

4. 上古市遺跡出土木製品については、取り上げ番号を括弧書きで付けている。

5. 上古市遺跡の木製品実測図は、下図における表現パターンで示している。



本文目次

第1章	調査に至る経緯	1
第1節	事業計画の概要	1
第2節	埋蔵文化財保護部局への照会と調整	1
第3節	法的手続き	2
第2章	浜田市三隅地域の遺跡と歴史的環境	3
第3章	蟬口古墓の調査	7
第1節	位置と環境	7
第2節	発掘作業と整理事業の経過	7
第3節	調査の概要	9
(1)	基本層序	9
(2)	検出した遺構と遺物	9
(3)	出土遺物	17
第4節	小結	32
(1)	遺構	32
(2)	遺物	33
第4章	上古市遺跡の調査	39
第1節	位置と環境	39
第2節	発掘作業と整理事業の経過	43
第3節	上古市遺跡6区の基本層位	45
第4節	調査の概要	47
(1)	第1遺構面の調査	47
(2)	第1遺構面出土品	50
(3)	第2・3遺構面の調査	54
(4)	第4遺構面の調査	57
(5)	第2・3・4遺構面出土品	61
(6)	第5遺構面の調査	88
(7)	第5遺構面出土木製品・土器	90
第5節	小結	93
第5章	自然科学分析	95
第1節	上古市遺跡周辺地域の古環境変遷	95
第2節	上古市遺跡出土木質遺物の樹種同定	119
第6章	総括	125
第1節	蟬口古墓の調査成果	125
(1)	遺構	125
(2)	一石五輪塔	128
第2節	上古市遺跡の調査成果	129
(1)	平安～鎌倉期	130

(2) 弥生時代～古墳時代	131
(3) まとめ	139

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第45図 上古市遺跡6区第4面全体図	57
第2図 事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地	3	第46図 上古市遺跡6区第2・3・4遺構面西側木製品出土状況	59
第3図 浜田市三隅町の遺跡	4	第47図 上古市遺跡6区第4遺構面木製品出土位置・60	
第4図 堺口古墓調査区的位置と周辺地形図	7	第48図 上古市遺跡6区第2・3・4遺構面・3層出土土器	61
第5図 堺口古墓調査前地形測量図	8	第49図 上古市遺跡6区第2遺構面出土木製品(1) ..	64
第6図 堺口古墓試掘調査トレンチ3出土遺物	9	第50図 上古市遺跡6区第2遺構面出土木製品(2) ..	65
第7図 堺口古墓調査後地形測量図	10	第51図 上古市遺跡6区第2遺構面出土木製品(1) ..	66
第8図 堺口古墓遺構配置図・調査区中央土層図	11	第52図 上古市遺跡6区第3遺構面出土木製品(2) ..	67
第9図 堺口古墓加工段1実測図	13	第53図 上古市遺跡6区第3遺構面出土木製品(3) ..	68
第10図 堺口古墓礎石建物実測図	14	第54図 上古市遺跡6区第3遺構面出土木製品(4) ..	69
第11図 堺口古墓SX1実測図	14	第55図 上古市遺跡6区第3遺構面出土木製品(5) ..	70
第12図 堺口古墓基壇1実測図	15	第56図 上古市遺跡6区第3遺構面出土木製品(6) ..	71
第13図 堺口古墓基壇2実測図	15	第57図 上古市遺跡6区第3遺構面出土木製品(7) ..	72
第14図 堺口古墓基壇3実測図	15	第58図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(1) ..	73
第15図 堺口古墓基壇1出土遺物	16	第59図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(2) ..	74
第16図 堺口古墓出土遺物(1) 陶器その1	18	第60図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(3) ..	75
第17図 堺口古墓出土遺物(2) 陶器その2	19	第61図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(4) ..	76
第18図 堺口古墓出土遺物(3) 陶器その3	20	第62図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(5) ..	77
第19図 堺口古墓出土遺物(4) 陶器その4	21	第63図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(6) ..	78
第20図 堺口古墓出土遺物(5) 陶器その5	22	第64図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(7) ..	79
第21図 堺口古墓出土遺物(6) 陶器その6	23	第65図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(8) ..	80
第22図 堺口古墓出土遺物(7) 陶器その7	24	第66図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(9) ..	81
第23図 堺口古墓出土遺物(8) 陶器その8	25	第67図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(10) ..	82
第24図 堺口古墓出土遺物(9) 陶器その9	26	第68図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(11) ..	83
第25図 堺口古墓出土遺物(10) 磁器その1	27	第69図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(12) ..	84
第26図 堺口古墓出土遺物(11) 磁器その2	28	第70図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(13) ..	85
第27図 堺口古墓出土遺物(12)	30	第71図 上古市遺跡6区第5遺構面全体図	88
第28図 堺口古墓出土遺物(13) 石製品	31	第72図 上古市遺跡6区第5遺構面杭列	89
第29図 上古市遺跡の位置と周辺の遺跡	40	第73図 上古市遺跡6区第5遺構面出土木製品(1) ..	90
第30図 上古市遺跡の位置	41	第74図 上古市遺跡6区第5遺構面出土木製品(2) ..	91
第31図 上古市遺跡調査区的位置(1/2000)	42	第75図 上古市遺跡6区第5遺構面出土木製品(3) ..	92
第32図 上古市遺跡調査地区割り	43	第76図 上古市遺跡6区第5遺構面・9層出土土器 ..	93
第33図 上古市遺跡6区全体図	44	第77図 試料採取地点(6区平面図)	95
第34図 上古市遺跡6区土層図	46	第78図 試料採取位置(6区西壁土層図)	95
第35図 上古市遺跡6区第1遺構面全体図	48	第79図 試料採取位置(6区南壁土層図)	96
第36図 上古市遺跡第1遺構面部分図	49	第80図 軟X線写真観察結果(西壁1)	97
第37図 上古市遺跡6区第1遺構面杭列	50	第81図 軟X線写真観察結果(西壁2)	98
第38図 上古市遺跡6区第1遺構面出土木製品(1) ..	51	第82図 軟X線写真観察結果(西壁3)	98
第39図 上古市遺跡6区第1遺構面出土木製品(2) ..	52	第83図 軟X線写真観察結果(西壁4)	100
第40図 上古市遺跡6区第1遺構面出土土製品	53	第84図 軟X線写真観察結果(西壁5)	100
第41図 上古市遺跡6区第1遺構面出土土器	53	第85図 軟X線写真観察結果(西壁6)	101
第42図 上古市遺跡6区第2・3遺構面全体図	54	第86図 軟X線写真観察結果(西壁7)	101
第43図 上古市遺跡6区第2・3遺構面部分図	55	第87図 軟X線写真観察結果(西壁8)	102
第44図 上古市遺跡6区第2・3遺構面出土木製品出土位置	56	第88図 軟X線写真観察結果(南壁1)	102
		第89図 軟X線写真観察結果(南壁2)	104

第90図	軟X線写真観察結果(南壁3)……………	104
第91図	軟X線写真観察結果(南壁4)……………	105
第92図	軟X線写真観察結果(南壁5)……………	106
第93図	軟X線写真観察結果(南壁6)……………	106
第94図	軟X線写真観察結果(南壁7)……………	107
第95図	軟X線写真観察結果(南壁8)……………	108
第96図	軟X線写真観察結果(南壁9)……………	108
第97図	軟X線写真観察結果(南壁10)……………	109
第98図	軟X線写真観察結果(南壁11)……………	109
第99図	花粉ダイアグラム(6区西壁)……………	110
第100図	植物珪酸体ダイアグラム(6区西壁)……………	114
第101図	試料採取地点(6区:自然木)……………	119
第102図	地蔵煙道跡の位置……………	125
第103図	地蔵煙道跡平面図・土層図……………	127
第104図	地蔵煙道跡出土遺物……………	127
第105図	上古市遺跡遺構変遷図……………	129
第106図	上古市遺跡出土古代・中世土器……………	130
第107図	松江市鹿島町神田遺跡……………	131
第108図	板材……………	133
第109図	扉・栓・小舞……………	134
第110図	台輪・壁材(1/15)……………	134
第111図	壁材と掘立柱建物との規模比較……………	134
第112図	浜田市三隅地区弥生・古墳時代土器集成……………	136
第113図	古墳時代前期の益田平野の土器様相……………	137
第114図	益田平野の北陸・近江地域系土器……………	138
第115図	周防・長門系甕形土器の型式変化……………	138

表目次

表1	事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地一覧……………	3
表2	浜田市三隅町の遺跡……………	5
表3	堺口古墓基壇1出土遺物観察表……………	16
表4	堺口古墓調査区内出土遺物観察表……………	33
表5	上古市遺跡6区第1遺構面出土木製品観察表……………	52
表6	上古市遺跡6区第1遺構面出土土製品観察表……………	53
表7	上古市遺跡6区第1遺構面出土土器観察表……………	53
表8	上古市遺跡6区第2・3・4遺構面・3層出土土器観察表……………	61
表9	上古市遺跡6区第2・3・4遺構面出土木製品観察表……………	86
表10	上古市遺跡6区第5遺構面出土木製品観察表……………	90
表11	上古市遺跡6区第5遺構面・9層出土土器観察表……………	93
表12	同定・鏡検対象分類群……………	96
表13	微化石概査結果……………	110
表14	花粉化石組成表(6区西壁)……………	112
表15	植物珪酸体化石組成表……………	114
表16	試料一覧(1)……………	122
表17	試料一覧(2)……………	123
表18	地蔵煙道跡出土遺物観察表……………	128

文中写真目次

写真1	堺口古墓試掘調査トレンチ3出土遺物……………	9
写真2	上古市遺跡6区第2・3遺構面……………	55
写真3	上古市遺跡6区第2・3遺構面北西部分……………	55
写真4	上古市遺跡6区第2～4遺構面間土層……………	58
写真5	上古市遺跡6区第5層……………	58
写真6	上古市遺跡6区第8層……………	58
写真7	地蔵煙道跡の古墓検出状況……………	126
写真8	地蔵煙道跡の古墓……………	126
写真9	2次加工……………	130

図版目次

堺口古墓	
図版1	遺跡遠景(北西から) 遺跡遠景(南東から) 調査前(西から)
図版2	基壇1調査前 近景調査後 調査区中央土層(1)
図版3	調査区中央土層(2) 調査区中央土層(3) 加工段4(西部)
図版4	加工段4(東部) 基壇1上層 基壇1中層
図版5	基壇1下層 基壇1セクション 基壇2遺存状況
図版6	基壇2セクション 基壇3上層 基壇3下層
図版7	基壇3セクション 加工段1・2 加工段1・礎石 検出状況
図版8	SX1 加工段2完掘状況 加工段3完掘状況
図版9	出土遺物(1)
図版10	出土遺物(2)
図版11	出土遺物(3)
図版12	出土遺物(4)
図版13	出土遺物(5)
図版14	出土遺物(6)
図版15	出土遺物(7)
図版16	出土遺物(8)
図版17	出土遺物(9)
図版18	出土遺物(10)
図版19	出土遺物(11)

- 図版 20 出土遺物 (12)
- 図版 21 出土遺物 (13)
- 図版 22 出土遺物 (14)
- 図版 23 出土遺物 (15)
- 図版 24 出土遺物 (16)
- 図版 25 出土遺物 (17)
- 図版 26 出土遺物 (18)
- 図版 27 出土遺物 (19)
- 上古市遺跡**
- 図版 28 遺跡と周辺 (上空東から)
遺跡と周辺 (上空西から)
- 図版 29 遺跡遠景 (三隅川河口付近から)
遺跡周辺 (遺跡から三隅川河口方向)
- 図版 30 調査区西壁土層
西壁土層部分-1
南壁土層作業状況
西壁土層部分-2
- 図版 31 調査区南壁土層
南壁土層部分
南壁土層 (5層)
南壁土層 (8層)
- 図版 32 第1遺構面全景 (南から)
第1遺構面全景 (東から)
第1遺構面 (東部分)
- 図版 33 第1遺構面 (北から)
第1遺構面杭列
第1遺構面田下駄出土状況
第1遺構面木樑状遺構
- 図版 34 第2・3遺構面全景 (南から)
- 図版 35 第2・3遺構面上面検出状況 (西側)
第2・3遺構面木製品検出状況 (西側)
第2・3遺構面中央の木製品
第2・3遺構面北西隅
第2・3遺構面北西隅 (北西から)
第2・3遺構面北西隅 (南東から)
- 図版 36 第2・3遺構面北側-1
第2・3遺構面北側-2
第2・3遺構面土器出土状況 (調査区北壁付近)
第2・3遺構面北西隅 (北から)
- 図版 37 第2・3遺構面北西隅 (北西から)
第2・3遺構面北西隅作業状況
調査区内東西方向土層 (5層の上下での木製品出土状況)
第2・3遺構面西側
第3遺構面西側
- 図版 38 調査区内東西方向土層 (5層)
第4遺構面作業状況
第4遺構面作業状況 (北西隅)
第4遺構面田舟出土状況
- 図版 39 第4遺構面北西隅作業状況 (北から)
- 第4遺構面北西隅木製品 (北西から)
第4遺構面作業状況
第4遺構面北西隅作業状況 (西から)
第4遺構面北西隅木製品 (北から)-1
第4遺構面北西隅木製品 (東から)
第4遺構面北西隅作業状況
第4遺構面北西隅木製品 (南東から)
第4遺構面北西隅木製品 (北から)-2
第4遺構面北西隅木製品 (西から)
- 図版 40 第4遺構面木製品 (52-1)
第4遺構面木製品 (63-3)
第3遺構面木製品 (56-3)
第4遺構面木製品 (非掲載)
- 図版 41 第4遺構面木製品 (63-2)
第4遺構面木製品 (北壁付近)
第4遺構面作業状況 (東から)
第4遺構面作業状況 (南から)
第4遺構面作業状況 (手前は作業用の道板)
- 図版 42 第4遺構面調査区北壁内木製品 (左端は 59-1)
第4遺構面北壁付近木製品
第4遺構面北壁付近木製品 (南から)
第4遺構面北壁内木製品 (61-1)
- 図版 43 第5遺構面全景 (南から)
- 図版 44 第4～5遺構面間の自然木 (奥は 814)
- 図版 45 第4～5遺構面間の自然木 (根張り)-1
第4～5遺構面間の自然木 (根張り) 除去後
第4～5遺構面間の自然木 (奥は 729)
第4～5遺構面間の自然木 (根張り)-2
第4～5遺構面間の自然木 (根張り)-3
第4～5遺構面間の自然木 (根張り)
下面の木製品
- 図版 46 第5遺構面作業状況
第5遺構面全景 (南から)
第5遺構面杭・板列 (北から)
- 図版 47 第5遺構面杭・板列 (南から)
第5遺構面 板列・倒木 (根) (東から)
第5遺構面杭・板列 (東から)
- 図版 48 完掘状況 (東から)-1
完掘状況 (東から)-2
現在の沈下防止材
- 図版 49 第1～4遺構面・3層・第5遺構面・9層出土土器
- 図版 50 第1遺構面出土木製品 (1)
- 図版 51 第1遺構面出土木製品 (2)
- 図版 52 第2遺構面出土木製品 (1)
- 図版 53 第2遺構面出土木製品 (2)
- 図版 54 第3遺構面出土木製品 (1)
- 図版 55 第3遺構面出土木製品 (2)
- 図版 56 第3遺構面出土木製品 (3)
- 図版 57 第3遺構面出土木製品 (4)
- 図版 58 第3遺構面出土木製品 (5)

- 図版 59 第 3 遺構面出土木製品 (6)
図版 60 第 4 遺構面出土木製品 (1)
図版 61 第 4 遺構面出土木製品 (2)
図版 62 第 4 遺構面出土木製品 (3)
図版 63 第 4 遺構面出土木製品 (4)
図版 64 第 4 遺構面出土木製品 (5)
図版 65 第 4 遺構面出土木製品 (6)
図版 66 第 4 遺構面出土木製品 (7)
図版 67 第 4 遺構面出土木製品 (8)
図版 68 第 4 遺構面出土木製品 (9)
図版 69 第 4 遺構面出土木製品 (10)
図版 70 第 4 遺構面出土木製品 (11)
図版 71 第 5 遺構面出土木製品 (1)
図版 72 第 5 遺構面出土木製品 (2)

第1章 調査に至る経緯

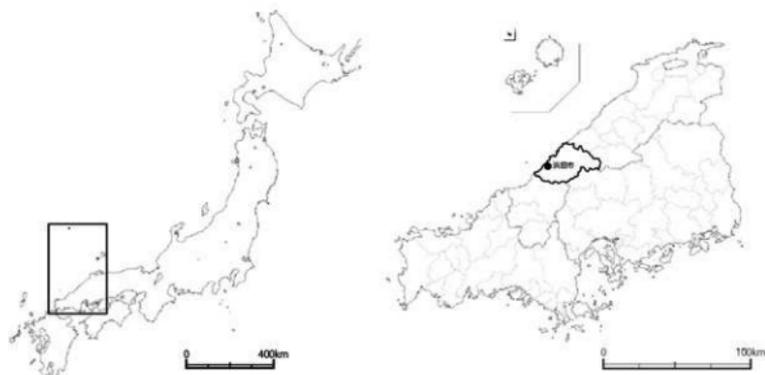
第1節 事業計画の概要

一般国道9号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長距離755kmの、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。近年は都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となっており、島根県下でも例外ではない。海岸沿いを通る浜田市や益田市では急勾配でカーブが連続する区間が多く、交通渋滞や交通事故などが発生している。また緊急時の代替道路の確保が難しいのが現状である。

こうした状況を改善するため、国土交通省により三隅益田道路の事業化が図られ、平成23年10月30日に三隅益田道路として都市計画決定された。三隅益田道路は、浜田市三隅町森溝上の石見三隅インターチェンジを起点として、益田市遠田町の遠田インターチェンジまでを結ぶ延長15.2kmの自動車専用道路として、平成24年度に事業化され、平成27年度に工事着手している。

第2節 埋蔵文化財保護部局への照会と調整

この計画・事業化にあたり、国土交通省から島根県教育委員会に対して、三隅益田道路建設予定地内遺跡の有無について照会があった。これを受けて島根県教育委員会では、浜田市と益田市の両教育委員会の協力のもと、平成25年2月と平成26年2月～3月に分布調査を実施した。その結果、周知の遺跡に加え、試掘調査を要する要注意箇所を確認し、発掘調査及び試掘調査が必要な旨を平



第1図 遺跡の位置

成26年5月13日付け島教文財第161号で回答した。その後も工事用道路等の付帯工事に伴う分布調査を数次にわたって行っている。

島根県教育委員会と国土交通省は地元教育委員会も含めて協議を重ね、分布調査の結果を踏まえ、試掘確認調査を平成26年度から国庫補助事業により実施した。本報告で扱う上古市遺跡については平成26年11月に輝口古墓については平成27年5月に試掘確認調査を実施した。

第3節 法的手続き

上記遺跡は平成27年9月8日付け国中整浜調設第87号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が国土交通省から島根県教育委員会教育長あてに提出された。それに対して島根県教育委員会は、平成27年9月8日付け島教文財第120号の40で記録作成のための発掘調査の実施を勧告している。調査は埋蔵文化財調査センターが行うこととなり、国土交通省と工程上の協議を経て発掘調査を実施した。文化財保護法第99条第1項の規定による通知は下記のとおりで、埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出している。

文化財保護法第99条第1項の規定による通知

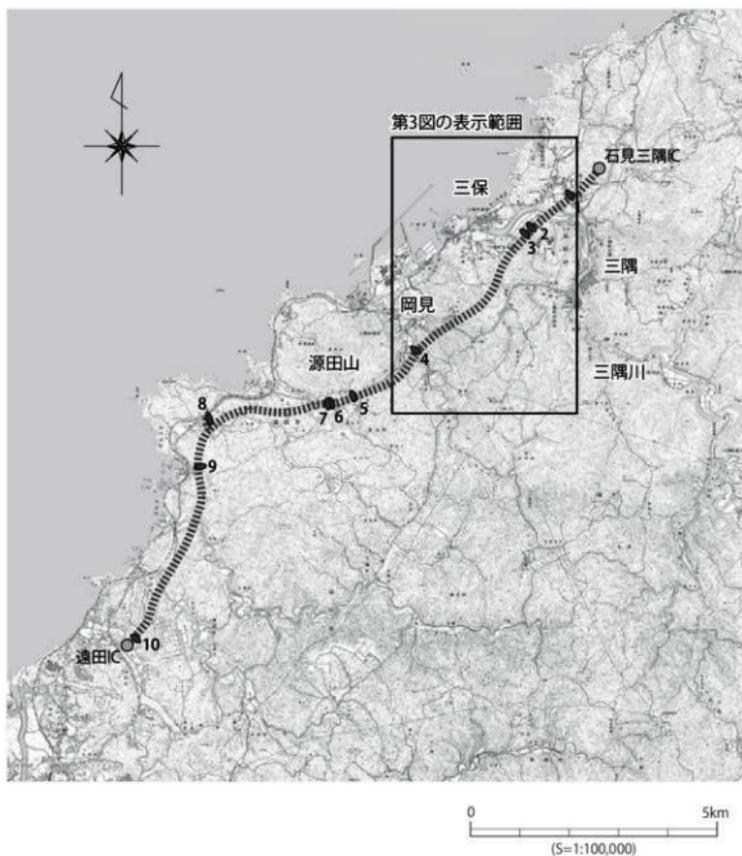
1. 輝口古墓 平成29年6月20日付け島教理第43号
2. 上古市遺跡 平成29年4月7日付け島教理第18号

輝口古墓の調査は9月29日に、上古市遺跡は9月21日に現地調査を終え、下記の通り国土交通省浜田河川国道事務所へ終了報告を提出した。

1. 輝口古墓 平成29年11月16日付け島教文財第192号の8
2. 上古市遺跡 平成29年10月27日付け島教文財第192号の6

第2章 浜田市三隅地域の遺跡と歴史的環境

浜田市三隅町域では中国山地が海岸部まで達しているため、海岸線の出入りが多い。起伏にとん



第2図 事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地

表1 事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地一覧

1	海石西遺跡	3	上古市遺跡	5	廻り田遺跡	7	榎坂遺跡	9	国ヶ峠遺跡
2	峰口古墓	4	普源田砦跡	6	近世山陰道遺跡	8	蔵廻り遺跡	10	神出西遺跡



第3図 浜田市三隅町の道跡

だ山地が海岸まで続く中を、三隅川およびその支流が南東から北西へ曲流し、多数の峡谷を形成している。海沿いには広い平地部分がなく、川沿いに形成される小規模な平地が主な生活場所となっている。内陸部では、井川川、今明川沿いにまとまった平野が広がり、井野・今明等の集落が形成されている。

歴史的には、旧石器・縄文時代に確実に遡る遺跡は見られない。

三隅町内の遺跡の初見は弥生時代である。三隅川の支流沿いに形成された小支谷に位置する海石西遺跡では、弥生時代前期の遺物が出土しており、弥生時代から生活の場として利用が始まっている。内陸部の井野に所在する大谷遺跡でも、弥生時代後期の甕が出土している。

古墳時代では、海石西遺跡や大谷遺跡で弥生時代から引き続いて遺物が出土している。また、横穴式石室を伴う大谷古墳が築かれている。現在町の中心部となっている海岸部の三隅・三保でも古墳や横穴墓が出現している。三隅川本流沿いには小野古墳や高田横穴墓群が確認されている。三隅町西部の岡見でも、海岸近い青浦古墳が知られており、岡見中学校脇遺跡では土師器が出土している。

古代の三隅地域は、那賀郡三隅郷の範囲内に当たる。近年までこの時代の遺跡は知られていなかったが、平成27年度に行われた海石西遺跡・上古市遺跡の調査で奈良時代の須恵器が出土し、古代に生活の場となっていたことが判明した。

中世には、城砦を中心に多数の遺跡がみられるようになる。城砦が多いのは、三隅氏の拠点となったことによる。三隅氏は益田、福屋、周布などほの諸氏と同様、石見国司であった御神本氏から分岐して成立した。石見国内のほかの国人領主と同様自立性が強く、南北朝の抗争に際しては南朝方に属して強い抵抗を見せた。「石見国衆」として益田氏を含む他の領主と一致した行動をとることもあったが、益田氏とは抗争する傾向が強かった。抗争の激しさを反映し、三隅町内には居城の高城を中心に多数の城砦が築かれた。

さらに、三隅湊を拠点とする大賀氏等の海辺領主の存在も知られている。このような領主は地域権力である三隅氏、大内氏から諸権益を保障され、かつ大名領国の範囲を超える広範囲な経済活動を行っていた。益田市東部から浜田市西部にかけて、海岸沿いに針藻城（三隅町古湊）、源田山城（三隅町岡見）、城ヶ浦城（益田市津田町）と多くの城砦が分布するのも、海上交通の活発さを反映している可能性がある。

表2 浜田市三隅町の遺跡

1	罫口古墓	7	風呂の木砦跡	13	高田横穴墓群	19	青竜城跡	25	森井竈跡
2	上古市遺跡	8	地藏畑遺跡	14	三隅石壁	20	陣ノ尾砦跡	26	次郎丸砦跡
3	刈立横穴墓	9	古市城跡	15	極楽寺横穴墓	21	松原遺跡	27	中山鉾跡
4	海石西遺跡	10	八ノ木砦跡	16	針藻城跡	22	斎藤竈跡	28	郷遺跡
5	普源田砦跡	11	海石遺跡	17	小金町城跡	23	山岡竈跡	29	たかのだん遺跡
6	成田郷三角田記念碑	12	安隈寺跡	18	城ヶ浦砦跡	24	岡見中学校脇遺跡	30	梅ヶ城跡

江戸時代には、井野等の内陸地域を中心にたたら製鉄が盛んにおこなわれた。生産された鉄は三隅湊の海運業者を通じて出荷された。

参考文献

- 三隅町 1971 『三隅町誌』
- 島根県教育委員会 2002 『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』
- 島根県立石見美術館 2017 『企画展石見の戦国武将—戦乱と交易の中世—』
- 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2018 『海石西遺跡 角落し遺跡 廻り田遺跡 近世山陰道跡（馬橋地区） 神出西遺跡』島根県教育委員会
- 本多博之 2018 「中近世移行期西日本海地域の流通と海辺領主」『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』島根県古代文化センター
- 川岡 勉 2018 「中世後期の守護支配と石見国衆」同上所収
- 中司健一 2018 「中世後期石見国人の動向と室町幕府・大名」同上所収

第3章 嶧口古墓の調査

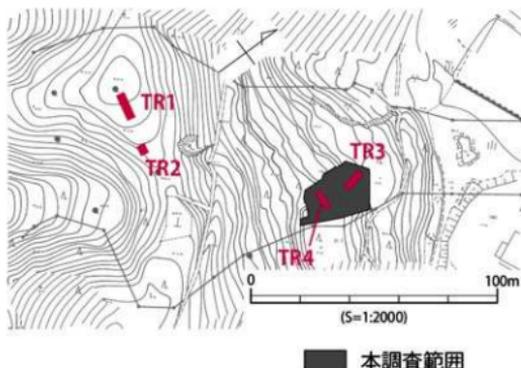
第1節 位置と環境

嶧口古墓は三隅川河口部に近い左岸の丘陵斜面に位置する。東は三隅川本流に開口する小支谷に面している。支谷を挟んで東に位置する丘陵裾部には、明光寺を中心に人家が密集している。嶧口古墓が所在する丘陵は、江戸時代以降は尾根頂部を中心に墓地として利用された。尾根を越えた西側には上古市遺跡があり、木製品を中心に弥生時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土している。

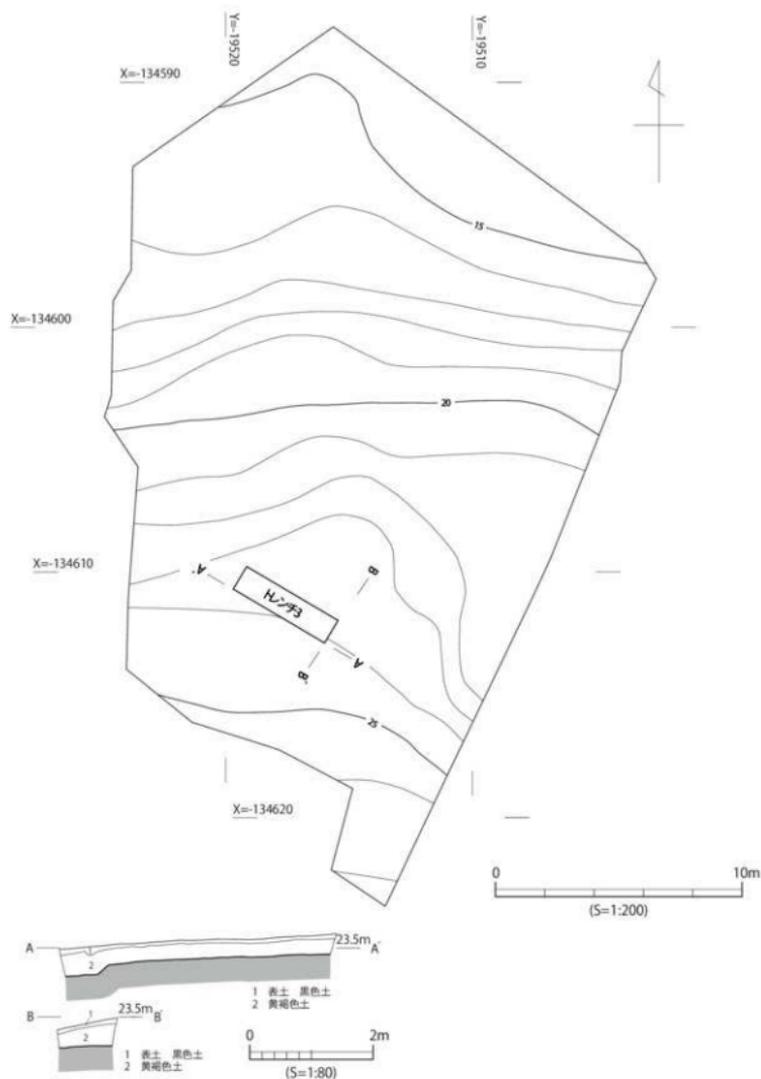
三隅川東岸の小支谷に位置する海石西遺跡では、弥生時代前期から古墳時代、古代、中世にわたる遺物が出土しており、継続的に生活の場となっていたことが判明する。古墳時代には、嶧口古墓が所在する海岸部の三隅・三保でも古墳や横穴墓が出現している。三隅川本流を挟んで東岸には高田横穴墓が確認されている。中世では三隅氏関連の城館が多い。嶧口古墓が所在する丘陵の一部は山城（古市城跡）となった。河口部でも針藪城跡が知られている。

第2節 発掘作業と整理事業の経過

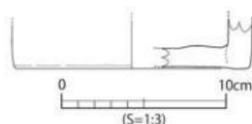
嶧口古墓は、平成27年度に行った試掘調査の結果、標高14mから28mの丘陵斜面に加工段と石組基壇を確認した。基壇には一石五輪塔が複数確認できた。遺物は、備前焼の壺の底部（第6図1）が出土した。一石五輪塔の年代観は16世紀末頃であり、16世紀末の古墓と予想されたことから、平成29年度に本調査を行った。本調査は8月1日から9月29日にかけて実施した。



第4図 嶧口古墓調査区の位置と周辺地形図



第5図 峰口古墓調査前地形測量図



第6図 蟬口古墓試掘調査トレンチ3出土遺物

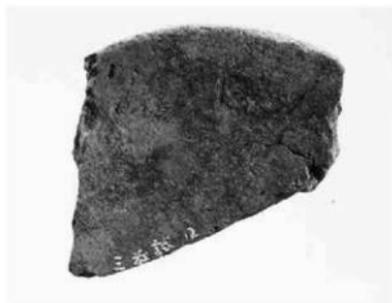


写真1 蟬口古墓試掘調査トレンチ3出土遺物

本遺跡では掘削前の状態で複数の平坦面（加工段1, 2, 4, 5）があり、いずれも厚い覆土に覆われていた。調査区東側の谷を進入路として利用できなかったため、西側から尾根越えて重機を進入させ、表土は重機により掘削した。下位の遺物包含層（黄褐色土）以下を人力で掘削し、続けて遺構検出、遺構掘削を行った。遺物の大部分は江戸時代～近代の陶磁器が中心である。調査終了前の9月5日に全体の空撮を行った。

遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、冬期は埋蔵文化財調査センターにおいて接合・復元・実測等の整理作業を行った。

平成30年度から令和元年度に、他の遺跡と併せて遺物実測、図化、写真撮影を行った。現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類についても、出土品と併せて総合的な検討を行い、遺構・遺物のトレース、写真撮影、割付、原稿執筆を行った。

第3節 調査の概要

(1) 基本層序 (第8図)

基本層序は上から順に黒褐色土層（表土）、黄褐色土層、岩盤である。遺物は主として表土、黄褐色土層から出土した。

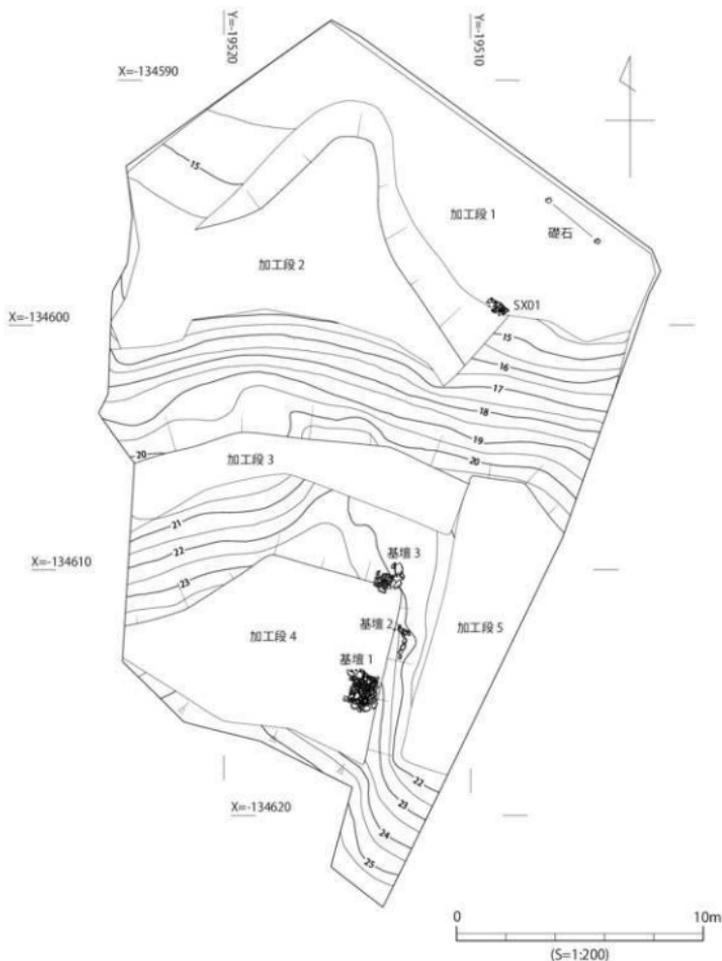
(2) 検出した遺構と遺物

調査の結果、4面の加工段と基壇3基を確認した。加工段のうち水平で建物の礎石が検出されるものは家屋敷地と推測される。

加工段1 (第9図)

調査区最下部は広範囲に削平され、大規模な平坦面となっている。これを加工段1とした。調査区内で北東辺30m、北西辺10mを測り、北～東方の調査区外へ続いている。北西端は南西へ折れ、長さ約15mの上り傾斜を経て上の加工段2に接続する。

調査区東端近くでは建物基礎と思われる礎石を2個検出した。石材は径20cmの平たい石を使用



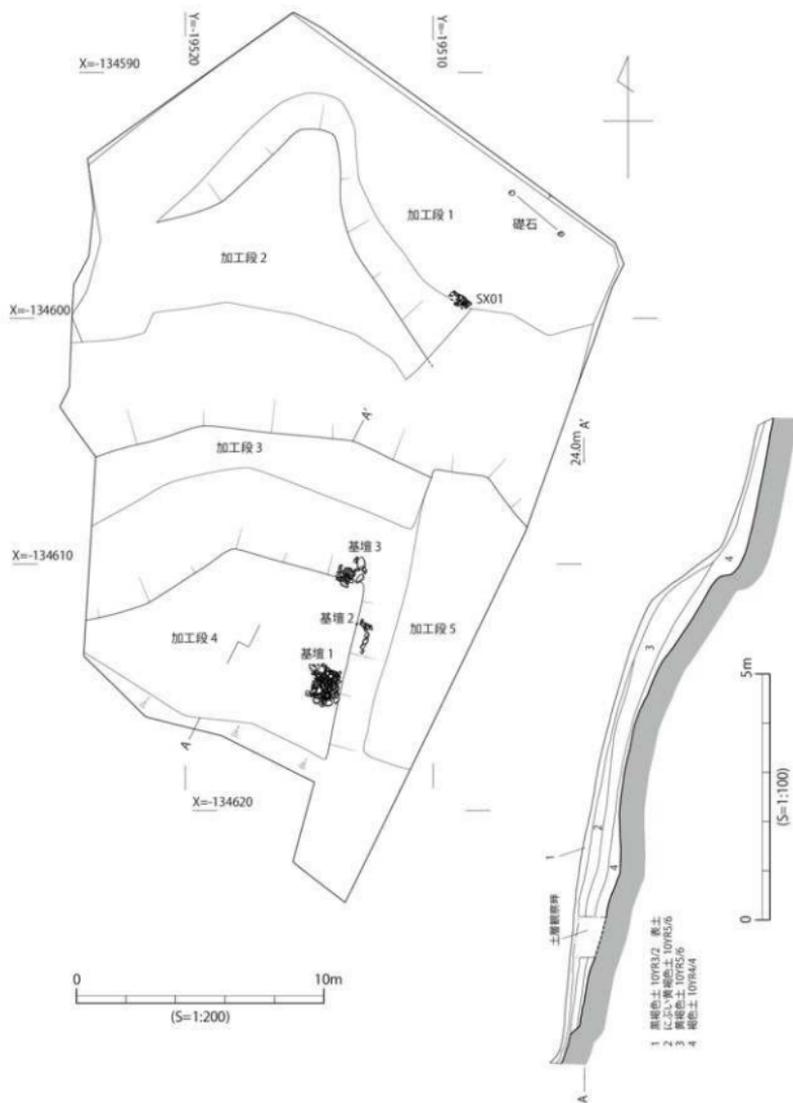
第7図 罫口古墓調査後地形測量図

し、2.4mの間隔をおいて配置されている。2点の礎石の延長線上にほかの礎石があると予想して精査を行ったが、この2個以外に礎石や柱穴は検出されなかった。

加工段1からの採集遺物は近代に属する石見焼の陶器が中心で、加工段1の造成時期は明治時代以後と考えられる。

SX1 (第11図)

斜面最下部に位置する加工段1の南辺に、石を集積して作られた遺構である。主軸はおおむね山



第8図 輝口古墓遺構配置図・調査区中央土層図

裾ラインに沿う。谷側の基底部には径20cm～30cmの大きめの石が置かれ、その上に径20cmの平たい石を垂直に立て並べたものが、南東側へ少し傾いた状態とみられる。山側には径10cm未満の比較的小さい角礫が散らばっていた。角礫の一部はすでに失われている可能性がある。

加工段2 (第8図)

加工段1の南西に接する加工段である。SX1付近を南東端として北西へのび、北西端は加工段1からの傾斜面に接続する。中央が北へ舌状に張り出し台形に近い形状で、南北19m、東西12mを測る。北東方は2mの段差を経て加工段1に接する。遺構は検出されなかった。

加工段2からの出土遺物は19世紀前半の磁器(26図9)等があり、加工段1の造成時期は19世紀以後と考えられる。

加工段4 (第8図)

加工段4の平面形状は等高線に沿う方向に細長く、現状で南北12m、東西17mを測る。ただし、加工段4の東に接して加工段5が造成されており、加工段5の造成に際して加工段4の東側が削られた可能性があるため、本来は現存部分の東方まで続いていた可能性がある。北へ向かって緩く傾斜する。加工段4の東辺に沿って、3基の古墳(基壇1、基壇2、基壇3)が築かれている。

加工段4からの出土遺物は18世紀から19世紀、昭和時代にわたる遺物が混在している。広東碗など18世紀の肥前系陶磁器(第25図4)がまとまって出土しており、備前焼(第16図ほか)を含むことから、加工段4の造成時期は18世紀にさかのぼる可能性がある。集石墓の出土遺物とも矛盾しないことから、同加工段も集石墓も18世紀に構築されたと考えられる。

加工段5 (第8図)

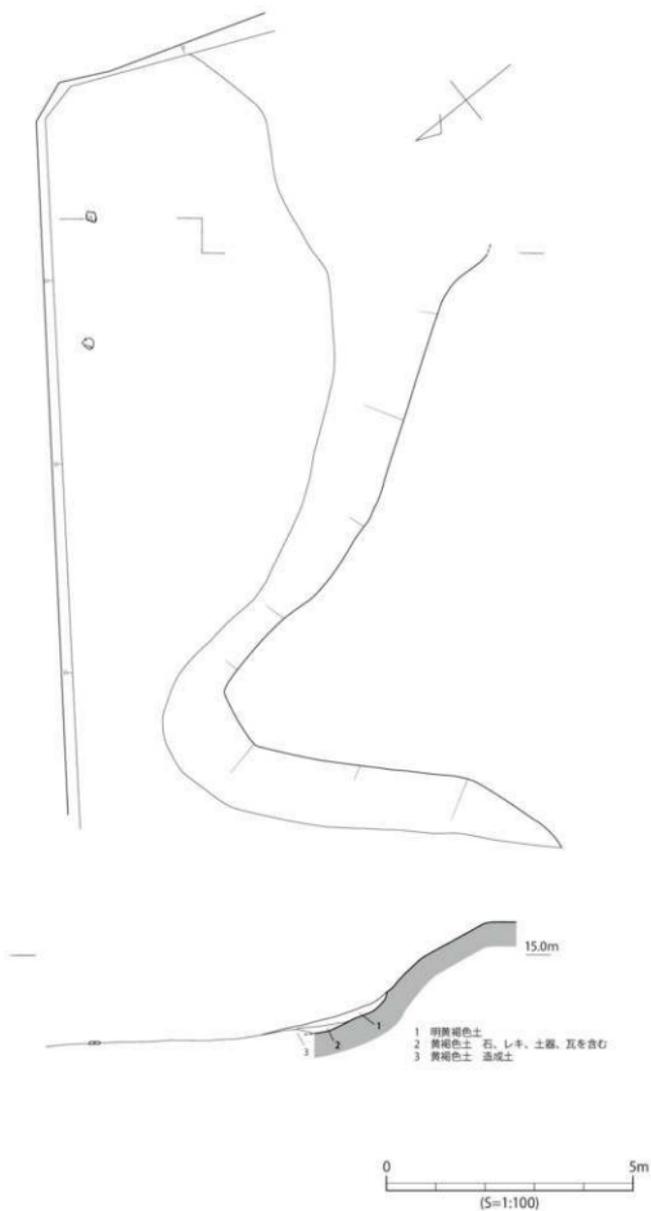
加工段4の東に接する面である。調査区内にかかる部分の規模は南北20m、東西7mを測り、南方の調査区外へ続く。加工段3、4との間は急崖となっており、加工段5を造成する際に加工段4の東端が削られた可能性が高い。遺構は検出されなかった。

基壇1 (第12図)

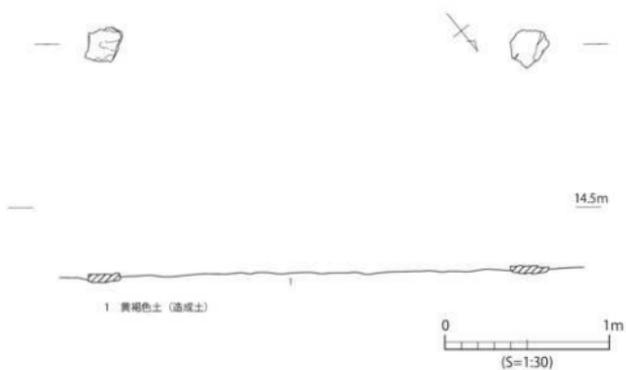
山腹斜面、加工段4東辺に構築された集石墓である。地山面を10～15cm掘り下げ内部に径10cm前後の礫を充填し、その上に一辺1.6mの方形基壇を構築する。基底部は径50cm程度の比較的大きな石を周縁にめぐらせ、内部を10cm程度の角礫で充填する。上層には大小の石を約3段積み上げる。基壇から出土した仏飯器(第15図9)は江戸時代に属し、基壇そのものは江戸時代に構築されたと考えられる。

基壇の上面に一石五輪塔の部材が置かれていた。一石五輪塔はすべて毀損しており、完全な形のものはない。空風輪部3点、火輪部2点、水輪部3点、地輪部2点、台座2点が出土している。空風輪部と火輪部の点数から、3基の一石五輪塔が存在したと推定される。基壇の中央に水地輪部2点(第15図5・6)が並べてあり、その横に空風輪部(第15図3)が置かれていた。少し南へずれた位置に空風輪部(第15図1)と台石2点(第15図7・8)、基壇の南端に空風火輪部(第92図4)、火水輪部1点(第15図2)が置かれていた。このうち15図1には「空」「風」、15図2には「火」「水」が陰刻されており、同一個体と考えられる。同一個体の2点が離れているなど、各部材は原位置を保っていない。

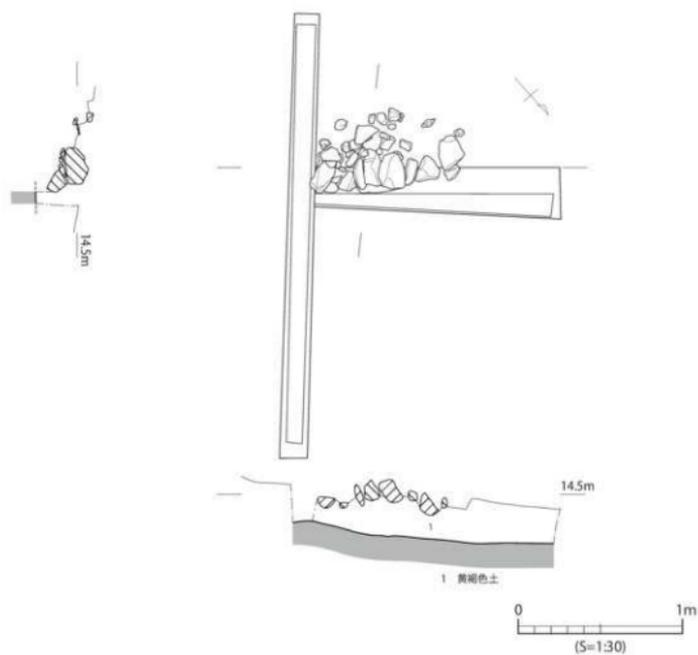
それぞれの部材は接合できないが、復元すると高さ60cm前後、幅は12～14cmとなる。



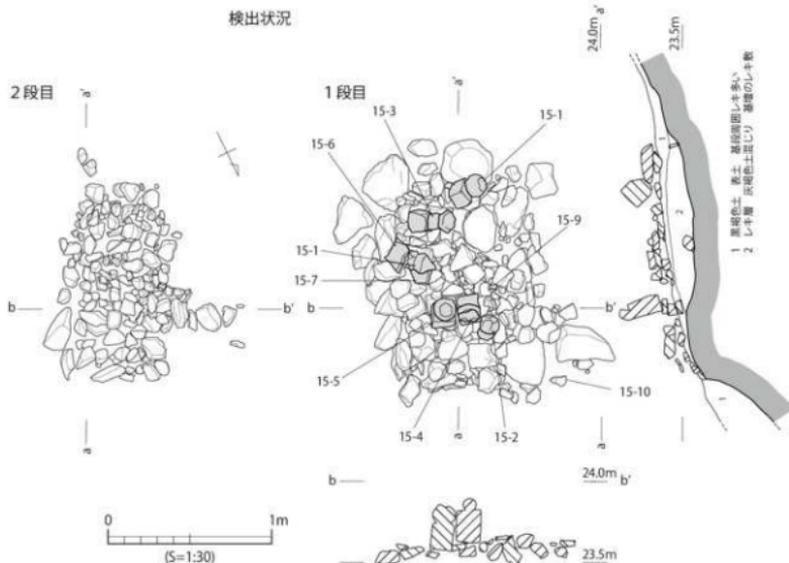
第9図 罫口古墓加工段1実測図



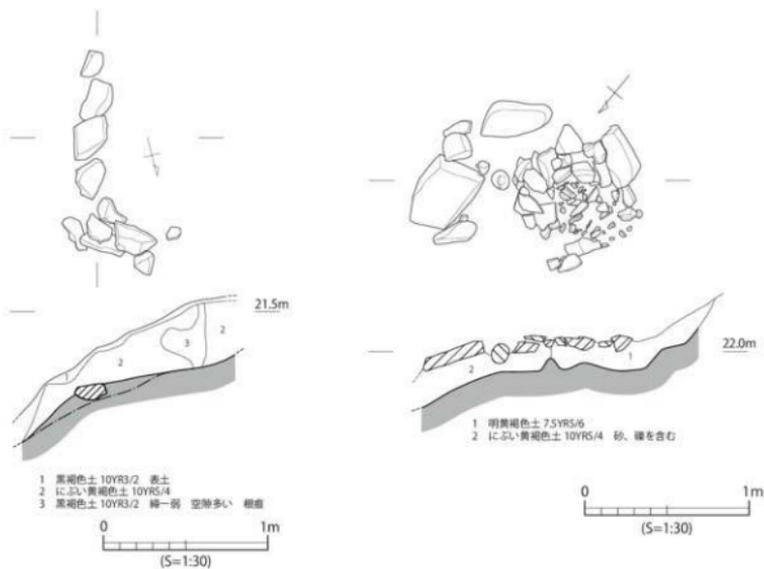
第10図 罫口古基礎石建物実測図



第11図 罫口古墓SX1実測図

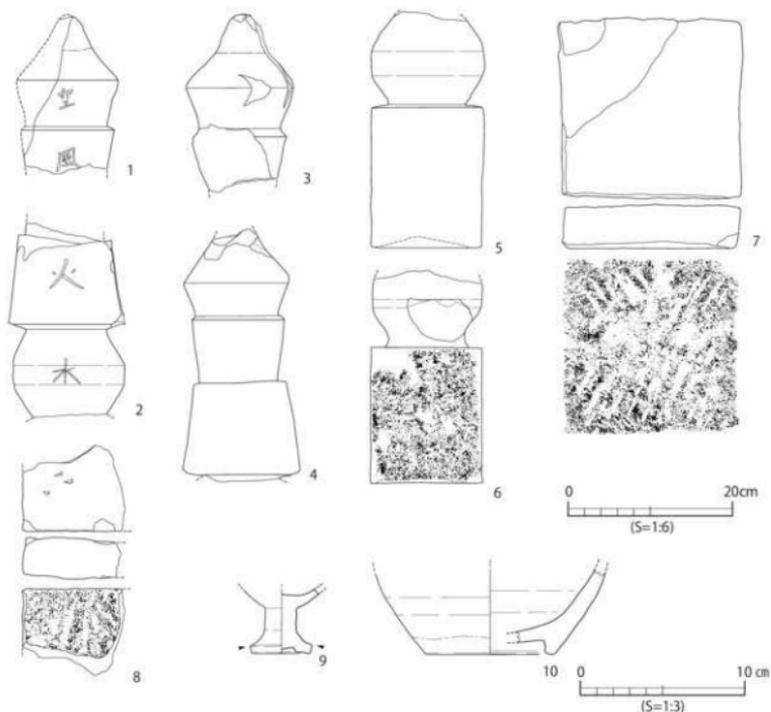


第12図 峰口古墓基壇1実測図



第13図 峰口古墓基壇2実測図

第14図 峰口古墓基壇3実測図



第15図 嵯峨古墳基壇1出土遺物

表3 嵯峨古墳基壇1出土遺物観察表

葬具 番号	図版 番号	出土 位置	器種	器種	法線				敷土 石材	成形・調整	軸系	文様	裝飾	産地	備考	
					a (cm)	b (cm)	c (cm)	d (cm)								
15-1	9	基壇1	石製品	一石五輪塔(空風輪)	12.4	19.0	—	—	火山礫凝灰岩	石材削り出し	—	—	—	—	—	福光石系 刻字「空」「風」
—	2	基壇1	石製品	一石五輪塔(水風輪)	14.2	23.7	13.7	—	火山礫凝灰岩	石材削り出し	—	—	—	—	—	福光石系 刻字「火」「水」
—	3	基壇1	石製品	一石五輪塔(空風輪)	13.1	21.7	11.3	—	火山礫凝灰岩	石材削り出し	—	—	—	—	—	福光石系
—	4	基壇1	石製品	一石五輪塔(空風輪)	12.8	30.8	11.3	—	火山礫凝灰岩	石材削り出し	—	—	—	—	—	福光石系
—	5	10	基壇1	石製品	一石五輪塔(水風輪)	—	28.9	13.8	—	火山礫凝灰岩	石材削り出し	—	—	—	—	福光石系
—	6	10	基壇1	石製品	一石五輪塔(水風輪)	—	26.0	13.3	—	火山礫凝灰岩	石材削り出し	—	—	—	—	福光石系 銘文
—	7	10	基壇1	石製品	一石五輪塔台石	22.2	22.5	5.3	—	火山礫凝灰岩	石材削り出し	—	—	—	—	福光石系
—	8	10	基壇1	石製品	一石五輪塔台石	—	—	5.0	—	火山礫凝灰岩	石材削り出し	—	—	—	—	福光石系
—	9	10	基壇1	甌器	甌器	—	4.0	3.4	—	白色	輪軸成形	透明軸	—	—	—	—
—	10	10	基壇1 周辺	陶器	甌	—	—	7.6	—	淡黄色	輪軸成形方	鉄軸	—	—	—	—

基壇1 出土遺物 (第15図)

第15図には基壇1で出土した一石五輪塔を示す。各部位の形態的特徴は次のとおりである。空輪は頂部が突出した算盤玉状、風輪部は逆台形をしている。火輪部は軒を作り出さない台形状をしている。水輪部は算盤玉に近く、地輪部は長方体をしている。地輪の底面は平坦でなく、中心にむけてわずかにくぼんでいる。台石は厚さ5cm前後の板状をしている。底面は平滑でなく工具痕がのこっている。1は空風輪部分である。空輪は頂部が突出した算盤玉状で、肩部に明瞭な稜をなす。風輪部は逆台形である。正面に「空」「風」の字が刻まれる。2は火水輪部分である。火輪は軒を作り出さない台形である。正面に「火」「水」の字が刻まれる。3は空風輪部分である。4は空風火輪である。空輪は頂部が突出する算盤玉状で、肩部に明瞭な稜をもつ。水輪とのつなぎ目まで残存する。5は水地輪部分である。水輪は算盤玉状で、中央部に緩い稜が認められる。地輪は直方体で、底面が少し窪む。6は水地輪である。6の地輪部には浅い線彫りによる銘文が三行に分けて以下のように刻まれている。

【右】 [] 庚 【中央】 與 [] 位 【左】 十月廿 []

7は一石五輪塔を設置する台石である。底面には工具痕が残る。8は台石の破片である。工具痕が残る。9は磁器製の仏飯器である。10は陶器の壺の底部である。高台は削り出しにより成形される。頻繁な使用のため丸くなっている。底部を除き鉄軸を施す。

基壇2 (第13図)

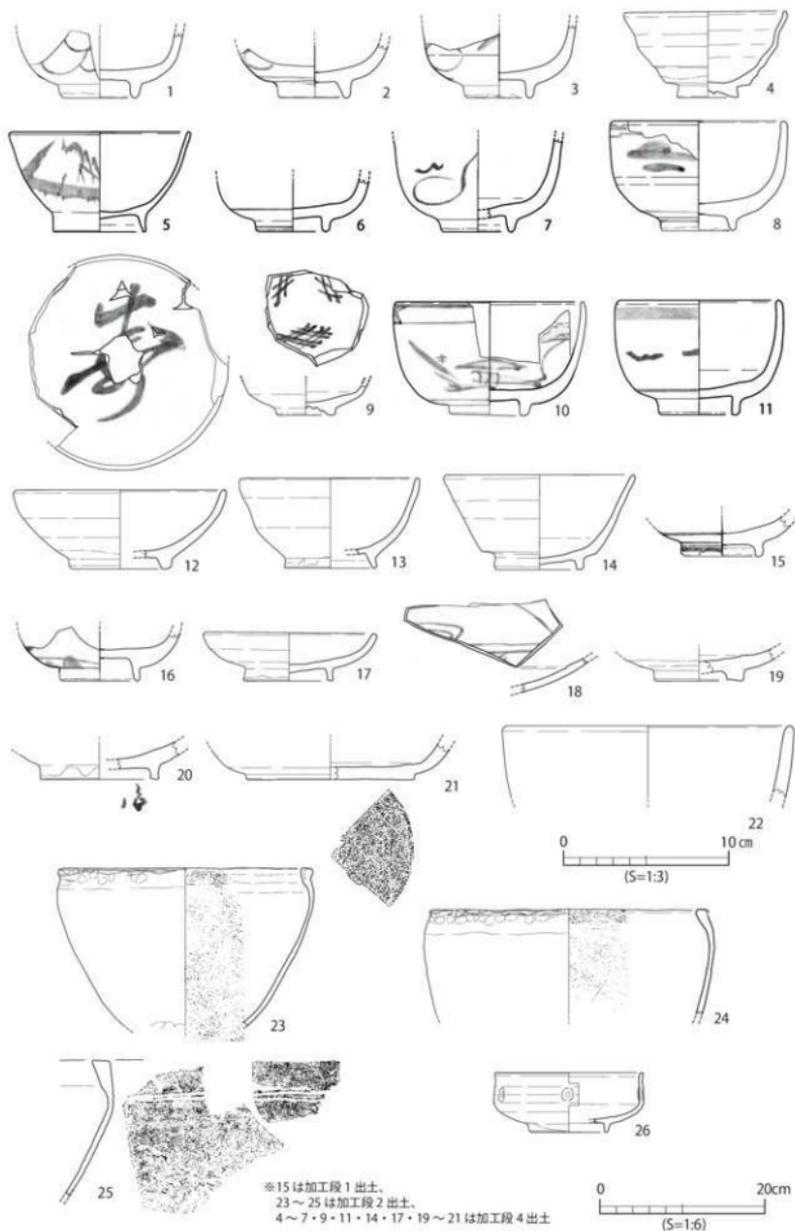
基壇1の斜面下方4mに位置する。本来基壇1と同様に平面方形に構築されていたと思われるが、現状で残る石は十一点のみで、南北方向に列状に並ぶ。現存長1.4mを測り、基壇の西辺の石列が残存したものと思われる。出土遺物は無く、築造年代は不明である。

基壇3 (第14図)

基壇2の下方5mに位置する。本来の平面形状を大きく損なっているが、外周部に径40cmの比較的大きな石を配置し、中心部を径15cm以下の角礫で充填したものであったと推測される。斜面を削平して幅1.5mの平坦面を作り、その上に石を並べて構築する。現存部分で1.5m×1.1mを測るが、外周部と中心部の石の一部が残っているだけで、本来の規模は不明である。集石の中心には表面が良く研磨された球形の石製品が残っていた。出土遺物は無く、構築年代は不明である。

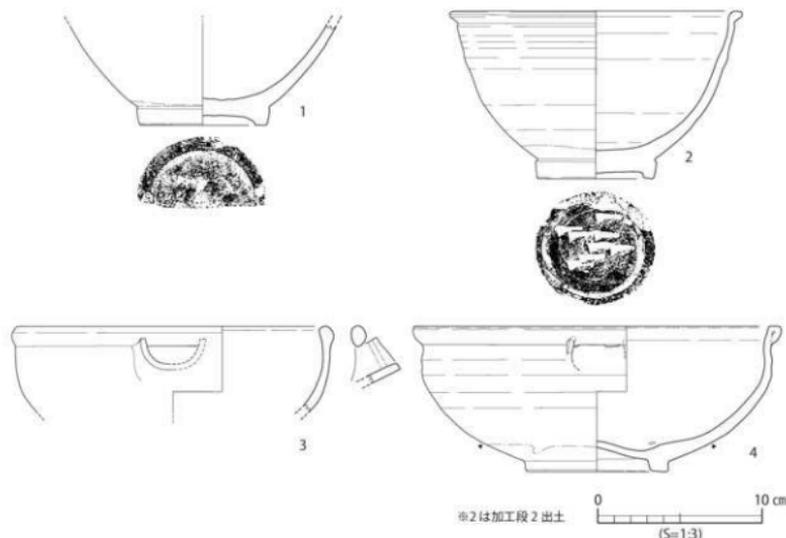
(3) 出土遺物**陶器 (碗・皿類 第16図1～16)**

第16図1～3は陶胎染付である。1、2は白化粧土がかかる。産地は肥前波佐見平戸とみられる。4は、腰部で鋭く折れて上へ延び、胴部には小さな段、鋭い屈曲がある。胴中部に透明釉に藁灰釉、鉄釉のかけ流しを施す。底部の無釉箇所は赤褐色に焼きあがる。産地は萩で、年代観は19世紀前半である。5は広東形碗で、丈の高い高台をもつ。畳付以外透明釉が施され、外面に鉄絵で山水文を描く。在地系か。年代観は19世紀代である。6～8は陶胎染付の丸形碗である。いずれも腰が張る形状で、器壁は厚手である。6～8は白化粧土を用いる。7は表面に草花文が描かれ、貫入が多数見られる。8は横方向の太い圓縁がめぐる。9は煎じ碗である。表面の透明釉は暗い緑灰色に発色する。見込みに鉄軸で格子文が複数描かれる。径の小さい高台内に釘彫りが施される。10、11は陶胎染付の丸形碗である。胴部には山水文が描かれる。口縁、胴下部に圓縁がめぐる。12は丸形皿であ



※15は加工段1出土、
23～25は加工段2出土、
4～7・9・11・14・17・19～21は加工段4出土

第16図 埴口古墓出土遺物 (1) 陶器その1



第17図 縄古藤出土遺物 (2) 陶器その2

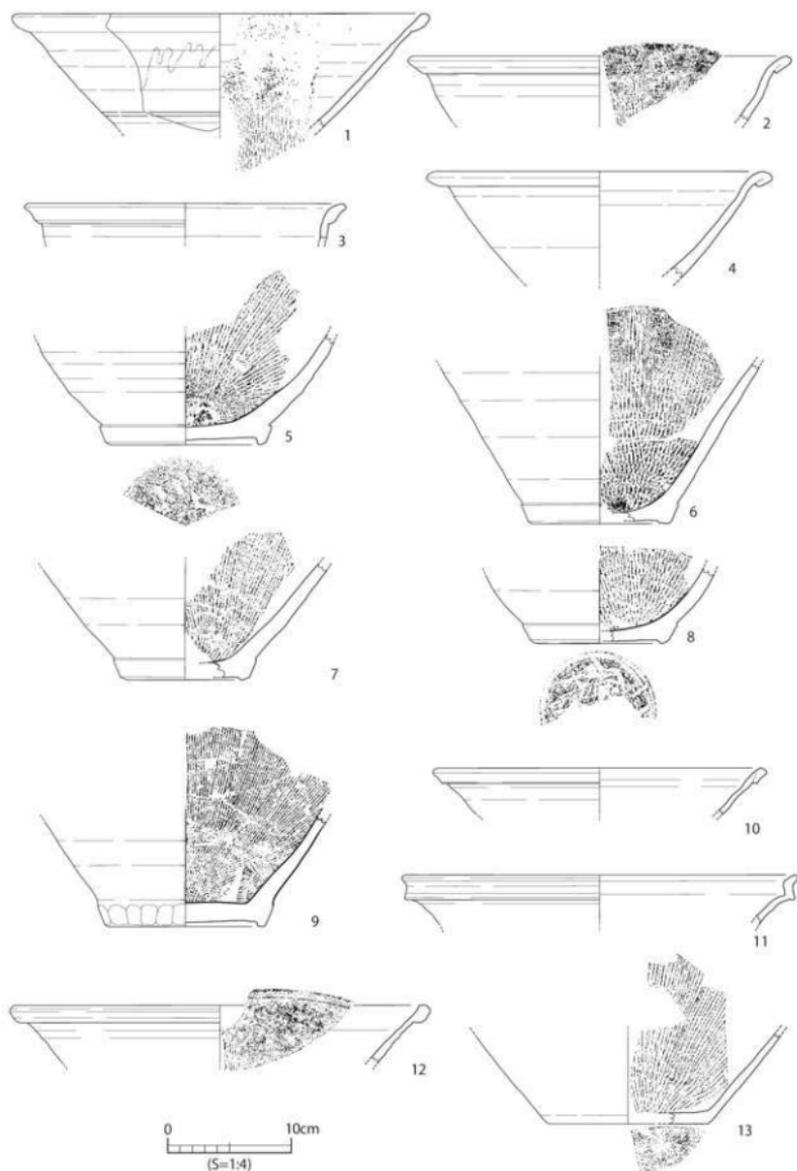
る。見込みには鉄軸で「寿」の字が書かれる。胎土は明るい浅黄褐色で、透明釉がかかる。表面の一部が白く変色している。14は平行形の碗である。削り出しにより径の広い高台が成形され、腰部外面には鋭い稜がつく。胴上部は薬灰釉がかかって淡い白みを帯びる。15、16は陶胎架付の碗の底部である。15は高台外面と胴下部の圈線のみ確認できる。表面は暗灰色を呈し、微細な貫入多数がみられる。16は高台内が深く抉られ、底面は薄く作られる。呉須は褐色に発色する。

陶器 (皿・鉢類 第16図17～21)

17は丸形小皿である。内外面に薬灰釉、あるいは白化粧土が施され白色を帯びる。18は鉢である。見込み部には鉄軸により細い線で流水文が描かれる。19は香炉又は火鉢である。20は海鼠軸がかかる。見込み部に目跡が2つ残る。21は平行鉢で、底面の広い範囲が接地部となっている。底部を含めて全面施釉され、底面には菱形の刻印が残る。胴下部から底部にかけて細い火罨が4条にられる。産地は備前で、年代観は18世紀後半である。

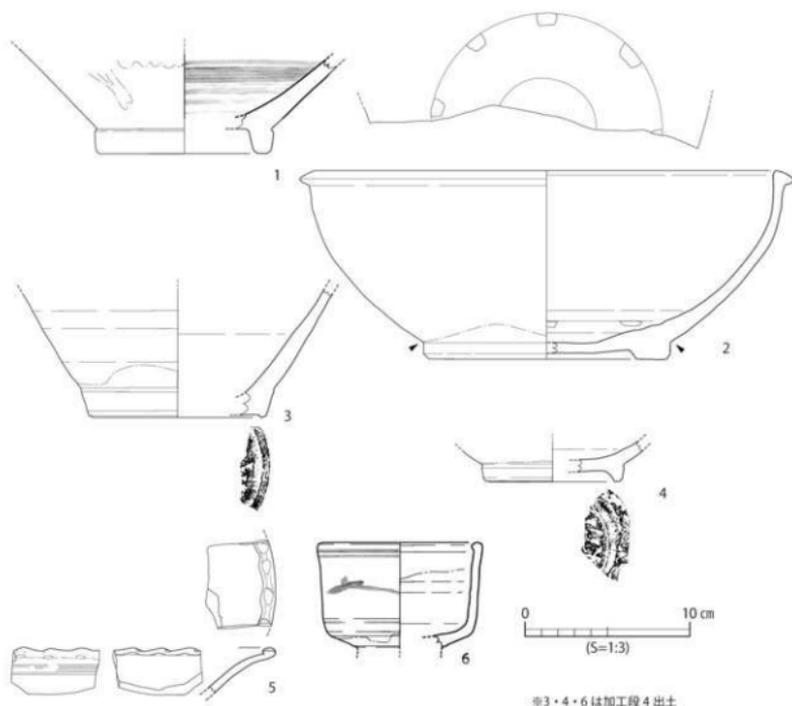
陶器 (鉢類 第16図22～第19図)

第16図22は鉢の口縁である。23～25は無軸の大型鉢で、佐野焼製品とみられる。23は粘土紐積み上げにより成形され、叩きにより整えられる。内面には弧状の当て具痕跡が部分的に残るが、大部分ナデ消される。口縁部の当て具痕は消されないまま残る。口縁部は面取りされるが、口縁外面側に押し出された粘土は削られないまま残る。24は、口縁部内面に板状の当て具痕跡が残る。胴部には、これと異なる弧状あるいは同心円状の当て具痕跡が残る。25は器形が23、24と異なり、別個体とみられるものである。口縁部はわずかに内湾して肥厚し、端部は幅1.5cmの広い面をもつ。口縁下部に2条の沈線がめぐる。26は腰が張る形態の鉢である。胴下部の4方向に一辺1cmの凹部



※4は加工段2出土、3・7・9・10・12は加工段4出土

第18図 埴口古墓出土遺物 (3) 陶器その3



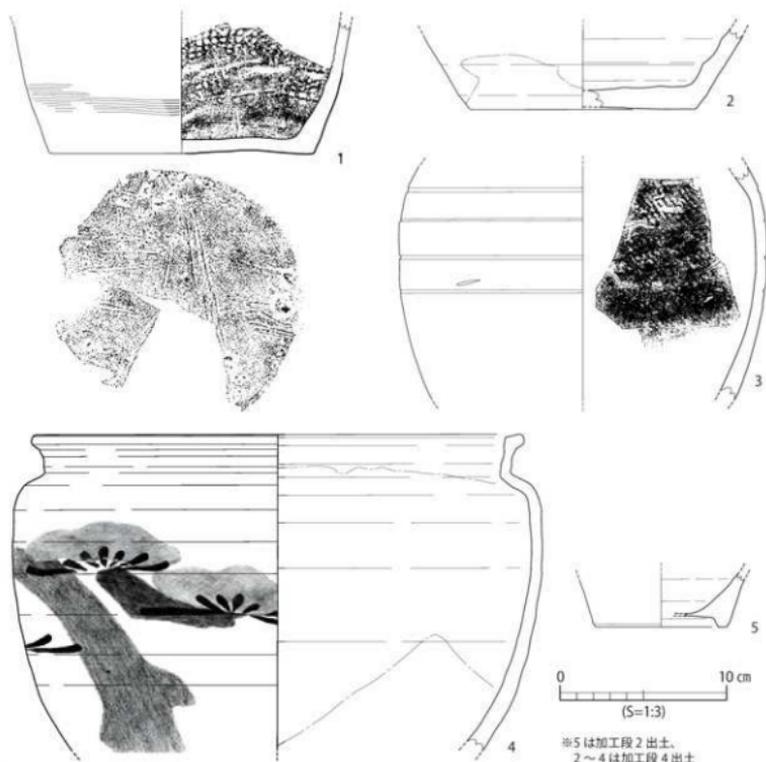
第19図 磯口古墓出土遺物 (4) 陶器その4

が作られる。胴下部から底部にかけて、内外面に白化粧土が刷毛目状に周回する。

第17図1～4は片口鉢である。1の底部には、高台を削り出しにより成形した際のカンナ痕が残る。産地は須佐とみられる。2は深めの鉢で、口縁から胴下部にかけて透明釉の外面、内面に重ね焼きされた鉢の一部が熔着、残存する。本個体と同様の透明釉が施される。

第18図1～13は播鉢である。1は内面に11条単位の摺目がつく。表面は鉄軸がかかり褐色をおびる。胴下部外面はヘラ削り痕跡が認められる。産地は石見焼。2は口縁部をわずかに内湾させたのちに外側へ折り返し帯状に造る。内面に10条単位の摺目がつく。3も口縁を外側へ折り返し帯状に作る。4は口縁を外へ折り返し、口縁直下はゆるく屈曲する。佐伯分類ⅢB類に属する(1)。内面に10条単位の摺目がつく。5は高台を削り出しにより成形し、断面逆台形の高台を作る。高台内には匏による削り痕が残る。内面は14条単位の摺目がすき間なく施される。6は削り出しにより低い高台が作られる。内面に10条単位の摺目がすき間なく入る。7は胴部外面に回転ヘラ削り痕跡がよく残る。高台は削り出しにより成形され、底部外面に匏による削りの痕跡が残る。内面には14条単位の摺り目がすき間なく入る。8は播鉢の底部である。削り出しにより低い高台が成形され、底部外面には匏による削り痕跡が残る。内面には10条単位の摺り目がすき間なく入る。2～8の産地は山

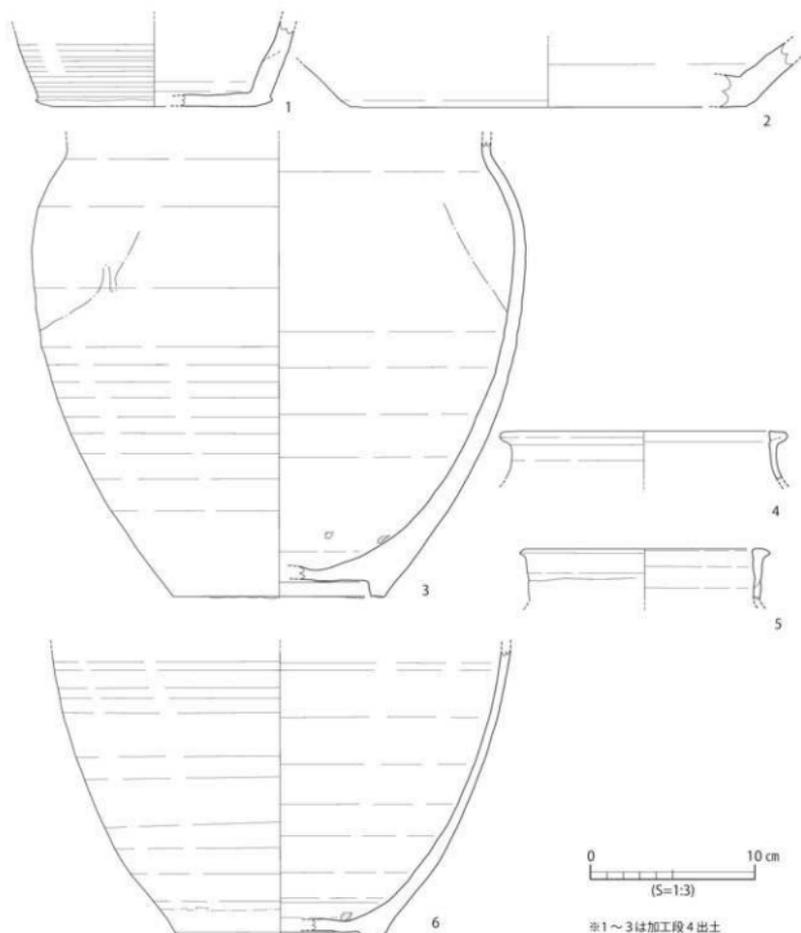
(1) 佐伯昌俊 2017 「須佐焼の生産・流通と石見焼」『近世・近代の石見焼の研究』島根県古代文化センター



第20図 罫口古墓出土遺物 (5) 陶器その5

口県須佐で、年代観は18世紀代である。9は削り出しにより高台を成形する。底部中央に鉋による削りの痕跡が少し残る。高台部外面は幅1cm余りの面を連続して面取りした上から回転ヘラ削りを施して調整する。内面には14条単位の播目をすき間なく施し、底部中央は不定方向の短い播目を重ねる。10は播鉢の口縁部である。口縁部は小さな屈曲をつけ、端部を外へ折り返して鋭い稜線をもつ帯を作る。摺目の上端がわずかに確認できる。11は播鉢の口縁部である。口縁を内側へ屈曲させ、下部は直立、上端は外へ折れる。産地は備前である。12は播鉢の口縁部である。端部を外へ肥厚させ、帯状に作る。内面に13条単位の播目が入る。石見焼に属する。13は播鉢の底部である。高台はつかない。底部外面には回転系切り痕が残る。内面に8条単位の播目が入る。

第19図1～5は鉢である。外面は上部から白泥釉が流し掛けされ、一部が胴下部に達している。内面は白泥釉を用いた横方向の刷毛目で裝飾する。2は胴部が内湾し口縁端部は外へ肥厚する。端部上面は面取りされる。見込には現存する範囲で5箇所の目跡が残る。窯道具の脚部が熔着したものである。高台は削り出しにより成形され、2cmに達する幅広の高台である。3は削り出しにより高台を成形しており、鉋削りの痕跡が残る。高台部を除き白化粧土、透明釉がかかる。4は高台は

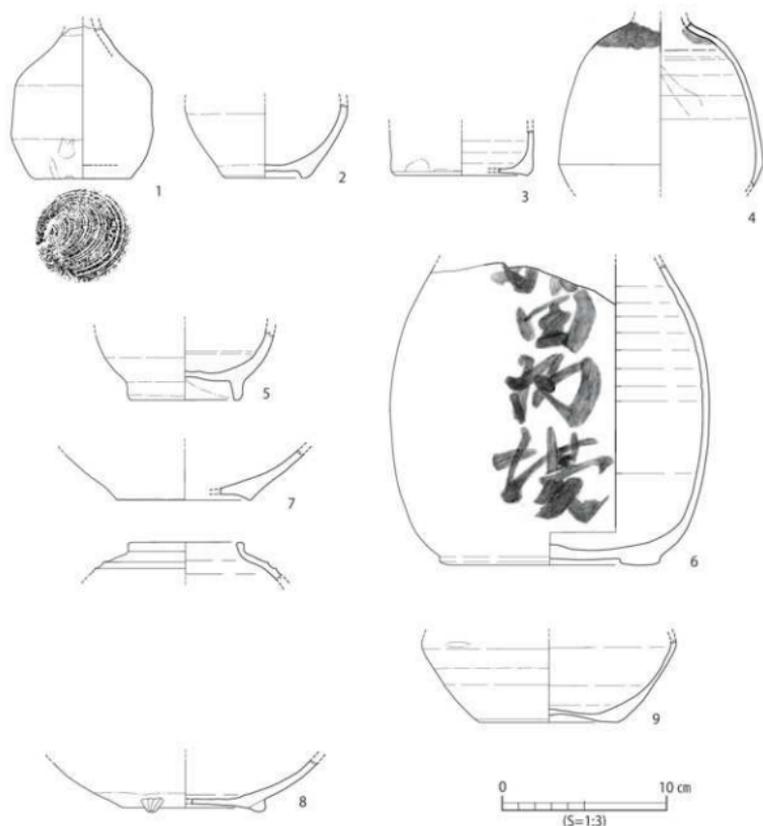


第21図 峰口古墓出土遺物 (6) 陶器その6

削り出しにより成形され、底部外面には鉋による削り痕跡が残る。3、4の産地は山口県須佐とみられる。5は口縁端部を内側へ折り、上面には1.5cm間隔で刻みをつけて波打たせ、輪花状に装飾する。6は香炉の胴部である。外面は白化粧土に呉須絵で文様があらわされる。外面底部と内面胴部下半は無軸である。産地は肥前波佐見で、年代観は18世紀前半である。

陶器（甕類 第20図～第21図）

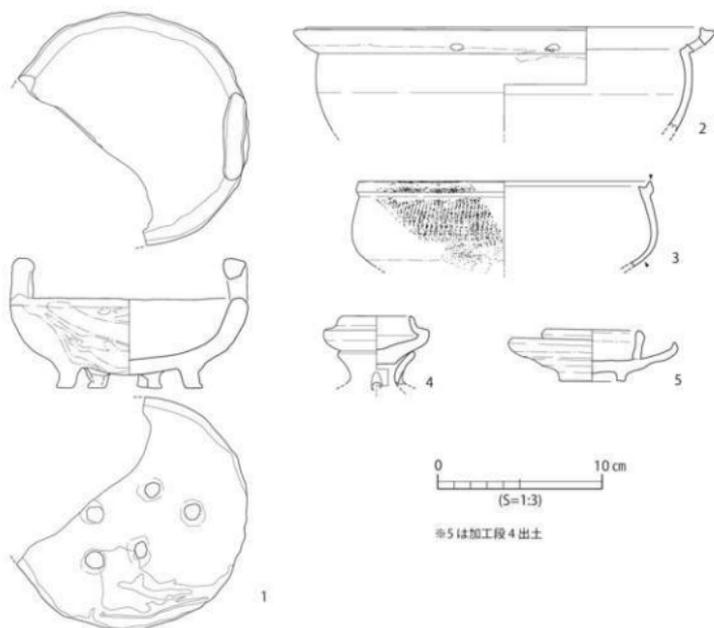
第20図1は甕の底部である。組づくりにより成形され、底部4cm上方の内面には粘土継ぎ目が横走る。器壁の厚さもこの継ぎ目を境に変わる。内面には格子目叩きの痕跡が残る。産地は肥前で



第22図 罈口古墓出土遺物 (7) 陶器その7

ある。2は陶器の甕の底部である。産地は肥前とみられる。3は陶器の甕の胴部である。外面の肩部には沈線が4条めぐり、内面には叩きの痕跡が残る。4は陶器の甕である。胴下部は白泥釉を水平方向にめぐらし、刷毛目に似た効果を出している。松文は鉄絵で樹幹と枝を表し、灰釉で松の葉を描く。5は陶器の甕の底部である。高台畳付き以外は灰釉が厚くかかる。

第21図1は甕または甕の底部である。内面には整形時の叩き痕が残る。産地は肥前系である。2は甕の底部である。全体に光沢の少ない銹釉がかかる。3は基壇1から出土した甕の底部である。胴部の内外面には鉄釉(来待釉)がかかる。高台は削り出しにより整形され、無釉。4は陶器の甕である。底部内面には目跡が4箇所残る。窯道具の脚部先端が付着したものである。高台端にも本個体の下に積まれた窯道具の一部が付着している。全体に鉄釉(来待釉)をかけ、その上から黒釉を重ね掛けする。5は陶器の甕の口縁部である。胴上部は内傾し、端部を内側へ折り返し、上面をわず

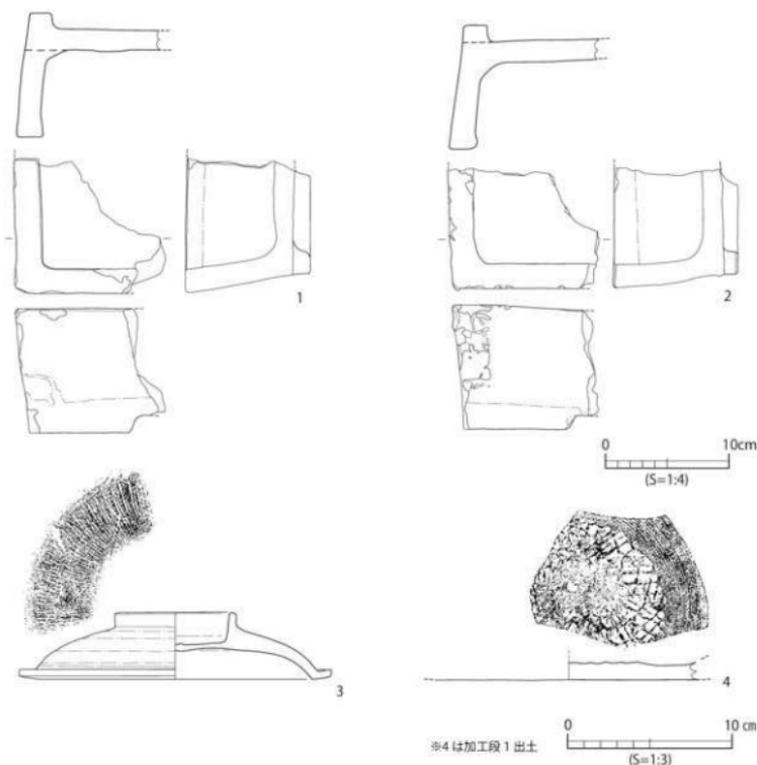


第23図 峠口古墓出土遺物 (8) 陶器その8

かに窪ませる。内外面に灰釉がかかる。石見焼で近代の所産である。6は陶器の壺の口縁部である。直立し、上端は面取りされる。端部直下に小さなくびれがある。内外面に鉄軸をかける。7は壺の底部である。高台は削り出しにより成形され、削り痕跡が明瞭に残る。内外面に灰釉がかかる。底部内面には窯道具の脚部先端が付着する。石見焼で、時代は近代である。

陶器 (瓶類 第22図)

第22図1は陶器の瓶である。肩と腰にゆるやかな稜がつく。外面全体に灰釉が厚くかかり、暗青灰色を呈する。底部は回転糸切痕が残る。2は陶器の中瓶である。灰釉が厚くかかる。全体の形状は辣非形で、高台は削り出しにより成形してクリ底とする。3は爛徳利の底部である。底部がわずかにくぼむ。全体に灰釉がかかる。4は陶器の徳利である。肩部から腰部にかけて径が広がり全体は下膨れになる。いわゆるべこかん形を模したものと思われる。鉄軸、黒釉を掛け分ける。5は陶器の中瓶底部である。少し腰が張る形状で、外面に灰釉がかかる。6は陶器の徳利である。表面には灰釉をかけ、胴部側面に鉄軸で「□田酒場」の鉄文字を記す。7は土瓶の底部である。胴部は直線的に外へ向かっており、算盤形になるとと思われる。底部外面にはわずかに熱を受けた痕跡がある。8は陶器の土瓶の口縁部及び底部の破片である。直立する短い口縁から、肩部が外へ大きく張り出す。外面にはカキ目文様がめぐる。底部は小さな粘土塊の脚部を貼り付ける。胴部は大きく外

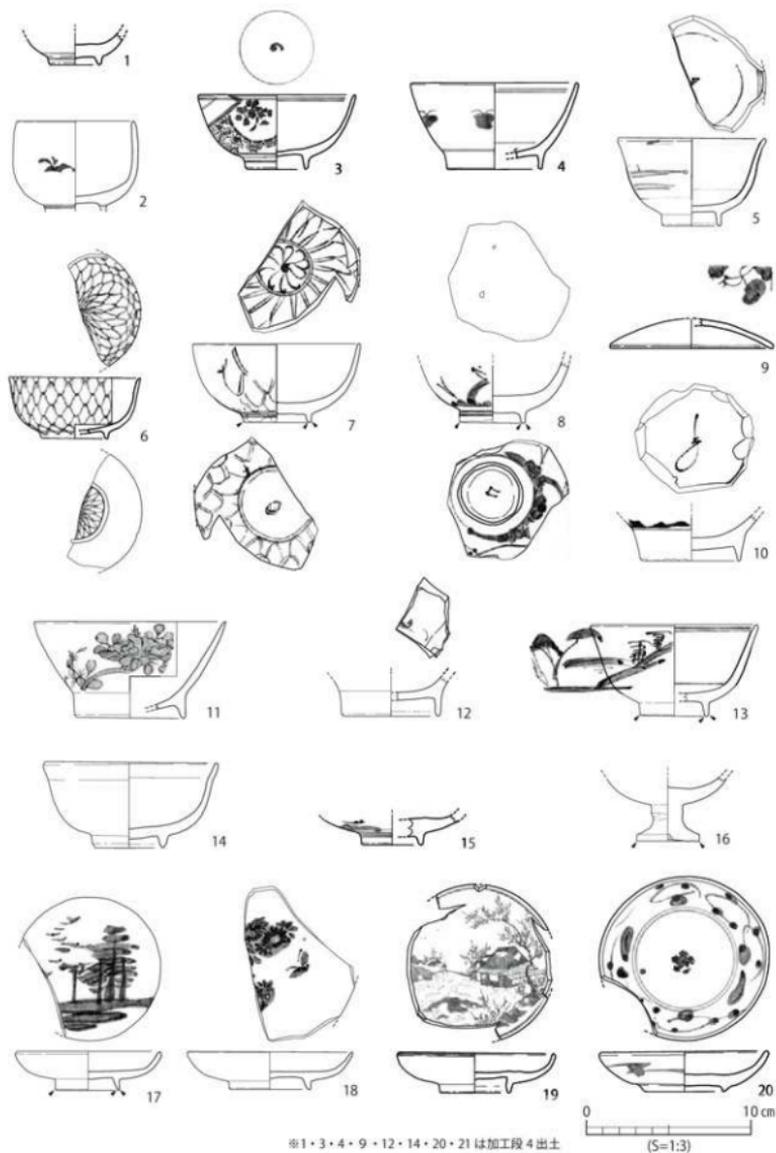


第24図 罫口古墓出土遺物 (9) 陶器その9

へ張り出し、算盤玉状の形が想定される。9は土瓶である。胴部最大径付近で内側に折れ、稜がつく。

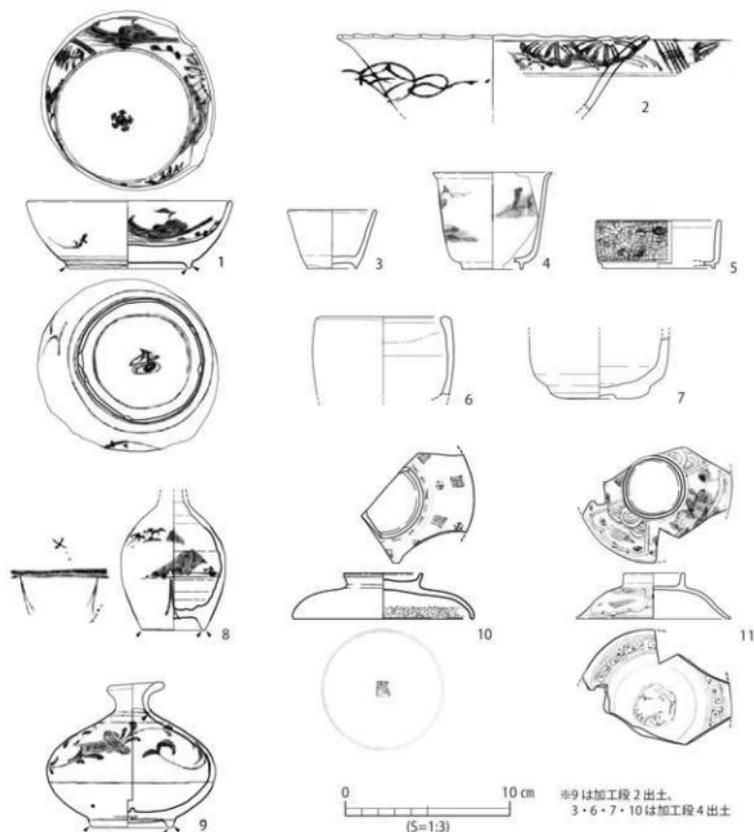
陶器 (その他 第23図)

第23図1は陶器の鍋である。二方向に径9mmの耳を貼り付けた、丸形紐状双耳鍋である。底部には脚が貼り付けられ、現状で5本を数え、うち1本は基部のみが残る。外面には来待軸がかかる。2は陶器の上鍋である。にぶい橙色の生地に鉄軸がかかる。口縁を外へ折って引き出し受け口状に成形の後、穿孔する。内面と口縁部外面に来待軸を刷毛目状に施す。3は行平鍋である。口縁端部はつまんで上方へ鋭く伸ばして蓋受けを作る。外面には、飛び鉤により連続した刻み目を刻む。口縁部～胴部外面は光沢のない銹軸を施す。4は柔燭である。受け皿と瓶状の筒部を別作りして接合している。受け皿部は口縁を内側へ折ったのち上へつまみ上げて成形する。底部外面には回転糸切痕が残る。外から見える範囲に黒軸を施す。筒部は斜め上方から内面へ向けて穿孔する。5は燈明皿の台である。高台付きの皿の中央に円筒形の皿受を載せる。



※1・3・4・9・12・14・20・21は加工段4出土

第25図 峰口古墓出土遺物 (10) 磁器その1



第26図 罫口古墓出土遺物 (11) 磁器その2

土製品 (蓋 第101図)

第101図1は線香立てである。厚さ2cmの粘土板を継ぎ合わせて製作する板作りである。胴部外面、口縁部には来待軸がかかる。底部は粘土板の一部を削って脚部を成形している。陶器窯で用いられる製作技法と多くの点で異なっており、瓦職人が製作した可能性がある。2は線香立てである。厚さ2cm前後の粘土板の組み合わせで成形し、削り出しにより脚部を作る。口縁部～胴部外面にかけて来待軸を施す。1との共通点が多く、瓦職人の手による可能性がある。3は鍋蓋である。口縁部を外へ折り、端部を面取りする。外面には飛び鉋による連続した刻み目を入れる。刻み目の上端と下端に、鉄軸による橙色の幅広の圈線をめぐらす。4は器種不明の円板形の陶器である。中央部に叩き目が、外周部に回転ナデの痕跡が残る。

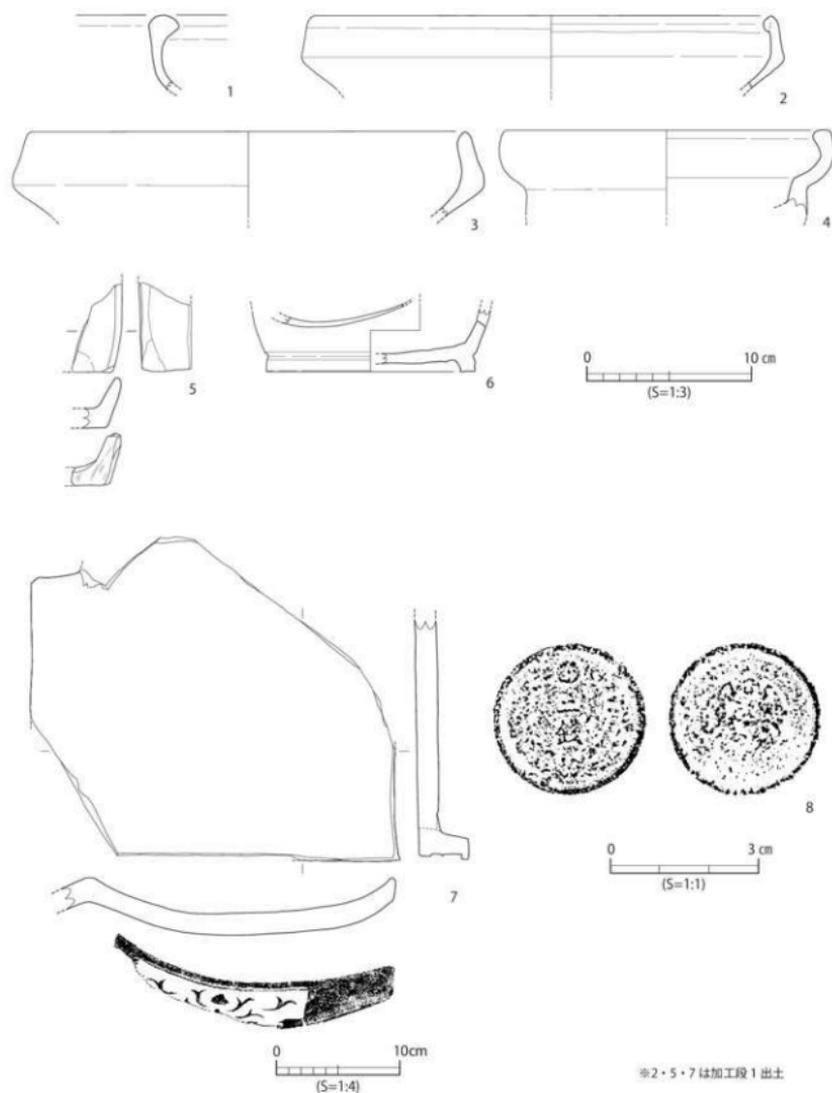
磁器（碗類 第25図1～17）

第25図1は丸形碗である。高台部には染付で圏線をめぐらす。産地は肥前系で年代観は18世紀代である。2は小丸碗である。胴上部から口縁部にかけてほぼ直立する。見込には胎土目跡が残る。外面には染付による草花文の一部が残る。3は菊花文埋め詰めの地の一部に区割り花文が表される。コバルトを用いた染付で、年代観は明治10～20年代以後である。4は広東形の碗である。高い高台から直線的に斜め上方へ立ち上がる。外面にはコンニャク印判による蝶文を一定間隔で捺す。産地は肥前系で、年代観は1800年～1810年である。5は端反形小碗である。染付により見込部に文様と圏線、外面にも文様を描く。6は酒盃である。染付による網目文が内外面全体、さらに高台内部にまで描かれた上質の製品である。7は丸形碗である。内面には染付で菊花文を描く。外面には染付による二重網目文を描く。底部外面中央には「禍福」がある。産地は肥前で、年代観は1750年～1760年である。8は碗の胴下部～底部である。見込に胎土目跡が3箇所残る。胴部には染付で梅樹文を描く。高台内は、字形が崩れた「大明年製」の銘を記す。産地は肥前で、年代観は18世紀前半（1830～40年代）のくらわんか碗である。9は広東碗の蓋である。染付で菊花文を描く。産地は肥前で年代観は18世紀代である。10は広東形碗である。先細る長い高台から胴部が斜め上方に直線的に立ち上がる。外面には染付による文様の一部が残る。見込には崩した「寿」字が表される。11は広東形碗である。胴部は直線的で、染付による芙蓉文が描かれる。肥前系で、時期は19世紀第1四半期に属する。産地は肥前系である。12は広東形碗の底部で、背の高い高台が残る。見込に「寿」字崩しが表される。年代は1800年～1810年に属する。13は端反形碗である。外面には染付により山水文が描かれ、中央には海浜が表される。産地は肥前系で、年代観は1850年～1860年である。14は端反形碗である。口縁部の外反がやや極端で、内外面にコバルトの代用で鉄軸をかける。年代観は昭和10年代である。15は丸形碗の底部である。外面には染付による梅樹文、圏線を描く。豊付きには重ね焼きの際の砂が付着する。肥前産のくらわんか形の碗で、年代観は18世紀第3四半期である。底部中央を削り高台状に作る。16は基壇1から出土した白磁の仏飯器である。脚端は面取りされる。17は仏飯器である。脚上部はアクセントがついてわずかに膨らむ。

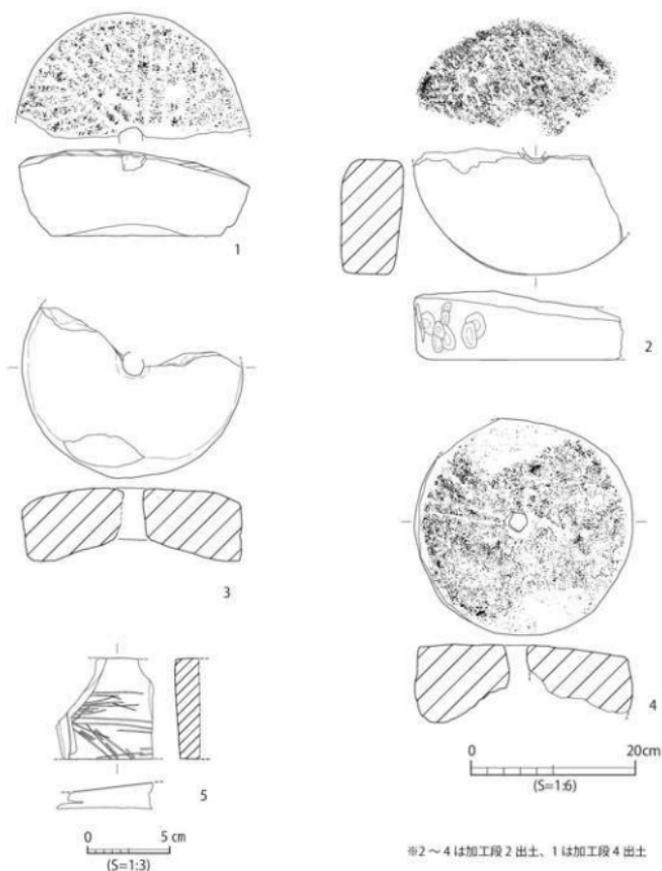
磁器（皿・鉢類 第25図17～第26図2）

第25図17は丸形皿である。見込には化学コバルトを用いて染付による山水文を描く。画面中に鳥、海浜が表される。年代観は明治10年代である。18は丸形皿である。見込には胎土目跡が3箇所残る。コバルト染付により花蝶文を描く。19は丸形皿である。家屋、梅樹、耕作風景をモチーフにした東屋山水文を、銅版刷により表す。化学コバルトに加え、家屋の屋根・梅花等に鉄軸を使用する。年代観は明治時代後半以後である。20は丸形の皿である。外面には折れ松葉文、内面外周部は梅樹文、中央にはコンニャク印判の五弁花文を染付で表す。産地は肥前系で、時代は1780～1800年代に属する。

第26図1は丸形皿である。胴部内面の文様は扇割り松竹梅文崩しである。見込中央部にはコンニャク印判による五弁花文、底部外面には「馬」字状渦福が表される。産地は肥前で、年代観は1800年～1810年代である。2は輪花鉢である。轆轤型打ち成形により口縁は細かく波打つ。内面外周部には菊花文のほか、竹編み、畑の作物等が描かれる。産地は肥前で、年代観は19世紀である。



第27図 罫口古墓出土遺物 (12)



第28図 峰口古墓出土遺物 (13) 石製品

磁器 (その他 第26図3～第26図11)

第26図3は桶形猪口である。高台の先端は先細り、畳付きは無釉である。産地は肥前で、年代観は19世紀である。4は筒丸形碗である。胴部はほぼ直立し、口縁端部がわずかに外へ折れる。染付により山水文が描かれる。年代観は19世紀中葉である。5は段重である。外面に染付で微塵唐草が描かれる。年代観は19世紀前半である。6は筒形香炉である。胴部が緩く張り、口縁端部は丸く収める。外面から内面口縁部にかけて青磁釉を施す。産地は肥前系で、年代観は18世紀末～19世紀

前半である。7は筒形香炉である。削り出しにより蛇ノ目凹形高台を成形する。畳付きの幅は9mmと広く、釉剥ぎされる。釉剥ぎ部分には重ね焼きの際に挿入された窯道具（戸車あるいはチャツ）の痕跡が環状に残る。8は神酒徳利である。外面には染付により上半分に松竹梅文、下半分に注連縄文が描かれる。肥前系で、年代観は19世紀前半代に属する。9は髪油壺である。胴部が大きく膨らみ、口縁端部はわずかに外反する。肩部には染付により花唐草文を描く。19世紀前半に比定される。10は望料碗の蓋である。口縁端部が内湾する。外面にはツマミ部の○×文及び圏線、文字文を描く。内面は四方袈裟禪文がめぐる。年代観は1820年～1830年代である。11は端反碗の蓋である。口縁部は外反気味に外方へ長く伸びる。外面は花唐窓千鳥文に蝶文、内面は環状松竹梅文に雷文を染付で描く。産地は肥前系で、年代観は1820年代～1830年代である。

土器・土製品・金属製品（第27図）

第27図1は瓦質土器の甕の口縁部である。端部を外へ肥厚させ、上端は曲面とし、外側は稜をつける。2は瓦質土器の焙烙である。胴部は内傾し、端部を内側へ折り返してわずかに肥厚させる。3は土師質土器の焙烙の口縁部である。胎土はにぶい橙色である。4は瓦質土器の焙烙である。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。胴中央部は内側へ折れる。5は平面四角形の皿形の土製品である。右側辺は高さ3cmの壁が立ち上がるが、下辺側は壁が無く、開口した状態である。6は高台を伴う土製品である。上端面は面取りされ、弧を描く。5、6とも器種は不明である。7は軒棧瓦である。棧瓦部の頭に前方から瓦当部を接着する。瓦当文様は均整唐草文である。左右三葉ずつ唐草が広がり、いずれも先端が二股に分岐する。中心飾りは三葉形である。8は二銭硬貨である。

石製品（第28図）

第28図1～4は石臼である。1は主溝間の角度を45度とした八分割で、主溝に平行する副溝を六本彫り、八分割六溝の構成である。2は上面全体が平滑である。傾斜して片方の側が薄くなっている。側面には成形時の叩き痕が残る。擦り溝は八分割六溝の構成である。3の底面は軸穴のある中心部へ向かって窪む。擦り溝は摩滅により消滅する。4は擦り溝の大半が摩滅している。3、4は火山礫凝灰岩製で、福光産である。5は砥石である。石の目に沿って剥離し、3枚に割れた状態で出土の後、接合したものである。下面は欠損する。上面には線状の使用痕が多数残る。

第4節 小結

(1) 遺構

碑口古墓の調査では、丘陵斜面から加工段と基壇が検出された。基壇1からは一石五輪塔が3基出土した。出土遺物は僅かであったが、遺物から推定される基壇1の構築年代は18世紀である。3つの基壇が造営されていた加工段4からの出土遺物は18世紀～19世紀前半が多く、同加工段上の墓地造営のピークは18世紀～19世紀前半と推定される。基壇1の年代もこの中に含まれる。

ただし、基壇1上面に集積されていた一石五輪塔の年代は17世紀代で、加工段や基壇の推定時期より古いものであった。一石五輪塔は基壇構築時あるいは構築後に付近から集められたものとみられ、五輪塔が建てられていた古墓の本体は調査区外に想定される。この丘陵が墓地として利用され始めた時期は、一石五輪塔の時期である17世紀代まで遡ると考えられる。

(2) 遺物

出土遺物のほとんどが近世から近代の遺物である。基壇1～3が構築された加工段4からは、陶胎染付の一群(第16図)が出土しており、18世紀代のものが多い。山口県須佐産の播鉢(第18図)も多く、年代の判明するものは18世紀に属する。磁器では、丸碗・広東碗を中心とする肥前系の磁器碗が多く、少数の香炉が含まれる(第25、26図)。磁器の多くは年代観が19世紀前半である。

これら加工段4からの出土遺物は基壇群造営のピークが18世紀～19世紀前半であることを示していると考えられる。

調査区下方の加工段1、2からの出土遺物は、表面採集、重機掘削時の出土遺物を含め、石見焼製品、型紙刷の肥前系磁器等が主である。片口鉢、佐野焼の鉢(第16図23～25)など鉢類も多い。

在地産(石見焼)以外では、肥前系の陶胎染付や、山口県須佐産の播鉢の一群、防府市佐野焼^⑦の鉢など西部地域からの搬入品の比重が高い。佐野焼に関しては、島根県を含む中四国、九州各地へ、舟運により広範囲に運ばれ、流通したことが指摘されている。三隅港経由で西方からさかんに物資が搬入された状況をうかがわせる。

(2) 佐野焼業者の動向、輸送については下記文献による。田畑直彦2017「山口県の窯業と石見焼」『近世・近代の石見焼の研究』島根県古代文化センター

表4 峰口古墓調査区内出土遺物観察表

探検 番号	陶胎 番号	出土位置	種類	形制	法量				胎土	成形 調整	施装	文様	裝飾	産地	備考
					a (cm)	b (cm)	c (cm)	d (cm)							
6	写真1	基壇1	陶器	皿	—	—	—	—	浅黄色	組作り・ ナデ	—	—	—	—	試掘調査
16-1	12	表土	陶器	丸形碗	—	—	(4.0)	—	灰黄色	輪轉成形	透明釉・ 呉須・ 白化粧土	草花文	呉須絵	肥前系流佐見 陶胎染付	18世紀前半代 陶胎染付
2	11	表土	陶器	丸形碗	—	—	(4.0)	—	灰白色	輪轉成形	透明釉・ 呉須・ 白化粧土	圓縁・ 草花文	呉須絵	肥前系流佐見 陶胎染付	18世紀前半代 陶胎染付
3	12	黄褐色土	陶器	丸形碗	—	—	4.2	—	灰色	輪轉成形	透明釉・ 呉須・ 白化粧土	草花文	呉須絵	肥前系流佐見 陶胎染付	18世紀前半代 陶胎染付
4	12	加工段4	陶器	輪轉形碗 (9.7)	5.3	3.6	—	—	にぶい黄褐色	輪轉成形	鉄釉・ 黒灰釉	—	掛け流し	呉焼	19世紀前半代
5	12	加工段4	陶器	広東形碗 (10.8)	6.1	5.6	—	—	にぶい黄褐色	輪轉成形	鉄釉・ 鉄釉	山水文	鉄絵	在地系	19世紀代
6	11	加工段4 南端	陶器	丸形碗	—	—	(4.0)	—	浅黄色	輪轉成形	透明釉・ 呉須・ 白化粧土	圓縁・ 草花文	呉須絵	肥前系流佐見 陶胎染付	18世紀前半代 陶胎染付
7	11	加工段4 南端	陶器	腰張丸形碗	—	(5.7)	(4.2)	—	灰黄色	輪轉成形	透明釉・ 呉須・ 白化粧土	草花文	呉須絵	肥前系流佐見 陶胎染付	18世紀前半代 陶胎染付
8	12	包合層	陶器	腰張丸形碗 (10.2)	6.7	4.6	—	—	灰白色	輪轉成形	透明釉・ 呉須・ 白化粧土	山水文	呉須絵	肥前系流佐見 陶胎染付	18世紀前半代 陶胎染付
9	11	基壇1 周辺	陶器	煎じ碗	—	—	3.2	—	にぶい黄色	輪轉成形	透明釉・ 鉄釉	格子文	高台内釘形 り	—	—
10	12	石葺り層	陶器	丸形碗 (11.2)	6.9	(4.9)	—	—	灰黄色	輪轉成形	透明釉・ 呉須	山水文	呉須絵	肥前系流佐見 陶胎染付	18世紀前半代 陶胎染付
11	12	加工段4 南端	陶器	丸形碗 (9.6)	7.0	(4.6)	—	—	灰黄色	輪轉成形	透明釉・ 呉須・ 白化粧土	山水文	呉須絵	肥前系流佐見 陶胎染付	18世紀前半代 陶胎染付

群別 調査 番号	調査 番号	出土位置	種類	器種	法量				胎土	成形 調整	施薬	文様	裝飾	産地	備考
					a (cm)	b (cm)	c (cm)	d (cm)							
16-12	11 12	黄褐色土	陶器	丸形甕	12.6	4.8	6.0	—	浅黄褐色	輪轆成形	透明釉・ 鉄釉	「寿」字	鉄趾	在地系	—
-13	11	表探	陶器	丸形甕	—	5.5	—	—	浅黄色	輪轆成形	灰釉	—	—	在地系	—
-14	13	加工段4	陶器	平形形甕	11.4	5.8	5.2	—	明黄褐色	輪轆成形	黒灰釉	—	—	在地系	—
-15	11	加工段1	陶器	丸形甕	—	—	4.6	—	灰黄色	輪轆成形	透明釉・ 灰釉・ 白化粧土	圓線	貝須趾	畿前系流伝見	18世紀前半代 陶師染付
-16	11	表探	陶器	丸形甕	—	—	—	—	灰色	輪轆成形	透明釉・ 灰釉・ 白化粧土	圓線	貝須趾	畿前系流伝見	陶師染付
-17	13	加工段4	陶器	丸形甕	10.2	3.0	5.3	—	にぶい褐色	輪轆成形	黒灰釉	—	—	在地系	—
-18	11	調査区 北東	陶器	鉢	—	—	—	—	浅黄色	輪轆成形	透明釉・ 鉄釉	流水文	鉄趾	在地系	近代々
-19	11	加工段4	陶器	香炉・火鉢	—	—	—	—	にぶい黄褐色	輪轆成形	透明釉	—	—	在地系	—
-20	11	黄褐色土	陶器	皿	—	—	—	—	明黄褐色	輪轆成形	黒豆	—	—	在地系	高台内に埋蔵
-21	11	基壇1 周辺	陶器	平形鉢	—	—	(10.0)	—	にぶい褐色	輪轆成形	—	—	火だすき	畿前系	* 底面に菱形の 刻印。 18世紀後半 方*
-22	11	表土	陶器	鉢	—	—	—	—	にぶい赤褐色	輪轆成形	—	—	火だすき	畿前系	—
-23	13 14	加工段2 下方	土器	鉢	(28.4)	(19.3)	—	(31.0)	浅黄褐色	紐作り成形・ タタキ	—	—	—	佐野焼	—
-24	13 14	加工段2 下方	土器	鉢	(31.2)	(12.8)	—	(35.2)	浅黄褐色	紐作り成形・ タタキ	—	—	—	佐野焼	—
-25	13 14	加工段2 下方	土器	鉢	—	—	—	—	浅黄褐色	紐作り成形・ タタキ	—	洗線×2	—	佐野焼	—
-26	13	黄褐色土	陶器	楕圓形鉢	(17.6)	7.3	(9.2)	(18.2)	浅黄褐色	輪轆成形	灰釉・ 白化粧土	—	刷毛目・押 正	在地系内	—
17-1	13	表探	陶器	片口鉢	—	—	(7.8)	—	浅黄色	輪轆成形・ 底面磨削り	灰釉	—	—	須佐	—
-2	13 14	加工段2	陶器	片口鉢	(17.0)	10.3	7.0	—	灰黄色	輪轆成形・ 底面磨削り	灰釉	—	—	須佐	—
-3	14	表土	陶器	片口鉢	(8.8)	(5.3)	—	—	浅黄褐色	輪轆成形	透明釉	—	—	—	—
-4	14	表探	陶器	片口鉢	(20.8)	8.9	8.4	—	灰黄色	輪轆成形・ 日鉢×5	透明釉	—	—	—	—
18-1	15	黄褐色土	陶器	深鉢	34.0	(9.3)	—	—	淡黄色	輪轆成形	鉄釉	—	—	—	注目11条単位
-2	15	黄褐色土	陶器	深鉢	—	—	—	—	にぶい褐色	輪轆成形	—	—	—	須佐	注目10条単位
-3	15	加工段4 高壇	陶器	深鉢	—	—	—	—	明黄褐色	輪轆成形	—	—	—	須佐	—
-4	15	加工段2	陶器	深鉢	—	—	—	—	にぶい黄褐色	輪轆成形	鉄釉	—	—	須佐	注目10条単位
-5	15	黄褐色土	陶器	深鉢	—	(9.1)	(12.0)	—	にぶい黄褐色	輪轆成形・ 底面磨削り	—	—	—	須佐	* 注目14条 単位 18世紀*
-6	15	表土	陶器	深鉢	—	(13.1)	(11.0)	—	にぶい褐色	輪轆成形	—	—	—	須佐	注目10条単位
-7	16	加工段4 高壇	陶器	深鉢	—	—	—	—	にぶい褐色	輪轆成形・ 底面磨削り	—	—	—	須佐	* 注目14条単位 18世紀*
-8	16	黄褐色土	陶器	深鉢	—	—	(10.0)	—	褐色	輪轆成形・ 底面磨削り	—	—	—	須佐	* 注目10条単位 18世紀*
-9	14	加工段4 高壇	陶器	深鉢	—	(9.0)	12.6	—	赤褐色	輪轆成形・ 底面磨削り	鉄釉	—	—	—	注目14条単位
-10	16	加工段4 高壇	陶器	深鉢	—	—	—	—	暗灰色	輪轆成形	鉄釉	—	—	—	—
-11	16	黄褐色土	陶器	深鉢	—	—	—	—	赤灰色	輪轆成形	鉄釉	—	—	—	畿前
-12	16	加工段4	陶器	深鉢	—	—	—	—	淡黄色	輪轆成形	鉄釉	—	—	在地	注目13条単位
-13	16	黄褐色土	陶器	深鉢	—	(7.4)	(13.0)	—	灰黄色	輪轆成形	鉄釉	—	—	—	注目8条1単位

押印 番号	陶版 番号	出土位置	種類	器種	法量				胎土	成形 調整	施薬	文様	裝飾	産地	備考
					a (cm)	b (cm)	c (cm)	d (cm)							
19-1	17	黄褐色土	陶器	こむ鉢	—	—	10.4	—	棕色	輪轆成形	白泥輪	—	網毛目・ 流し掛け	—	—
-2	17	表採	陶器	鉢	(30.0)	11.5	(14.6)	—	浅黄褐色	輪轆成形・ 彫出し高台	灰輪	—	—	在地	日跡×5
-3	17	加工段4 曲壁	陶器	鉢	—	—	—	—	にぶい黄褐色	輪轆成形・ 底面彫削り痕	透明輪	—	—	調査	18世紀
-4	17	加工段4 曲壁	陶器	鉢	—	—	—	—	棕色	輪轆成形・ 底面彫削り痕	—	—	—	調査	—
-5	17	黄褐色土	陶器	鉢	—	—	—	—	浅黄色	輪轆成形	灰輪	—	—	口縁部を折 り返し、上 面に朝白を 入れて敲打 させる	—
-6	17	加工段4	陶器	香炉	(9.4)	(6.6)	—	—	浅黄色	輪轆成形	透明輪・ 灰須・ 白化粧土	山水文カ	供願絵	肥前系政茂見	18世紀前半代 陶器残存
20-1	17	表土	陶器	甕	—	(8.0)	(16.0)	—	灰黄色	紐作り成形・ 格子目状叩き	鉄輪	—	—	肥前系	18世紀前半代カ
-2	17	加工段4	陶器	甕	—	—	(13.4)	—	灰褐色	紐作り成形	鉄輪	—	—	肥前系カ	—
-3	18	加工段4	陶器	甕	—	—	—	—	灰黄色	紐作り成形・ 格子目状叩き	鉄輪	沈線×4	—	肥前系	18世紀前半代カ
-4	18	加工段4	陶器	甕	(29.0)	(19.2)	—	(11.8)	棕色	紐作り成形	白泥輪・ 鉄輪・ 灰輪	松文	鉄輪・ 網毛目	—	—
-5	18	加工段2	陶器	壺	—	—	(8.0)	—	灰白色	輪轆成形	透明輪	—	—	—	—
21-1	19	加工段4	陶器	壺	—	—	—	—	灰赤色	紐作り成形・ カキ目	—	—	—	肥前系	—
-2	19	加工段4	陶器	壺	—	—	—	—	黄灰色	紐作り成形	鉄輪	—	—	—	—
-3	18	褐色土	陶器	壺	—	(27.9)	(12.8)	—	灰黄色	紐作り成形・ 日跡×4	鉄輪・ 黒輪	—	重む掛け	—	—
-4	19	黄褐色土	陶器	壺	—	—	—	—	浅黄色	輪轆成形	透明輪	—	—	在地 (石見模)	—
-5	19	表採	陶器	壺	—	—	—	—	棕色	輪轆成形	鉄輪	—	—	—	—
-6	19	黄褐色土	陶器	壺	—	—	(18.7)	—	灰黄色	紐作り成形	灰輪	—	—	在地 (石見模)	—
22-1	18	表採	陶器	瓶	—	(9.3)	6.0	—	暗青灰色	輪轆成形	灰輪	—	—	—	頸部を頸珠の後 転用カ
-2	18	表土	陶器	瓶	—	—	(4.9)	—	浅黄色	輪轆成形	灰輪	—	—	在地 (石見模)	頸部・ タリ底
-3	19	灰黄褐色 土	陶器	徳利	—	—	7.0	—	灰黄色	輪轆成形	灰輪	—	—	在地 (石見模)	徳利形
-4	19	黄褐色土	陶器	徳利	—	—	—	—	淡黄色	輪轆成形	鉄輪・ 黒輪	—	掛け分け	在地系	—
-5	18	黄褐色土	陶器	瓶	—	—	(6.6)	—	浅黄色	輪轆成形	灰輪・ 白化粧土	—	—	—	二次焼成
-6	20	北西法面	陶器	徳利	—	(18.5)	12.4	(19.4)	緑灰色	輪轆成形	灰輪・ 鉄輪	—	鉄文字	在地 (石見模)	鉄輪で字 「田出酒場」
-7	19	黄褐色土	陶器	土瓶	—	—	(8.2)	—	灰白色	輪轆成形	透明輪	—	—	在地 (石見模)	—
-8	19	表土	陶器	土瓶	—	—	(7.6)	—	淡黄色	輪轆成形 頸部彫削り	鉄輪	カキ目	—	—	—
-9	19	黄褐色土	陶器	算盤玉形 土瓶	—	—	(8.4)	—	浅黄褐色	輪轆成形	透明輪	—	—	在地 (石見模)	—
23-1	20	表採	陶器	罎	13.0	7.9	—	—	灰黄色	紐作り成形 脚部・取手彫 付け	来持輪	—	—	—	丸形紐状双耳 罎 脚部×5
-2	20 21	黄褐色土	陶器	土罎	(25.6)	(6.3)	—	—	にぶい棕色	輪轆成形	鉄輪	—	網毛目	—	口縁を外へ引き 出した後穿孔
-3	20 21	黄褐色土	陶器	行平罎	—	—	—	—	浅黄褐色	輪轆成形	鉄輪	—	飛び跡によ る朝白	—	—
-4	20 21	表土	陶器	薬瓶	4.1	(4.2)	—	—	灰黄褐色	輪轆成形・ 回転系切り跡	黒輪	—	—	—	瓶状部に穿孔
-5	20 21	加工段4	陶器	灯明舞台	5.6	3.2	3.8	9.9	にぶい黄褐色	輪轆成形	灰輪	—	—	—	円筒形脚受

第3章 埴口古墓の調査

神田 番号	図版 番号	出土位置	種類	器種	法量				胎土	成形 調整	施薬	文様	裝飾	産地	備考
					a (cm)	b (cm)	c (cm)	d (cm)							
24-1	21	表採	陶器	線香立て	(12.2)	(11.0)	10.1	—	にぶい黄褐色	板作り	未付軸	—	—	—	削出しにより脚部に透かしを成形
-2	21	表採	陶器	線香立て	(12.2)	(9.8)	10.1	—	浅黄色	板作り	未付軸	—	—	—	—
3	20 21	表土	陶器	蓋	(7.4)	4.1	(19.0)	—	灰黄色	輪轆成形	鉄軸	鉄軸による 脚部	飛び駒による 刻目	—	—
-4	21	加工段1	陶器	不明	—	1.1	—	—	灰赤色	輪轆成形・ 叩き目	—	—	—	—	—
25-1	23 24	加工段4	磁器	丸形小杯	—	—	(3.0)	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	脚部	染付	肥前系	18世紀代カ
-2	22	表採	磁器	小丸甕	(7.3)	(5.4)	—	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	草花文・ 脚部	染付	—	京産
-3	22	加工段4	磁器	丸形甕	(9.4)	4.6	3.6	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 化学コバルト	菊花理詰め ・区割り花 文	型紙刷・コ バルト染付	—	明治10～20年 代以降
-4	22 23 24	加工段4	磁器	広東形甕	(10.0)	5.3	(5.0)	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	蝶文	染付	肥前系	1800～1810 年
5	22	表採	磁器	端反形甕	—	5.4	(3.6)	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	飛騨文	染付	肥前系	19世紀代
6	23	表採	磁器	端反形酒盃	(8.0)	3.7	(3.7)	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	蘭日文	染付	肥前系	高台内まで蘭日 文が描かれる
-7	23 24	石割り層	磁器	丸形甕	—	4.8	4.1	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	二重蘭日文 ・草花文 ・酒盃	染付	肥前系	1750～60年代
-8	22	表土	磁器	丸形甕	—	—	4.0	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	梅蘭文	染付	肥前系	くらわんか刷 れ「天明年製」 1750～1760 年代
-9	23 24	加工段4	磁器	広東形甕	—	—	—	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	草花文	染付	肥前系	18世紀末～19 世紀初
-10	23	表土	磁器	広東形甕	—	—	6.1	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	「寿」字文	染付	肥前系	1800～1810 年代
-11	23	石割り層	磁器	広東形甕	—	—	—	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	芙蓉文	染付	肥前系	1780～1800 年代
-12	23 24	加工段4	磁器	広東形甕	—	—	(5.8)	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	「寿」字刷 し	染付	肥前系	1800～1810 年代
-13	22	表採	磁器	端反形甕	(10.0)	10.6	(4.2)	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	山水文(海 浜)・脚部	染付	肥前系	1850～60年代
-14	22	基壇1 貫辺	磁器	端反形甕	10.3	5.3	4.1	—	白色	輪轆成形	鉄軸	—	—	—	昭和10年代
-15	23 24	表採	磁器	丸形甕	—	—	—	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	梅蘭文	染付	肥前系	18世紀中頃
-16	22	表採	磁器	仏教器	—	(3.9)	(3.8)	—	白色	輪轆成形	透明軸	—	白磁	肥前系	輪高台
-17	23 24	表土	磁器	丸形甕	8.9	2.4	3.9	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 化学コバルト	山水文	コバルト染 付	—	明治10年代
-18	23 24	基壇1 貫辺	磁器	丸形甕	(11.0)	2.3	4.9	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 化学コバルト	花蝶文	型紙刷・コ バルト染付 染料・目録 ×3	—	明治10年代
-19	23 24	加工段4	磁器	丸形甕	(9.4)	2.5	4.1	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 化学コバルト・ 鉄軸	東屋山水文 (存疑)	瀬色刷	—	明治後半以降
-20	23 24	基壇1 下方	磁器	丸形甕	10.1	2.5	4.8	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	梅蘭文・ 五弁花文・ 折れ松葉文	染付・ コンニャク 印刷	肥前系	1780～1800 年代
26-1	24 25	石割り層	磁器	丸形甕	—	4.2	7.6	—	白色	輪轆成形	透明軸・ 瓦蓋	扇割り松竹 梅文・花文・ 馬字表酒盃	染付・コン ニャク印刷	肥前系	1800～1810 年代
-2	24 25	表採	磁器	輪花鉢	(18.5)	—	—	—	白色	輪轆型打成形	透明軸・ 瓦蓋	高花文・ 宝文	染付	肥前系	19世紀前半代
-3	24 25	加工段4	磁器	桶形器口	—	3.6	—	—	白色	輪轆成形	透明軸	—	白磁	肥前系	19世紀代

採得 番号	図版 番号	出土位置	種別	器種	法量				胎土	成形 調整	施薬	文様	裝飾	産地	備考
					a (cm)	b (cm)	c (cm)	d (cm)							
20-4	23	表採	磁器	筒丸形碗	—	5.9	—	—	白色	輪轉成形	透明釉・ 呉須	山水文	染付	肥前系	19世紀中葉
—	5-23	黄褐色土	磁器	段重	—	2.9	—	—	白色	輪轉成形	透明釉・ 呉須	御縁唐草文	染付	肥前系	19世紀前半代
6	24 加工段4	磁器	筒形香炉	—	—	—	—	—	灰白色	輪轉成形	青磁釉	—	外面青磁	肥前系	18世紀末～19 世紀前半代
—	7-23	加工段4	磁器	筒形香炉	—	—	(4.6)	—	灰白色	輪轉成形	透明釉・ 呉須	種蘭山水文	染付	肥前系	“乾ノ目高台” 18世紀前半
—	8-25	黄褐色土	磁器	神酒徳利	—	(8.0)	3.8	(8.3)	白色	輪轉成形	透明釉・ 呉須	松竹梅文・ しめ縄文	染付	肥前系	19世紀前半代
—	9-25	加工段2	磁器	梨油壺	3.4	8.9	5.1	10.3	白色	輪轉成形	透明釉・ 呉須	花唐草文	染付	肥前系	19世紀前半代
—	10-24 25	加工段4	磁器	塑料碗蓋	(4.6)	2.8	(10.8)	—	白色	輪轉成形	透明釉・ 呉須	不明文字 文・四方禪 文・御縁・ 〇×文	染付	肥前系	1820～30年代
—	11-24 25	表採	磁器	磁反碗蓋	3.6	2.8	(9.2)	—	白色	輪轉成形	透明釉・ 呉須	花唐草・ 文・横文・ 環状松竹梅 文・面文	染付	肥前系	1820～30年代
27-1	26	黄褐色土	瓦質土器	甕	—	—	—	—	黄灰色	—	—	—	—	—	—
—	2-26	加工段1	瓦質土器	信筒	(26.8)	—	—	—	にぶい褐色	輪轉成形	—	—	—	—	—
—	3-26	表土	土師質 土器	信筒	—	—	—	—	にぶい褐色	輪轉成形	—	—	—	—	—
—	4-26	黄褐色土	瓦質土器	信筒	(19.4)	—	—	—	にぶい黄褐色	輪轉成形	—	—	—	—	—
—	5-26	加工段1	土製品	不明	(5.3)	(3.0)	3.5	—	にぶい黄褐色	板作り成形カ	—	—	—	—	—
—	6-25	黄褐色土	土製品	不明	—	(4.2)	(12.8)	—	黄褐色	輪轉成形カ	—	—	—	—	—
—	7-25	加工段1	瓦	軒椼瓦	29.5	(26.0)	2.0	—	褐色	タタラ作り	未待軸	唐草文	押印	—	—
—	8-26	基壇1北 斜面表土	金属製品	銭貨	3.2	3.2	0.2	—	—	—	—	—	—	—	“表面に文様 裏面に文字 「二銭」”
28-1	26	基壇1 周辺	石製品	石臼	(27.4)	(10.5)	(20.4)	—	—	—	—	—	—	—	八分割六溝
—	2-26	加工段2	石製品	石臼	(21.3)	8.4	—	—	—	—	—	—	—	—	八分割六溝
—	3-26	加工段2	石製品	石臼	26.8	8.9	24.8	—	—	(石材) 火山礫層灰岩	—	—	—	—	福光石
—	4-27	加工段2	石製品	石臼	26.0	9.5	—	—	—	(石材) 火山礫層灰岩	—	—	—	—	福光石系
—	5-26	石盛り層	石製品	砥石	—	6.2	—	—	—	—	—	—	—	—	石の目に沿って 割れ、下面側は 欠損

第4章 上古市遺跡の調査

第1節 位置と環境

上古市遺跡の所在する浜田市三隅町は、海岸から10数キロ南には中国山地がせまり1000m級の山塊が並び立っている。さらに海岸付近にも大麻山・合戦山・水来山・高城山・茶白山・源田山など300～500mほどの山々が連なる山地帯である。この地域の主要な河川である三隅川・岡見川の下流部付近は、丘陵が低くなるものの平野を形成することはない。三隅川の河口付近の後背湿地にわずかにまとまった可耕地が存在する。この地域は、山国石見を象徴するかのような景観をなしている。

浜田市三隅町は、いわゆる平成の大合併により浜田市となるが、それ以前は石見地域の都市である浜田市と益田市の境界となる地帯であった。古代においても中核地域の間に位置し、険しい自然環境におかれた状況は、遺跡の数に如実に表れている。

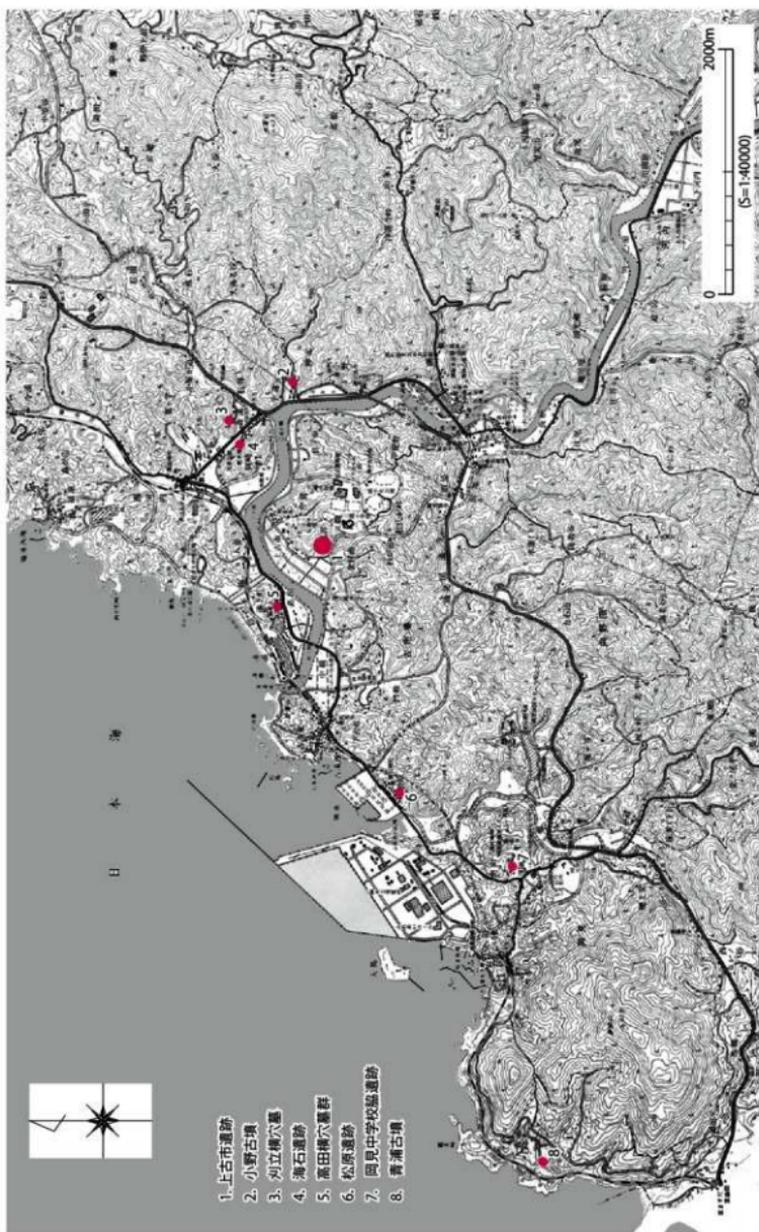
現在までのところ、上古市遺跡の所在するこの地域で知られる古代以前の遺跡は極めて少ない。海岸部と三隅川下流域に点在して少数の遺跡が見られる程度である。集落遺跡としては、海岸に面した沖積地に形成されたと見られる松原遺跡があり、縄文土器や弥生前期の土器、古墳時代前期から中期の土師器などが出土している。その他には目立った集落遺跡は無かったが、近年の三隅益田道路建設事業に伴い調査された海石西遺跡や上古市遺跡の成果から、三隅川の下流部では小規模ながらも集落遺跡が点在することが明らかになりつつある。

今回の上古市遺跡の調査成果から、不安定ながらも弥生時代前期から低地への進出がなされていたことが明らかとなり、中期後葉から古墳時代後期まで間断期がありつつも長期間にわたる遺物が出土している。海石西遺跡では弥生時代中期後葉から終末期の遺物が出土しており、三隅川下流部では弥生時代前期から古墳時代後期にいたるまで、断続的ではあるものの微高地や丘陵縁辺部などに集落が存在していると思われる。

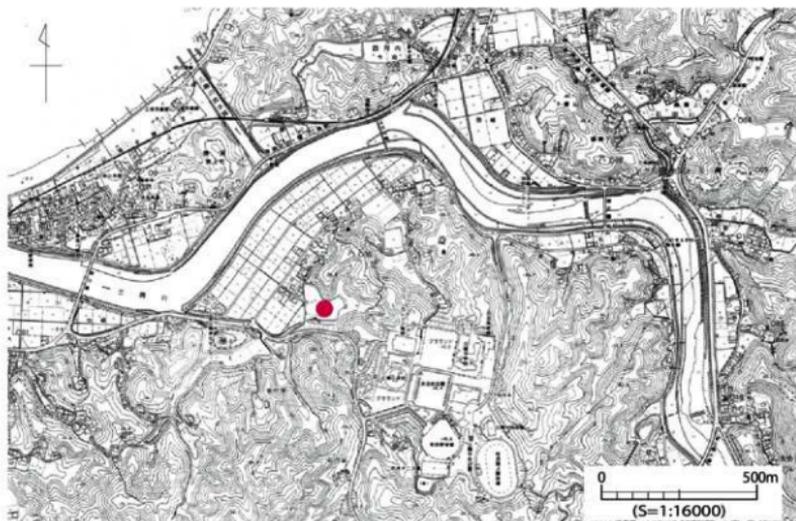
海石西遺跡・上古市遺跡出土の土器の様相を見おくと、弥生後期前葉については、石見地域で見られる器壁が厚く頸部直下に大振りの列点文を入れる甕があるが、弥生中期後葉(IV-1～2)や終末期の土器は出雲地域と大きな差はない。断片的な資料であるが古墳時代前期未まで、山陰系の甕形土器が煮沸具として使用されている。これに対し西に20km離れた益田平野では、古墳時代入ると急速に周防・長門地域の土器が流入するのに対し、前期後半には山陰系土器が激減し、特に煮沸用の甕形土器は見られなくなる。このように浜田市の西端にあたる地域の様相と益田平野では古墳時代以降に土器様相の違いが顕著になる。現状では三隅川下流域が山陰系土器を最後まで使用する地域の西端ということになる。

墳墓については、古墳時代中期までは確認されておらず、後期になって横穴式石室を埋葬施設とする小野古墳や青浦古墳、高田横穴墓群や刈立横穴墓などの横穴墓が見られるようになる。

工事中発見しながら詳細な発掘調査がなされた刈立横穴墓は、幅2.6mの正方形プランの玄室で、須



第29図 上古市道跡の位置と周辺の遺跡



第30図 上古市遺跡の位置

恵器が約30点のほか、大刀4・耳飾り5・切小玉5などが出土している。

青浦古墳は、奥壁幅1.65m・残存長2.8mの無袖形横穴式石室の可能性が指摘されている。海岸に面した丘陵斜面に日本海を見渡す立地にあり、松原遺跡の存在も合わせると、海人とも称すべき集団の存在も想像される。

古墳時代以降は現状では未知の状況はといってもよく、上古市遺跡で8世紀後半から9世紀にかけての須恵器などがまとまって出土している。

この地域においては、現在のところ遺跡の存在が確認できない時期が多く、隙間を埋める遺跡が周辺にあるのか、継続して集落経営を続けることが難しかったのか、判断できる状況にはない。

山陰道建設に伴う調査で、こうした課題に対する足掛かりとなる成果を得た、今後はその周辺の状況を確認していくことが望まれる。

参考文献

三隅町 (1971) 『三隅町史』

浜田市教育委員会 (2011) 『鳥根県浜田市遺跡地図(三隅自治区) 史跡 石見国分寺跡(塔東側の確認調査) —平成21年度市内遺跡発掘調査』

浜田市教育委員会 (2014) 『松原遺跡 市道松原2号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

鳥根県教育委員会 (2018) 『一般国道(三隅益田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』

海石西遺跡 角落し遺跡 廻り田遺跡 近世山陰道(馬橋地区) 神出西遺跡』



第31図 上古市道跡調査区の位置 (1 / 200)

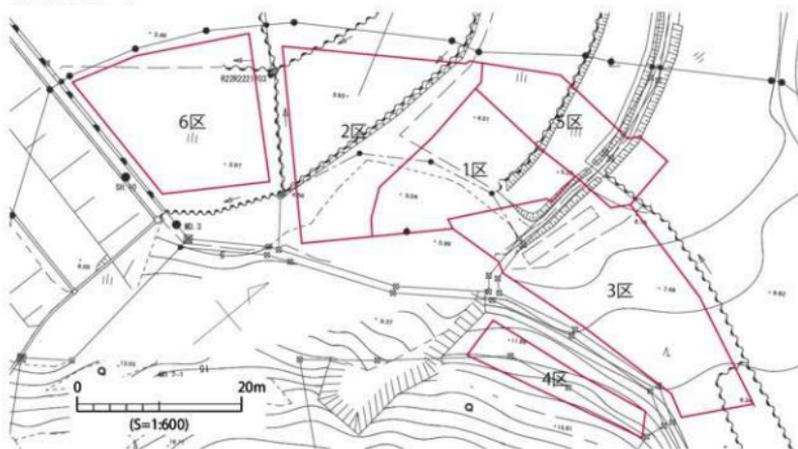
第2節 発掘作業と整理作業の経過

平成29年5月8日から9月21日まで、500㎡を対象に調査を実施した。近現代の水田土壌部を除き直下で杭列や板材・棒材を列状に敷き並べた鎌倉時代の遺構を検出した。この遺構の性格について、6月16日に田中義昭氏から指導を受けた。さらに下層の古墳時代中期の面まで検出した段階で、遺跡の古環境について中村唯史氏から指導を受けている。8月5日には地域住民に向けた現地公開を行い、約15名の参加があった。標高1mの泥炭層まで掘り下げ、8月30日にラジコンヘリによる空撮をおこなった。その後、補足調査と分析資料のサンプリングを実施し、すべての作業を終えた。

整理作業は現地調査と並行して木製品分類の中心に進めた。10月19日に建築材などの木製品を埋蔵文化財調査センターに運搬した。大型木製品は遺物収納用コンテナに収納できないため、敷地内にコンパネとブルーシートを用いた水槽を制作した。木製品のうち建築材については、12月14日に箱崎和久氏から指導を受けている。平成29年度に遺構・遺物の実測及びトレース、写真撮影などの主な作業を終え、平成30年度・令和元年度に編集作業をおこなった。

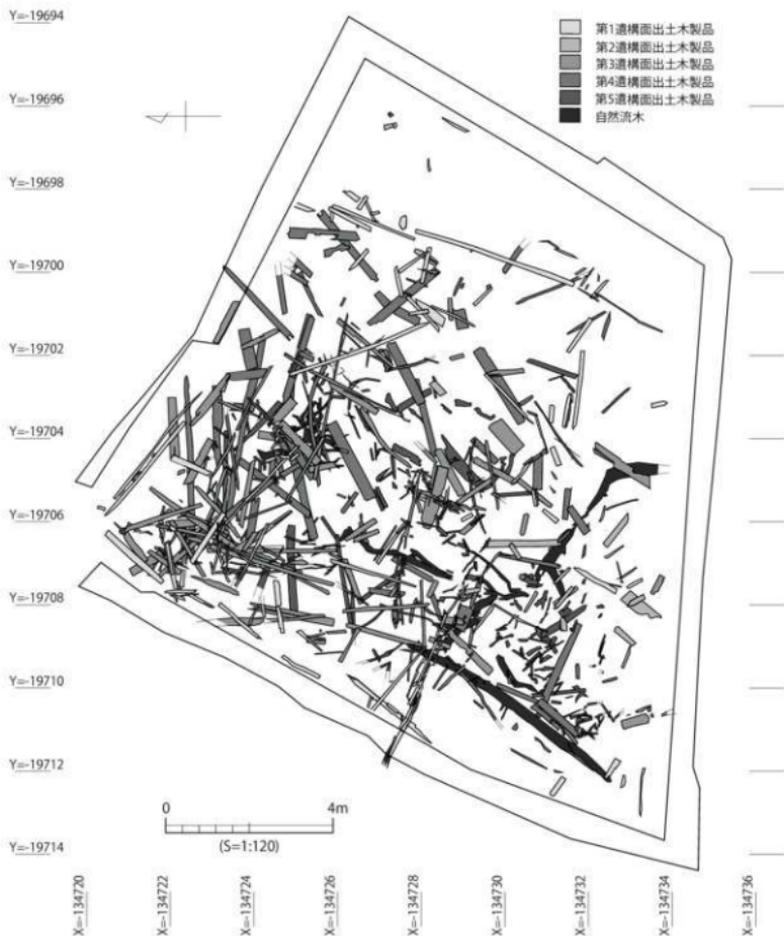
遺跡は三隅川河口から1km東の丘陵裾にあり、三隅川の後背湿地最奥部にあたる。調査前の標高は4mで、近年まで水田耕作が営まれていた。水田は周辺住民からの聞き取りでは深田で耕作が困難であったようである。

調査は用地買収の関係で2か年に分けて実施することとした。平成28年度に調査対象地のうち1～5区について実施した。調査の結果、1区では古墳時代中期の土器だまり、2区では同時期の杭列を検出している。このほか弥生時代中期後半から後期、平安時代から鎌倉時代初めの土器・木製品も出土している。



第32図 上古市遺跡調査地区割り

平成29年度は2区の南西に位置する6区を調査した。調査は平成29年5月8日から着手した。重機によって表土及び近現代の水田土壌を除去した。その直下で杭列を検出したため、その後は人力で掘削を進めている。調査では鎌倉時代と古墳時代前期、弥生時代前期の各面で遺構や木製品を検出した。各面とも腐食した植物を含む軟弱な土質であったため作業は難渋した。地下からの湧水に加えて、大雨の際には谷筋から調査区内への浸水により、水没することも度々であった。そうした調査環境のため、検出面ごとの測量・写真等の作業は難航し時間を要している。8月30日にラジコンヘリに空中写真撮影をおこない、すべての現地作業を9月21日に完了した。



第33図 上古市遺跡6区全体図

第3節 上古市遺跡6区の基本層位

この遺跡は三閩川河口から1km東の丘陵裾にあり、三閩川の後背湿地最奥部にあたる。現在は水田として利用されている。層位は大きく7区分でき、現在の水田にかかわる層(1層)、中世の層(2層)、古代の層(3・4層)、古墳時代前期の層(5層)、弥生時代前期の層(6層)、洪水層(8層)、泥炭層(9層)からなる。

8層は、厚さ20cmほどの均質な粘土層で、砂礫等をほとんど含んでいないことから、三閩川の氾濫が後背地全体に及び、一帯が完全に水没した状況下で堆積したものと見られる。これより下層は腐食した植物を大量に含むオモカス層と呼称している泥炭層と丘陵から流れ込んだと見られる砂礫層が堆積している。8層以下はトレンチ調査で部分的にしか掘り下げていないが、縄文土器の小片が1点出土しているものの、単純な自然堆積層と見られ、遺構は確認されていない。よって、8層を地山と認定し、8層上面までを全面掘り下げている。

灰白色粘土層の直上にはさらに泥炭層がわずかに堆積し、この層より上層は単純な自然堆積層はなく、現在に至るまでの人的活動の痕跡が残されている。

詳細な調査を行った部分の基本層位は、近代から現代の盛り土(水田)100cm、古代～中世の層が80cm、古墳時代の層が40cm、弥生時代の層が30cmの厚さで堆積している。これらの層は、腐食した植物なども含み、一見すると自然堆積の泥炭層(オモカス)⁽¹⁾と共通するが、背後の丘陵に起源する砂礫や地山の粘土ブロックを含むなど、標高1m以下の泥炭層とはその様相はまったく異なる。近代以降の水田に伴う盛り土は重機により掘削し、以下の層より調査を進めている。

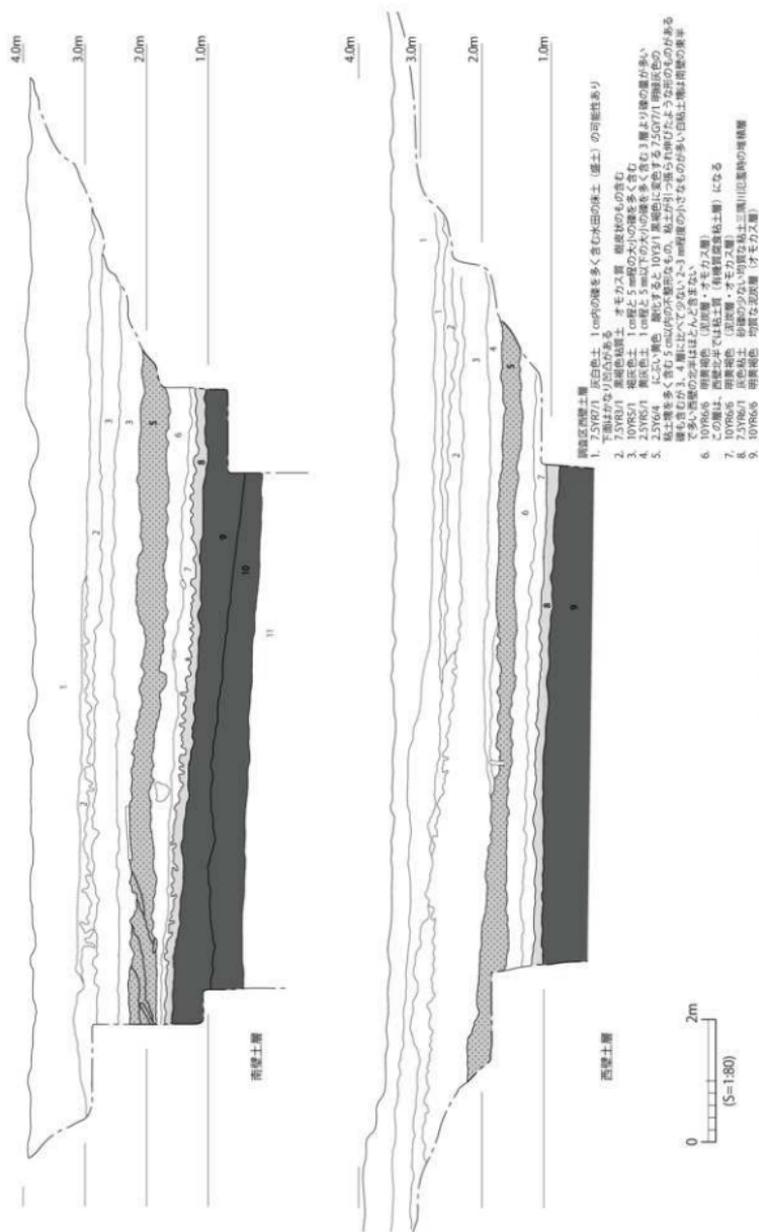
中世の層である2層上面には杭列や木樋が、2層中で畦畔の骨材と見られる板列などが検出されている。土層のX線撮影でも根痕などが多数確認できることから、水田耕作層と見られる。3層から4層にかけては、オモカス質の土層であるが、砂礫等を含んでおり単純な自然堆積ではなく耕作等の人為的な活動がなされていた可能性がある。中世以降は、継続して水田となっていたものと思われる。

5層も、オモカス質の土層で、検出直後は黄色を呈するが、すぐに酸化して黒褐色に変化する。この層中には灰色の5cm以下の粘土塊を多く含んでいる、粘土塊は南側の丘陵斜面に近い所で多く含まれる傾向にある。粘土塊には、引っ張られて伸びたような形状のものもある。こうした均質な粘土は丘陵部分には存在していることは想定しにくく、供給源としては下部にある三閩川の洪水時に形成された8層が想定される。おそらくは、ある部分を8層まで達する深度で掘削し、その掘削土を盛土したものである可能性が考えられる。この5層の上部と下部で大量の建築材を中心とする木製品が出土している。さらに6層上面では弥生時代前期の杭列も検出された。

また、5層と6層の間には、自然流木や倒木、樹立していた木の根などがあり、弥生前期以降にはいったん樹林地帯になっていた可能性がある。

(1) オモカスとは、泥炭層の出露地域での通称。調査現場では、完全な泥炭でなくても湿地状の環境で形成された植物遺体を大量に含む土層も含めて使用している。

鹿島町教育委員会 1994 『下谷遺跡・神田遺跡 佐陀南地区農村活性化住環境整備事業に伴う発掘調査』
渡辺正巳・池田俊一 2007 『第3節 里方本郷遺跡から山持遺跡にかけて分布する「オモカス」層について』『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区 国道431号道路改良事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』鳥根県教育委員会



第34図 上古市道跡6区土層図

第4節 調査の概要

(1) 第1遺構面の調査

第1遺構面は表土と近代の水田土壌部分を重機掘削により除去後、2層上面にて検出した。第1遺構面からは、自然流路とそれに並行する杭列、流路の西側で水田畦畔と考えられる木組みや木樋状遺構を検出した。流路の西側は東側よりも約30cm低く下げて検出しており、同時期の面として検出できていない。検出面の標高は杭の頂頭で3.0m、木組み・木樋状遺構は2.5m前後であった。

自然流路 (第35図)

調査区東側を北東から南西に向けて流れている。幅2.5～4.0m、断面は浅い皿状をしている。検出面からの深さは約15cmである。埋土は灰色粘質土を主体とする。調査区北壁でわずかに砂礫層の堆積がみられた。流路全体を常に水が流れていたわけではないようである。検出した長さは10mで、調査区外にも延びている。自然流路を北東方向に延ばした地点には、現在も湧水がみられることから、小規模な沢であったと考えられる。流路の底面からは大型の木製品や自然木が出土している。

杭列 (第35図)

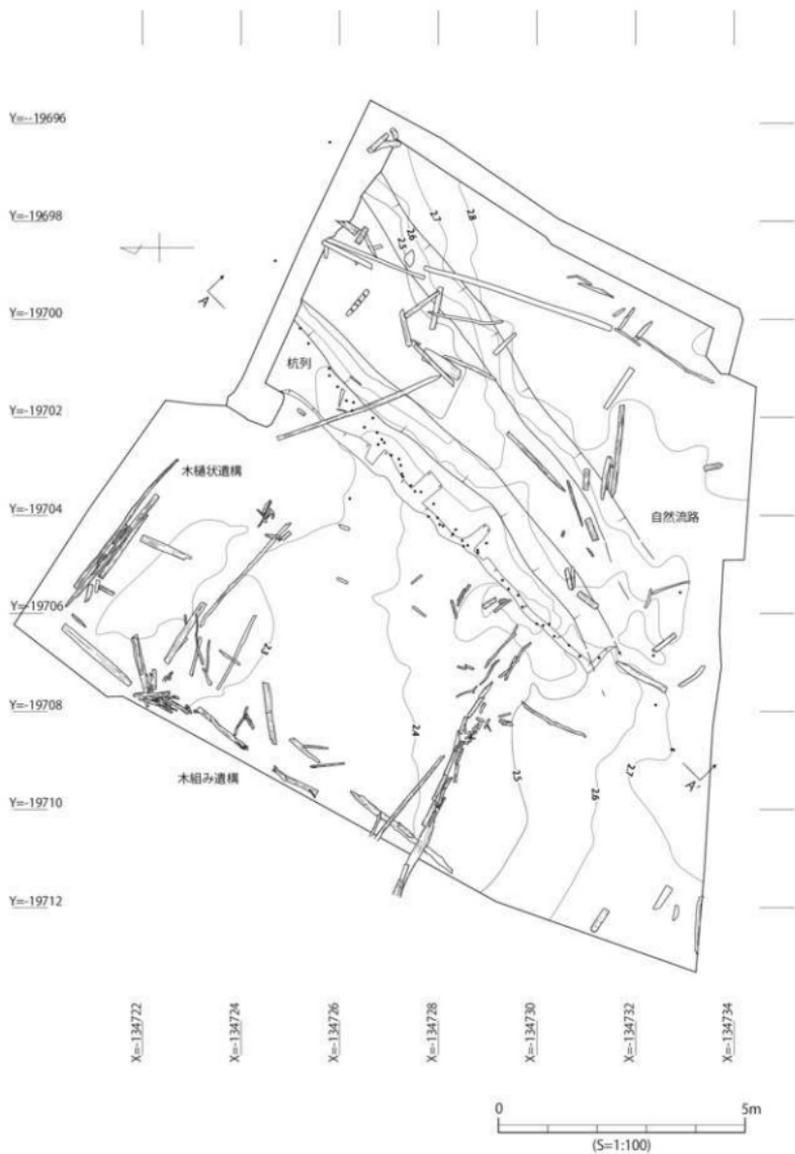
自然流路の西岸に平行して65本の杭が打ち込まれている。北東から南西方向にほぼ直線に並んでいる。杭は10～70cm前後の間隔で打ち込まれている。流路側に別の杭が打たれているなど、ジグザグする箇所もみられる。杭の頂部は標高3.0m前後である。先端の深さは一定ではないが、標高2.6～2.7m前後が多い。長さは30～40cm、幅5～8cm前後である。杭の形態は、半裁した丸太材、断面が長方形や三角形をした板材などがみられる。

木組み遺構・木樋状遺構 (第35図・第36図)

自然流路の西側で、木組み遺構を3列と木樋状遺構を検出した。木組み遺構は、長い板材や棒材、自然木などを敷き並べている。こうした材を固定するための杭材は打ち込まれていない。木組みは、調査区西壁に沿って北東から南西に軸線をもつものと、それに直交する2本がある。直交する2本の距離は5～6mである。木樋状遺構は調査区北西端、木組み遺構から北に2.2m前後に位置する。板材2枚を内側に傾けて据え、内法幅25cm、深さ10cmの溝状にしている。板材の長さは3.0～3.35m、幅10～15cmである。小口的一端が尖っており、転用材の可能性もある。遺構面の層と遺構の埋土は区別ができず、掘り方も検出できなかった。

木組み遺構は畦道・作業道などの土留めを目的とするものと考えられる。木樋状遺構は、東延長線上に木組みや溝などの遺構は検出できていない。横板のみで組み合う底板を持たないことから、素掘り溝の壁面を補強する目的であったものと思われる。

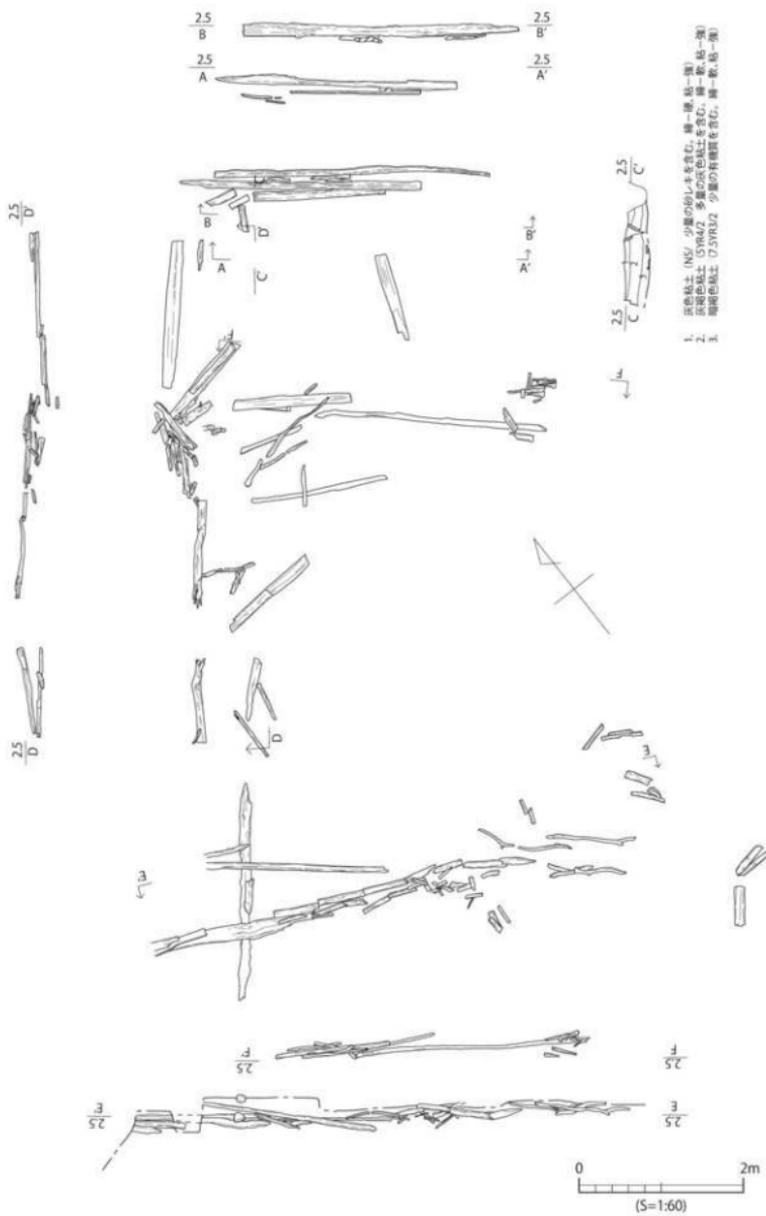
木組み遺構・木樋状遺構の北東にあたる1区・2区からも杭列1・2を検出している。杭列1が木樋状遺構から北東に約25m、杭列2が北東に約15m離れている。今回、検出した杭列とは直交し、木樋状遺構・木組み遺構と平行する位置関係である。杭の頂部は杭列1・2とも標高3.0m前後であり、これらは当該期に営まれた一連の水田施設に伴うものと考えられる。



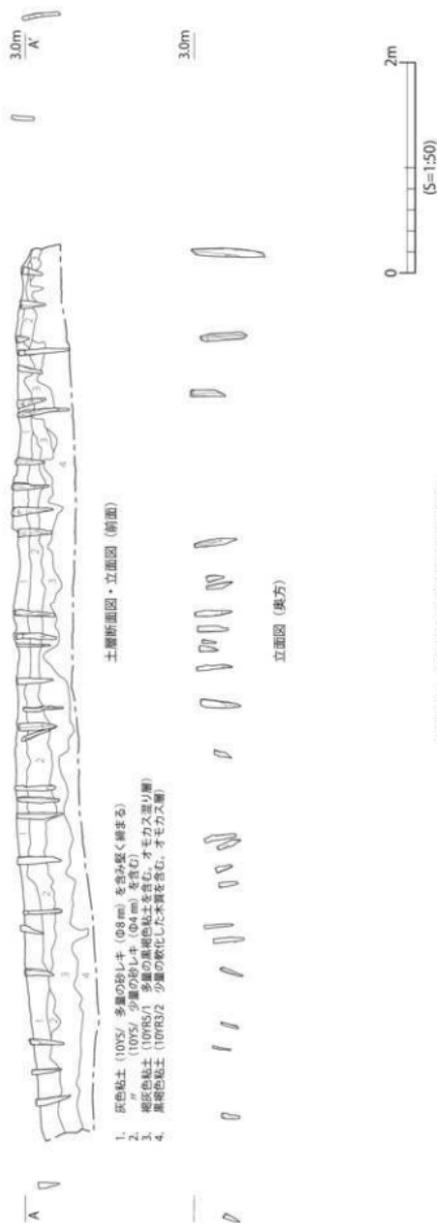
第35図 上古市道跡6区第1遺構面全体図

第4節 調査の概要

(1) 第1遺構面の調査



第36図 上古市遺跡第1遺構面部分図

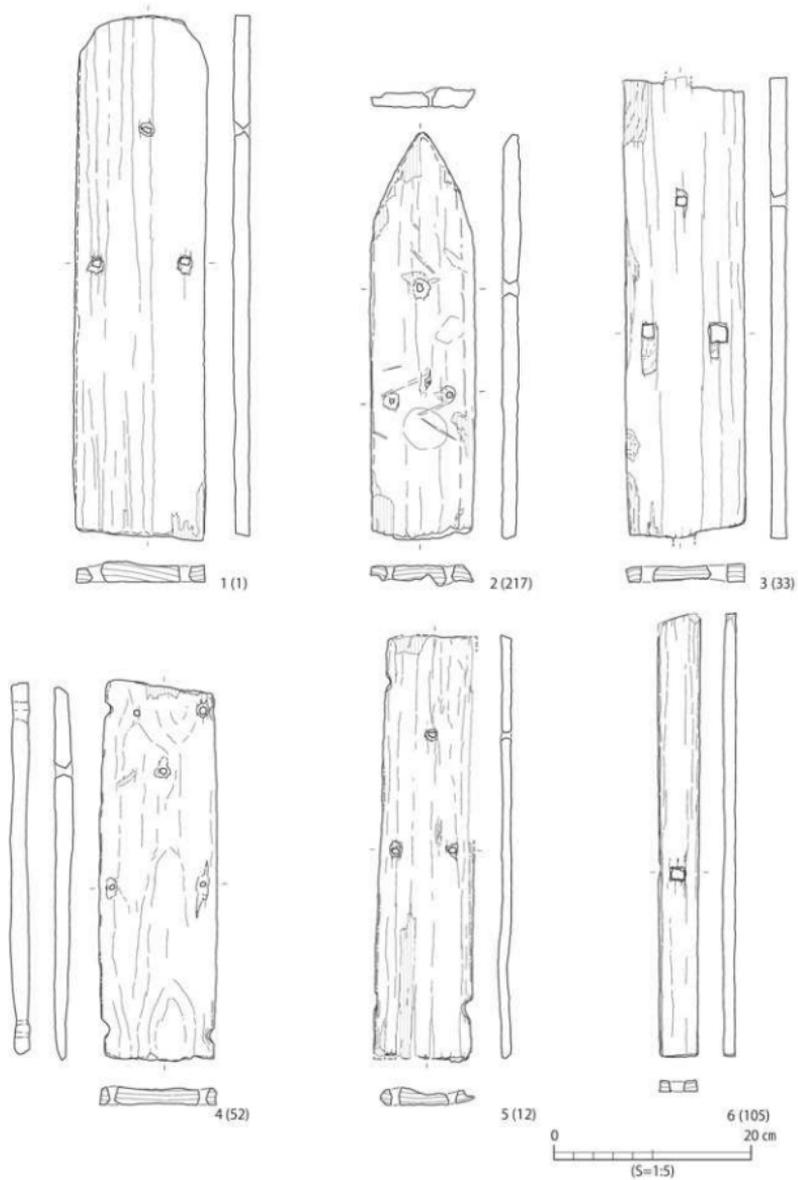


第37図 上古市道跡6区第1遺構面杭列

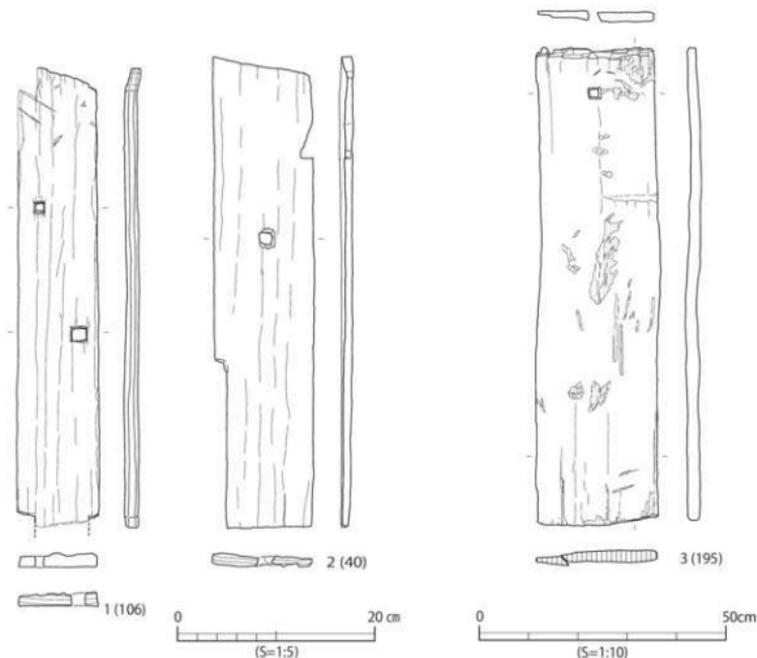
(2) 第1遺構面出土品

木器 (第38図・第39図)

農耕具や板材が出土している。田下駄は足板のみの枠なし形式 (第38図1~2) と円形枠付き形式の (同3~5) の足板がある。1は先端を丸くし、2は山形になっている。いずれも転用材で、2は矢板を転用した可能性がある。3は先端に造り出しを有し、4~5は挟りにより横木・円形枠を固定する。第38図6・第40図1~3は棒状・板状をした用途不明の材である。いずれも1ないし2カ所穿孔がある。第40図3は板材を二次加工している。上下端は粗い加工により切り落とし、上位に1カ所方形孔をあけている。



第38図 上古市道跡6区第1遺構面出土木製品(1)



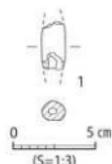
第39図 上古市道跡6区第1遺構面出土木製品(2)

表5 上古市道跡6区第1遺構面出土木製品観察表

採収 番号	取上げ 番号	No.	検出面	分類群	器種名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	年輪 本数	木取り	樹種	備考
38-1	50	1	1	農耕土木具	山下駄	53.5	13.4	2.1	13	板目	スギ	棒なし形式。上端を面取りし丸く仕上げる。転用材か。横孔は径1.0cmを3ヵ所。
2	50	217	1	農耕土木具	山下駄	41.4	10.6	2.1	24	板目	スギ	棒なし形式。先端を山形に加工する。矢板材の転用か。径0.5cmの孔3ヵ所と径0.3cmの孔1ヵ所。
3	50	33	1	農耕土木具	山下駄	47.1	12.2	1.6	13	板目	スギ	円形棒付き形式。横孔は1.0-1.8cm角3ヵ所。
4	50	52	1	農耕土木具	山下駄	38.7	12.0	1.9	6	板目	ヒノキ	円形棒付き形式。両側面に2ヵ所ずつ幅1.5cmのV字状の抉りを入れる。上端には径1.5cmの孔を2ヵ所あける。
5	51	12	1	農耕土木具	山下駄	43.5	9.9	1.8	7	板目	モミ	円形棒付き形式。両側面に2ヵ所抉りを入れる。右後・左前はV字状。右前は浅く、左後ろはV字の抉りが貫通していない。
6	51	105	1	不明	不明	45.4	4.1	1.3	11	板目	スギ	割乳。二次加工あり。靱い加工による1.5×1.2cmの方形孔。
39-1	51	106	1	不明	不明	46.8	8.3	1.5	14	板目	スギ	板材。割乳。上下端を欠損。下端に5.2×1.5cm以上のホゾを作りだす。方形孔2ヵ所あける。
2	51	40	1	不明	不明	48.2	10.1	1.8	16	板目	スギ	二次加工あり。下端を粗く切り落とす。靱い加工による1.2cm角の方形孔1ヵ所。右辺に割り込み。
3	51	195	1	不明	不明	97.4	24.8	2.8	168	板目	スギ	板材。二次加工あり。表裏面とも手押痕残る。上下端を粗く切り落とす。靱い加工により1.8×1.5cmの方形孔をあける。

土製品・土器 (第40図・第41図)

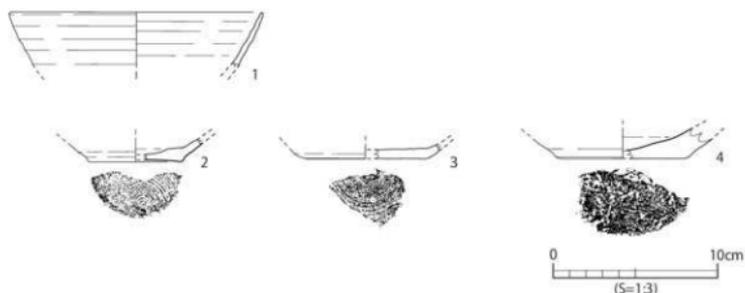
第40図1は、管状をした小型の土鍾である。両端は欠損している。胎土は砂礫を含んであおらず精製されている。第41図1～4は土師質土器の坏である。1は、口縁部で器壁が薄く、内外面に回転ナデ痕を残している。2～4は、底部である。2・3は内面に回転ナデ痕、外面に回転糸切り痕が見られる。2の外面には煤が付着している。4は2・3よりも厚手の大型品である。外面に回転糸切り痕はみられない。



第40図 上古市遺跡6区第1遺構面出土土製品

表6 上古市遺跡6区第1遺構面出土土製品観察表

押図 番号	図版 番号	器種	調整	色調	焼成	直径	残存重量
40-1	49	土製品 土鍾		2.5Y6/1 黄灰色	良好	1.4cm	(4.0g)



第41図 上古市遺跡6区第1遺構面出土土器

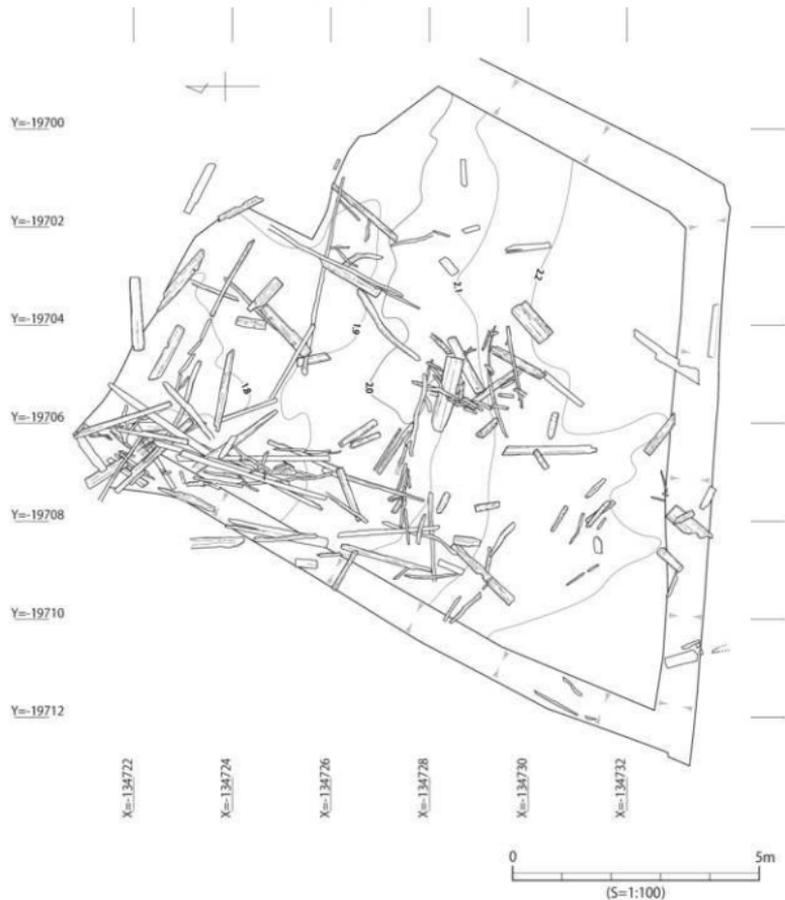
表7 上古市遺跡6区第1遺構面出土土器観察表

押図 番号	図版 番号	器種	調整	色調	焼成	口径	残高
41-1	49	土師質土器 口縁部	内外面とも回転ナデ	外)10YR6/2 灰黄褐色 内)10YR6/2 灰黄褐色	良好	口径(15.2cm)	残高(3.4cm)
-2	49	土師質土器 底部	外面底は、回転糸切り痕。その他は回 転ナデ。底部外面には煤付着。	外)10YR7/3 にぶい黄褐色 内)10YR6/3 にぶい黄褐色	良好	底径(5.6cm)	残高(1.5cm)
-3	49	土師質土器 底部	外面底は、回転糸切り痕。その他は回 転ナデ。	外)10YR6/2 灰黄色褐色 内)10YR7/3 にぶい黄褐色	良好	底径(7.6cm)	残高(0.9cm)
-4	49	土師質土器 底部	内外面ともナデ調整か？糸切り痕はな い。	外)5YR6/6 褐色 内)10YR5/2 灰黄褐色	良好	底径(8.0cm)	残高(1.9cm)

(3) 第2・3遺構面の調査

遺構について (第42図～44図)

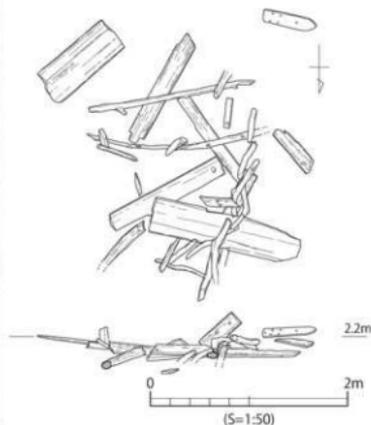
第1遺構面より80cmほど下層にある5層は、前述の通り人為的な盛土層の可能性が高いと見られるが、この層の上面と下面から多くの建築材が出土している。5層上面を第2・3遺構面、5層の下面を第4遺構面として遺物の取り上げを行っている。丘陵側の標高のやや高い位置から出土したものを第2遺構面、調査区北西側のやや標高の低い部分を第3遺構面とし調査を進めたが、いずれも5層上面にあることから、同一の遺構面と見られる。



第42図 上古市遺跡6区第2・3遺構面全体図



写真2 上古市遺跡6区第2・3遺構面



第43図 上古市遺跡6区第2・3遺構面部分図

5層上面は東から西に向けて傾斜している。調査地が東側からのびる谷部の入口部分にあたり、谷地形に沿って傾斜していることになる、湧水は著しく多いということではないが、水量は多くはないものの、谷筋に沿って常時水流があるような場所であり、軟弱な地盤である。

この層の上面では、調査区の全体から建築材を主体とする板材が出土している。この面に取り上げた木製品は約280点であった。大量の建築材は検出面に貼りつくように、谷地形の傾斜に平行あるいは水平に検出されており、地形の傾斜とは逆方向に傾いたり、大きく傾いた状態で出土するものはなかった。

ただし調査区中央には杭が打ち込まれていたり、垂直気味に立つような状態で田下駄などが検出されている。

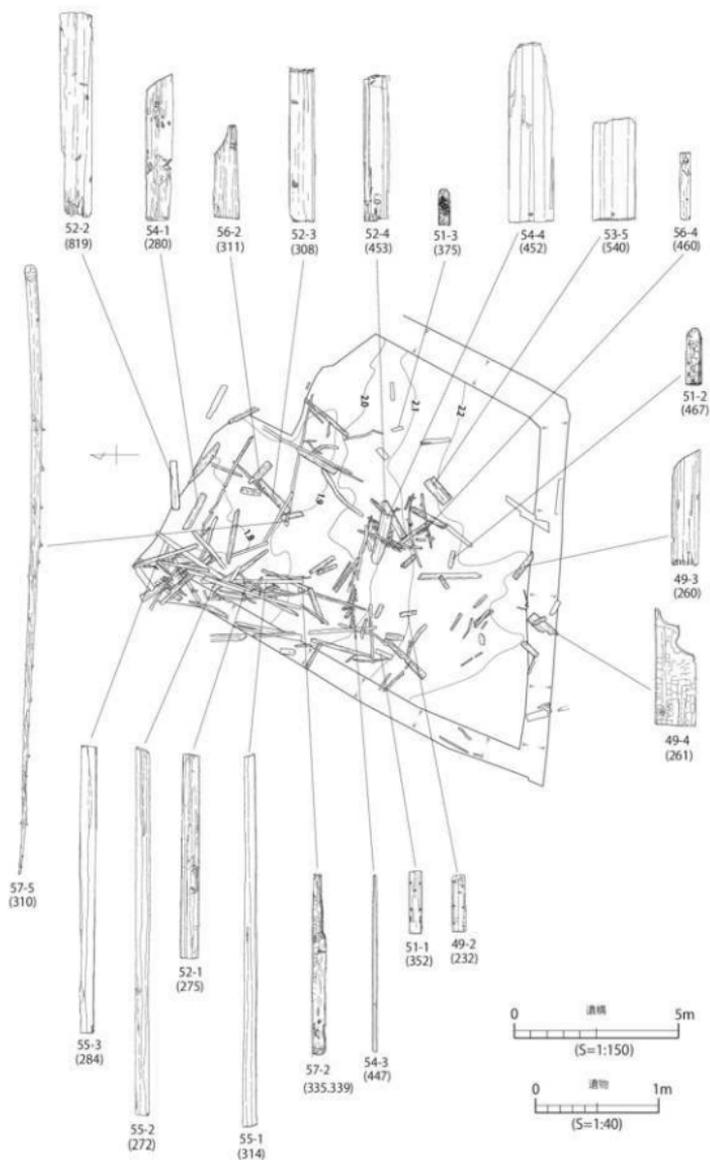
平面的には、調査区北西コーナーから西壁に沿う形で、幅2mほどで帯状に集中して出土している。板材の長軸を南北方向にとり、3m超のものも含む板材が折り重なって出土している。これら南側の一群に対して数量は少ないものの、調査区北壁側では東西方向に長軸を向けて板材が出土す



写真3 上古市遺跡6区第2・3遺構面北西部分

る傾向があり、西壁側の板材の一群とは直行するかたちで出土している。

時期を決める材料は少ないが、5層の上面で土師器の直口壺（第48図1）が出土している。口縁部を下にして倒立する格好で検出した。また、後述する5層下面でも直口壺の小片（第48図2）が出土している。この二点の土器は同一個体の可能性がある。

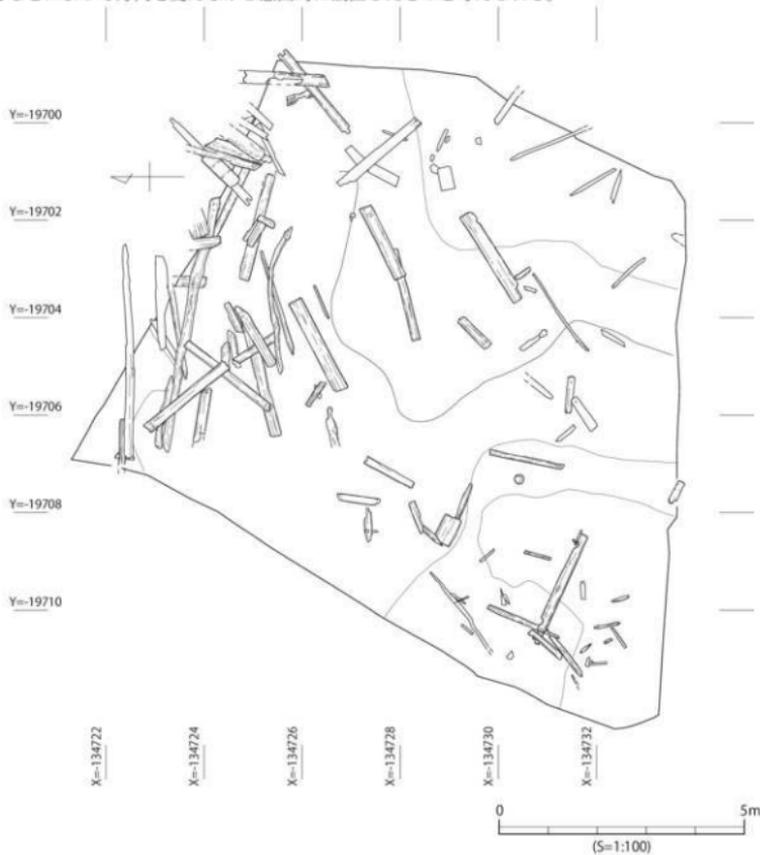


第44図 上古市道跡6区第2・3遺構面出土木製品出土位置

(4) 第4遺構面の調査

遺構について (第45図～48図)

第4面は、5層下部にて検出された建築材の検出面である。検出した約140点の木製品の大半は板状のものを中心としている。これらは、調査区北壁沿いにて集中する傾向にある。部分的には2m前後の板状の建築材が南北方向に長辺をそろえて並べ設置したかのような状況が見られる。また、比較的長い5m近い部材については南北方向にて検出される傾向にあることから、部材の長さなどによって方向を変えながら意図的に設置したものと考えられる。



第45図 上古市遺跡6区第4面全体図

やはり、この面からも木製品以外の出土品はないに等しいが、土師器の直口壺(第48図2)の小片が一点出土している。この小片は第3面で出土した直口壺(第48図1)と同一個体の可能性がある。

第3面と第4面に挟まれた5層は、基本層位でもふれたように盛土層の可能性が考えられる。また、その上下で同一個体と見られる土器が出土していることから、第3面と4面は盛土を行う際の一連の過程で設置された建築材であると見られることから、両面から出土した建築材については、出土層位は異なるものの同時期のものと見られる。

おそらくは、盛土作業を行うに際しての沈下防止や作業道の確保などを目的に、大量の建築部材が持ち込まれ利用されたものと考えておきたい。

このような5層を上下に挟み込むようにして、多くの板材が出土したわけであるが、この層が人為的な盛土である可能性について今一度見ておくと、この層は灰白色の小粘土塊が多く含まれている(写真5)。南壁では多く含まれ、西側では少なくなる傾向にある。この灰白色粘土塊の起源が60cm下層にある8層の灰白色粘土層(写真6)である可能性が高い。この層は、三隅川が氾濫を起こし後背部を完全に水没状態にした時に堆積したものと見られる。これまでの調査の中では、8層と同様の粘土層は他には認められないことから、調査区周辺で8層まで達するまで掘削が行われ、その排土が持ち込まれたものと見られる。あるいは粘土層がブレンドされながら造成がなされた可能性もある。こうした人為的な盛土の可能性のある層の上下から多くの板材が出土している。出土状況を再度確認すると上面(第2・3遺構面)と下面(第4遺構面)では板材の集中する部分が異なり、板材の並ぶ方向も直行する関係にある。上面・下面で2度にわたる作業段階があったというよりは、一連の盛土作業を行う中での差と見たほうがよいかもしれない。



写真4 上古市道跡6区第2～4遺構面間土層

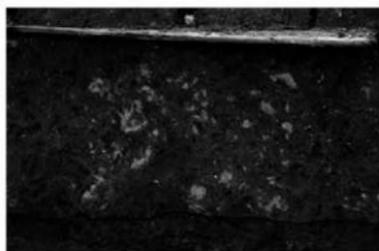


写真5 上古市道跡6区第5層

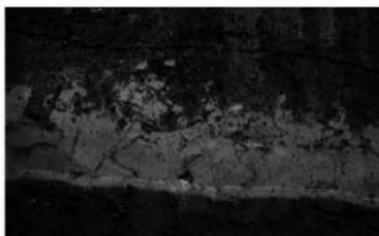
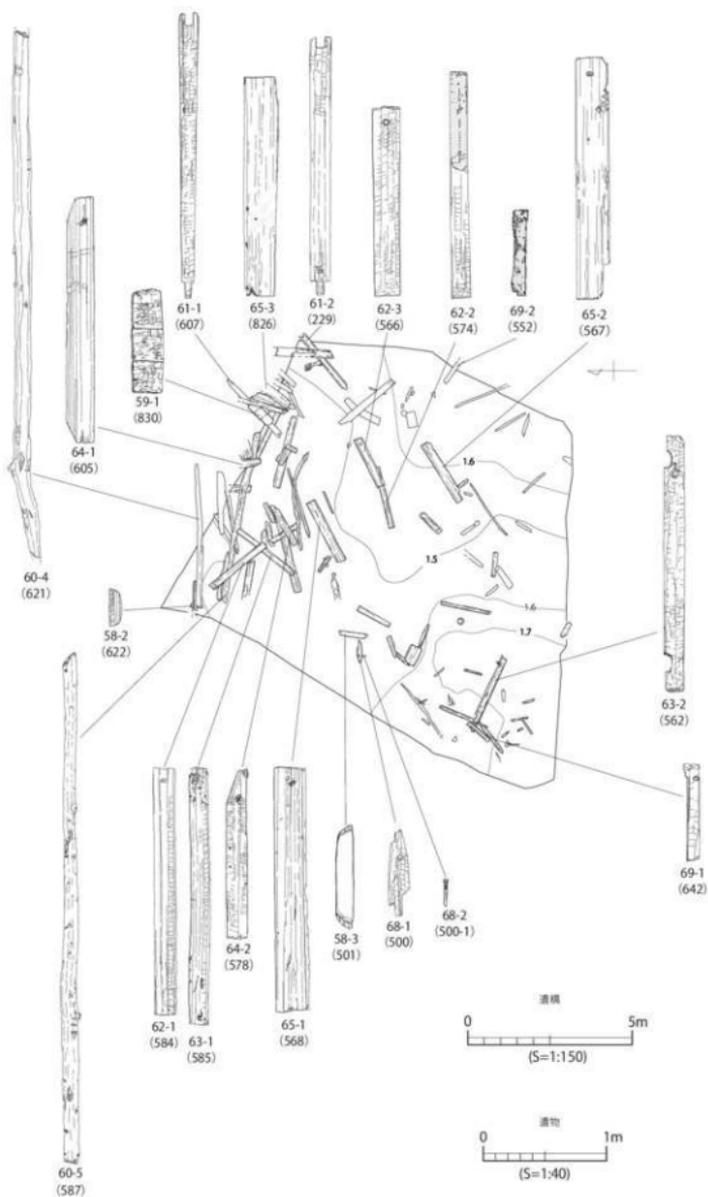


写真6 上古市道跡6区第8層



第46図 上田市道跡6区第2・3・4遺構面西側木製品出土状況

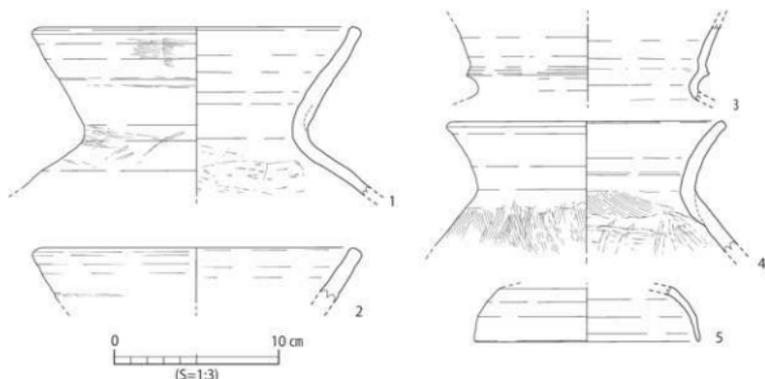


第47図 上古市道跡6区第4遺構面木製品出土位置

(5) 第2・3・4遺構面出土品

第2～4遺構面出土の土器 (第48図)

1は直口壺で、頸部が屈曲せずに丸みを持つのを特徴とする。口縁先端は面を持つが、両角は丸みがあるためシャープさはない。内面頸部以下はヘラ削りで、それ以外は横ナデ調整である。回転系のナデ調整で砂粒の動きにより沈線が回るように見える部分がある。2は、口縁端部のみ的小片であるが、1と同じ形態で色調も共通することから、同一個体とみられる。4は単純口縁の甕である。口縁部は屈曲せずあまり傾かない。端部は面をつくらず、丸くおさめている。口縁部は内外面とも横ナデ調整、胴部外面は縦方向に刷毛目をかける。頸部内面は刷毛調整、胴部内面はヘラ削りである。頸部と胴部の粘土接合部には、縦方向に細い筋状の調整痕がある。これは接合個所の粘土をならすための調整と見られる。5は須恵器の坏蓋である。口径が大きく、端部は薄く伸びる。天井部がわずかに残っており、回転ヘラ削りがなされている。6は山陰系土器の甕である。口縁先端が



第48図 上古市遺跡6区第2・3・4遺構面・3層出土土器

表8 上古市遺跡6区第2・3・4遺構面・3層出土土器観察表

棟号 番号	図取 番号	種別	器種	部位	調整など	色調	焼成	胎土	法量	出土 層位
48-1	49	土器	直口壺	口縁部	口縁から頸部は、内外面ともに横ナデ、胴部は、外面横ナデ。内面頸部以下はヘラ削り。	外)10YR6/2 灰黄褐色 内)2.5Y 7/3 浅黄色	良好	微砂粒を多く含む。石英	口径 (19.0cm) 残高 (10.4cm)	5層 上部
2	49	土器	直口壺	口縁部	口縁部は内外面ともに横ナデ。	内・外)10YR7/2 にふい黄褐色	良好	微砂粒を多く含む。石英	小片	5層 下部
3	49	土器	甕	口縁部	外面は、口縁から頸部は内外とも横ナデ、胴部は縦刷毛。内面は、口縁部は横ナデ、頸部は刷毛調整、胴部はヘラ削り。	外)2.5Y3/2 黒褐色 内)7.5YR4/3 褐色	良好	微砂粒を多く含む。石英・金雲母	口径 (16.4cm) 残高 (8.1cm)	3層
4	49	弥生土器	甕	口縁部	内外とも横ナデ。	外)10YR5/2 灰黄褐色 内)10YR6/2 灰黄褐色	良好	微砂粒を多く含む。石英・金雲母	残高 4.7cm	3層
5	49	須恵器	蓋	口縁部	天井部外面はヘラ削り。その他は回転ナデ。	外)2.5y5/1 黄灰色 内)2.5Y6/1 黄灰色	良好		口径 (13.6cm) 残高 (3.4cm)	3層

残っていないが、下段突出は水平方向にシャープに作られている。3～5は、3層からの出土で、遺構に伴うものではない。

第2～4遺構面出土の木製品

第2～3遺構面からは農具や建築材と見られる木製品が多数出土しているが、これらは一連の盛土中にあることから、同時期のものと考えられる。また、建築材と見られる木製品には、柄や孔などの加工が無いものや二次的な加工もあることから、部材として特定できるものが少ない。

第2遺構面（第49図～50図）

農具や建築材が出土している。第49図1と2は円形枠付き形式の田下駄である。両端に円形枠を緊縛するための孔を2個ずつあけている。第49図3は妻壁板の可能性が考えられる。片側斜辺部のみ遺存し、斜辺の角度は63°である。第49図4は扉板である。表裏の全面には木理（繊維）と平行する切削痕が明瞭に残っている。長辺の一方は角を落として側面が丸みをもち、隅角の一角所に孔がある。欠損部が焼けているが、2次加工しやすく焼いた可能性がある。第50図1～3は用途不明の板材である。2は端部を切り落とし、表面に粗い貫通孔をあけるなどの2次加工の跡がみられる。

第3遺構面（第51図～57図）

第51図1～6は農具の田下駄である。1～3は足板のみの枠なし形式、4～6は円形枠付きで横木・円形枠を緊縛するための孔をあけている。

第52図1から第56図3までが建築材である。第52図1は、幅15.8cmで狭く、厚さ2.6cmと薄い板材である。長さは異なるが、第55図1・2も同様の特徴を持つ板材である。

第53図1～第55図4は板材である。第53図6は2次加工により短小な材となっているが、厚さが4.9cmあることから床板とした。両短辺にほぞを作り出すもの（第53図4）、長辺に挟りをもつもの（第52図2・第53図1）がある。割肌のものが多いが、第53図1は木理（繊維）と平行する切削痕が明瞭に残っている。また1ないし2カ所の貫通孔、短辺側の粗い切り落としは二次的な加工と考えられる。第53図5は、端部近くに小さな孔があるが、端部に切り離しの粗い削り跡が残ることから、二次的に切断されている可能性がある。

第54図1は妻壁板である。片側斜辺部を切り落とすが、一方の斜辺の角度50～65°である。3は小舞と考えられる棒材である。両端部を細く仕上げている。表面に垂木などと接した圧痕はみられない。

第55図1～4は厚さ1.4～3cm前後の薄い板材である。幅11～13cmと幅狭なものである。第55図1と2は長さ310～313cmで、今回の出土品で最も長い板材である。長さがあることから屋根葺材の可能性が考えられる。いずれも割肌で切削痕はみられない。第56図4は長方形孔をあけた小型の材で、器具材と考えられる。第56図1～3と第57図1～2は用途不明の板材である。第57図3は杭である。第57図5は根元側と枝を切り落としたもので端材と考えられる。第57図2には、一方の側縁に小さな切り込みが5ヶ所に残る。第57図4は柱材である。

第4遺構面（第58図～70図）

第58図・第59図は農具である。第58図1・2は田下駄である。いずれも枠なし形式で、1は長

方形2は円形に近い形態と思われる。緒孔は1が四孔、2は半分以上を欠損するため不明である。どちらも表面に木理と平行する切削痕を残している。第58図3は田舟で、大半は失われているが、長軸方向はおおよそ90.6cmである。

第59図は直柄平鍬3個体を連続して製作している。全体では、長さ91.5cmを測り、それぞれ一枚の鍬は、上から長さ33.4cm・幅27.1cm、長さ28.2cm幅28.0cm、長さ28.3cm幅27.5cmを測る。中段・下段はほぼ正方形、上段は上端が直線的に仕上げられていないため縦長に見えるが、最短の長さは30.2cmであることから、いずれの鍬身も正方形であると見られ、それぞれの原形は完成している。縦断面を見ると隆起部分と泥除けの着装部になる部分は、厚さ6.6cmから7.1cmで断面方形になる。刃になる部分は細長い台形状になり先端部の厚みは2.1cmから3.3cmである。長辺片側には原木の痕跡である樹皮が残り、厚みのある部分の横断面は、樹皮側を底辺とする三角形になりミカン割した原木の形状を残している。

また、鍬の外側になる面では、頭部の柄孔の隆起部分を高く残し、刃先に向かっては傾斜して徐々に薄く加工されている。内側になる面は、泥除け着装部分は割肌を残しているが、刃部は切削痕があり平坦になっている。下端は製材時の粗い切断のための加工痕が残っている。

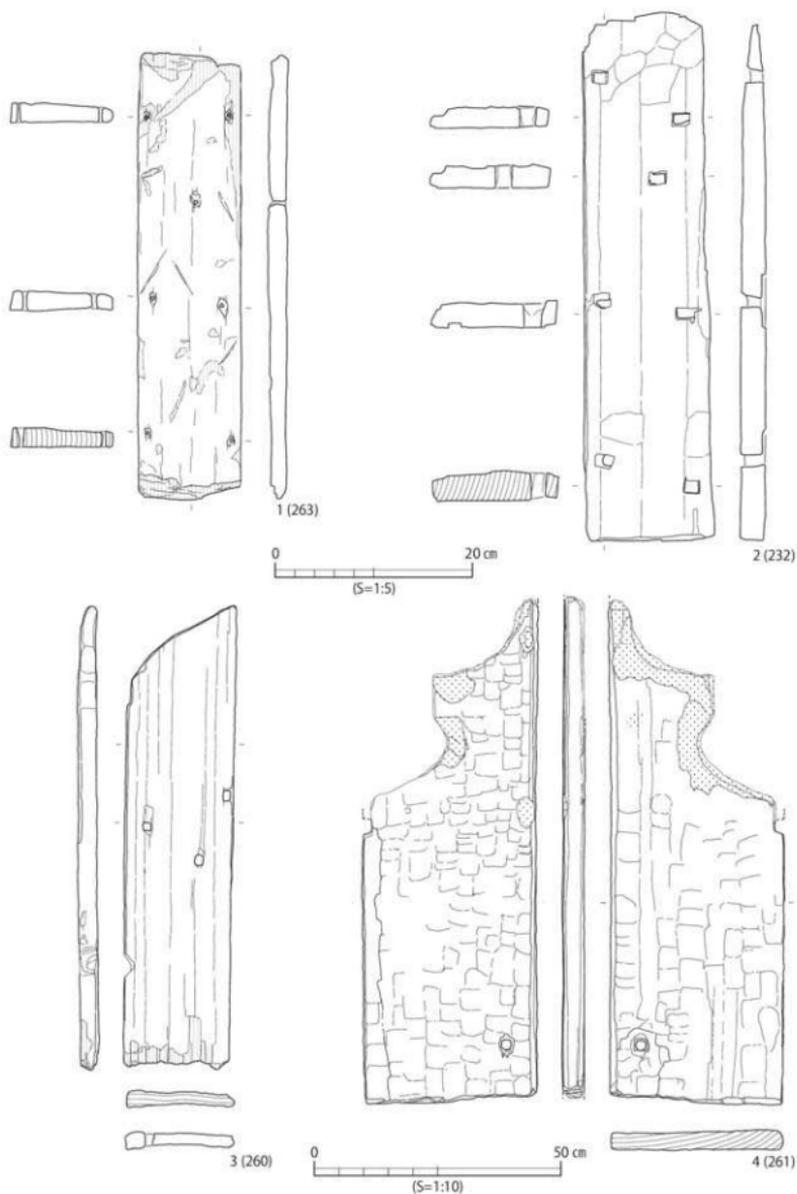
第60図1～第68図2は建築材である。第60図1～3は柱材と考えられる。1と2は先端を尖らせてある。2には6カ所の小さい貫通孔がある。3は風蝕が進み、先端部は摩耗している。4と5は水平構造材で桁材と思われる。いずれも棒状の芯去材で、端部は二次的に切り落とされている。4には斜め方向の貫通孔が1カ所空く。

第61図1・2は同じ形状で、小口を一方を凸状に、もう一方を凹状に加工するもので、壁材の可能性が考えられる。壁材とすれば板校倉の構造になると見られる。表面には切削痕が残り平滑な仕上げとなっている。

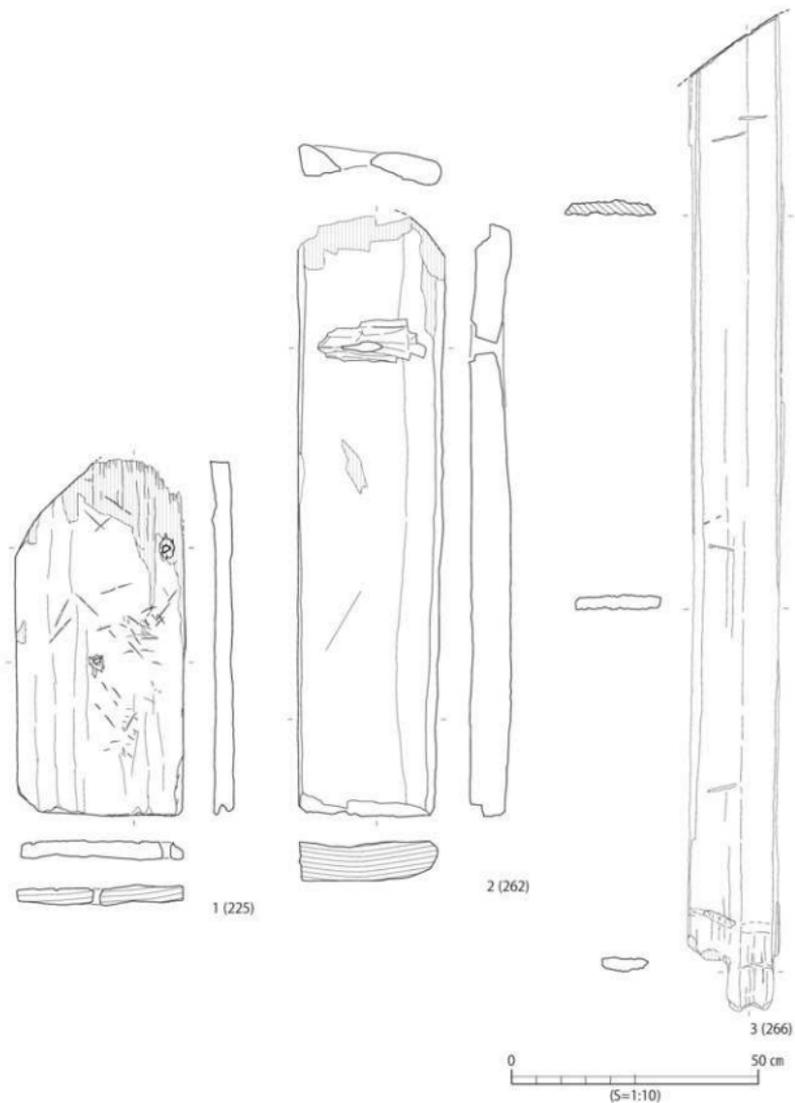
第62図1～3は床板ないし壁板の可能性がある。第63図2は長辺側縁に半円形の抉りを2カ所もち、それぞれの芯々距離は172.8cmとなる。柱と柱の間に入る台輪ないし床板、2ヶ所の抉りで梁材を受ける壁板などが想定される。第64図～第67図は厚さ2～3cmの薄い板材で壁材ないしは屋根材とした。長さ164～219.8cm、幅16.4～39.2cmである。割肌のもと平行切削痕を明瞭に残すものの両方がある。第64図1～3は妻壁板である。1はほぼ完形で、斜辺の角度は22°～26°である。3は斜辺の角度は19°である。第65図1～3は、壁か屋根材と見られる。法量や大型の板のわりに厚さが薄いなど第62図1と共通する

第67図1～2は屋根材である。3～6は建築材だが部位は不明である。いずれも2次加工により短辺を切り落としている。第67図9は小舞の断片である。別材との緊縛によると思われる圧痕がみられる。

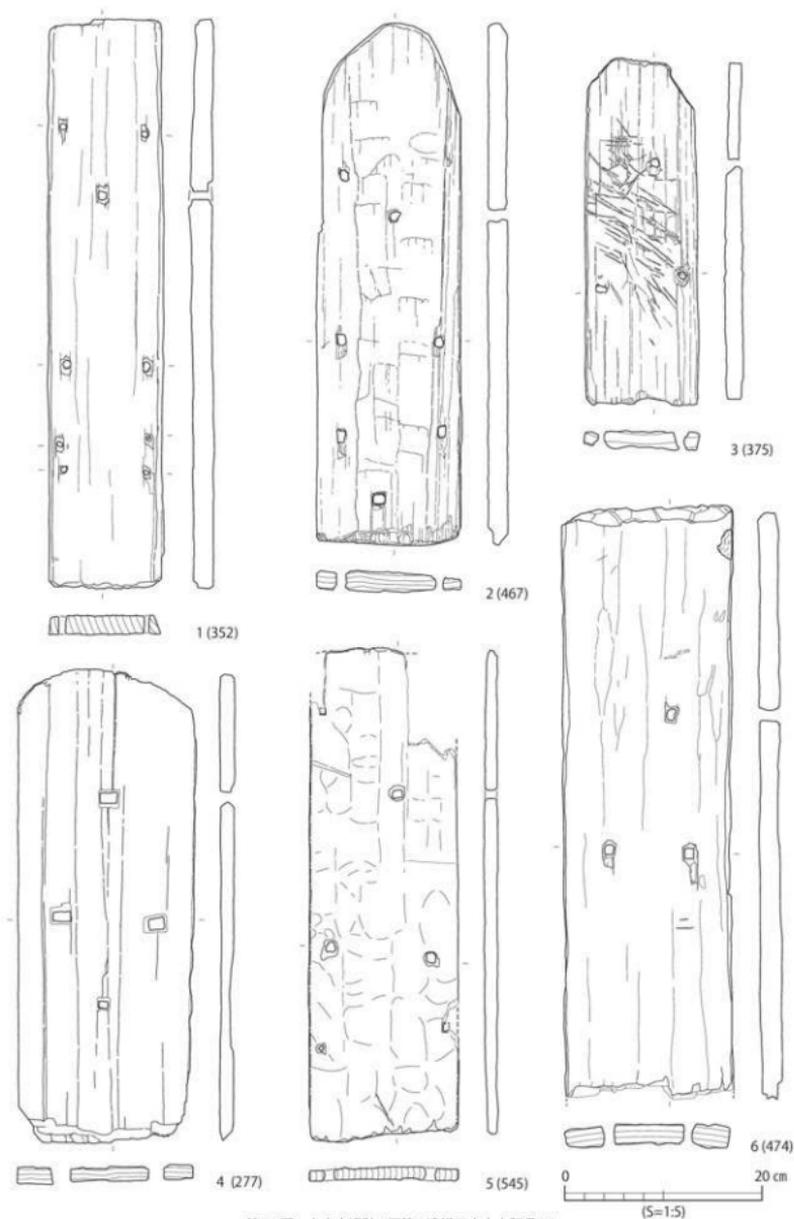
第68図1は、片側の側縁がやや膨らみつつ緩やかに傾斜している。第68図2は栓で第68図1の孔に差し込まれた状態で出土したが、これは本来の組み合わせとは関係のないものと見られる。第69図1は、用途不明で、建築材ではなく箱など容器など器具材の可能性もある。第69図は2次焼成を受けている。第70図1は深い工具痕が見られ、原材と見られる。



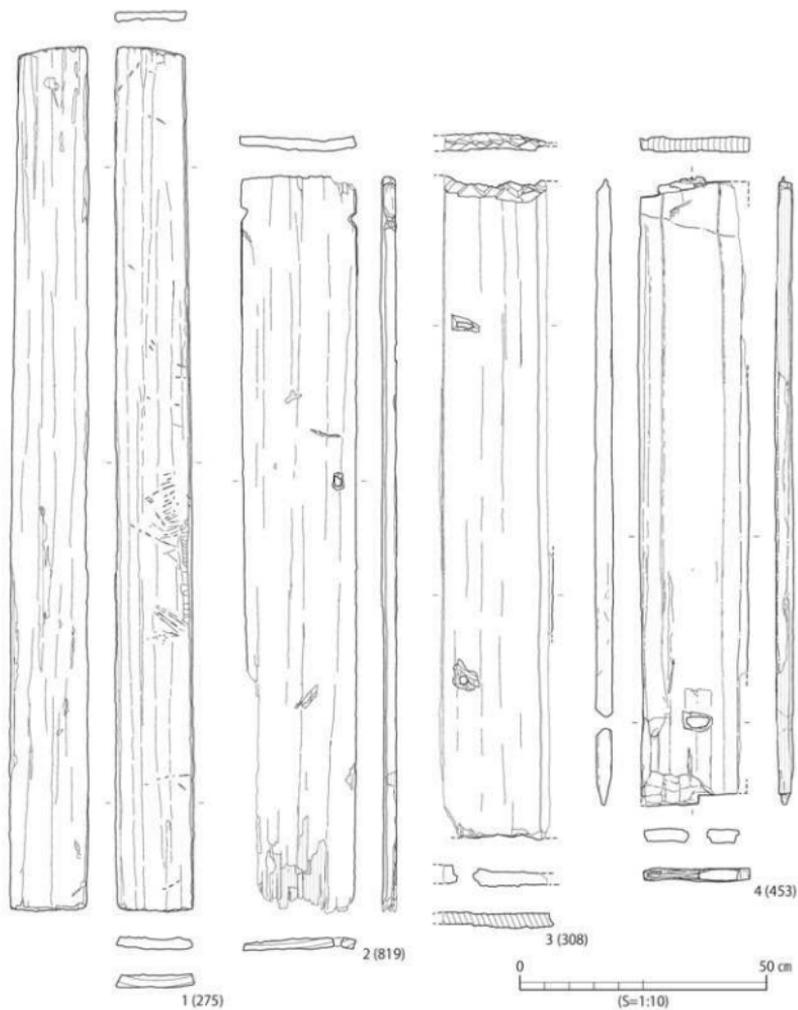
第49図 上古市道跡6区第2道横面出土製品(1)



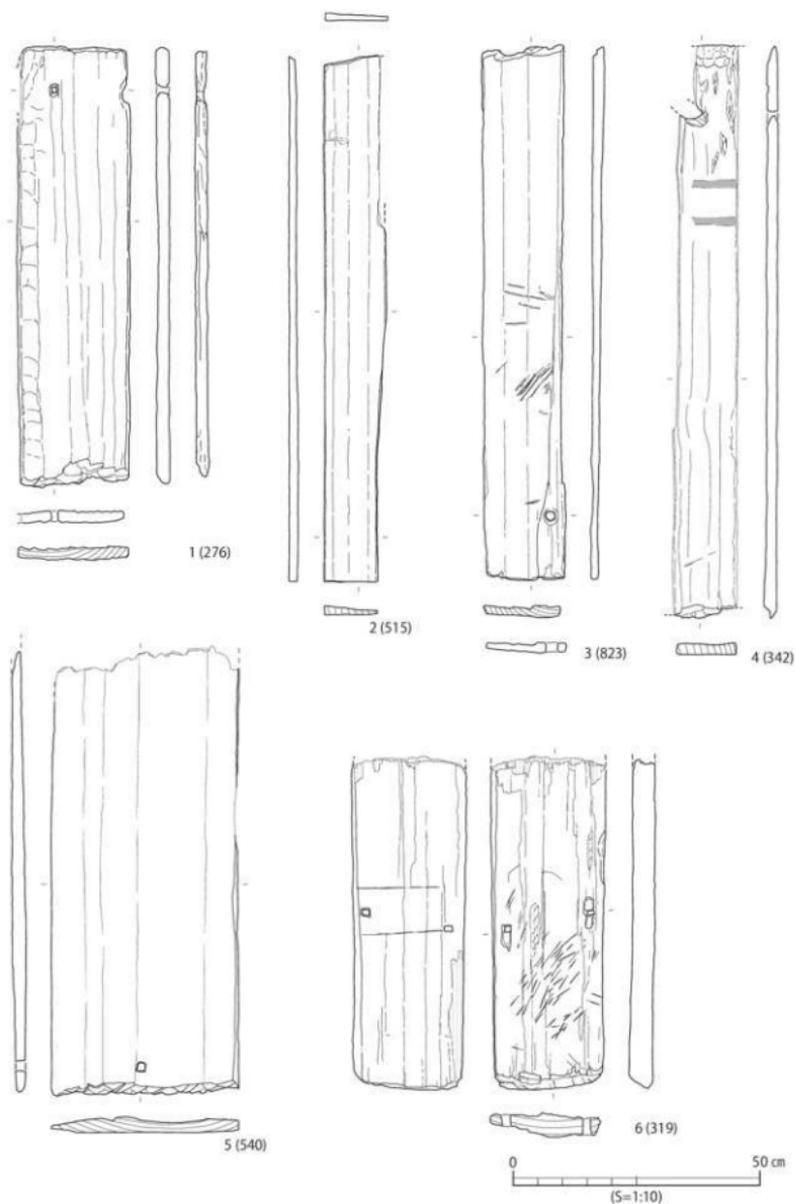
第50図 上古市遺跡6区第2遺構面出土木製品(2)



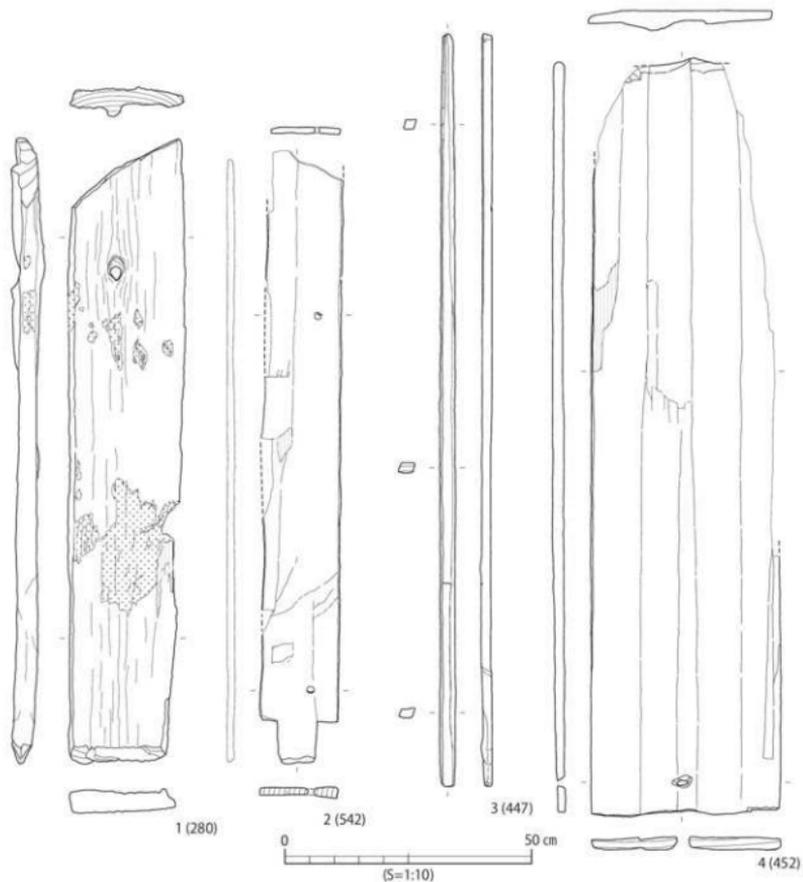
第51図 上古市道跡6区第3遺横面出土木製品(1)



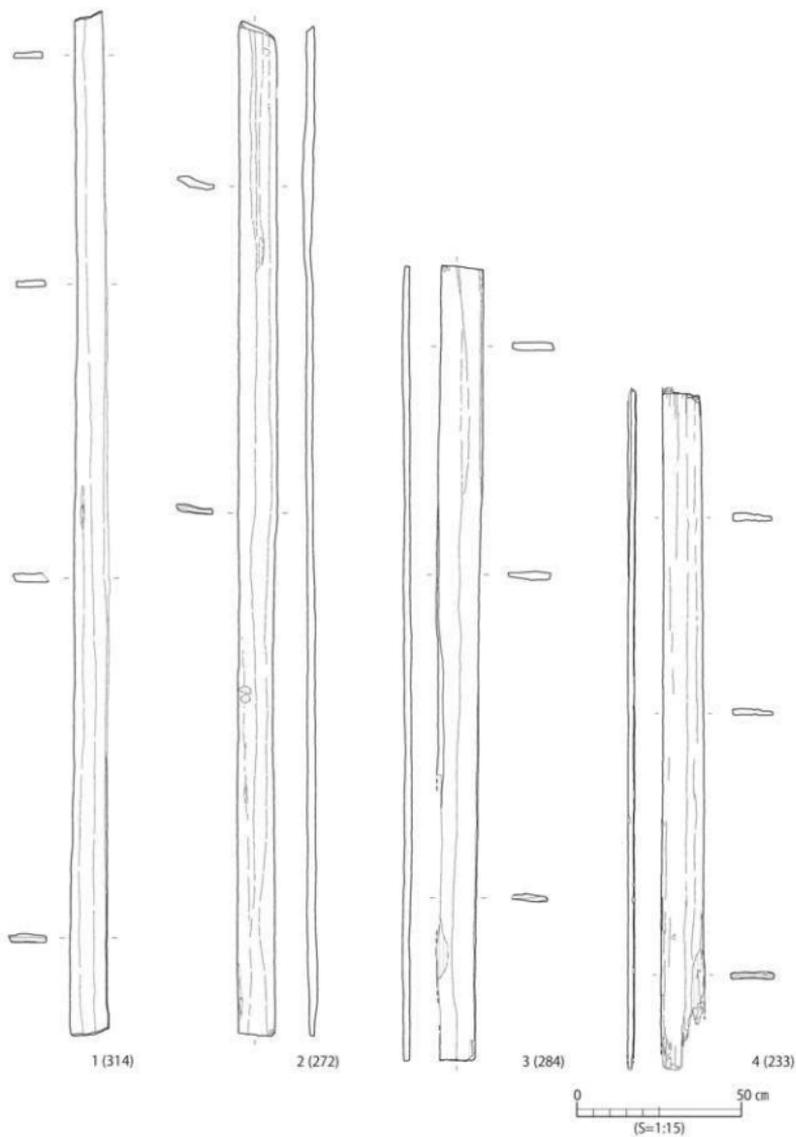
第52図 上古市遺跡6区第3遺構面出土木製品(2)



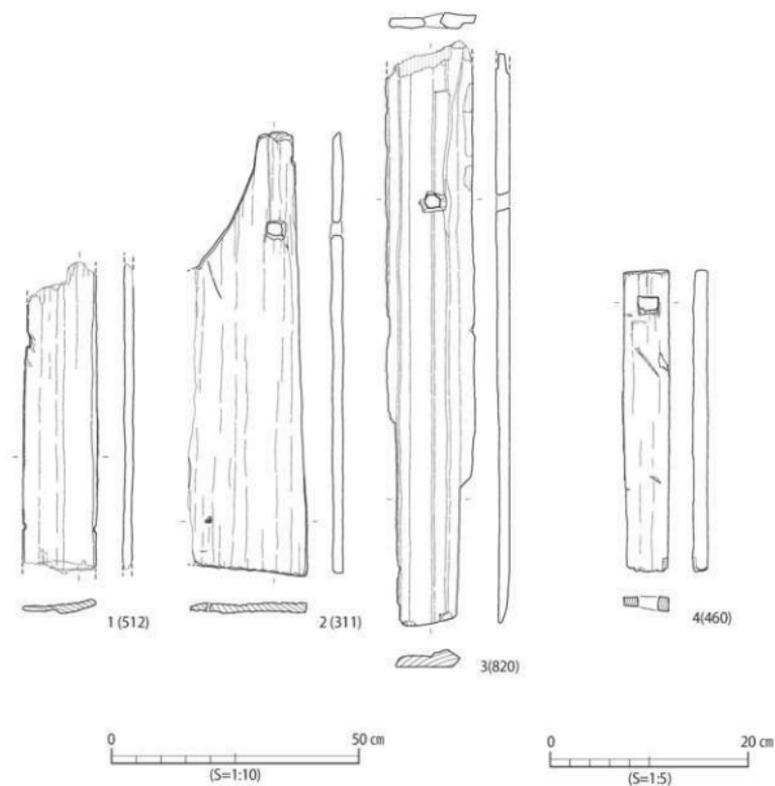
第53図 上古市道跡6区第3遺構面出土木製品(3)



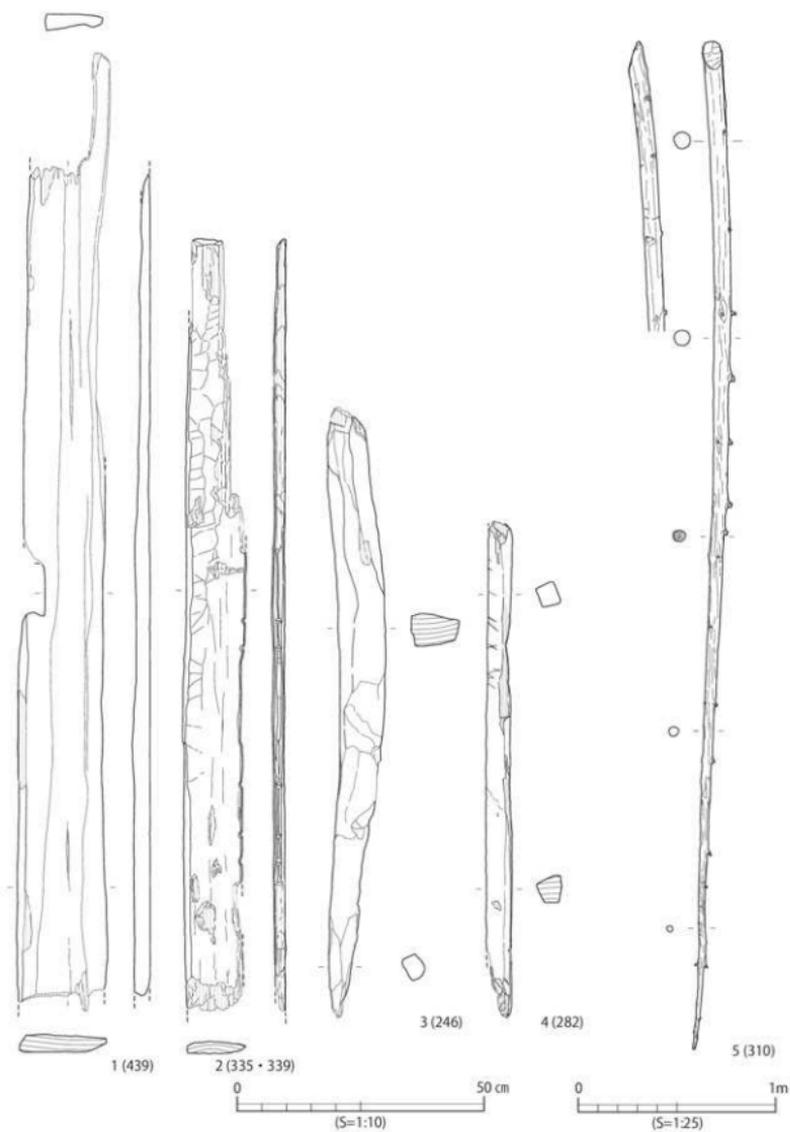
第54図 上古市遺跡6区第3遺構面出土木製品(4)



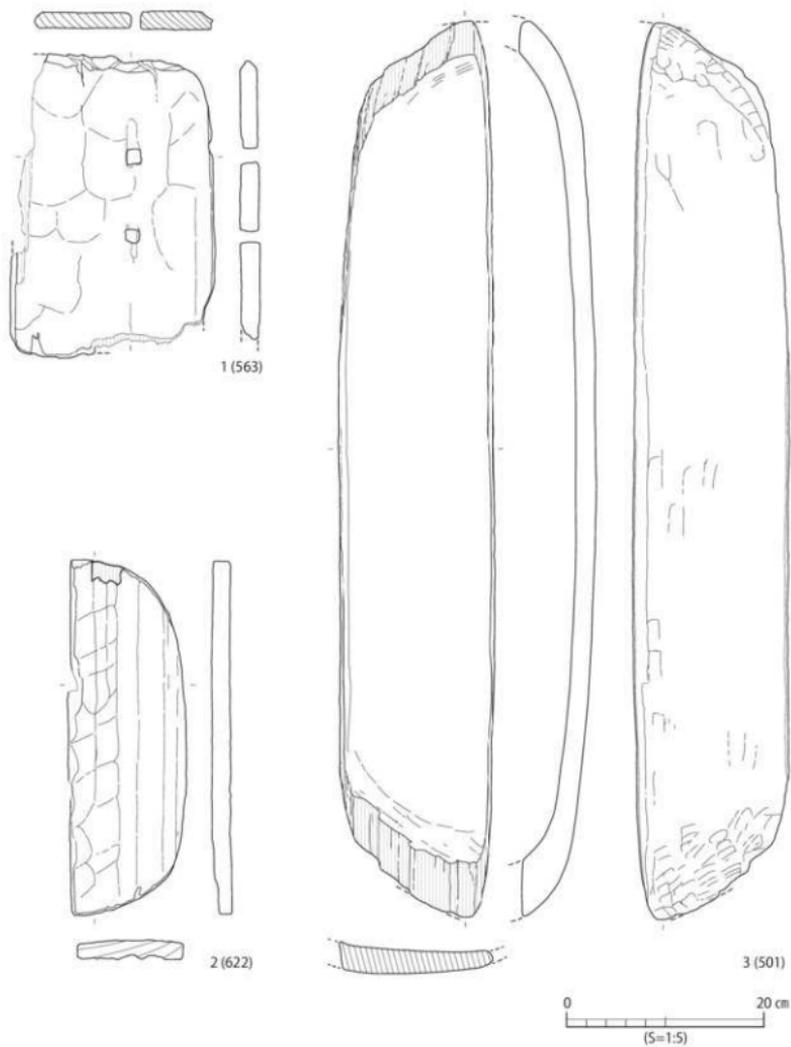
第55図 上古市道跡6区第3遺構面出土木製品(5)



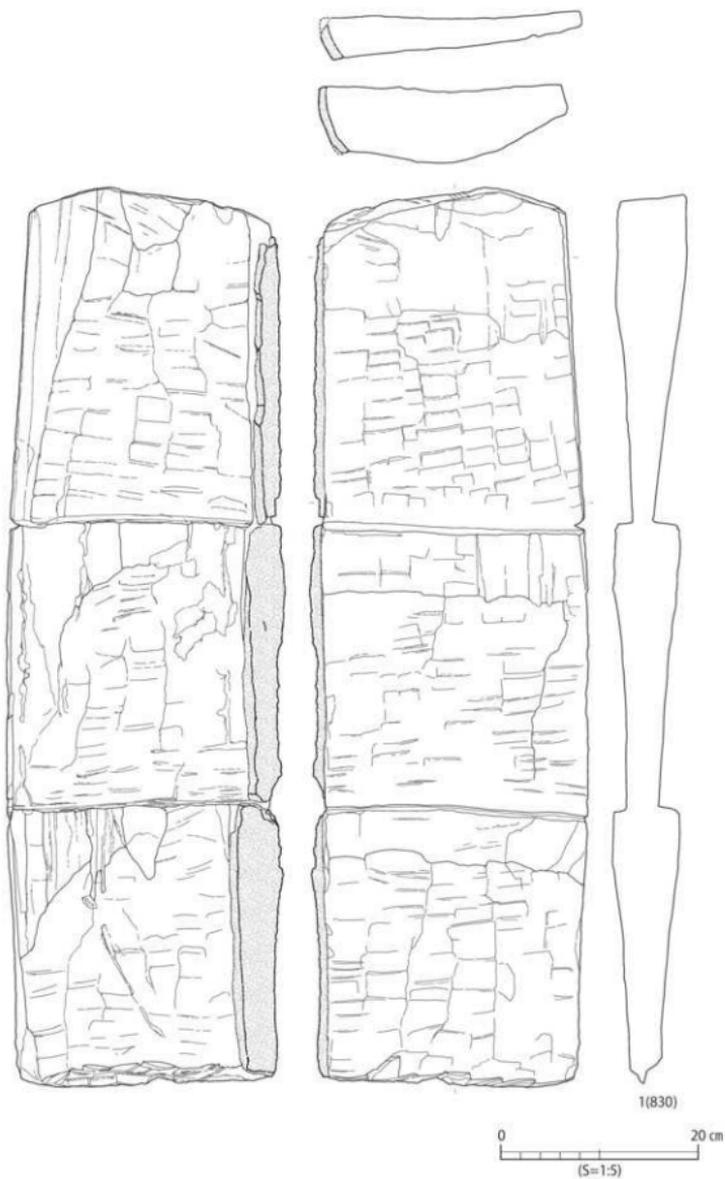
第56図 上古市遺跡6区第3遺構面出土木製品(6)



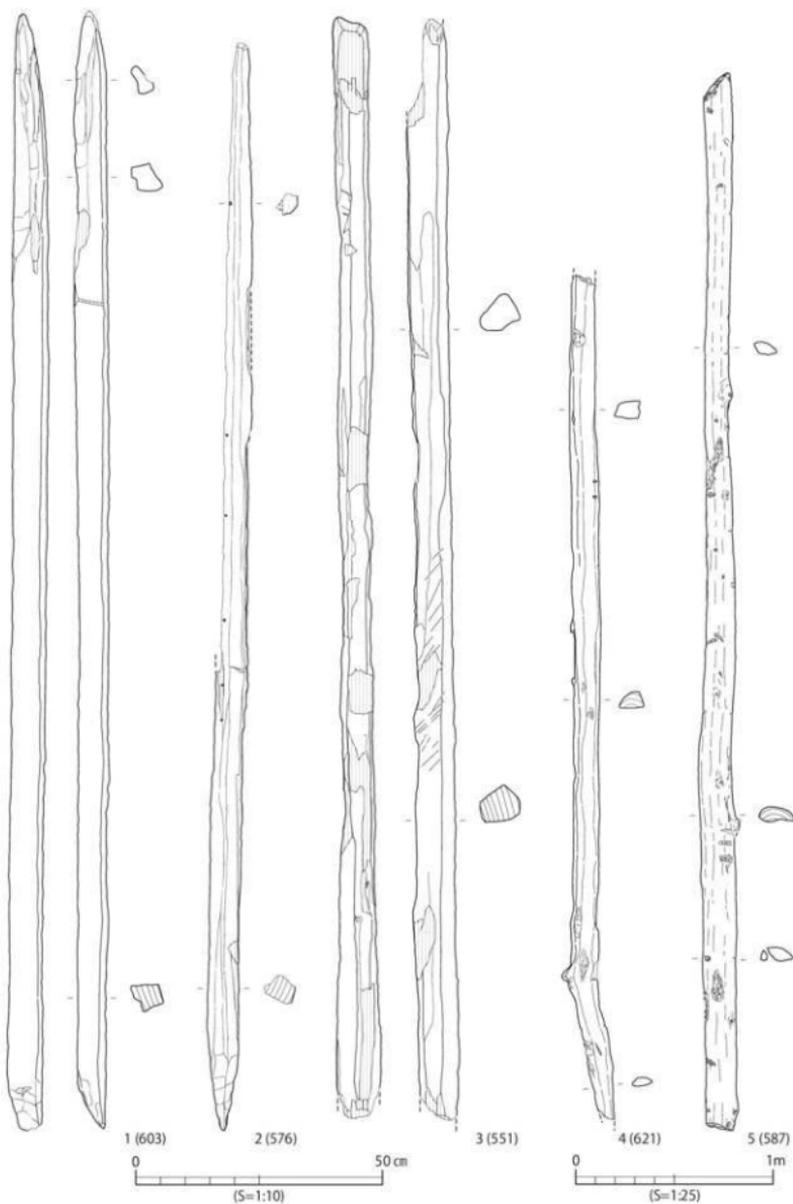
第57図 上古市道跡6区第3遺構面出土木製品(7)



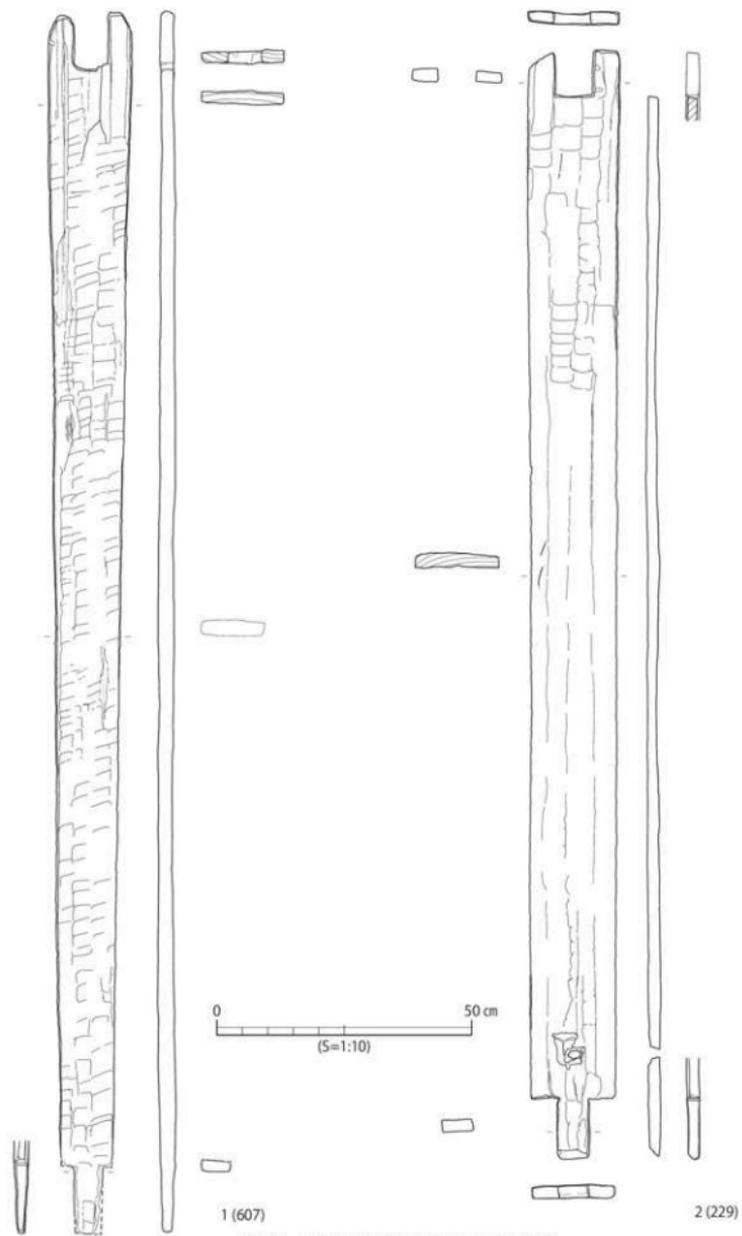
第58図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(1)



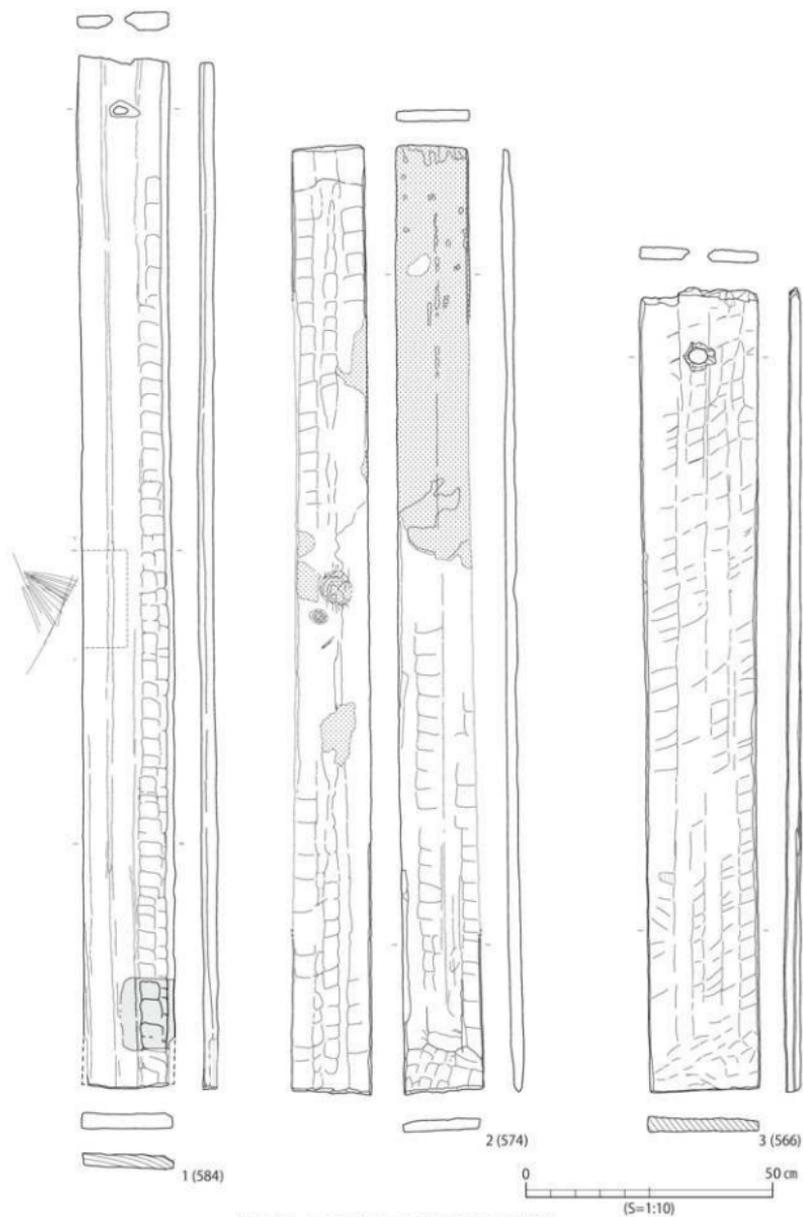
第59図 上古市道跡6区第4道横面出土木製品(2)



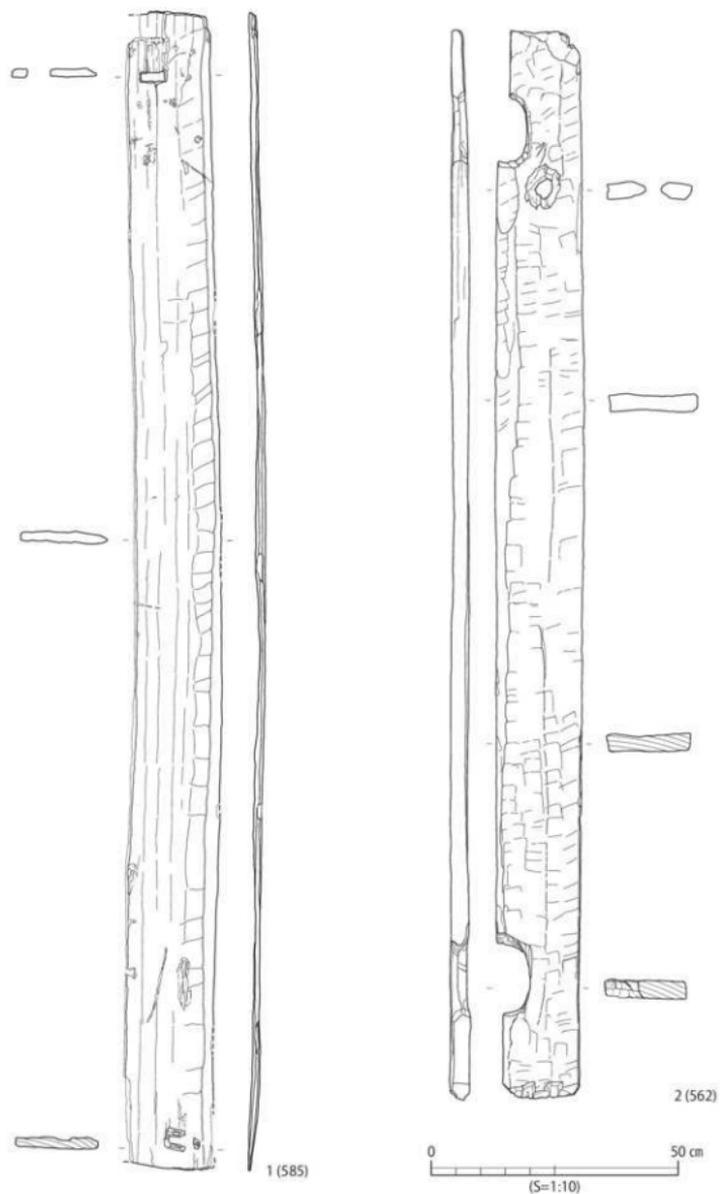
第60図 上古市道跡6区第4遺構面出土木製品(3)



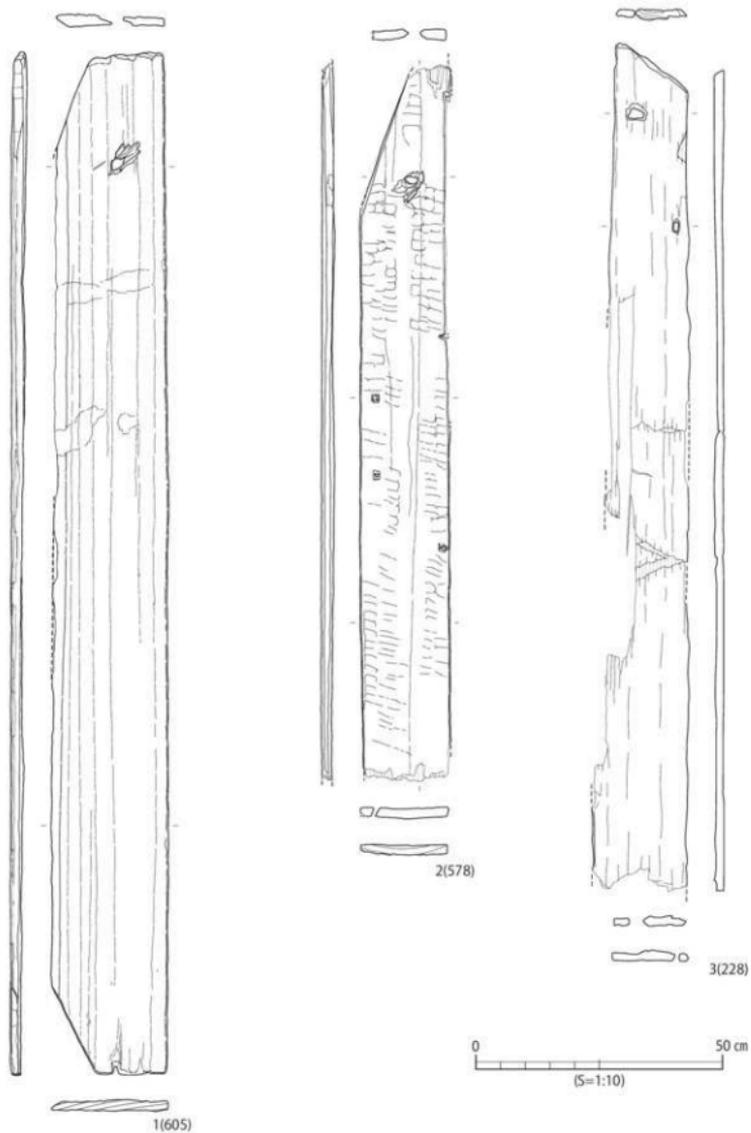
第61図 上古市道跡6区第4遺横面出土木製品(4)



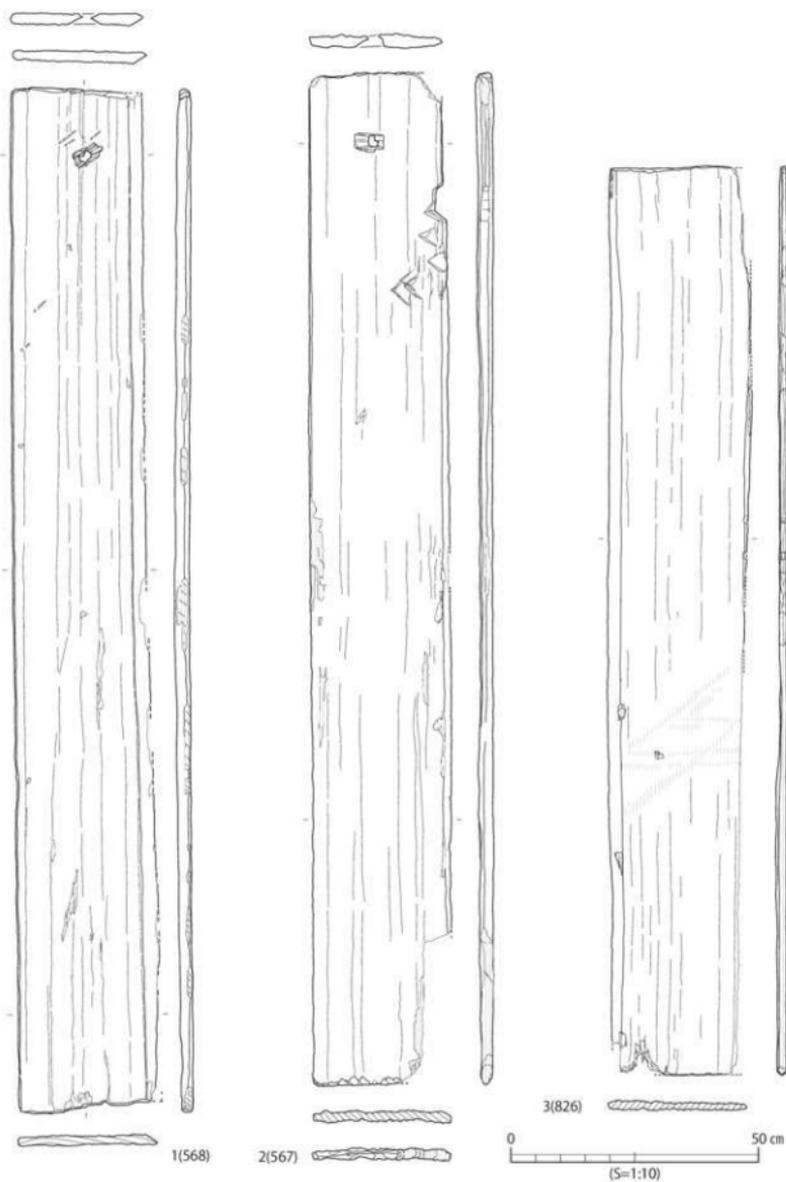
第62図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(5)



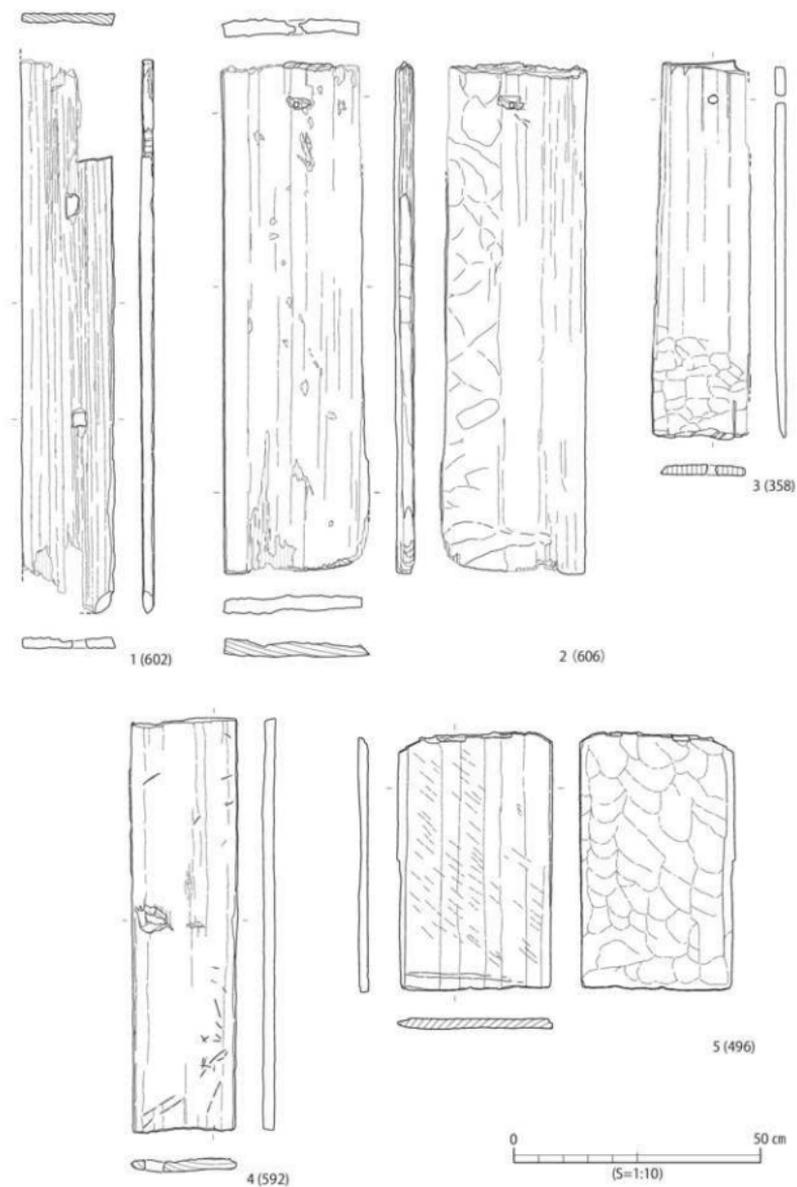
第63図 上古市道跡6区第4道構面出土木製品(6)



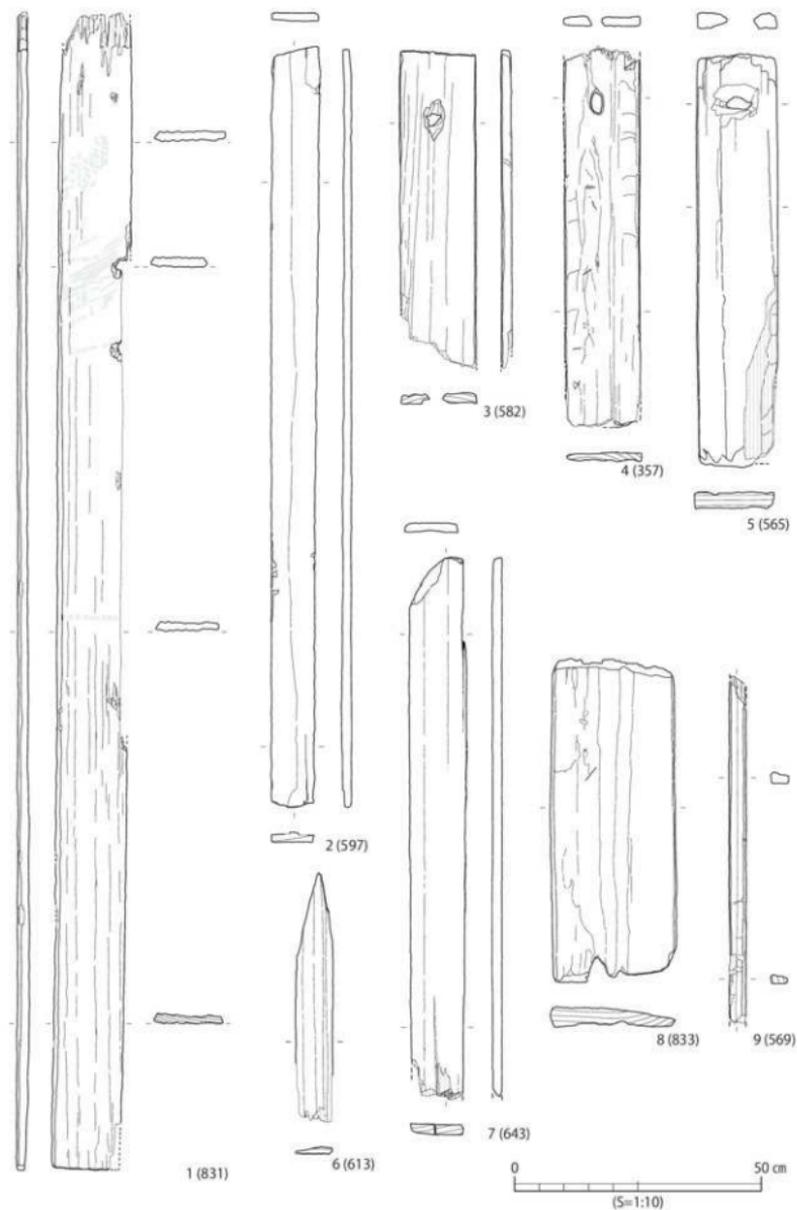
第64図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(7)



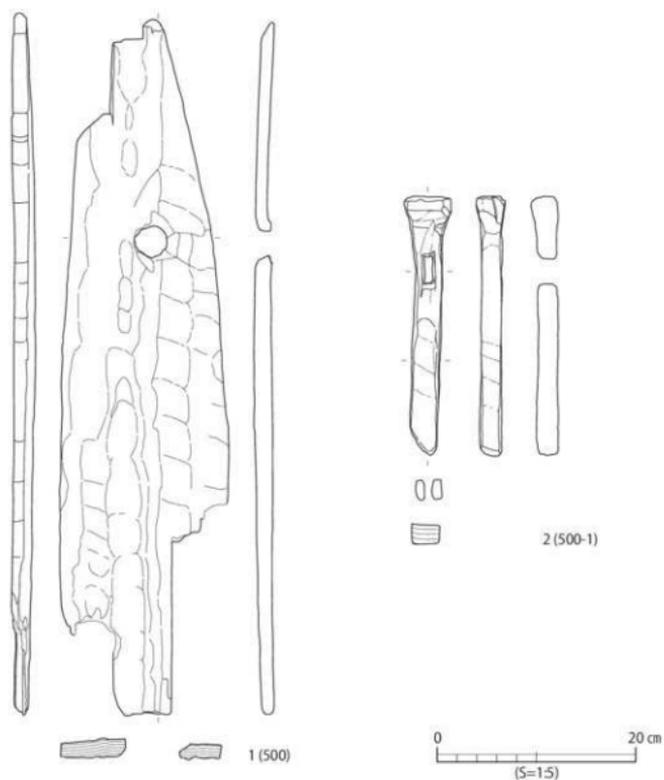
第65図 上古市道跡6区第4遺構面出土木製品(8)



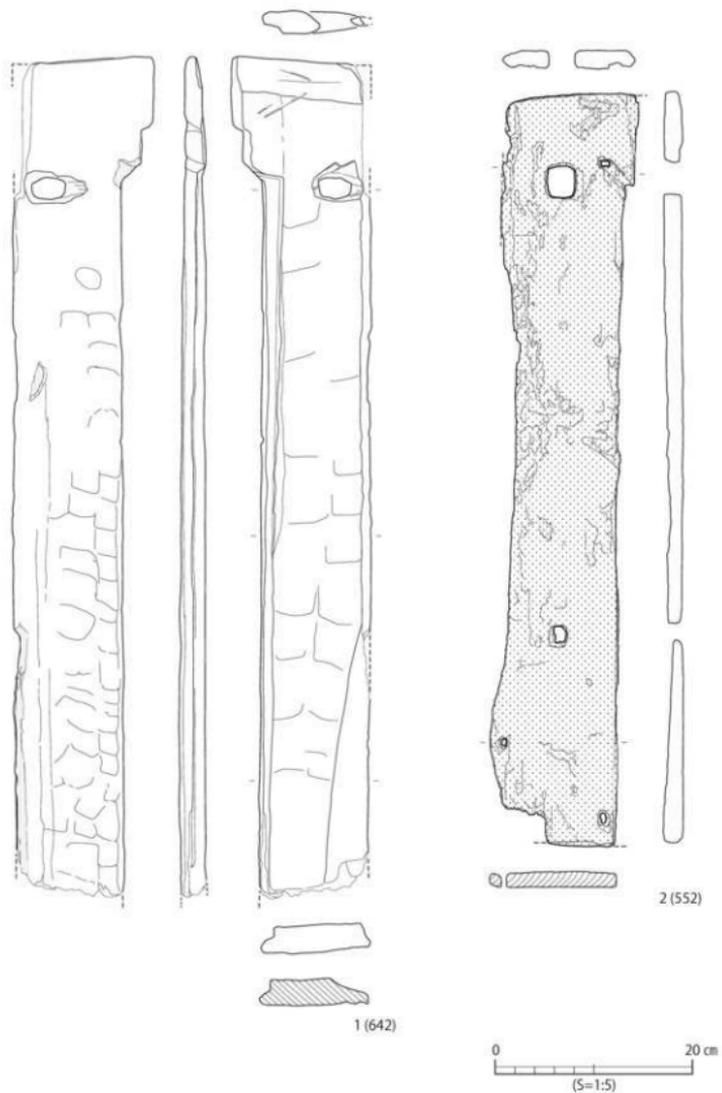
第66図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(9)



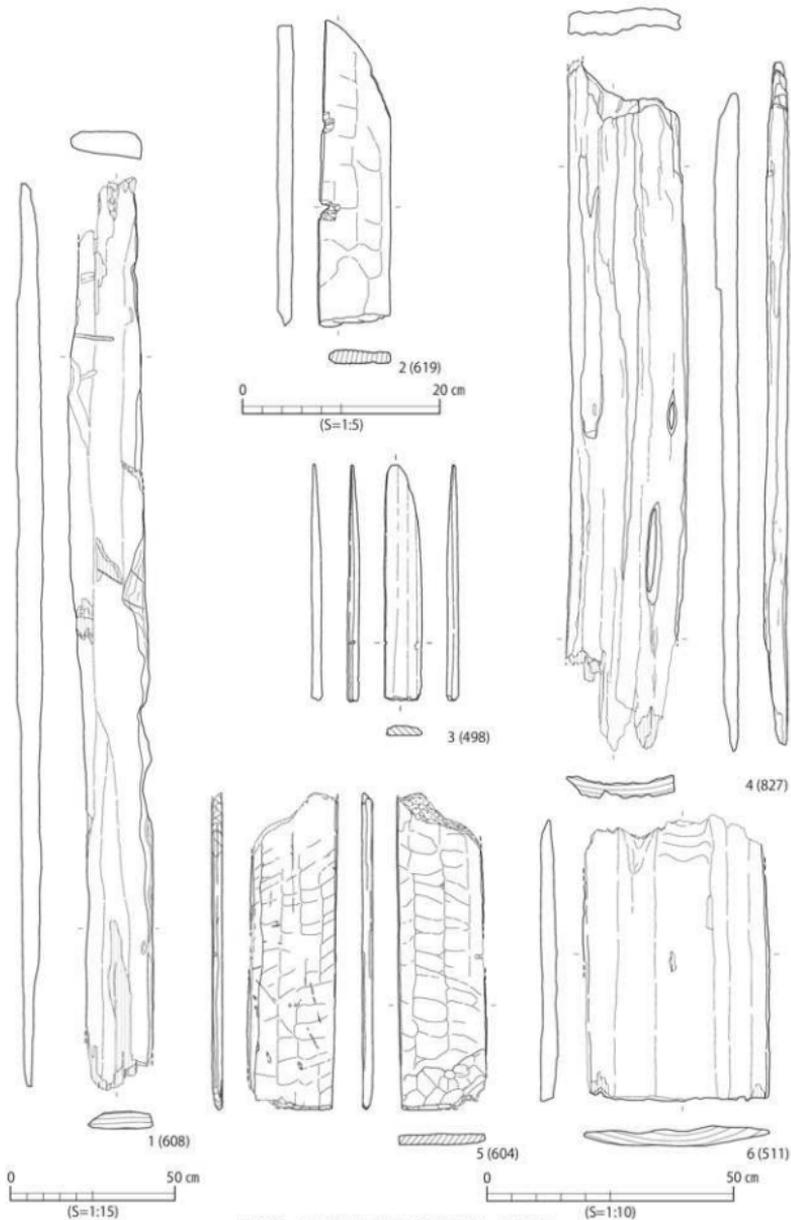
第67図 上古市道跡6区第4遺構面出土木製品(10)



第68図 上古市道跡6区第4遺構面出土木製品(11)



第69図 上古市道跡6区第4遺構面出土木製品(12)



第70図 上古市遺跡6区第4遺構面出土木製品(13)

表9 上古市道跡6区第2・3・4遺構面出土土製品観察表

採掘 番号	回次 番号	出土 品名	検出 層	分類群	器種名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	年輪 本数	本取り	研磨	備考
49-1	52	263	2	農耕土具	山下駄	45.3	10.4	2.0	68	駄目	スギ	円形枠付き形式。前後に2か所ずつV字形孔。磨孔は径0.3-0.5cm。
-2	52	232	2	農耕土具	山下駄	53.5	12.6	2.8	34	駄目	スギ	円形枠付き形式。先端は薄く尖らせる。1.6×1.2cm前後の長方形孔を前後に2か所ずつあける。
-3	52	260	2	建築材	妻壁	94.0	22.0	1.8	32	駄目	スギ	板材。上端は斜め直線-弧状になる。下端は欠損。左側の下端近くにV字の切り欠き。1.5-2.0cm内の穿孔3か所。右側のものはV字の切欠きと接合仕口の可能性あり。右側の断面は凸形となる。横方向に置いた層厚と配は65度となる。
-4	52	261	2	建築材	扉	100.8	34.8	3.9	65	駄目	スギ	上辺から右側辺を欠損。欠損部は黒く塗られている。右辺の中心ほどに幅1.5cmの狭り。左辺には2cm内の孔。表面面と木手厚が明確に異なる。
50-1	53	225	2	不明		36.4	17.2	2.0	13	駄目	スギ	板材。上辺左側を丸く仕上げている。上辺右側は欠失する。径0.5-0.7cmの孔を2か所あける。
-2	53	262	2	不明		61.4	7.5	4.0	34	駄目	スギ	二次加工あり。上端右側-下端は切り落しと。両面から粗い穿孔1か所。右側縁から表面面1/3は磨孔している。
-3	53	266	2	不明		203.2	18.8	2.8	48	駄目	スギ	板材。別削。上端を斜めに切り落す。下端は欠損。
51-1	54	352	3	農耕土具	山下駄	58.2	11.6	2.4	26	駄目	スギ	円形枠付き形式。表面に手厚縁のこ。磨孔は径1.0cm。径0.4-0.6cmの孔を前に2か所、後ろに4か所あける。
-2	54	467	3	農耕土具	山下駄	53.1	14.6	2.0	14	駄目	スギ	円形枠付き形式。転用材か。上端を丸く削る。磨孔は1.0-1.2cm角。1.0-1.2cm内の孔を前に2か所、後ろに3か所あける。
-3	54	375	3	農耕土具	山下駄	35.3	10.5	1.8	11	駄目	スギ	枠なし形式。転用材か。上端両面を削り取る。磨孔は0.5-1.0cm角。表面に斜め方向の物筋が見える。
-4	54	277	3	農耕土具	山下駄	48.0	17.7	1.5	18	駄目	スギ	枠なし形式か。転用材か。上端を丸く削り、下端は粗く切り落す。磨孔は1.0-1.7cm角。後ろに1.0cm内の孔を1か所あける。
-5	55	545	3	農耕土具	山下駄	50.6	15.2	1.3	161	駄目	スギ	円形枠付き形式。転用材か。上端両面を欠損。磨孔は1.0-1.2cm角。前1か所、後ろ2か所に0.5cm内の孔。表面に手厚縁が明確に異なる。
-6	55	474	3	農耕土具	山下駄	60.6	17.2	2.4	16	駄目	スギ	枠なし形式か。上下端を粗く切り落す。1.0-1.2cm内の孔を3か所あける。
52-1	57	275	3	建築材	壁	176.4	15.8	2.6	14	駄目	スギ	板材。表面(左側)のみ研磨。二次加工あり。上端は弧状に、下端は水平に切り落す。
-2	56	819	3	建築材	壁?	150.2	23.2	2.1	13	駄目	スギ	板材。別削。下端は欠失する。両側の上端にV字の切り欠きをもつ。2.5×1.5cmの孔を1か所あける。
-3	56	308	3	建築材	壁(床?)	135.2	23.6	3.0	163	駄目	スギ	板材。別削。一部に手厚縁残る。二次加工あり。上端を粗く切り落し、両側縁を削り取る。下端は直線か。縦削に2か所粗い加工による孔をあける。
-4	56	453	3	建築材	壁	128.6	22.2	3.4	144	駄目	スギ	板材。上端中央部、下端左上に断三角形のホゾを作りだす。二次加工あり。5.0×2.5cmの孔をあける。
53-1	55	276	3	建築材	壁	90.2	22.8	2.4	46	駄目	スギ	板材。上端は磨孔し、下端は欠損する。表面の一部に手厚縁のこ。右辺上端に狭りがある。上端近くに2.0cm内の孔を1か所あける。
-2	56	515	3	建築材	屋根?	106.0	12.2	3.0	32	駄目	スギ	別削板材。二次加工あり。上端右側を削り落す。表面に物筋のこ。径1.5-2.0cmの孔をあける。
-3	57	823	3	建築材	壁(床?)	109.2	16.6	2.4	44	駄目	スギ	板材。別削。二次加工あり。上端を粗く加工で切り落す。表面に物筋のこ。径1.5-2.0cmの孔をあける。
-4	57	342	3	建築材	壁	117.0	13.0	2.3	94	駄目	スギ	板材。二次加工あり。上辺は断三角形に切り落す。下端は両面を残して粗い加工で切り落す。粗い加工による3.0×1.0cm以上の孔をあける。
-5	55	540	3	建築材	屋根か壁	91.0	38.0	30.0	20	駄目	スギ	板材。別削。二次加工あり。下端は粗く切り落す。下端は欠損。下端中央に2.0×1.5cmの方形孔。
-6	56	319	3	建築材	床	68.3	23.4	4.9	66	駄目	スギ	板材。表面とも別削。上端は欠損する。下端は斜めに切り落す。二次加工あり。1.5×1.0cmの孔を2か所あける。表面に物筋。裏面に斜め方向の物筋が見える。
54-1	57	280	3	建築材	妻壁か屋根	128.0	23.8	6.8	52	駄目	モミ	板材。別削。上端は斜めに切る。下端は粗く切り落す。表面の一部が黒く塗られている。跡がある。横方向に置いた層厚と配は68度となる。
-2	57	542	3	建築材	妻壁?	125.0	17.8	2.4	44	駄目	スギ	薄い板材。上端は欠損。下端は幅6.0cm×長さ9.0cmのホゾを作り出す。径1.0-1.2cmの小孔を2か所あける。
-3	57	447	3	建築材	小脚	153.5	3.2	2.1	16	駄目	スギ	平型の楕円材。上下端を粗く削り出す。断面方形。
-4	58	452	3	建築材	甲か屋根	154.4	39.2	4.0	15	駄目	スギ	板材。別削。二次加工あり。上辺は切り落す。右辺上辺は欠損。右辺下辺に径0.2cm、深さ0.4cmの孔。下辺近くに4.0×3.0cmの孔。
55-1	58	314	3	建築材	屋根	313.4	12.0	2.7	21	駄目	スギ	薄い板材。別削。上端は斜め、下端は弧状に切り落す。
-2	57	272	3	建築材	屋根	310.3	11.0	3.2	10	駄目	スギ	板材。上端を斜めに、下端は水平に切り落す。
-3	58	284	3	建築材	屋根	246.0	13.6	2.5	17	駄目	スギ	薄い板材。上端は水平に切り落す。左側は一部欠損する。
-4	58	233	3	建築材	屋根	210.0	12.2	2.1	17	駄目	スギ	板材。別削。二次加工あり。上端は切り落す。下端は右側は欠損する。
56-1	58	512	3	不明		61.4	15.0	1.8	49	駄目	スギ	板材。裏面の一部に手厚縁。上下端は欠損。左辺上辺と右辺の下端近くにV字の切り欠き。
-2	58	311	3	不明		87.6	24.0	2.4	63	駄目	スギ	板材。別削。上端-左側縁は切り落す。上辺縁を円弧状に仕上げている。右辺の上辺に3.0×2.5cm、左辺下辺に0.5cmの小孔をあける。
-3	59	820	3	不明		115.3	18.1	3.4	59	駄目	スギ	板材。別削。上下端および側辺の下辺は欠損。6.0×4.0cmの長方形の孔。
-4	57	460	3	不明		31.1	4.4	1.5	44	駄目	スギ	上端近くに2.0×1.7cmの方形孔。左辺に径0.2cmの小孔。
57-1	59	439	3	不明		195.2	9.2	3.6	12	駄目	スギ	板材。別削。側辺の一部に手厚縁。上下端は欠損。右辺の上半は乾燥による歪み。左辺中央に10.5×5.0cmの狭り。
-2	59	335-339	3	不明		157.0	12.2	2.5	39	駄目	スギ	板材。下端と右辺上辺は欠損。表面に手厚縁のこ。右辺に5.0cm間隔で1.0×0.5cmのV字の切り欠き。
-3	59	246	3	土木材	杭	124.3	9.7	6.6	49	駄目	スギ	別削。断面方形。上端は欠損。下端を尖らせる。
-4	59	282	3	建築材	柱	101.3	5.3	5.5	33	駄目	スギ	両側面に別削。断面方形。上端を削り、下端を尖らせる。
-5	59	310	3	不明		511.5	8.5	8.5	22	芯持ち	モミ	幹の先端のない柱。端材か。枝を落し、上端を斜めに切り落す。跡あり。
58-1	60	563	4	農耕土具	山下駄	31.0	20.7	2.0	13	駄目	スギ	前後と左辺を欠損。磨孔2か所のこ。
-2	60	622	4	農耕土具	山下駄	36.3	12.0	2.0	10	駄目	スギ	平片を欠失。磨孔2か所のこ。丸く削り、表面は加工面を現す。
-3	61	501	4	農耕土具	山下駄	90.6	15.6	2.0-5.6		駄目	スギ	平面の半分ほどを欠損する。輪・幅は凡々とも。裏面には工具加工面を現す。
59-1	60	830	4	農耕土具	土器未成品	91.5	28.0	6.6-7.1		駄目	アカガシ	三連作の土器未成品。平面は台形。上面は弧状に隆起し、下面は平直。裏面に工具加工面を明確に現す。側面に磨痕を残している。

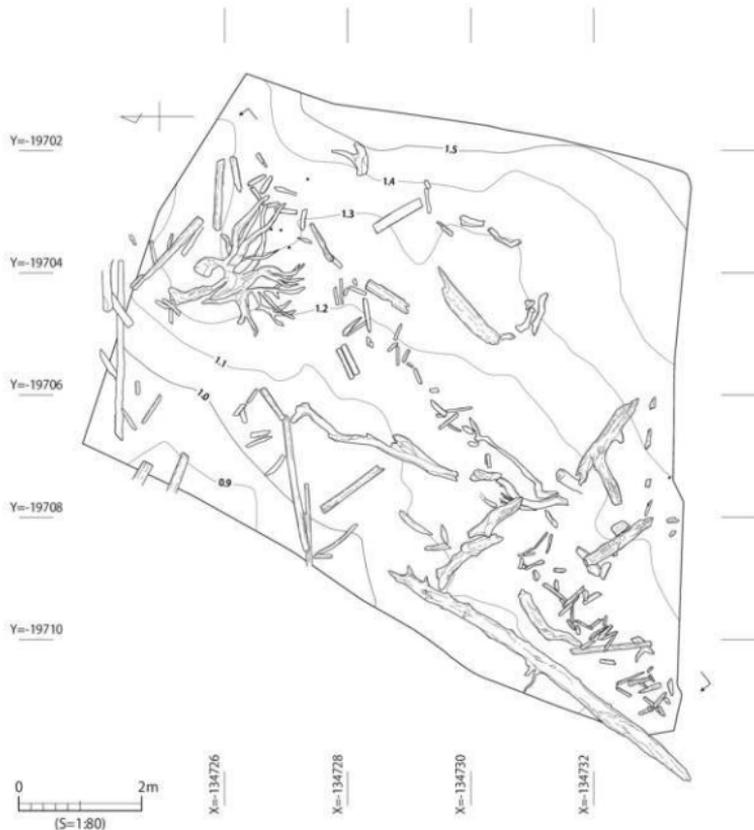
発掘 番号	調査 番号	出土 No.	検出 面	分類部	器種名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	年輪 本数	水取り	模様	備考
60-1	62	603	4	建築材	柱	227.3	7.1	7.1	36	横目	スギ	断面方形、両端を尖らせる。右辺に2ヵ所の抉り。
-2	62	576	4	建築材	柱	221.3	6.8	6.9	37	横目	スギ	下端を尖らせる。径4.0cmの小孔を6ヵ所開ける。
-3	62	551	4	建築材	柱	223.3	9.2	9.0	34	横目	スギ	全面風蝕。上下端は欠損し、下端は摩耗している。表面に斜め方向の刀物痕あり。
-4	62	621- 1-7	4	建築材	桁	425.5	13.5	11.0	16	芯持ち	セシダン	断面平円形。下端は側縁を削り取る。径1.0-1.5cmの小孔2ヵ所。上の孔は貫通していない。
-5	62	587- 1-8	4	建築材	桁	532.2	16.8	7.8		芯持ち	セシダン	丸丸の平直。上下端は斜めに切り落とす。3.0～2.5cmのホゾ。
61-1	61	607	4	建築材	壁	241.2	16.2	3.0	12	縦目	スギ	板材。表面に手汗痕残る。上辺に6.5×10.5cmの抉り、下辺の中央に5.5×13.5cmのホゾ。
-2	61	229	4	建築材	壁	218.8	17.9	1.9	17	縦目	スギ	板材。表面に手汗痕残る。上辺に7.3×8.8cmの抉り、抉りの左端は欠損。下辺の中央に6.0×10.7cmのホゾ。
62-1	63	584	4	建築材	壁	210.5	18.4	2.6	37	縦目	スギ	板材。表面に手汗痕が明瞭にのこる。上辺近くに2cmの方形孔。中央左よりに線刻。上辺右端は面取り。右辺は平直。下端は風化している。
-2	63	574	4	建築材	壁	194.0	14.8	2.2	21	縦目	スギ	板材。柱材に差し込むよう上下端の幅10cm程度を薄く削る。表面に手汗痕を明瞭に残す。裏面(図の右)の上平は風蝕。
-3	63	566	4	建築材	壁	164.0	23.8	2.2	124	横目	スギ	板材。二次加工あり。上端を粗く切り落とす。表面は手汗痕が明瞭に残る。上端近くに粗い加工による2.8×4.0cmの孔。
63-1	64	585	4	建築材	壁か 扉根	219.8	17.4	1.8	18	縦目	スギ	板材。二次加工あり。左辺側を削り取る。表面は手汗痕が明瞭。上辺近くに5.0×1.5cmの長方形孔。下辺近くに穿孔中と思われるコゴ形の凹みあり。
-2	64	562	4	建築材	床か壁	217.6	18.0	2.0	25	縦目	スギ	板材。左辺に13.0×5.5cmの平円形の抉り2ヵ所。抉りの芯部距離17.5cm。二次加工あり。粗い加工による角あり。表裏面に手汗痕が明瞭に残る。
64-1	64	605	4	建築材	妻壁	208.0	23.9	2.2	22	縦目	スギ	板材。割削。上下端は斜めに切る。二次加工による2.0×3.0cmの粗い穿孔1ヵ所。下端に1.5×2.5cmの抉りあり。縦方向(図のとおり)に削いた尻根勾配は71.5度、横方向では22-26度となる。
-2	65	578	4	建築材	妻壁	145.9	24.0	2.0	24	縦目	スギ	板材。上端を斜めに切断する。下端は欠損。表面に手汗痕が明瞭に残る。上辺に1.5×0.3cmの孔とV字の切り欠き2ヵ所。左辺に1.0cmの方形孔2ヵ所。縦方向(図のとおり)に削いた尻根勾配は71.5度。横方向では20度となる。
-3	65	228	4	建築材	妻壁か扉根	176.5	18.5	2.1	48	横目	スギ	板材。割削。上端は斜めに切り落とす。下端は欠損する。縦方向(図のとおり)に削いた尻根勾配は54度となる。二次加工あり。1.7×1.2cmの方形孔。
65-1	65	568	4	建築材	壁か扉根	208.4	28.6	3.1	34	縦目	スギ	板材。割削。二次加工あり。上下端は粗い加工で切り落とす。左右辺は断面凸状。上辺近くに粗い加工による方形孔。
-2	66	567	4	建築材	壁か 扉根	204.4	28.2	2.6	63	横目	スギ	板材。割削。二次加工あり。右辺の上下端を欠損。右辺上辺に抉り、上辺近くに粗い加工による方形孔。
-3	66	826	4	建築材	壁か 扉根	188.8	29.4	2.0	78	横目	スギ	板材。割削。上端の右端と下端を一部削り取る。
66-1	67	602	4	建築材	壁	114.2	18.8	2.7	13	縦目	スギ	板材。上下端は欠損。縦列に2.5cm角の長方形孔2ヵ所。
-2	67	606	4	建築材	壁	104.6	28.9	3.6	26	横目	スギ	板材。二次加工あり。上端は粗く切り落とす。下端は摩耗。上端近くに両側に穿孔した長方形孔。
-3	67	358	4	建築材	壁	76.3	20.0	2.0	144	横目	スギ	板材。二次加工あり。下端を薄く削り出す。上辺近くに径1.5cmの円形孔1ヵ所。
-4	67	592	4	建築材	壁	85.0	21.0	2.3	24	縦目	スギ	板材。割削。二次加工あり。上下端を切り落とす。中央左よりに3.5×1.0cmの長方形孔あり。断面。表面に斜め方向の刀物痕。
-5	65	496	4	建築材	壁	47.2	28.0	1.8	48	縦目	スギ	幅広の板材。上端は欠損する。左右側縁は欠損。裏面(図の右)に手汗痕を明瞭に残す。表面(図の左)に斜め方向の刀物痕を残す。
67-1	66	831	4	建築材	扉根	236.0	14.2	2.3	12	縦目	スギ	板材。割削。上端及び下端側縁を欠損。
-2	67	597	4	建築材	扉根	155.2	4.8	2.0	5	縦目	スギ	薄い板材。二次加工あり。上下端は切り落とす。
-3	63	582	4	建築材	壁か 扉根	65.0	18.5	2.5	15	縦目	スギ	板材。二次加工あり。下端は欠損。上辺近くに粗い加工による3.0×2.5cmの方形孔。
-4	68	357	4	建築材	壁か 扉根	77.7	15.5	2.1	46	縦目	スギ	板材。上下端は欠損。表面に手汗痕のこる。上辺近くに4cmの長方形孔。
-5	68	565	4	建築材	壁か床	84.5	16.4	3.2	10	縦目	スギ	板材。割削。二次加工あり。上端近くに粗い加工による5.0×2.0cmの方形孔。表面は荒れている。
-6	67	613	4	不明		50.8	7.5	1.5	15	縦目	スギ	板材。割削。上端を両側縁から尖らせる。
-7	68	643	4	不明		110.4	1.8	2.0	18	横目	スギ	板材。割削。上端は斜めに切り落とす。下端は欠損する。
-8	61	833	4	不明		66.1	25.7	4.3	8	縦目	スギ	板材。割削。厚みは均一ではない。二次加工あり。上下端を粗く切り落とす。
-9	68	569	4	建築材	小溝	70.9	4.1	3.9	17	横目	スギ	断面長方形。上下端は欠損。表面に割削と断面による圧痕あり。
68-1	68	500	4	不明		69.5	16.8	1.8	8	縦目	スギ	板材。表裏及び両側縁に手汗痕残る。上端は段状に仕上げた。下端は欠損。4.0×3.8cmの孔一方開けあり。
-2	68	500	1	栓		25.2	2.8	2.2	5	縦目	スギ	断面方形の身部分に頸部を作り出す。全面に加工痕残る。頸部は4.8×2.0cm、2.5×1.7cm断面方形の身部分に、3.0×1.0cmの方形孔をあける。
69-1	69	642	4	不明		85.8	13.0	2.4	42	横目	スギ	板材。両側縁及び下端を欠損する。上辺に3.2×2.5cmの方形孔1ヵ所。
-2	69	552	4	不明		76.7	13.4	1.9	49	横目	スギ	板材。全面黒く焼ける。左右辺を欠損する。3.1×2.7cmの方形孔1ヵ所と小孔4ヵ所あける。
70-1	68	608	4	不明		279.5	22.6	8.3	15	縦目	スギ	厚い板材。割削。上下端は欠損する。断面。厚み均一でない。
-2	68	619	4	不明		31.3	7.3	1.5	16	横目	スギ	板材。表面に手汗痕。裏面は割削。右辺の上下端を斜めに仕上げた。下端は粗く切り落とす。左辺2ヵ所に粗い加工による抉り。
-3	69	498	4	不明		47.3	7.6	2.0	45	縦目	スギ	板材。割削。上端を薄く尖らせる。下端は切り落とす。
-4	69	827	4	不明		141.0	23.6	4.8	42	縦目	スギ	上端は欠損する。断面。
-5	69	604	4	不明		64.8	17.5	2.0	54	横目	スギ	板材。二次加工あり。下端は粗く切り落とす。上端は黒く焼け欠損。表裏とも手汗痕を明瞭に残す。
-6	69	511	4	不明		58.4	37.8	39.9	23	横目	スギ	板材。裏面に手汗痕残る。二次加工あり。下端は粗く切り落とす。上端は欠損。

(6) 第5遺構面の調査

遺構について (第71図～第72図)

第4遺構面の古墳時代前期の建築部材を取り上げる段階で、自然木や、ここに生育していたと思われる樹木の根が張った状態が検出されている。古墳時代に盛土がされる以前には樹木が生育するような状態であったと見られるが、その時期については明確にする材料がない。この自然木の直下にて、弥生時代前期の木列が検出されているので、第5遺構面と第4遺構面には長期にわたる空白期間があるとみられ、この間は樹林帯であった可能性がある。

弥生時代前期の木列は長さ50cmほどの杭状のものが多く、打ち込まれたようなものもいくつかあるが、大半は横倒しになっている。出土状況からは、杭列というよりも棒状のものを敷きならべ



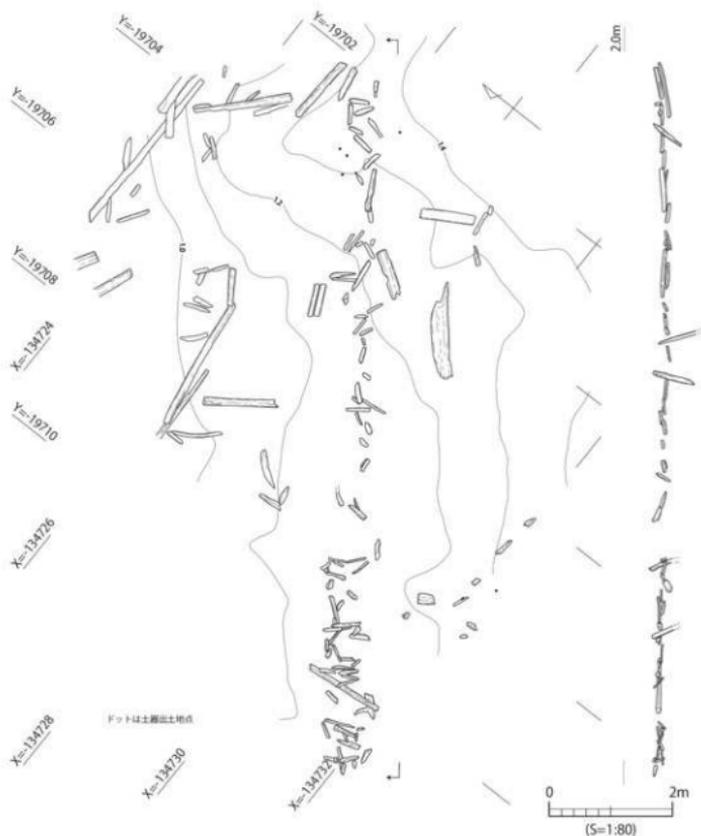
第71図 上古市道跡6区第5遺構面全体図

たような状態であった。小規模ながらも沈下を防止するような通路状の遺構であった可能性が考えられる。棒状の木製品は標高1.3～1.4mではほぼ水平に並んでいる。

なお、第4遺構面と第5遺構面の間は層厚が小さいため、出土物の中にはどちらの面に伴うのか判断できないものもあった。確実に第5遺構面に伴うのはこの杭列のみである。

木列の一部は、自生していた樹木の根の下部から検出されたものもあることから、樹林帯になったのはこの木列の廃絶以降であると言える。

土器片が数点出土しているが、2個体のものがあり、壺は北側で木列の間から数点の小片となって検出されている。甕は調査区南側の壁際トレンチで検出したものだが、標高1.50mで木列と同じ標高での検出である。

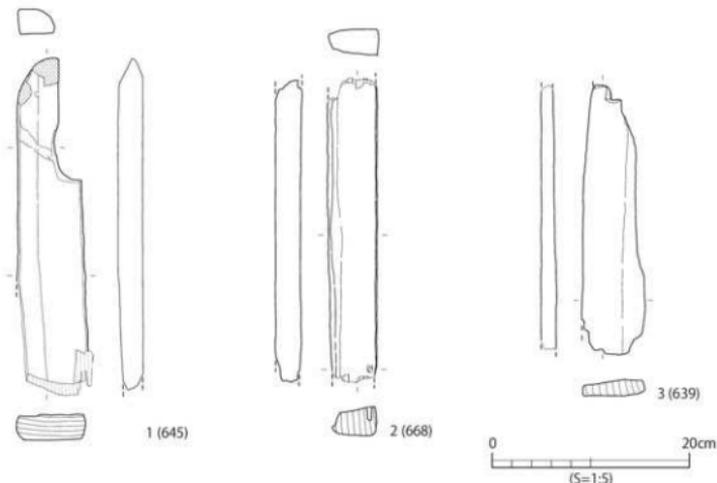


第72図 上古市遺跡6区第5遺構面杭列

(7) 第5遺構面出土木製品・土器

木製品 (第73図～第75図)

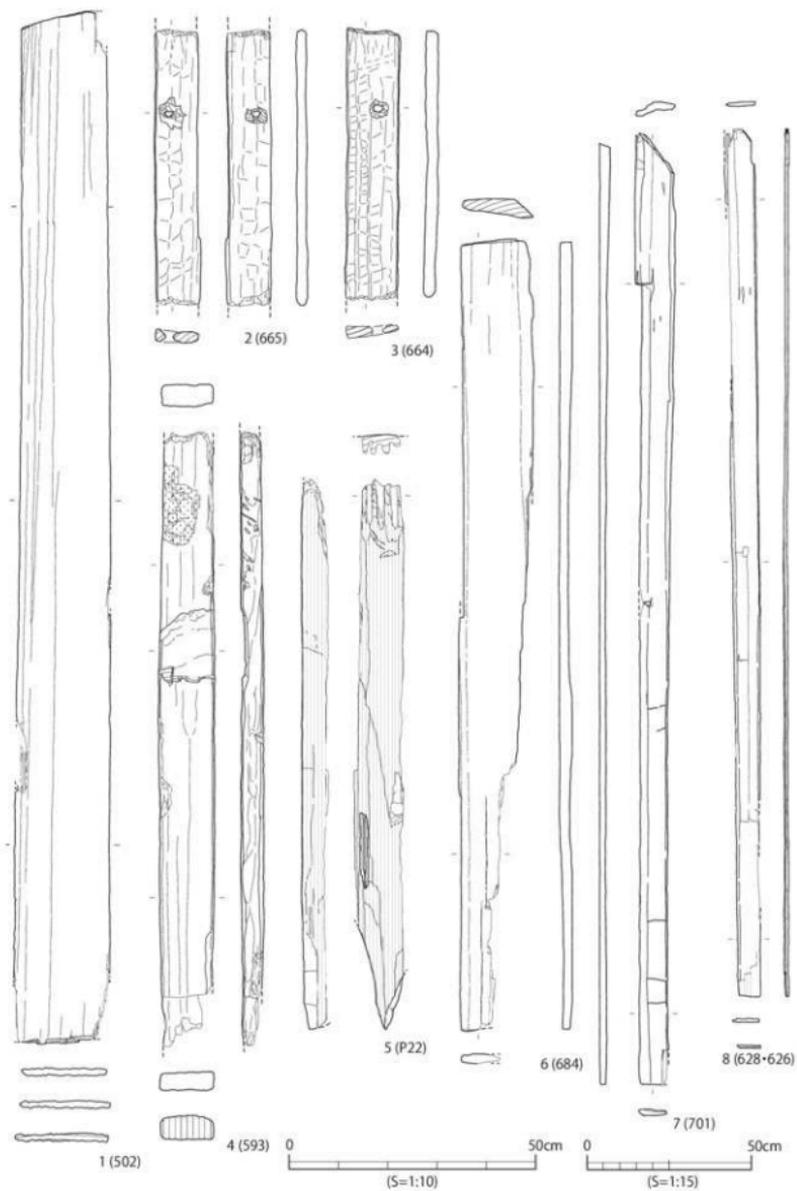
第74図1・4・7は建築材である。4は厚さが4.8cmあり、幅は狭いが床材と考えられる。7は薄く幅の狭い板材で、屋根材と思われる。5は板状の杭である。先端を両側縁から削り、尖らせている。第73図～第75図は用途不明品である。



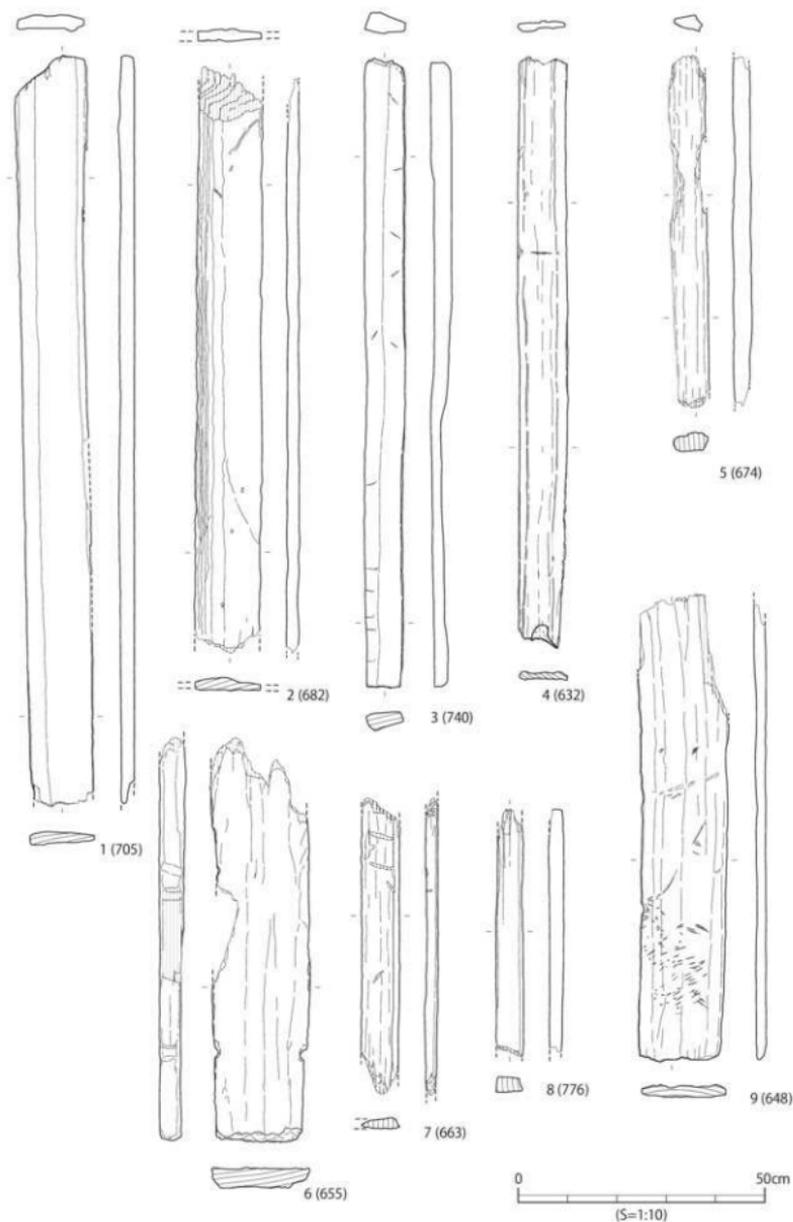
第73図 上古市道跡6区第5遺構面出土木製品(1)

表10 上古市道跡6区第5遺構面出土木製品観察表

検出 番号	採取 番号	取上げ No.	検出面	分類群	器種名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	年輪 本数	木取り	樹種	備考
73-1	70	645	5	不明		34.2	7.0	2.6	15	縦目	スギ	上辺隅を面取り。下端は欠損。上辺は表面削り、右辺に6.2×3.0cm以上の狭り。
2	70	668	5	不明		31.0	5.0	2.7	36	縦目	スギ	断面長方形。上・下端は欠損。下端の右隅近くに0.5cm角、深さ1.3cmの小孔。
3	71	639	5	不明		27.4	6.3	1.7	54	縦目	スギ	上・下端、右側縁は欠損。下辺右隅近くに約20cmの小孔。
74-1	70	502	5	建築材	屋根	204.4	18.6	1.4	5	縦目	スギ	板材。羽形。上辺は斜め、下端は水平に切り落とす。
2	70	665	5	不明		56.2	9.2	2.5	42	縦目	スギ	板材。表面に手跡残る。二次加工あり。粗い加工による1.5×1.0cmの孔。
3	70	664	5	不明		53.3	10.7	2.5	51	縦目	スギ	板材。表面に手跡残る。上・下端を欠損する。二次加工あり。2.0×1.5cmの孔。
4	70	593	5	建築材	床	125.4	11.4	4.8	35	縦目	スギ	板材。羽形。上・下端は欠損する。上端から表面が黒く焼ける。
5	72	Pre.22	5	土木材	杭	112.4	10.2	5.4	19	縦目	スギ	断面長方形。下端は両側縁から尖らせる。上端は欠損する。
6	72	684	5	不明		161.3	14.5	3.5	27	縦目	スギ	羽形。右・下・下端は欠損。下端を切り落とす。厚みは一定でない。
7	72	701	5	建築材	屋根	291.9	12.8	2.7	12	縦目	スギ	薄い板材。上端は斜めに切り落とす。上端が下端より0.5cm厚い。
8	72	626	5	不明		287.0	9.7	1.0	5	縦目	スギ	薄い板材。上端を斜めに切り落とす。
75-1	71	705	5	不明		153.5	14.7	3.3	22	縦目	スギ	二次加工あり。上端は斜めに切り落とす。下端は欠損。
2	71	682	5	不明		119.6	13.5	2.5	8	縦目	スギ	板材。上・下端は欠損する。二次加工あり。両側縁は削り取る。
3	71	740	5	不明		128.2	8.2	4.2	23	縦目	スギ	羽形。上・下端は欠損。厚みは均一でない。
4	71	632	5	不明		120.8	10.0	2.1	32	縦目	スギ	板材。羽形。上・下端は欠損。上端近くから表面が黒く焼ける。
5	71	674	5	不明		71.8	7.4	3.2	29	縦目	スギ	棒材。羽形。上・下端及び側面中ほどを欠損する。
6	70	655	5	不明		82.5	19.8	4.8	19	縦目	スギ	薄い板材。上・下端及び左辺中ほどを欠損する。側面下位の対になる位置に狭りあり。
7	71	663	5	不明		60.5	7.6	2.5	64	縦目	スギ	板材。上・下端を欠損する。
8	72	776	5	不明		50.2	5.4	3.2	37	縦目	スギ	断面長方形。上端は木理に沿って削れ欠損する。表面は摩耗。下端は欠損。
9	72	648	5	不明		94.0	17.4	2.6	12	縦目	スギ	板材。表面は羽形。上端を欠損する。二次加工あり。下端を切り落とす。



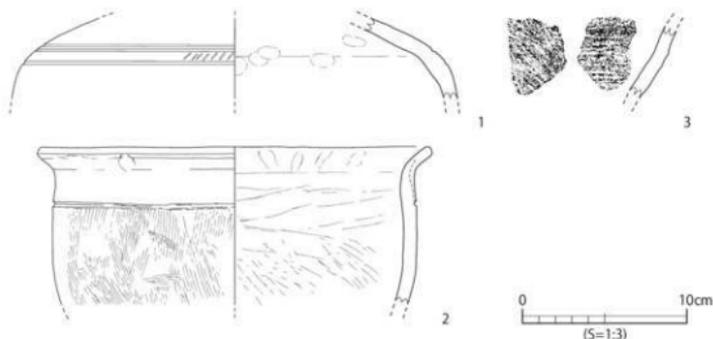
第74図 上古市遺跡6区第5遺構面出土木製品(2)



第75図 上古市道跡6区第5遺構面出土木製品(3)

第5遺構面・9層出土土器(第76図)

2は甕の上半部で、頸部直下には1条の沈線がある。外面には全面に煤が付着している。1は甕の胴部で、接合はできなかつたが同一個体と見られる小片が4点ある。風化がかなりすすんでいる。肩部には刺突文を挟み、上に2条、下に1条の沈線がめぐる。3は縄文土器の小片である。第5遺構面調査完了後に西壁沿いのサブトレを深掘し土層堆積の状況を確認するさいに出土したものである。泥炭層であるいわゆるオモカス層から出土している。土層からは遺構が形成されるような環境であったとは考えにくく、背後の丘陵から流れ込んだものと考えられる。



第76図 上古市遺跡6区第5遺構面・9層出土土器

表11 上古市遺跡6区第5遺構面・9層出土土器観察表

種別 番号	図版 番号	種別	器種	部位	調整	色調	焼成	胎土	法量	出土 層位
76-1	49	弥生 土器	甕	胴部	外面は、ナデ調整。内面には指 圧痕あり。2条+1条の沈線間 に刺突文	外・内) 5YR5/6 明赤褐色	良好	2mm以下の砂粒を 含む。長石	口径(25.8cm) 残高5.0cm	6層
2	49	弥生 土器	甕	口縁 ~肩	外面は、刷毛調整→口縁部のナ デ調整→沈線。内面は口縁部は ナデ調整、頸部以下は、ヘラミ ガキ。	外)10YR6/2 灰黄褐色 内)10YR3/1 黒褐色	良好	3mm以下の砂粒を 含む。長石	口径(23.6cm) 残高9.7cm	6層
3	49	縄文 土器	深鉢	胴部	外面は巻き貝条痕、内面は二枚 貝条痕による調整。	外・内) 10YR4/1 褐灰色	良好	微砂粒多い。	小片	9層

第5節 小結

上古市遺跡の調査について簡単にまとめておきたい。今回の調査では弥生時代前期の杭列状の遺構が検出された。この地域における平野への最初の進出と見られる。その後しばらくは、遺構・遺物は検出されていないが、古墳時代前期に大規模な土地造成が行われたことが明らかになったことは、大きな成果である。その後は、水田経営が安定して行われた可能性があり、中世の水田遺構も検出している。

第5章 自然科学分析

第1節 上古市遺跡周辺地域の古環境変遷

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント（株））

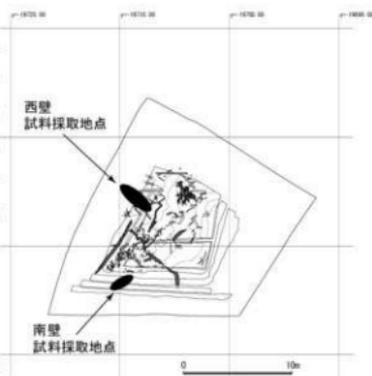
はじめに

上古市遺跡は鳥根県西部の浜田市三隅町古市場に位置し、三隅川河口部左岸の小谷奥の沖積平野縁辺に立地する。本報は、上古市遺跡周辺地域の古植生などの古環境（変遷）を明らかにする目的で、鳥根県教育庁埋蔵文化財センターが、文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した軟X線写真観察、花粉分析及び植物珪酸体分析について、再編したものである。

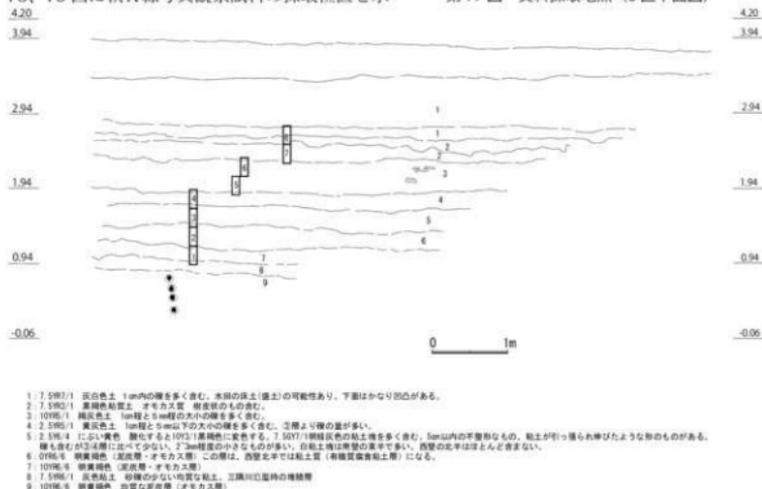
分析試料について

試料採取地点（6区平面図）を第77図に、第

78、79図に軟X線写真観察試料の採取位置を示

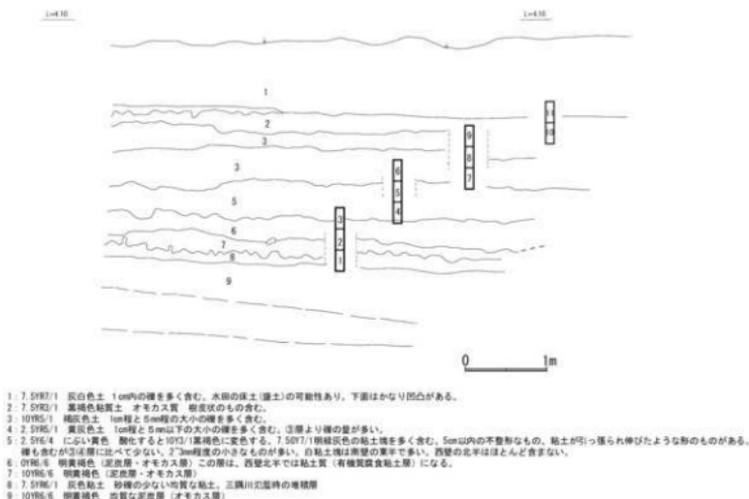


第77図 資料採取地点（6区平面図）



- 1: 7.597/1 灰白色土 10m内の層を多く含む。米飯の灰土(遺土)の可能性あり。下部はかなりの凹みがある。
- 2: 7.598/1 黄褐色粘質土 オモカス層 粘着状のものを含む。
- 3: 1019/1 黄白色土 10m程と5m程の大小の層を多く含む。
- 4: 2.519/1 黄白色土 10m程と5m程以下の大小の層を多く含む。3層より層の厚さが多い。
- 5: 2.516/4 土に白い褐色 散在すると1013/1層境域に染色する。7.597/1層境域の粘土層を多く含む。5m以内の平層形のもの。粘土が押しつぶされびたような形のものがある。層も含むが2.516層に比べて少ない。2.5m程度以下の小さなものが多い。白粘土は層境の薄層で多い。西壁の北半はほとんど含まない。
- 6: 1019/6 黄褐色粘 泥炭層・オモカス層 この層は、西壁北半では粘土層(有機質黄褐色粘土層)になる。
- 7: 1019/8 黄褐色粘 (泥炭層・オモカス層)
- 8: 7.519/1 灰白色土 砂層が少ない程度に粘土。三隅川川底沖の堆積層
- 9: 1019/9 黄褐色粘 均質な泥炭層(オモカス層)

第78図 試料採取位置（6区西壁土層図）



第79図 試料採取位置(6区南壁土層図)

した。

軟X線写真観察試料は、断面図に描かれた面から掘込んで試料を採取したために、解析結果と本図面との間で地層境界にズレが生じている。

軟X線写真観察結果を受け、微化石分析は西壁でのみ実施した。また、微化石分析用試料は軟X線写真観察後に軟X線写真観察資料から分取し、分析用試料の採取層は各ダイアグラム中に示している。

今回使用した平面図、断面図は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより提供を受けた原因をもとに、作成したものである。

分析方法

軟X線写真観察方法

試験室内にて、25 cm × 10cm × 1cmの透明アクリルケースに入るよう、試料調整を行う。

軟X線写真撮影では撮影用ケースに入れた印面紙に、40kVp・30mAの電流をかけた軟X線を照射し感光させる。撮影された写真はネガであり、軟X線の透過しやすい粘土、植物片は黒く、透過しにくい砂粒、二次的な酸化鉄や酸化マンガンは白く表現されている。

撮影写真を基にスケッチを行うとともに、「土

表12 同定・検鏡対象分類群
(同定分類群と推定母植物の関係)

同定シセル	コード	分類群	対応する植物群
③	1	イネ	イネ
	3	イネ類群(緑の養分植物)	イネ
	21	ムギ類(緑の養分植物)	コムギ・オオムギ
	41	オシロイ(シコクビエ型)	シコクビエ
	61	キビ型	ヒメ・アワ・キビ
	62	キビ属型	キビ
	64	ヒエ属型	ヒエ
	66	エノコログサ属型	アワ
	84	ウシクサ科白	サトウキビ
	91	モロコシ属型	モロコシ
	93	コムギ属型	コムギ
	94	オシロイ属型	オシロイ
	④	11	ウマノコグサ科・アシカキ
13		マコモ	マコモ
31		ヨシ属	ヨシ
33		ダンクウ属	ダンクウ
35		ヌマガヤ属型	ヌマガヤ
51		シバ属型	シバ属
71		トダクシ属	トダクシ属
81		ススキ属型	ススキ属
83		ウシクサ属A	ウシクサ属など
201		メダケ型	メダケ
203		ネギ型	ネギ
205		チマキザサ型	チマキザサ・チシマザサ
207		ヒメヤザサ型	ヒメヤザサ
209		マダケ属型	マダケ
300		カヤツリグサ科(スズメなど)	スズメ
390		シダ類	シダ類
501		フナ科(イモ)	シシト
503		フナ科(アカシギ)	カシ
510		クスノキ科	ハシバミノキなど(クスノキ科)
530		マンサク科(イヌノキ)	イヌノキ
530	アブノキ科	アブノキ	
540	モクレン属型	モクレン属	
570	マツ科型	マツ科	
580	マツ科型	マツ科	

環記載薄片ハンドブック (久馬・八木: 訳監修, 1989)」に準じて記載を行う。

微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉(胞子)、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を5段階で示した。

花粉分析方法

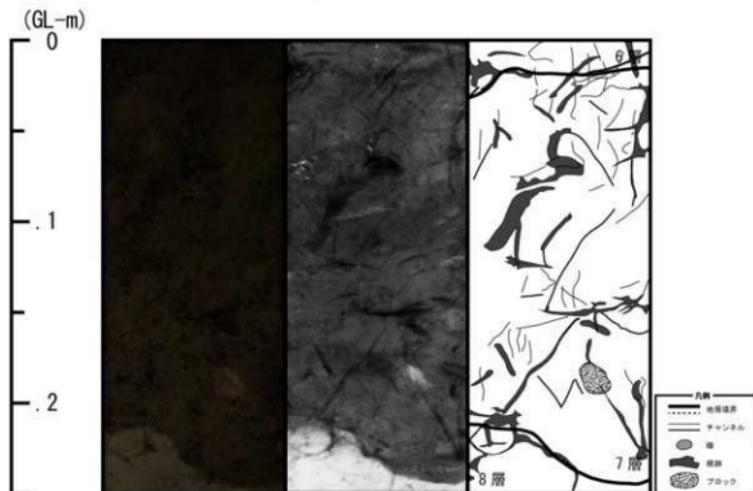
渡辺(2010)に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村(1974)に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科(40ミクロン以上)と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ミクロン未満)に細分した。

植物珪酸体分析方法

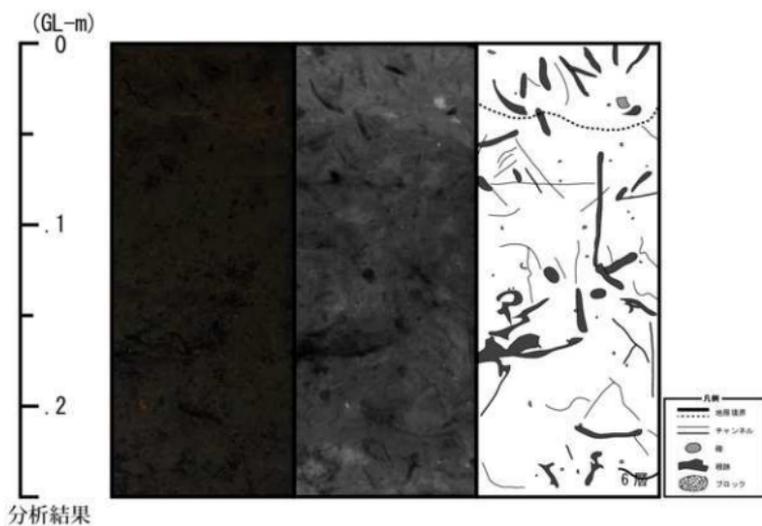
藤原(1976)のグラスピース法に従って実施した。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかな、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群(表12)を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスピースの個数が300を超えるまで計数を行った。

AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 ^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期:5568年で年代計算を行った。暦年代校正にはOxCal ver. 4.3 (Bronk Ramsey, 2009)を用い、INTCAL13 (Reymer et al., 2013)を利用した。



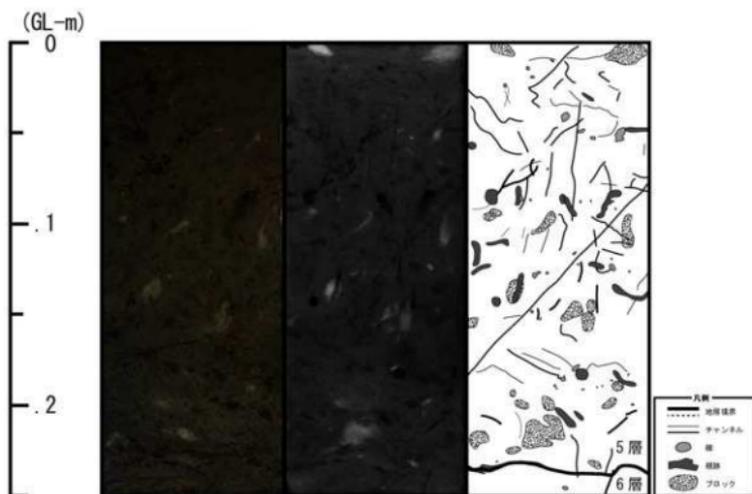
第80図 軟X線写真観察結果(西壁1)
(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



分析結果

第 81 図 軟X線写真観察結果 (西壁 2)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



第 82 図 軟X線写真観察結果 (西壁 3)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)

軟X線写真観察結果

実視写真、軟X線写真、解析結果を第80～98図に示す。

両地点とも、現地に記載されている最上位の「1層」から再下位の「9層」までの9層について、実視写真及び軟X線写真で判別することができた。さらに、幾つかの層は細分できることが分かった。以下では、層ごとに下位から記載を行っていく。

(1) 西壁

① 8層 (試料No西壁1)

腐植質粘土。上位の7層下底にあるチェンバーから伸びるやや太いチャンネルと上下及び水平方向に伸びる直線的なチャンネルが多く認められる。さらに、チャンネルによって区画された細粒の角塊状ベッドが認められる。

② 7層 (試料No西壁1)

泥炭で、2cmほどの腐植質粘土(8層)のブロックを含む。やや太いチャンネルが多く、チェンバーを伴うものもある。一方、細いものの数は少ない。ベッドは強度に発達した極細粒の小粒状ベッドが集合して、弱～中度に発達した粗粒の小粒状ベッドを成している。

③ 6層 (試料No 1.2,3)

泥炭。上部の色調がやや明るい。楕円状のバグと、やや太く上下方向に伸びる直線的なチャンネルが特徴的である。やや太いチャンネルにはチェンバーを伴うものも僅かにある。また、細いチャンネルは少なく、上下方向に伸びる直線的なものはほか、水平方向に伸びるもの、ジグザグ状のものも認められた。ベッドは強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。これらの幾つかが固まって、二次ベッドを成すものもある。二次ベッドの多くは中度に発達した中～粗粒の小粒状ベッドである。

④ 5層 (試料No西壁3,4)

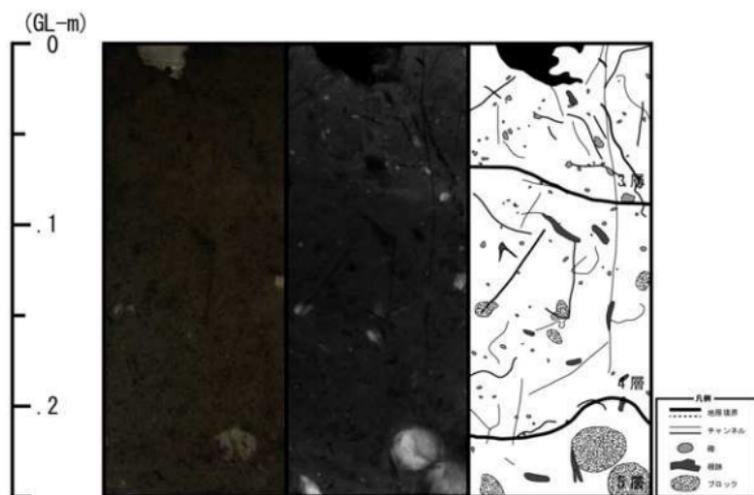
泥炭。全体に長径1cm以下、最大3cmほどの灰色粘土のブロックを多く含む。上部では極粗砂、細礫が混じり、上位の4層に漸移する。この外、全体に楕円形のバグが多く分布する。チャンネルは細いものがほとんどだが、量は少なく。上下方向に伸びる直線的なもののほか、水平方向に伸びるものや、ジグザグ状のものがある。ベッドは強度に発達した極細～中粒の小粒状ベッドが全体に認められる。局所的に極細～細粒のベッドが、中度に発達した粗粒の小粒状二次ベッドを成している。

⑤ 4層 (試料No西壁4,5)

礫混泥炭。極粗砂～細礫を含み、下位の5層に漸移する。上位の3層に比べ色調がやや暗い。チャンネルの分布は少なく、細く上下方向に伸びる直線的なものが目立つ。ベッドは、強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。局所的に二次ベッドも認められ、多くは中～強度に発達した粗粒の小粒状ベッドである。

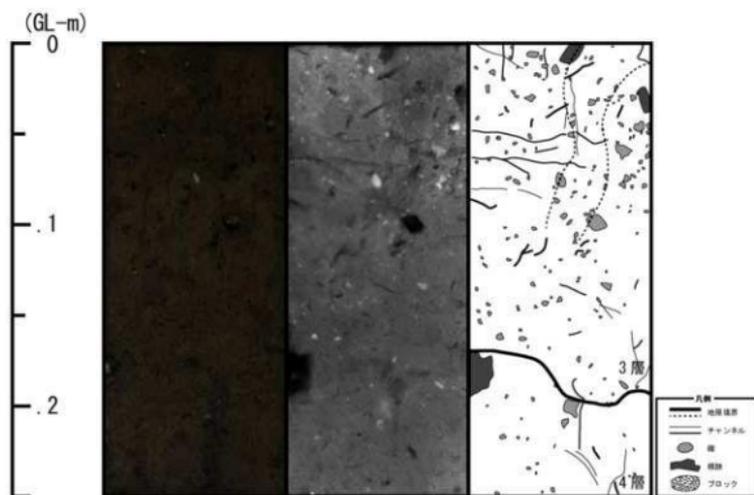
⑥ 3層 (試料No西壁4,5,6)

礫質泥炭。礫は長径数mmの角礫が主体。中部には、液状化を示唆するラミナが認められる。チャンネルの分布量は少なく、上下方向に伸びる細く直線的なチャンネルが、上、下端部に認められる。中部ではチェンバーから伸びるやや太いものが認められるが、多くの伸長方向は水平である。礫、粗粒砂の含有量が多く、ベッドとの区別が付けにくい。強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッ



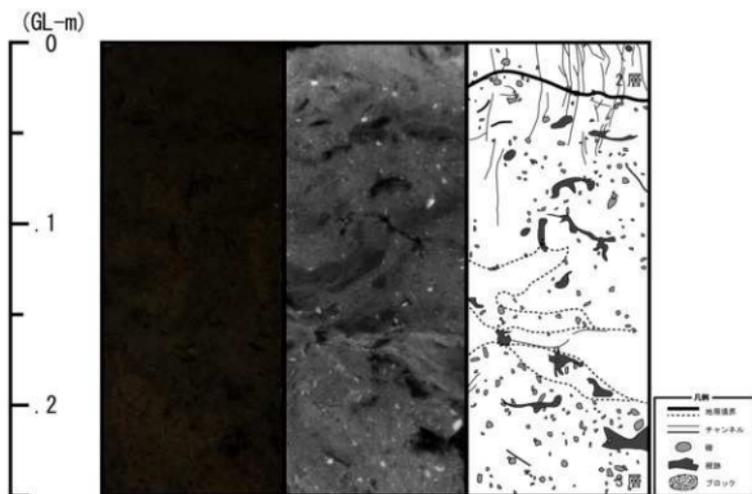
第 83 図 軟X線写真観察結果 (西壁 4)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



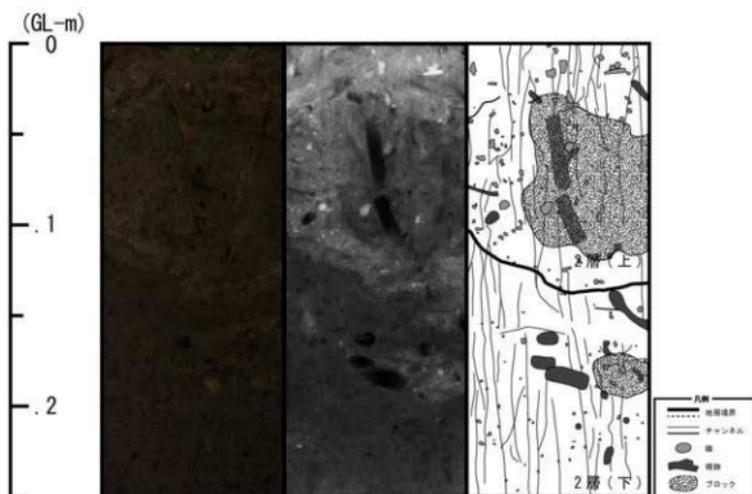
第 84 図 軟X線写真観察結果 (西壁 5)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



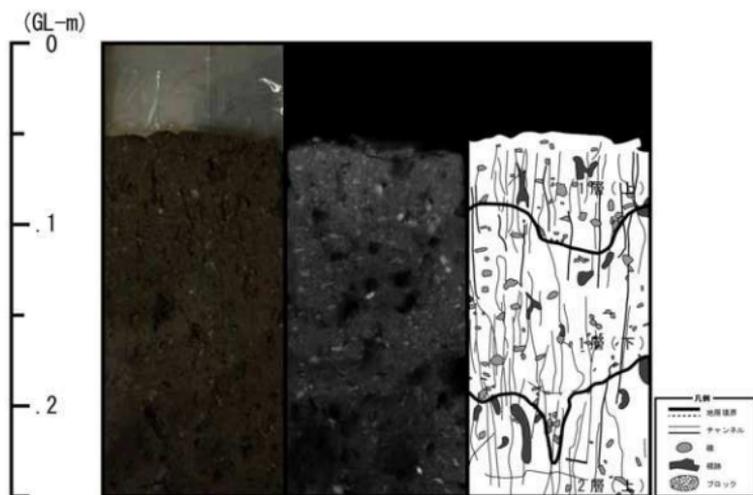
第85図 軟X線写真観察結果 (西壁6)

(左：実視 中：軟X線 右：解析結果)



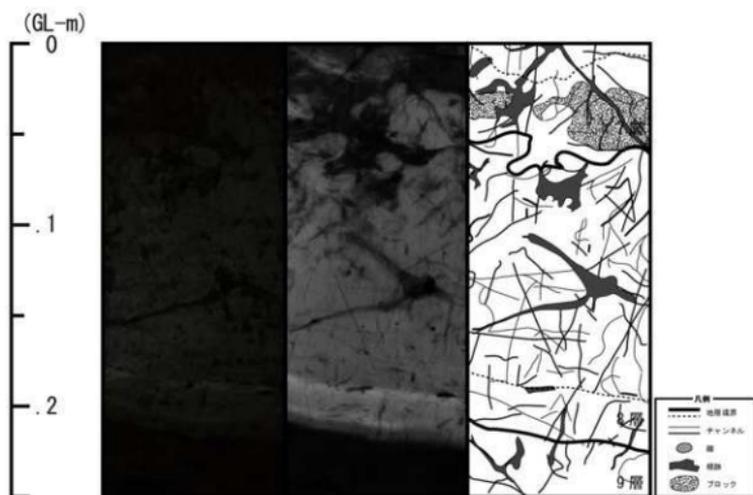
第86図 軟X線写真観察結果 (西壁7)

(左：実視 中：軟X線 右：解析結果)



第 87 図 軟X線写真観察結果 (西壁 8)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



第 88 図 軟X線写真観察結果 (南壁 1)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)

下が全体に認められる。二次ベッドも多く認められ、多くは中～強度に発達した中～粗粒の小粒状ベッドや弱～強度に発達した極粗粒の小粒状ベッドを成している。

⑦ 2層(下)(試料No西壁 6.7)

泥炭。粗砂～細礫を含むほか、腐植質粘土のブロック(長径3cm)が認められる。楕円状のバグのほか、根跡と考えられる暗色帯が僅かに認められる。チャンネルは上下方向に伸びる、細く直線的なものが多く、水平方向に伸びるものも認められる。粗砂～細礫が多く含まれベッドとの区別が付けにくい、強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。二次ベッドも多く認められるが、多くは弱～強度に発達した中～粗粒の小粒状ベッドを成している。

⑧ 2層(上)(試料No西壁 7.8)

礫混腐植質粘土。粗砂～細礫を多く含むほか、泥炭(2層下)のブロック(長径10cm)が認められる。楕円状のバグや、根跡、茎片と考えられる幅の広い暗色帯が認められる。チャンネルは上下方向に伸びる、細く直線的なものが多く、水平方向に伸びるものも僅かに認められる。粗砂～細礫が多く含まれベッドとの区別が付けにくい、強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。二次ベッドも局所的に認められ、多くは弱～強度に発達した極粗粒の小粒状ベッドも認められる。

⑨ 1層(下)(試料No西壁 8)

腐植質粘土質砂礫。マトリックスが腐植質粘土からなる。礫は長径10mm以下の角礫で、粗～極粗粒砂も多く含まれる。礫の抜けた跡や茎がバグとして認められる。チャンネルは上下方向に伸びる、細く直線的なものがほとんどで、僅かに水平方向に伸びるものが認められる。礫、粗粒砂の含有量が多く、ベッドとの区別が付けにくい、強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。二次ベッドが散在し、強度に発達した中～粗粒の小粒状ベッドを成している。

⑩ 1層(上)(試料No西壁 8)

腐植質シルト質砂礫。マトリックスが腐植質シルトからなる。下位の1層(下)似比べ、やや粗粒。礫は長径10mm以下の角礫で、粗～極粗粒砂も多く含まれる。根跡と考えられ幅の太い暗色帯が認められるが、バグやチェンバーは認められなかった。チャンネルは上下方向に伸びる、細く直線的なものから成る。礫、粗粒砂の含有量が多く、ベッドとの区別が付けにくい、強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められ、強度に発達した中～粗粒の小粒状ベッドも多い。

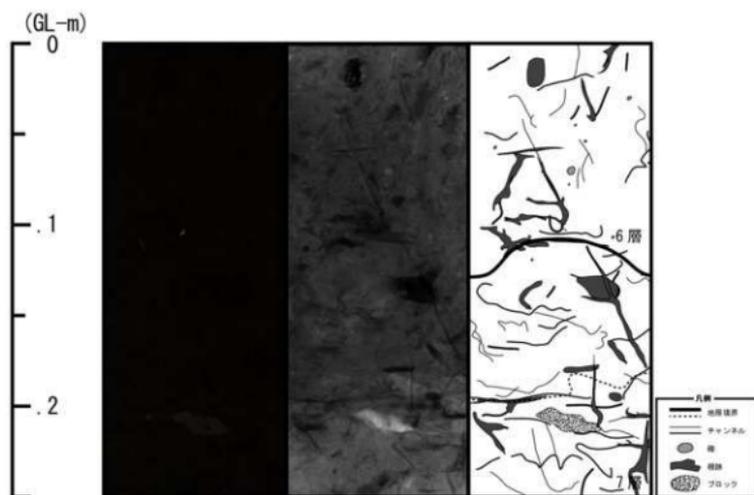
(2) 南壁

① 9層(試料No南壁 1)

泥炭(ピート)。上位の8層から伸びる、根跡の可能性が高く上下方向に伸びる直線的なチャンネルのほか、根跡と考えられるやや太く直線的なチャンネルが認められる。ベッドは強度に発達するものが部分的にあるが、ほとんどの部分で強度に発達した中～粗粒の小粒状ベッドが分布する。

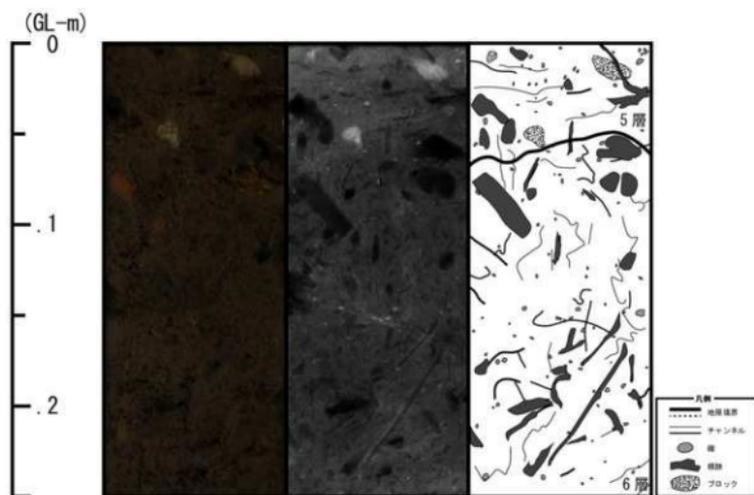
② 8層(試料No南壁 1)

腐植質粘土で、下部3cmほどに明灰色の薄層が3層確認できる。根跡の可能性が高く上下方向に伸びる、直線的なチャンネルのほか、水平方向に伸びるチャンネルも認められる。このほか根跡と考えられるやや太く直線的なチャンネルと地下茎と考えられるチェンバーが認められる。ベッドは、下部ではチャンネルによって区画された細粒の角塊状を成す。上部では擾乱に伴い、中～強度に発達した中～粗粒の小粒状ベッドが顕著になる。



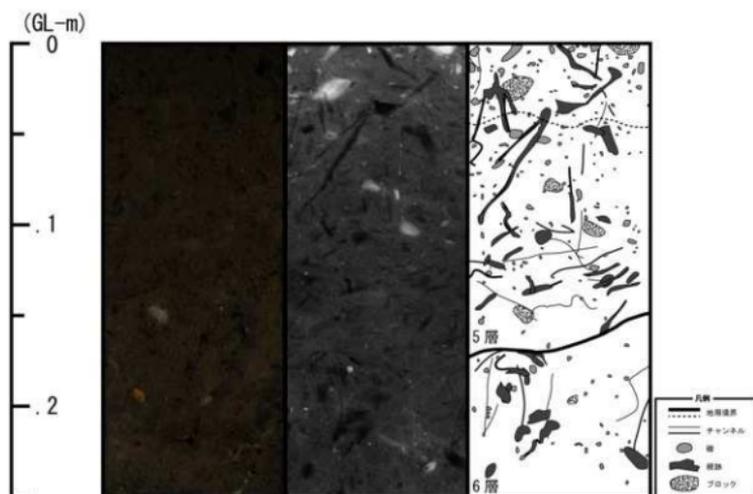
第 89 図 軟X線写真観察結果 (南壁 2)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



第 90 図 軟X線写真観察結果 (南壁 3)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



第91図 軟X線写真観察結果 (南壁4)
(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)

③ 7層 (試料Na南壁1,2)

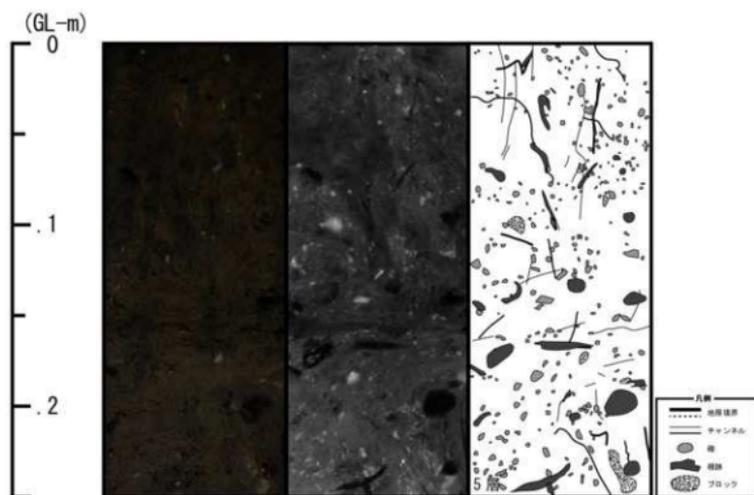
泥炭で、下部では腐植質粘土(8層)の数cm大のブロックを含む。チャンネルが多く分布し、ベッドの多くはチャンネルによって区画された中粒の角塊状を成す。中部の色調は、全体に褐色を帯びる。腐植質粘土(8層)ブロックは下部に比べ小型になり、数も減る。また、チャンネルの分布数は下部に比べ減る。ベッドは、チャンネルによって区画された極細～細粒の角塊状ベッドに加え、中～強度に発達した細～粗粒の小粒状ベッドが認められる。上部では、チェンバーが顕著である。また、チャンネルの分布数が更に減る。特に上下方向に伸びるチャンネルが少なくなり、水平方向に伸びるものが目立つようになる。ただし、やや太くチェンバーを伴う直線的なチャンネルには、上下方向に伸びるものが目立つ。ベッドは強度に発達した極細粒の小粒状ベッドが集合して、弱～中度に発達した粗粒の小粒状ベッドを成している。

④ 6層 (試料Na南壁2,3,4)

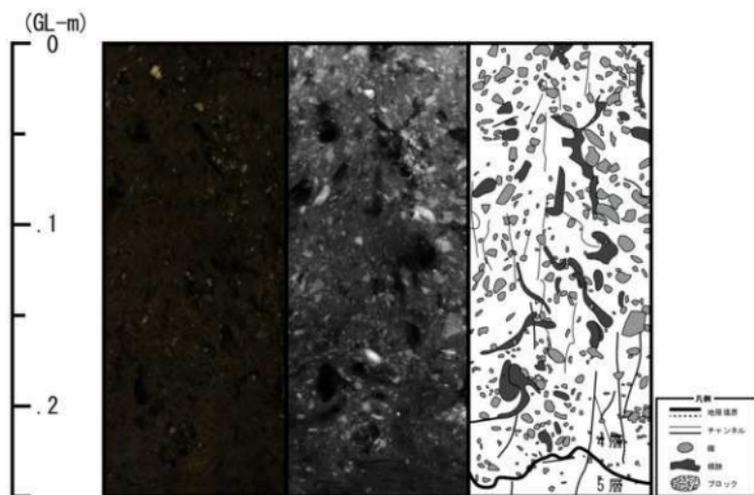
礫混じり泥炭。単独で分布するチェンバーが特徴的で、やや太く上下方向に伸びる直線的なチャンネルが目立つ。ただし、やや太いチャンネルには1～2cmほどの短いものが多い。また、細いチャンネルでは上下方向に伸び直線的なものはほとんど観察されず、水平方向に伸びるものや、ジグザグのものが多い。ベッドは中～強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。これらの幾つかが固まって、二次ベッドを成すものもある。二次ベッドの多くは中度に発達した中粒の小粒状ベッドである。

⑤ 5層 (試料Na南壁3,4,5,6)

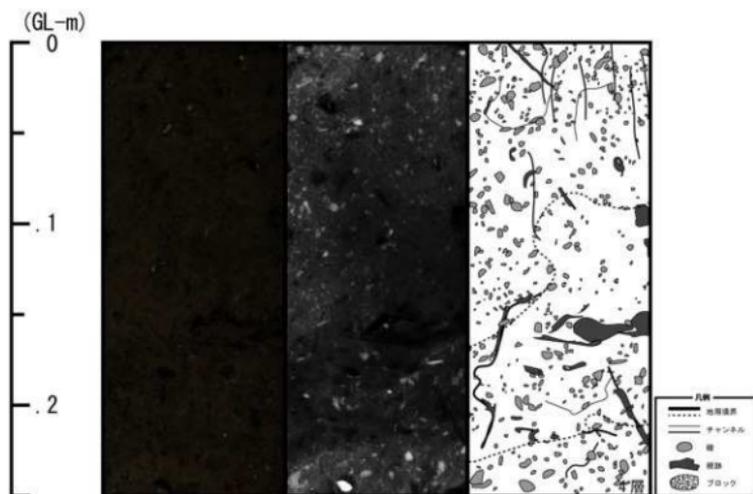
礫混じり泥炭。下部10cmほどの色調は褐色を帯びるが、構造的にはそれより上位と変わらない。



第92図 軟X線写真観察結果 (南壁5)
(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



第93図 軟X線写真観察結果 (南壁6)
(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



第94図 軟X線写真観察結果 (南壁7)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)

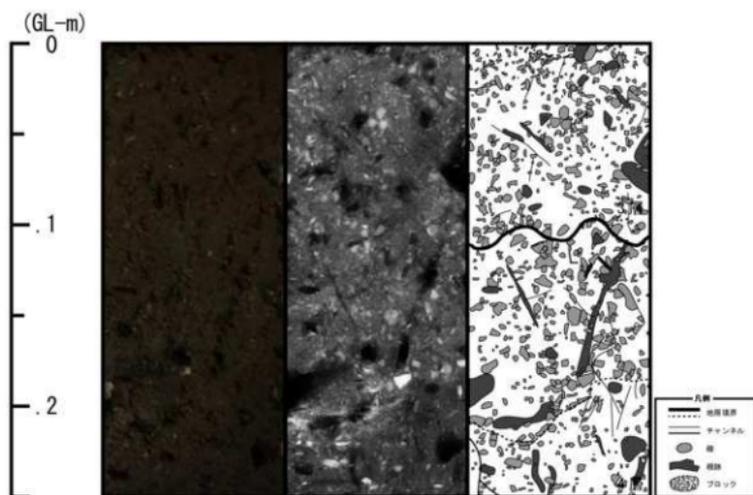
全体に長径1～2cm以下の灰色粘土のブロックを多く含む。ブロック径は下位ほど大きく、上位では小さくなる。チェンバーが特徴的であるが、ほとんどが単独で分布するバグである。チャンネルではやや太いものが目立つ。上下方向に伸びる直線的なものほか、水平方向に伸びるものも多い。細いチャンネルでは上下方向に伸び直線的なものほか、水平方向に伸びるものや、ジグザグ状のものも多い。ベッドは強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。局所的に二次ベッドが認められ、多くは中度に発達した粗粒の小粒状ベッドである。

⑥ 3層 (試料№南壁 6.7.8)

礫質腐植質粘土。5層に比べ色調が暗くなる。有機物の分解が進み、粘土分が増えているように観察できる。礫は長径数～15mm程度の角礫主体。中部では上下に比べ礫が少ない。また、有機物の分解が余り進んでいない部分が(中部の)下位に認められる。チェンバーが特徴的で、ほとんどが単独で分布する。チャンネルではやや太いものが目立つ。上下方向に伸びる直線的なものほか、水平方向に伸びるものも多い。細いチャンネルでは上下方向に伸び直線的なものが多いが、水平方向に伸びるものや、ジグザグのものも認められる。礫、粗粒砂の含有量が多く、ベッドとの区別が付けにくい。強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。局所的に二次ベッドも認められ、多くは中～強度に発達した粗粒の小粒状ベッドである。

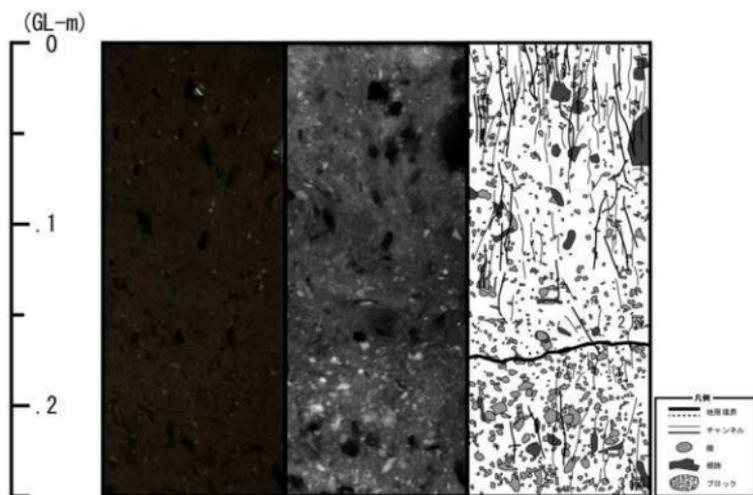
⑦ 3層 (試料№南壁 8.9.10)

腐植質粘土質礫。礫は長径数mmの角礫が主体。チェンバーが認められるほか、楕円状のバグが多く認められる。チャンネルではやや太いものはほとんど認められず、細いものが主体になる。特に2層との境界付近で上下方向に伸びる直線的なものが多い。礫、粗粒砂の含有量が多く、ベッ



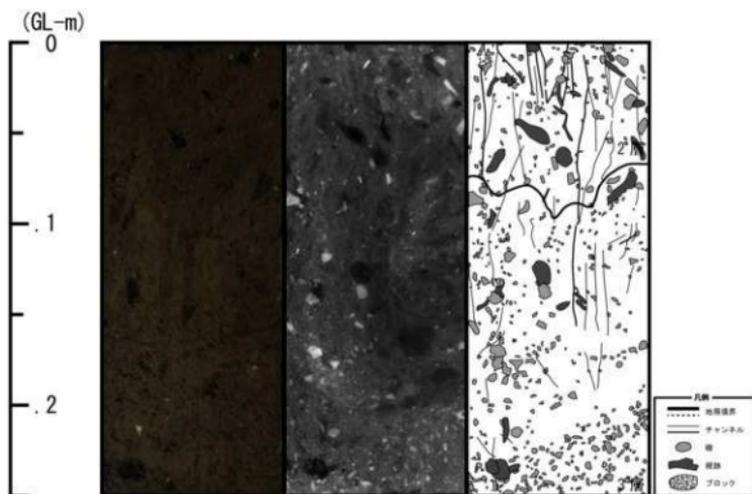
第95図 軟X線写真観察結果 (南壁8)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



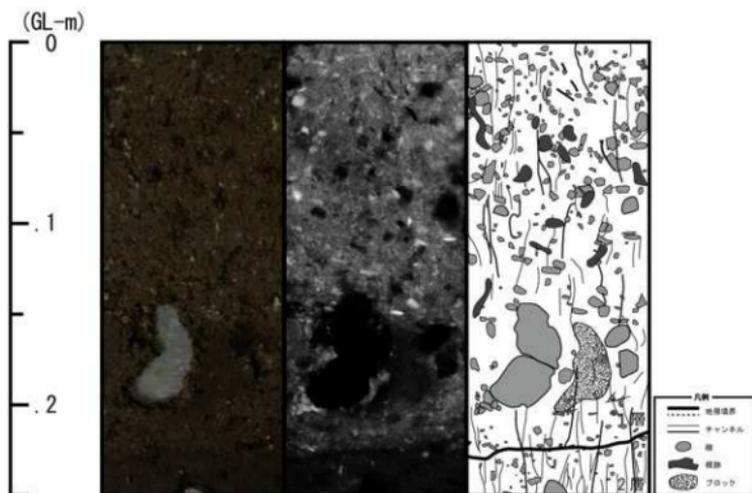
第96図 軟X線写真観察結果 (南壁9)

(左:実視 中:軟X線 右:解析結果)



第97図 軟X線写真観察結果 (南壁10)

(左：実視 中：軟X線 右：解析結果)



第98図 軟X線写真観察結果 (南壁11)

(左：実視 中：軟X線 右：解析結果)

ドとの区別が付けにくい、強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。二次ベッドも多く認められ、多くは中～強度に発達した中～粗粒の小粒状ベッドを成している。

⑧ 2層 (試料No南壁 9,10,11)

礫混腐植質粘土。礫は長径数～10mmの角礫が主体。チェンバーが認められるほか、楕円状のバグが多く認められる。チャンネルは上下方向に伸びる、細く直線的なものが多く認められる。礫、粗粒砂の含有量が多く、ベッドとの区別が付けにくい、強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。二次ベッドも多く認められ、多くは中～強度に発達した中～粗粒の小粒状ベッドを成している。

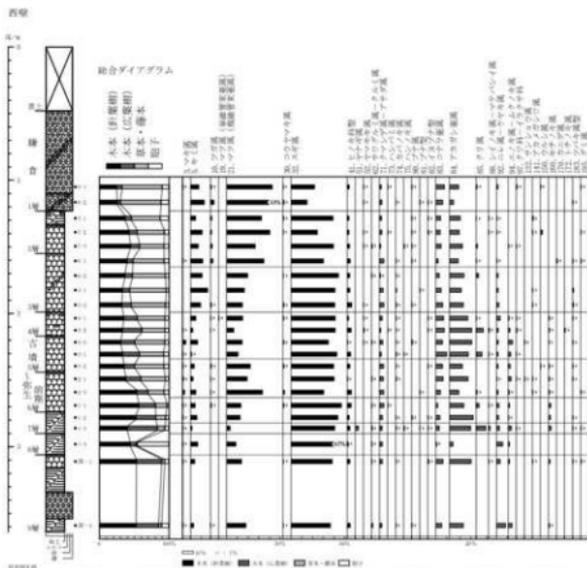
⑨ 1層 (試料No南壁 11)

腐植質粘土質砂礫で、マトリックスが腐植質粘土からなる。礫は最大30mmほどで、長径数～15mmの角礫が主体。腐植質粘土のブロックも認められる。また、礫の抜けた跡がチェンバー、バグとして認められる。チャンネルは上下方向に伸びる、細く直線的なものが多く認められる。礫、粗粒砂の含有量が多く、ベッドとの区別が付けにくい、強度に発達した極細～細粒の小粒状ベッドが全体に認められる。部分的に二次ベッドも認められ、多くは中～強度に発達した中～粗粒の小

表 13 微化石調査結果

試料No.	種別	植物体	植物体	植物体	植物体	植物体
8-1	○	○	○	○	△	△
8-2	○	○	○	○	△	△
7-1	○	○	○	○	△	△
7-2	○	○	○	○	△	△
7-3	○	○	○	○	△	△
6-1	○	△	○	○	△	△
6-2	○	△	○	○	△	△
5-1	○	△	○	○	△	△
5-2	○	△	○	○	△	△
4-1	○	△	○	○	△	△
4-2	○	△	○	○	△	△
4-3	○	○	○	○	△	△
3-1	○	○	○	○	△	△
3-2	○	○	○	○	△	△
2-1	○	○	○	○	△	△
2-2	○	○	○	○	△	△
1-1	○	○	○	○	△	△
1-2	○	○	○	○	△	△
1-3	○	○	○	○	△	△
1-4	○	○	○	○	△	△
第1層	○	○	○	○	△	△
第2層	○	△	○	○	△	△

凡例 ○：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる △：非常に少ない
 △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない



第 99 図 花粉ダイヤ

粒状ベッドを成している。

微化石概査結果

微化石概査結果を表13に示す。

いずれの試料でも花粉化石の検出量は多かったが、その他の微化石については、試料による偏りが認められた。微粒炭、植物片は、珪藻は多く検出される試料が多く、植物珪酸体、火山ガラスの検出量は、多く検出される試料が少なかった。

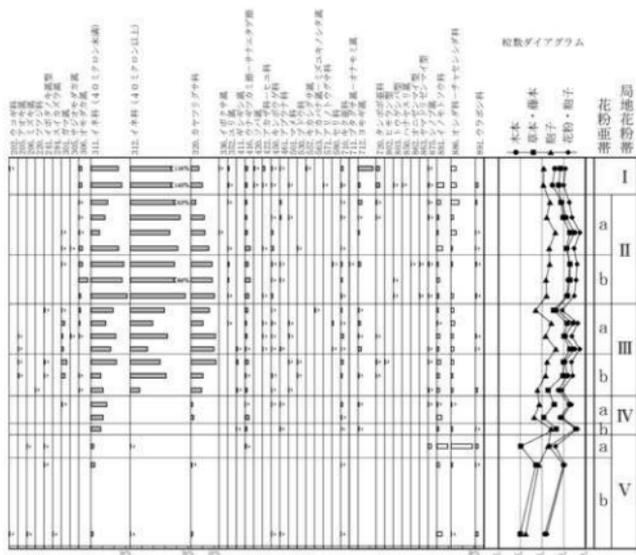
花粉分析結果

分析結果を花粉ダイアグラム(第99図)と花粉化石組成表(表14)に示す。花粉ダイアグラムでは、分類群ごとの百分率(百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。)を、スペクトルで表している(木本(針葉樹)は黒、木本(広葉樹)は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した。)[総合ダイアグラム]では「木本(針葉樹)」、「木本(広葉樹)」、「草本・藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示した。[粒数ダイアグラム]では「木本」、「草本・藤本」、「胞子」「花粉・胞子(全ての合計)」ごとに含有量(湿潤試料1g中の粒数)の変化を示している。

植物珪酸体分析

植物珪酸体分析の結果を、植物珪酸体ダイアグラム(第100図)との植物珪酸体化石組成表(表15)に示す。植物珪酸体ダイアグラムでは、検出量を1gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。

6層下部より下位では、イネが全く検出できなかった。一方、6層中部より上位ではイネが連続して検出された。特に、幾つかの試料では、稲作の指標とされる5000粒/gを上回る量で、イネ



グラム(6区西壁)

表 14 花粉化石

試料番号		試-1	試-2	試-3	試-4	試-5	試-6	試-7	試-8	試-9											
1 Polypodiaceae	ワコ属	1	0.4%					1	0.05%												
2 Alnus	ナナカシ属	17	7.8%	27	12.7%	11	4.8%	28	10.9%	17	7.1%	20	11.2%	23	10.7%	32	16.0%	20	9.2%		
3 Fagus	クヌシ属	2	0.9%	1	0.2%														2	0.9%	
18 Pinus (Pinus/Quercus)	マツ属 (雑種雑交種属)																			2	0.9%
21 Pinus (Distyliopsis)	マツ属 (雑種雑交種属)	88	42.0%	113	53.1%	79	35.8%	105	40.4%	84	25.8%	77	24.8%	42	19.4%	32	16.1%	32	14.9%		
22 Quercus	クヌシ属	5	0.6%	2	0.2%	2	0.5%	1	0.4%											2	0.9%
23 Corylioidae	コナラ属	40	22.0%	32	15.0%	44	20.2%	64	24.6%	65	26.0%	87	30.2%	93	44.4%	82	41.0%	88	40.7%		
24 Cupressaceae type	スギ属	4	1.9%	4	1.7%	4	1.7%	4	1.5%	5	2.1%	6	2.7%	5	2.7%	5	2.5%	5	2.3%		
51 Salix	ヤナギ属																				
52 Myrica	ヤナギ科	1	0.4%	1	0.3%					1	0.4%									1	0.3%
62 Pinus/quercus-Japanica	マツワコ属																				
71 Carpinus-Quercus	クヌシ属	4	1.9%	5	2.2%	5	2.1%	6	2.2%	3	1.2%	9	4.1%	2	0.9%	7	3.5%	9	4.2%		
72 Cordia	クヌシ科	1	0.4%	1	0.3%																
73 Betula	カシノ木属																				
75 Alnus	ナナカシ属																				
80 Fagus	クヌシ属	1	0.4%																		
81 Fagus ovata type	クヌシ属																				
82 Fagus americana type	クヌシ属																				
83 Quercus	クヌシ属	19	8.1%	14	6.6%	11	4.8%	11	4.2%	12	5.0%	5	2.2%	7	3.2%	10	5.0%	14	6.5%		
84 Cyclobalanopsis	クヌシ科	18	8.4%	14	6.6%	24	10.9%	24	9.2%	29	12.1%	39	14.9%	29	14.0%	22	11.0%	38	18.0%		
85 Castanea	クヌシ属	2	0.9%																		
86 Castanopsis-Pistacia	クヌシ科																				
92 Ulmus-Zelkova	ユリカシ	3	1.2%																		
93 Carya-Abutilon	ユリカシ属																				
94 Malus-Prunella	ユリカシ属	2	0.9%																		
95 Malus-Urticaceae	クヌシ科																				
144 Malus	クヌシ科																				
150 Rhus	クヌシ科	1	0.4%																	1	0.3%
152 Ilex	クヌシ科																				
157 Acer	クヌシ科																				
172 Anemone	クヌシ科																				
193 Carex type	クヌシ科	1	0.4%																	2	0.9%
194 Eriophorum	クヌシ科	1	0.4%																		
201 Anemone	クヌシ科																				
205 Anemone	クヌシ科	1	0.4%																		
206 Comae	クヌシ科																				
220 Eriophorum	クヌシ科																				
241 Lycopodium type	クヌシ科																				
243 Lycopodium	クヌシ科																				
301 Typha	クヌシ科																				
305 Alnus	クヌシ科																				
308 Sagittaria	クヌシ科																				
311 Gramineae (All)	クヌシ科	6	2.7%	6	2.8%	1	0.4%	1	0.4%	2	0.9%	1	0.4%	1	0.4%	1	0.4%	1	0.4%	1	0.4%
312 Gramineae (All)	クヌシ科	259	118.1%	394	182.7%	330	148.0%	412	181.6%	382	164.5%	39	17.4%	62	28.2%	119	58.5%	100	47.7%		
320 Gramineae	クヌシ科	10	4.7%	21	9.9%	10	4.5%	20	9.2%	29	12.1%	38	16.8%	37	16.8%	48	23.4%	48	23.4%		
326 Anemone	クヌシ科																				
332 Lamiaceae	クヌシ科	3	1.2%	2	0.9%	1	0.4%														
411 Ranunc.	クヌシ科																				
418 Eriophorum-Pistacia	クヌシ科	5	2.2%	4	1.9%	4	1.7%	4	1.5%	5	2.1%	10	4.6%	9	4.3%	9	4.3%	7	3.5%		
420 Fagopyrum	クヌシ科	2	0.9%	1	0.3%																
432 Compositae-Hemeraea	クヌシ科	3	1.2%	1	0.3%																
439 Ranunculidae	クヌシ科	2	0.9%	1	0.3%																
441 Compositae	クヌシ科	1	0.4%																		
501 Leguminosae	クヌシ科																				
520 Malus	クヌシ科																				
531 Betula	クヌシ科	2	0.9%																		
542 Euphorbia-Lobelia	クヌシ科																				
571 Heligonidae	クヌシ科																				
580 Umbelliferae	クヌシ科																				
710 Carpinidae	クヌシ科	5	2.2%	2	0.9%	1	0.4%	2	0.9%												
711 Anemone-Ranuncul.	クヌシ科																				
712 Anemone	クヌシ科	29	13.0%	4	1.9%	8	3.7%	1	0.4%	3	1.3%	3	1.3%	3	1.3%	3	1.3%	3	1.3%	3	1.3%
780 Cucurbitaceae	クヌシ科	7	3.1%	7	3.2%	2	0.9%	1	0.4%												
802 Ursula'sia variabilis type	クヌシ科																				
820 Ursula'sia variabilis type	クヌシ科																				
830 Ursula'sia variabilis type	クヌシ科																				
862 Ursula'sia variabilis type	クヌシ科																				
864 Ursula'sia variabilis type	クヌシ科																				
875 Quercus	クヌシ科	1	0.4%	2	0.9%	1	0.4%	2	0.9%												
881 Phloxidae	クヌシ科	10	4.5%	10	4.7%	7	3.2%	8	3.6%	3	1.3%	10	4.6%	5	2.3%	4	1.9%	5	2.3%		
886 Anem. Anem.	クヌシ科	17	7.8%	17	7.8%	8	3.6%	11	4.8%	2	0.9%	2	0.9%	2	0.9%	2	0.9%	2	0.9%	2	0.9%
891 Potamogetonae	クヌシ科	5	2.2%	3	1.2%																
899 MOLLUSCA-TYPI-SPINIF.	クヌシ科	16	7.2%	16	7.2%	4	1.7%	5	1.9%	1	0.4%	1	0.4%	2	0.9%	2	0.9%	2	0.9%	2	0.9%
990 MOLLUSCA-TYPI-SPINIF.	クヌシ科	46	14.0%	39	12.5%	34	14.1%	15	5.0%	12	5.0%	11	5.0%	8	4.0%	5	2.5%	9	4.5%		
本花材計		222	22.2%	153	20.1%	229	40.9%	280	54.1%	240	37.1%	225	42.0%	218	42.4%	220	42.4%	223	42.4%	223	42.4%
草本・藤本植物群		395	17.6%	412	18.5%	319	14.2%	394	18.1%	443	20.3%	398	18.4%	271	12.1%	342	15.1%	322	14.5%	322	14.5%
樹木植物群		89	13.0%	69	11.8%	89	12.8%	93	12.9%	91	12.9%	91	12.9%	91	12.9%	91	12.9%	91	12.9%	91	12.9%
雑草		61	2.8%	37	1.7%	62	2.8%	45	1.7%	49	1.8%	49	1.8%	41	1.8%	41	1.8%	41	1.8%	41	1.8%
植物群分類		60	2.8%	37	1.7%	62	2.8%	45	1.7%	49	1.8%	49	1.8%	41	1.8%	41	1.8%	41	1.8%	41	1.8%

由来の植物珪酸体が検出できた。

このほかヨシ属やススキ属型、ウシクサ族A型が多くの試料で検出され、ブナ科(シノキ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)などの樹木由来の珪酸体も多く検出できた。一方、ササ類由来の植物珪酸体は、ほとんど検出できなかった。

花粉分帯

花粉分析結果を基に、花粉分帯(局地花粉帯の設定)を行った。以下に、下位から上位に向かい各花粉帯の記載を行う。

(1) V帯(試料:深-4、1、1-4)

木本花粉の割合が高く、草本・藤本花粉は数%と低率である。木本花粉ではスギ属が高率で、マツ属(複雑維管束亜属)、アカガシ亜属がこれに次ぐ。この外、モミ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属が低率で検出される。上部(試料:深-1、4)では胞子の割合が高くなるほか、木本花粉でスギ属が特に高率を示し、マツ属(複雑維管束亜属)、アカガシ亜属の出現率が相対的に

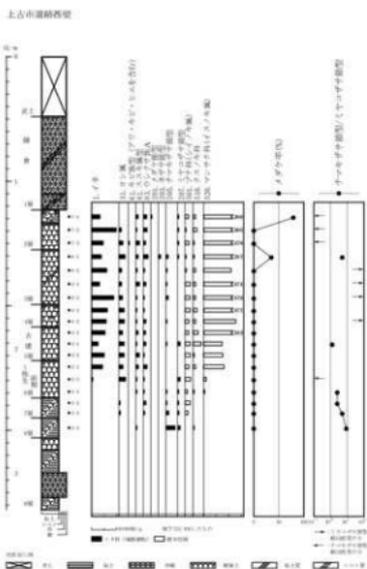
(4) II帯 (試料 5-2 ~ 7-1)

木本花粉と草本・藤本花粉の割合がきつ抗する。下部 (試料: 5-2 ~ 6-2) では草本・藤本花粉が僅かに上回る試料もあるが、上部 (試料: 6-1 ~ 7-1) では木本花粉の割合が高くなる。木本花粉では、スギ属が高率を示すが、上部でやや低率になる。同様の傾向はモミ属やアカガシ亜属でも認められる。一方、マツ属 (複維管束亜属) は増加傾向を示し、上部ではスギ属を上回る割合を示す試料もある。草本花粉ではイネ科 (40ミクロン以上) の出現率が特に高く、イネ科 (40ミクロン未満)、カヤツリグサ科も高率を示す。ただし、イネ科 (40ミクロン未満)、カヤツリグサ科の出現率は上部でやや低下する。また、下部ではオモダカ属が、低率であるが特徴的に検出される。

以上の特徴から下部 (試料: 5-2 ~ 6-2) をb亜帯、上部 (試料: 6-1 ~ 7-1) をa亜帯とした。

(5) I帯 (試料 8-2、8-1)

草本・藤本花粉の割合が急増し、木本花粉をしのぐようになる。木本花粉では、スギ属が急減し、マツ属 (複維管束亜属) がやや増加する。この外、モミ属、コナラ亜属が微増し、アカガシ亜属が微減する。草本花粉ではイネ科 (40ミクロン以上) が極めて高い出現率を示すほか、イネ科 (40ミクロン未満)、カヤツリグサ科も高率を示す。また、栽培種のソバ属がごく低率で検出される。



第100図 植物珪酸体ダイアグラム (6区西壁)

表15植物珪酸体化石組成表

試料名	試料1	試料2	試料3	試料4	試料5	試料6	試料7	試料8	試料9	試料10	試料11	試料12	試料13	試料14	試料15	試料16	試料17	試料18	試料19	試料20	
イネ科	24	16	45	26	61	25	16	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
イネ科(40ミクロン未満)	830	732	722	728	738	830	722	722	722	722	722	722	722	722	722	722	722	722	722	722	722
イネ科(40ミクロン以上)	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
カヤツリグサ科	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21
オモダカ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
スギ属	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
松属	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
マツ属(複維管束亜属)	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
モミ属	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
コナラ亜属	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
アカガシ亜属	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
雑草花粉	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
ソバ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

上段 植物標本
中段 植物標本(複製) ×100倍鏡
下段 植物標本(複製) ×100倍鏡

従来の分析結果との比較

島根県西部では、東部に比べ花粉分析の実施地点が少なく、実施されていたとしても断続的であった。特に今回調査の弥生時代から中世にかけては、分析事例の少ない期間であった。

浜田市内下府川下流に位置する川向遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての時期と中世以降の2時期の花粉分析が実施されている（川崎地質（株）、2000）。ここではスギ属が高率で出現し、下部（SK-V帯）でアカガシ亜属を、上部（SK-IV帯）でマツ属（複雑管束亜属）、アカガシ亜属を伴っている。分析試料が少ないものの、今回の分析結果と類似点が多い。また、分析数量の多い今回の分析結果（花粉化石群 別途業務（文化財調査コンサルタント株式会社、2018）で実施した花粉分析結果（花粉ダイアグラム）を、第99図に示す。ここでは、調査地の堆積環境として、V、IV帯は沼沢湿地環境、Ⅲ、Ⅱ帯は沼沢湿地あるいは水田環境、Ⅰ帯は水田環境としていた。

前述のように、今回実施した植物珪酸体分析でイネが検出される層準は、局地花粉帯のⅢ帯b亜帯下部（試料No 2-3）に相当する。Ⅲ帯b亜帯下部（試料No 2-3）ではイネの検出密度は500粒/gと少ないが、Ⅲ帯b亜帯中・上部（試料No 2-1、3-2）では4400、5100粒/gと稲作の指標とされる5000粒/g前後の値を示している。このことから、Ⅲ帯b亜帯層準（6層、5層下部）が作土であった可能性が高い。

Ⅲ帯a亜帯（試料No 3-1～4-1）では、最下部（試料No 3-1）でイネの検出密度が2600粒/gとやや低い値を示すが、その他の試料では5000粒/gを超える検出密度を示し、稲作の指標とされる5000粒/gを超える。このことから、Ⅲ帯a亜帯層準（5層中・上部、4層）も、水田作土であった可能性が高い。

Ⅱ帯b亜帯（試料No 5-2～6-2）、Ⅱ帯a亜帯（試料No 6-1～7-1）では、最下位の試料No 5-2でイネの検出密度が8900粒/g、上位の試料No 7-2で9900粒/gと高い値を示す。その他、やや低い検出密度を示す試料もあるが、Ⅱ帯層準（3層、2層）全体が水田作土であった可能性が高い。集）の一部を切り取ったと考えて矛盾はない結果であった。

作土層について

花粉分析結果ではV、IV帯においてイネ科（40ミクロン以上）が検出されず、イネ科、カヤツリグサ科を除く水田雑草、イネを除く栽培植物由来の花粉も検出されなかった。植物珪酸体分析でもイネは検出されないことから、V、IV帯で稲作を含む耕作が行われた可能性は極めて低い。

花粉分析のⅢ帯（6～4層）では、イネ科（40ミクロン以上）の出現率が10～30%を示し、サジオモダカ属、オモダカ属やセリ科などの水田雑草由来の花粉が検出された。植物珪酸体分析ではⅢ帯b亜帯最下部の試料No 2-3、a亜帯最下部の試料No 3-1では、イネの検出密度はやや少ないが、その他の試料では稲作の指標とされる5000粒/gをほぼ超えていることから、Ⅲ帯層準（6～4層）で水田耕作が行われた可能性が高い。

花粉分析のⅡ帯（3、2層）でも、イネ科（40ミクロン以上）は30%以上の出現率を示し、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属やセリ科などの水田雑草由来の花粉が検出された。植物珪酸体分析では、やや低い検出密度を示す試料もあるが、試料No 5-2でイネが8900粒/g、試料No 7-2で9900粒/gと高い検出密度を示すなど、Ⅱ帯層準（3層、2層）全体で水田耕作が行われてい

た可能性が高い。

花粉分析のI帯(1層下部)では、イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率が100%を超え、栽培植物のソバ属も検出された。さらに、水田雑草由来のオモダカ属、イボクサ属、キカシグサ属も検出された。植物珪酸体分析を行っていないものの、I帯層準(1層下部)では水田耕作に加え、ソバの栽培も行われていたと考えられる。

古植生について

花粉分析結果を基に、調査地周辺の古植生について考察する。また、植生変遷を明確にするために、過去から現在へ向かい、局地花粉帯に沿って考察を行う。

(1) V帯期(弥生時代前期以前)

9層、8層が対応する。上位の7層上面が弥生時代前期の遺構面であることから、V帯は弥生時代前期以前の古植生を反映すると考えられる。

スギ属が高率で検出され、極相林(照葉樹林)要素のアカガシ亜属に加え遷移植生(二次林)要素のマツ属(複雑管束亜属)やコナラ亜属、クマシデ属・アサダ属、河畔林要素のニレ属・ケヤキ属やエノキ属・ムクノキ属、サワグルミ属・クルミ属が検出される。高率で検出されるスギ属(スギ)は、自然環境下では谷筋や水の流れのある湿地など水分の豊富な場所に生育する。調査地が谷の出口に位置することから、調査地近辺の谷筋や平地の湿潤な場所に林を成していたものと考えられる。花粉化石の検出されるアカガシ亜属やコナラ亜属は、背後の丘陵上に生育し、モミなどの温帯針葉樹を混濁していたものと考えられる。また、植物珪酸体の検出されたクスノキ科も丘陵上に分布していたと考えられる。一方、マツ属(複雑管束亜属)には海岸植生として代表的なクロマツ、山地の二次林植生として代表的なアカマツを含む。多くは背後の丘陵に生育したアカマツに由来すると考えられるが、調査地が海岸に比較的近いことから、クロマツ海岸林からの影響もあったものと考えられる。また、ケヤキやエノキは三隅川の自然堤防上に分布し、オニグルミは調査地近辺の湿地周辺に生育していたものと考えられる。一方、調査地(湿地内)には、ヨシなどのイネ科草本が生育していたと考えられるが、出現率が低く、植物珪酸体も検出されていないことから、水域を覆う面積はさほど多くなかったものと考えられる。

上位の8層(a亜帯)ではスギ属が増加するが、粒数ダイアグラムでは木本花粉全体が減少している。丘陵上で森林を成していたアカガシ亜属、コナラ亜属、アカマツが何らかの原因で減少し、相対的にスギが増えたものと考えられる。

(2) IV帯期(弥生時代前期頃)

7層と6層下部が対応する。7層上面が弥生時代前期の遺構面であることから、IV帯は弥生時代前期頃の古植生を反映すると考えられる。

V帯と花粉化石群集に大きな変化は認められず、遺跡周辺の植生に大きな変化は認められなかった。植物珪酸体分析では、シノキ属が連続して検出されたほか、クスノキ科、イスノキ属も検出されており、丘陵上の照葉樹林の多様性が伺える。また、下部のb亜帯ではクリ属花粉が特徴的に検出される。クリ属の花粉は散布距離が短いことから、調査地近辺で生育していたと考えられる。

草本・藤本花粉化石では、イネ科(40ミクロン未満)が増加傾向を示し、カヤツリグサ科やガマ属も検出されるなど、水域から湿地環境への変化が推定される。

(3) III帯期 (古墳時代頃)

6層中部～4層が対応する。5層の上面、下面が古墳時代の遺構面であることから、III帯は古墳時代頃の高木を反映すると考えられる。

最下部で、マツ属(複雑管束亜属)がIV帯に比べ急増するが、その後減少傾向を示す。一方スギ属、アカガシ亜属は最下部でIV帯に比べ急減し、その後増加傾向を示す。植物珪酸体でも、アカガシ亜属花粉の増加に同調してシイノキ属、クスノキ科、イスノキ属が増加傾向を示している。さらに、5層からはイスノキの根張りやシイノキ属、ハコヤナギ(ヤマナラシ)属、スギ、モミ属の倒木が検出され、遺跡内や周囲の丘陵上に分布していたことが分かる。また、6層では極粗粒砂～細礫を含むようになり、谷上部で何らかの環境変化が認められる。これらのことにより、一時的にアカマツ林が広がるが、その後極相林であるスギ林、カシ類やシイノキ類、クスノキ類、イスノキ類を主要素とする照葉樹林に遷移していったものと考えられる。

草本・藤本花粉化石の出現率もIV帯に比べ急増し、その後増加傾向を示す。イネ科(40ミクロ以上)の出現率が高く、調査地内の湿地化が進むとともに、近辺で稲作が行われ出した可能性が指摘できる。前述のように植物珪酸体分析の検出密度も高く、調査地が水田であった可能性が高い。

(4) II帯期 (古墳時代～鎌倉時代)

3層、2層が対応する。上位の1層が鎌倉時代の遺物を含むことから、古墳時代から鎌倉時代にかけての高木を反映すると考えられる。

この期間を通じて、マツ属(複雑管束亜属)が増加傾向を示し、スギ属、アカガシ亜属が減少傾向を示す。背後の丘陵上に分布していたカンシ林(照葉樹林)や、調査地近辺の谷筋や平地の湿潤な場所に分布していたスギ林が伐採され、伐採地でアカマツ林が拡大したのと考えられる。ただし、植物珪酸体分析ではシイノキ属、クスノキ科、イスノキ属の減少は認められない。調査地近辺に限れば、照葉樹林の伐採は進んでいなかったようである。

草本・藤本花粉化石の出現率は下部のb亜帯で高く、上部のa亜帯でやや低率になる。b亜帯ではイネ科(40ミクロ未満)、カヤツリグサ科に加え、オモダカ属も特徴的に検出される。一方a亜帯に入ると、これらが一斉に減少する。前述のように調査地は水田であったと考えられることから、水田の管理が進み、雑草駆除が効果的に行われていた可能性が示唆される。

(5) I帯期 (鎌倉時代)

1層が対応する。1層は鎌倉時代の遺物を含むことから、鎌倉時代の高木を反映していると考えられる。

II帯から、マツ属(複雑管束亜属)の増加傾向が続く。スギ属の減少が顕著であるが、アカガシ亜属の減少はさほど顕著ではない。また、II帯b亜帯からI帯にかけて、マツ属(複雑管束亜属)の出現率が増減を繰り返している。有翼型花粉のモミ属、ツガ属の増減がマツ属(複雑管束亜属)に同調し、スギ属、ヒノキ科や、広葉樹花粉が逆の増減を繰り返すことから、この増減は、植生変化に伴うのではなく、堆積環境の変化に起因する可能性が高い。草本・藤本花粉の出現率は、II帯に比べ20%程度増加する。このことは、イネ科(40ミクロ以上)が100%を超える出現率を示すことに起因する。前述のように、調査地点に水田が広がり、裏作などでソバが栽培されていたのと考えられる。

まとめ

上古市遺跡内及び周辺地域での古植生変遷を推定する目的で、花粉分析を実施した。この結果、以下の事柄が明らかになった。

- 1) 花粉分析の結果を基に、I～V帯の局地花粉帯を設定した。さらに、II～IV帯をそれぞれa、b亜帯に細分した。
- 2) 分析結果を同時期の近隣の遺跡（浜田市内下府川下流に位置する川向遺跡）で実施された花粉分析結果と比較した。両分析結果には類似点が多く、分析数量の少ない川向遺跡での分析結果が、分析数量の多い今回の分析結果（花粉化石群集）の一部時期を示していると考えて矛盾はない結果であった。
- 3) 弥生時代前期以前から鎌倉時代にかけての、遺跡内及び周辺地域での古植生を推定した。
 - ① この期間を通じた森林植生として、スギが調査地近辺の谷筋や平地の湿潤な場所に林を成し、背後の丘陵上に、モミなどの温帯針葉樹を混生する照葉樹林やコナラ、アカマツ林を主要素とする二次林が分布していた。一方、クロマツ海岸林も海岸沿いに分布していた可能性がある。また、三隅川の自然堤防上にはケヤキやエノキからなる河畔林が分布し、調査地近辺の湿地周辺にはクルミ類も生育したと考えられる。
 - ② これらの林が弥生時代前期以前から鎌倉時代にかけて、時には伐採により縮小と跡地の二次林化、あるいは極相林へと遷移することによって、花粉化石群集の変遷に結びついたと考えられる。
 - ③ 調査地を覆った湿地の植生は、初期には水域の周囲にヨシなどが茂る程度であったものが、カヤツリグサ科やガマ属の湿性植物を伴うようになる。また、古墳時代までには調査地が水田になっていたと考えられる。

引用文献

- 川崎地質株式会社 2000 川向遺跡発掘調査における自然科学分析、川向遺跡 多陀寺川荒廃砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、40-48、島根県浜田土木建築事務所・浜田市教育委員会、島根県。
- 中村 純 1974 イネ科花粉について、特にイネを中心として、第四紀研究、13,187-197。
- 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9、15-29。
- 渡辺正巳 2010 花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法、174-177、ニュー・サイエンス社。
- 渡辺正巳・古野 毅 2019 上古市遺跡出土木質遺物の樹種同定。

第2節 上古市遺跡出土木質遺物の樹種同定

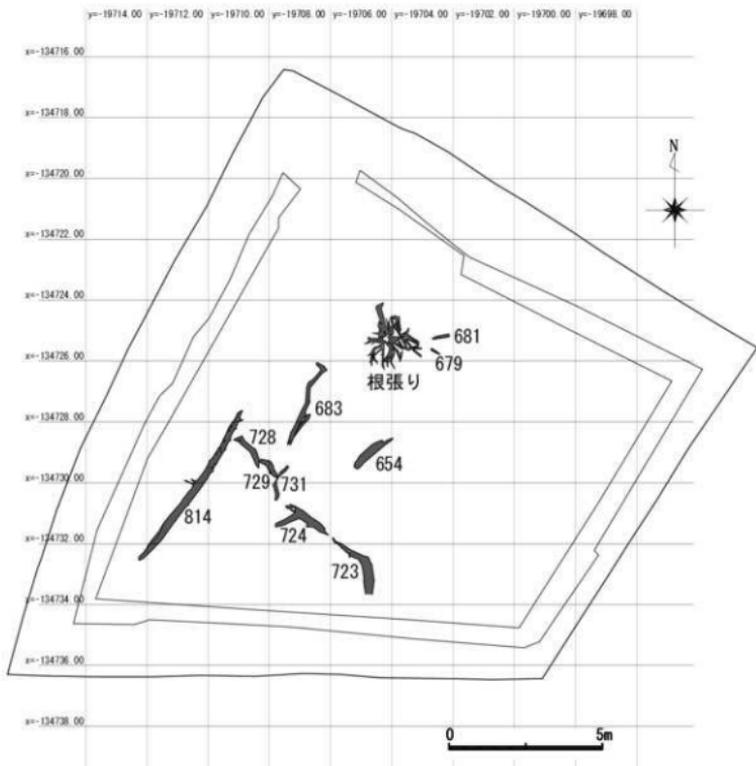
渡辺正巳（文化財調査コンサルタント(株)）・古野 毅（鳥根大学名誉教授）

はじめに

上古市遺跡は鳥根県西部の浜田市三隅町古市場に位置し、三隅川河口部左岸の小谷奥の沖積平野縁辺に立地する。本報は、上古市遺跡で出土した木質遺物について用材等を確認する目的で、鳥根県教育庁埋蔵文化財センターが、文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した樹種同定について、再編したものである。

分析試料について

試料一覧を表16、17に、自然木11試料の採取位置を第101図に示す。この図面は、鳥根県



第101図 試料採取地点（6区：自然木）

教育庁埋蔵文化財調査センターより提供を受けた原因をもとに、作成したものである。

樹種同定方法

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺(2010)に従い作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント株式会社に保管・管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか(1985)の用語に基本的に従い、記載を行った。

樹種同定結果

分類ごとに特徴的な試料(下線試料)の記載を行った。また、第3表に同定結果を示し、下線試料について顕微鏡写真を示した。

(1) モミ属 *Abies* sp

試料名：814(W17092808)、5(W18042005)、30(W18042505)、32(W18042507)、49(W18042603)

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅はやや狭い。分野壁孔はスギ型で2～4個存在し、放射柔細胞に典型的なじゅず状末端壁をもつことなどから、モミ属と同定した。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

試料名：681(W17092807)、1(W18042001)、ほか108試料

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は広い。樹脂細胞は移行部から晩材部に分布している。また、分野壁孔はスギ型で2～3個存在することなどから、スギと同定した。

(3) ハコヤナギ(ヤマナラシ)属 *Populus* sp.

試料名：723(W17092103)、724(W17092102)、杭1(W17092805)

記載：年輪幅はやや広い。中庸ないしやや小さい道管が単独ないし2～4個放射方向に複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の配列が斜線状になる部分がある。道管のせん孔は単せん孔である。道管放射組織間壁孔はふるい状である。軸方向柔組織は年輪界に沿って1列のターミナル状で、顕著である。放射組織は単列同性で、高さは30細胞高程度以下である。以上の組織上の特徴から、ハコヤナギ属と同定した。

(4) コナラ属(アカガシ亜属) *Quercus* (sub. *Cyclobalanopsis*) sp.

試料No：53(W18042607)

記載：中庸で円形ないし楕円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが非常によく発達し、周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は接線方向に1ないし2細胞幅の独立帯状柔組織を形成している。放射組織は同性で、低い単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織がある。更に道管放射組織壁孔は典型的な櫛状を示す。以上の組織上の特徴から、コナラ属(アカガシ亜属)と同定した。

(5) シイノキ属 *Castanopsis* sp.

試料名：654(W17092101)

記載：年輪幅は狭い。環孔性の放射孔材である。孔圏部の道管は単独でやや大きく、2～5列に配列しているが、接線方向に連続せず、間隔が空いている。孔圏外（幅は狭い）の道管は径が小さくなり、小道管が集合して放射状に配列している。道管せん孔は単せん孔を示す。道管内腔にチロースが非常に発達している。周囲仮道管が存在している。軸方向柔組織は短接線状で、顕著である。放射組織は単列同性である。以上の組織上の特徴から、シノキ属と同定した。

(6) イスノキ属 *Distylium* sp.

試料名：683(W17092104)、728(W17092801)、731(W17092803)、立木(W17092804)

記載：年輪幅は狭い。小さい道管がほぼ単独で年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は階段せん孔で、バーの数は少ない。木部繊維は極めて厚壁である。軸方向柔組織は1～2細胞幅の接線状で、ほぼ一定の間隔で規則的に配列し、非常に特徴的である。所々にビスフレックが認められる。放射組織は異性で、1～3細胞幅である。以上の組織上の特徴から、イスノキ属と同定した。

(7) センダン *Melia azedarach* Linn.

試料No：57(W18042704)、58(W18042705)

記載：環孔材で、大きい楕円形の道管が単独で1～3列に配列する。孔圏外の道管は中庸で楕円形の道管が単独で散在するほか、小さい道管が房状に集まり斜状に配列する。道管せん孔は単せん孔である。また、道管には内容物が認められるものもある。道管相互壁孔は小紋孔（交互状）で、道管-放射組織間壁孔にも壁孔縁が明瞭に認められ、交互状に配列する。また、小道管にはらせん肥厚が認められる。軸方向柔組織は孔圏道管の周りに存在するほか、年輪に沿って配列する。放射組織は同性で2.5列である。以上の組織上の特徴からセンダンと同定した。

(8) 散孔材

試料名：729(W17092806)

記載：年輪幅はやや狭い。非常に小さい道管がほとんど単独で年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔である。ほとんどの道管内腔に着色物質が充填しており、顕著である。木部繊維は非常に厚壁である。軸方向柔組織は散在状ないし短接線状で多く、着色物質を含有している。放射組織は異性で、1～3細胞幅であり、着色物質を含有している。放射柔細胞には平伏細胞、直立細胞、方形細胞の3種類が存在する。放射柔細胞壁は厚壁である。道管、軸方向柔組織及び放射組織のほとんどの細胞内腔に着色物質が顕著に存在し、特異的である。以上の組織上の特徴から、バラ科（Rosaceae）の可能性が指摘できるが、断定できないことから「散孔材」に止めた。

主要器種の用材について

(1) 農耕土木具

16 試料の樹種同定を行い、鍛冶製品：1 試料、田舟：1 試料、田下駄：15 試料の内訳であった。

これらのうち、鍛冶製品はアカガシ亜属、田舟はスギ、田下駄のうち1 試料がモミ属で他はスギという結果であった。鳥根県内の既知データ（渡辺・中川，2013）によれば、鍛（あるいは鋤）の同定試料282のうち95%（267 試料）がアカガシ亜属であり、従来の通りの傾向を示した。また、田舟は従来の同定試料2と少ないが、全てがスギであった。一方、田下駄は既知の同定試料112で、

表 16 試料一覧 (1)

No.	母樹No.	樹高	時代	器 種	備考	樹種同定結果	整理番号	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	木高V		
1	38-1	1	2	鎌倉時代	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042001	50.0	11.4	2.1	母目	
2	38-2	217	2	鎌倉時代	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042002	41.4	10.6	2.1	母目	
3	38-3	33	2	鎌倉時代	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042003	47.1	12.2	1.6	母目	
4	38-4	52	2	鎌倉時代	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042004	38.7	12.0	1.9	母目	
5	38-5	12	2	鎌倉時代	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042005	43.5	9.9	1.8	母目	
6	38-6	105	2	鎌倉時代	不明	不明	スギ	WI8042006	45.4	4.1	1.3	母目	
7	38-1	106	2	鎌倉時代	不明	不明	スギ	WI8042007	46.8	6.3	1.5	母目	
8	38-2	40	2	鎌倉時代	不明	不明	スギ	WI8042008	48.2	10.1	1.8	母目	
9	38-3	185	2	鎌倉時代	不明	不明	スギ	WI8042009	97.4	24.8	2.8	母目	
10	49-1	283	3-4	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042010	40.3	10.4	2.0	母目	
11	49-2	232	3-4	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042011	53.5	12.6	2.6	母目	
12	49-3	280	3-4	古墳時代前期	建築材	畳	スギ	WI8042012	94.0	22.0	1.8	母目	
13	49-4	281	3-4	古墳時代前期	建築材	畳	スギ	WI8042013	100.8	34.8	3.9	母目	
14	50-1	223	3-4	古墳時代前期	不明	不明	分刺	スギ	WI8042014	38.4	17.2	2.0	母目
15	50-2	262	3-4	古墳時代前期	不明	不明	スギ	WI8042015	61.4	7.5	4.0	母目	
16	50-3	266	3-4	古墳時代前期	不明	不明	スギ	WI8042016	203.2	18.8	2.8	母目	
17	51-1	352	3-4	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042017	58.2	11.6	2.4	母目	
18	51-2	487	3-4	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042018	53.1	14.6	2.0	母目	
19	51-3	375	3-4	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042019	25.2	10.5	1.8	母目	
20	51-4	277	3-4	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042020	48.0	11.7	1.5	母目	
21	51-5	345	3-4	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042021	50.8	15.2	1.3	母目	
22	51-6	374	3-4	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042022	40.8	17.2	2.4	母目	
23	52-4	462	3-4	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042026	128.6	22.2	3.4	母目	
24	52-5	319	3-4	古墳時代前期	建築材	壁カ	スギ	WI8042027	150.2	23.2	2.1	母目	
25	53-4	342	3-4	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042028	117.0	13.0	2.3	母目	
26	52-3	358	3-4	古墳時代前期	建築材	壁(小梁)	スギ	WI8042031	135.2	23.8	3.0	母目	
27	53-3	422	3-4	古墳時代前期	建築材	壁(小梁)	スギ	WI8042032	109.2	14.6	2.4	母目	
28	53-1	276	3-4	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042033	80.2	22.8	2.4	母目	
29	53-5	540	3-4	古墳時代前期	建築材	壁(小梁)	スギ	WI8042034	91.0	38.0	30.0	母目	
30	57-4	282	3-4	古墳時代前期	建築材	柱	スギ	WI8042035	101.3	5.3	5.5	母目	
31	53-6	319	3-4	古墳時代前期	建築材	床	スギ	WI8042036	88.2	23.4	4.9	母目	
32	54-1	280	3-4	古墳時代前期	建築材	伊勢石	スギ	WI8042037	128.0	23.8	6.8	母目	
33	54-2	542	3-4	古墳時代前期	建築材	伊勢石	スギ	WI8042038	125.0	17.8	2.4	母目	
34	54-3	447	3-4	古墳時代前期	建築材	小梁	スギ	WI8042039	153.5	3.2	2.1	母目	
35	54-4	452	3-4	古墳時代前期	建築材	伊勢石	スギ	WI8042040	154.4	39.2	4.0	母目	
36	55-1	314	3-4	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042511	313.4	12.0	2.7	母目	
37	55-2	272	3-4	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042512	310.3	11.0	3.2	母目	
38	52-1	275	3-4	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042513	176.4	15.8	2.6	母目	
39	53-2	515	3-4	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042514	106.0	12.2	3.0	母目	
40	55-3	284	3-4	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042515	248.0	13.6	2.5	母目	
41	55-4	233	3-4	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042516	210.0	12.2	2.1	母目	
42	56-4	480	3-4	古墳時代前期	不明	不明	スギ	WI8042517	31.1	4.4	1.5	母目	
43	56-1	312	3-4	古墳時代前期	不明	不明	スギ	WI8042518	61.4	15.0	1.8	母目	
44	56-2	311	3-4	古墳時代前期	不明	不明	スギ	WI8042519	87.6	24.0	2.4	母目	
45	57-3	246	3-4	古墳時代前期	土木材	杭	スギ	WI8042520	124.3	9.7	8.6	母目	
46	57-1	439	3-4	古墳時代前期	不明	不明	スギ	WI8042521	195.2	9.2	3.6	母目	
47	57-2	335-339	3-4	古墳時代前期	不明	不明	スギ	WI8042601	157.0	12.2	2.5	母目	
48	56-3	420	3-4	古墳時代前期	不明	不明	スギ	WI8042602	115.2	18.1	2.4	母目	
49	57-5	310	3-4	古墳時代前期	不明	不明	スギ	WI8042603	911.5	8.5	8.5	母目	
50	56-1	563	5	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042604	31.0	30.7	2.0	母目	
51	56-2	422	5	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042605	36.3	12.0	2.0	母目	
52	56-3	561	5	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	スギ	WI8042606	80.6	15.6	2.9-3.6	母目	
53	59-1	830-1-2	5	古墳時代前期	鳥糞土木具	目下駄	アカガシ産腐	WI8042607	81.8	30.0	6.6-7.1	母目	
54	60-1	602	5	古墳時代前期	建築材	柱	スギ	WI8042701	227.3	7.1	7.1	母目	
55	60-2	576	5	古墳時代前期	建築材	柱	スギ	WI8042702	221.3	6.8	6.9	母目	
56	60-3	551	5	古墳時代前期	建築材	柱	スギ	WI8042703	223.2	9.2	9.0	母目	
57	60-4	621-1-7	5	古墳時代前期	建築材	桁	センダン	WI8042704	425.5	13.5	11.0	芯持ち	
58	60-5	587-1-8	5	古墳時代前期	建築材	桁	センダン	WI8042705	532.2	16.8	7.8	芯持ち	
59	63-1	585	5	古墳時代前期	建築材	壁(小梁)	スギ	WI8042706	219.8	17.4	1.8	母目	
60	63-2	562	5	古墳時代前期	建築材	壁(小梁)	スギ	WI8042707	217.6	18.0	2.0	母目	
61	61-2	229	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042708	218.8	17.9	1.9	母目	
62	61-1	607	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	WI8042709	241.2	18.2	3.0	母目	
63	65-1	568	5	古墳時代前期	建築材	壁(小梁)	スギ	WI8042710	208.8	23.8	3.1	母目	
64	65-2	567	5	古墳時代前期	建築材	壁(小梁)	スギ	WI8042711	204.4	28.2	2.6	母目	

スギが92% (103 試料) を占めた。今回同定されたモミ属は、鳥根県内では初出であったが、全国的には全体の3%ほどの同定数があった(伊東・山田編, 2012)。

(2) 建築材

57 試料の樹種同定を行った。多くはスギで、モミ属とセンダンが2 試料ずつ同定された。鳥根県内の既知データでは、建築部材へのスギ利用は16%に止まり、特定の種類が多くなることはなく(渡辺・中川, 2013)、この傾向は全国的なものでもあった(伊東・山田編, 2012)。このように、

表 17 試料一覧 (2)

No.	樹種No.	木質品No.	層位	時代	器種	備考	経緯同定結果	管理番号	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	本取V
65	62-3	826	5	古墳時代前期	建築材	壁か屋根	スギ	W18042712	188.8	29.4	2.0	経過
66	62-1	584	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	W18042713	210.5	18.4	2.0	経過
67	62-2	574	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	W18042714	194.0	18.8	2.2	経過
68	62-3	566	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	W18042715	164.0	23.8	2.2	経過
69	66-1	602	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	W18042716	114.2	18.8	2.7	経過
70	66-2	606	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	W18042717	104.8	28.9	2.8	経過
71	66-3	588	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	W18042718	76.2	20.0	2.0	経過
72	66-4	592	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	W18042719	80.0	21.0	2.3	経過
73	66-5	466	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	W18042720	47.2	28.0	1.8	経過
74	67-1	631	5	古墳時代前期	建築材	屋根	スギ	W18042721	236.0	14.2	2.3	経過
75	67-2	597	5	古墳時代前期	建築材	屋根	スギ	W18042722	155.2	4.8	2.0	経過
76	67-3	582	5	古墳時代前期	建築材	壁か屋根	スギ	W18042723	65.0	18.3	2.5	経過
77	67-4	357	5	古墳時代前期	建築材	壁	スギ	W18050101	77.7	15.5	2.1	経過
78	67-5	365	5	古墳時代前期	建築材	壁か床	スギ	W18050102	84.5	18.4	3.2	経過
79	67-6	613	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050103	50.8	7.5	1.5	経過
80	67-7	843	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050104	110.4	1.8	2.0	経過
81	67-8	825	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050105	69.2	16.8	1.8	経過
82	67-9	589	5	古墳時代前期	建築材	木彫	スギ	W18050106	70.9	4.1	2.8	経過
83	64-1	605	5	古墳時代前期	建築材	書架	スギ	W18050107	209.0	23.9	2.2	経過
84	64-2	378	5	古墳時代前期	建築材	書架	スギ	W18050108	143.9	24.0	2.0	経過
85	64-3	228	5	古墳時代前期	建築材	柵・木床	スギ	W18050109	176.5	18.5	2.1	経過
86	70-1	608	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050110	279.5	22.4	6.3	経過
87	70-2	619	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050111	21.2	7.2	1.5	経過
88	70-3	486	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050112	47.3	7.8	2.0	経過
89	70-4	827	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050113	141.0	23.8	4.8	経過
90	70-5	804	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050114	84.8	17.5	2.0	経過
91	70-6	511	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050115	58.4	37.8	39.9	経過
92	69-1	842	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050116	85.8	17.5	2.0	経過
93	69-2	552	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050117	76.7	12.0	2.4	経過
94	68-1	500	5	古墳時代前期	不明		スギ	W18050118	69.5	16.8	1.8	経過
95	68-3	500-1	5	古墳時代前期	柱		スギ	W18050119	25.2	2.8	2.2	経過
96	74-6	626-628	6	弥生時代前期	柱		スギ	W18050120	287.0	8.7	1.0	経過
97	74-7	701	6	弥生時代前期	建築材	屋根	スギ	W18050121	291.8	12.8	2.7	経過
98	74-4	593	6	弥生時代前期	建築材	床	スギ	W18050122	125.4	11.4	4.8	経過
99	74-5	722	6	弥生時代前期	土木材	杭	スギ	W18050123	112.4	10.2	3.4	経過
100	73-1	645	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050901	24.2	7.0	2.6	経過
101	73-2	668	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050902	31.0	5.0	2.7	経過
102	73-3	639	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050903	27.4	6.2	1.7	経過
103	75-6	776	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050904	50.2	5.4	3.2	経過
104	74-6	684	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050905	161.2	14.5	3.5	経過
105	75-1	708	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050906	153.2	14.7	2.3	経過
106	75-2	682	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050907	118.8	12.5	2.5	経過
107	75-9	646	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050908	94.0	17.4	2.4	経過
108	74-1	502	6	弥生時代前期	建築材	書架	スギ	W18050909	204.4	18.8	1.4	経過
109	75-3	740	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050910	128.2	8.2	4.2	経過
110	75-4	632	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050911	120.8	10.0	2.1	経過
111	75-5	474	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050912	71.8	7.4	2.9	経過
112	75-7	663	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050913	60.5	7.6	2.5	経過
113	74-3	664	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050914	55.2	10.7	2.5	経過
114	74-2	665	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050915	56.2	9.2	2.5	経過
115	75-4	655	6	弥生時代前期	不明		スギ	W18050916	82.5	19.8	4.8	経過
116	-	881	6				スギ	W18050917				
117	-	854	5	弥生前期～古墳前期	供木		シノノ属	W17092101				
118	-	861	5	弥生前期～古墳前期	供木		スギ	W17092102				
119	-	865	5	弥生前期～古墳前期	供木		イスノキ	W17092104				
120	-	679	5	弥生前期～古墳前期	供木		スギ	W17092103				
121	-	723	5	弥生前期～古墳前期	供木		ハコヤナギ/ヤマナラシ属	W17092105				
122	-	724	5	弥生前期～古墳前期	供木		ハコヤナギ/ヤマナラシ属	W17092102				
123	-	728	5	弥生前期～古墳前期	供木		イスノキ	W17092101				
124	-	729	5	弥生前期～古墳前期	供木		熊孔材	W17092106				
125	-	731	5	弥生前期～古墳前期	供木		イスノキ	W17092103				
126	-	814	5	弥生前期～古墳前期	供木		ヒス属	W17092108				
127	-	811	5	弥生前期～古墳前期	土木材	杭	ハコヤナギ/ヤマナラシ属	W17092105				
128	-	正木(榎)⑤	5	弥生前期～古墳前期	正木		イスノキ	W17092104				

今回の同定結果は異例と言える。ただし縄文時代前期以降中世頃までは、島根県西部の低地にはスギ林が広く分布していたと考えられている(渡辺, 2009)。弥生時代前期から古墳時代前期の時期に、身近にあった樹木を用いたとすれば、今回の結果は当然のものと考えられる。

まとめ

上古市遺跡から得られた木質遺物を対象とした樹種同定の結果、以下の事柄が明らかになった。

- 1) 128 試料の樹種同定を行った結果、スギが 87% (111 試料) を占めた。この外モミ属が 5 試料、イスノキが 4 試料、ハコヤナギ (ヤマナラシ) 属が 3 試料、センダンが 2 試料、アカガシ亜属、シノキ属、散孔材が各 1 試料同定できた。
- 2) 農耕土木具に関しては、島根県下及び全国規模での既知の傾向と同傾向を示した。田下駄のモミ属の用例は島根県下で初であったが、全国的には 3% の用例を示していた。
- 3) 建築材の 93% がスギであった。この傾向は、島根県下及び全国規模で捉えた場合、異例の結果であった。ただし既知の結果では、建築材として特定の樹種が多用されていないことから、遺跡近辺に生えていた樹木をランダムに使用した可能性が指摘できる。島根県西部の低地では、縄文時代前期以降中世頃までスギ林が広く分布していたと考えられていることを踏まえると、当然の結果とも考えられる。

引用文献

- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 木の考古学 出土木製品用材データベース、P447、海青社、滋賀。島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 1985 木材の構造、276p.、文永堂、東京。
- 渡辺正巳 2009 山陰地方における完新世の花粉層序と古環境-花粉考古学を用いて-、P221.、島根大学大学院総理工学研究科博士論文。
- 渡辺正巳 2010 木質遺物 (埋没樹木) 樹種同定、必携 考古資料の自然科学調査法、194-198。ニュー・サイエンス社、東京。
- 渡辺正巳・中川 寧 2013 山陰の木製品の樹種と植生について、木製品から見た古代のくらし、37-48、島根県古代文化センター。

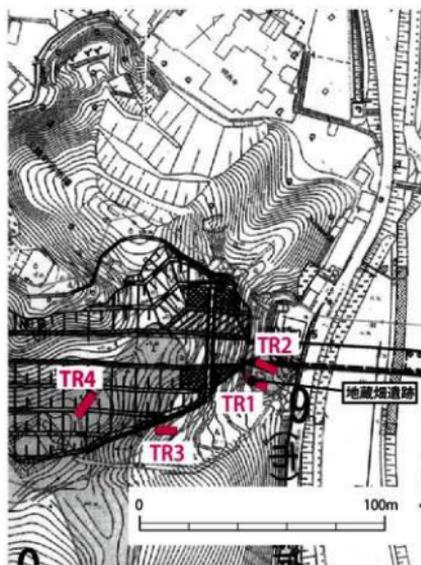
第6章 総括

第1節 蟬口古墓の調査成果

(1) 遺構

蟬口古墓は尾根の北斜面を利用したものであるが、同遺跡が所在する尾根頂部にも墓地があり、こちらは近世後期から現代まで墓地として継続していた。本遺跡と同様に丘陵地の一部が墓地となっている例は、三隅川の左岸右岸を問わず三隅町内で見出される。現代に続く丘陵の墓地利用の開始期の状況がよくわかる資料が得られた。

なお、山間部では浜田市旭町の後河内古墓群で、丘陵の一部を造成し、加工段上に連続して墓地を営んだ例が調査されている。墓地造営のピークは18世紀後半～19世紀前半で蟬口古墓と共通し、墓坑内からは木棺に使用された釘が多数出土している。類似の古墓は、隣接する重富遺跡でも古墓群が確認されている。いずれも土葬墓と火葬墓が混在する。一方、蟬口古墓では墓坑が確認されないことが相違点である。



第102図 地蔵畑遺跡の位置

蟬口古墓から谷一つ隔てた北方の丘陵中腹に位置する地蔵畑遺跡では、長辺1.3m、短辺1mの集石墓を検出した。最大で一辺50cmに達する平たい石を、方形を意識して配し、隙間に角礫を充填する。方形の中央部は石を多量に置かず、窪みを作り、そこに埋葬していた。中世とみられる土師質土器の皿片、骨片、焼土、炭化物が出土している。骨片は人骨の可能性が高い。体の一部の骨しか残存しない状況から、別地点で火葬された後に当地で埋葬されたとみられる。あるいは、焼土面が残る点を重視するならば、この地点で火葬され骨の大部分が持ち出された可能性も考えられる。

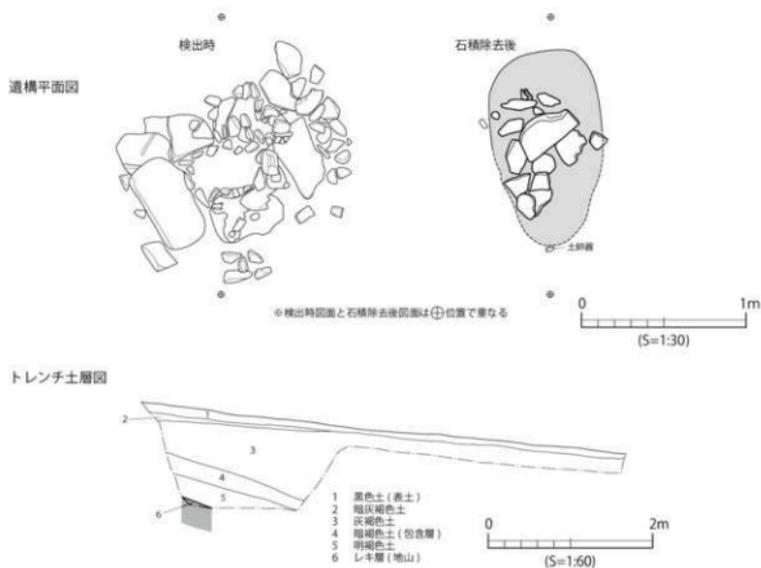
出土遺物は土師質土器、須恵器がある。1は土師質土器の皿で、厚い底部を有し、底部は回転系切りとみられる。2は須恵器の壺あるいは甕か。肩部から胴部最大径付近にかけて、カキ目が僅かに



写真7 地藏畑遺跡の古墓検出状況



写真8 地藏畑遺跡の古墓

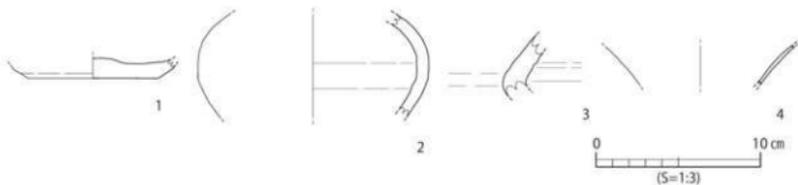


第103図 地藏畑遺跡平面図・土層図

残る。3は須恵器の甕の頸部である。4は土師質土器の坏または皿とみられる。1、4が出土していることから、地藏畑遺跡の古墓の年代は中世と考えられる。

地藏畑遺跡の例から、当地域の丘陵地は、中世末～近世前期の頃から墓地としての利用が始まっていた可能性がある。

地域差を検討するにはより多くの調査事例が必要だが、土葬と火葬、使用される容器、土地利用など、近世の葬制を複数の要素にわたって検討できる資料が得られた。



第104図 地藏畑遺跡出土遺物

表 18 地蔵畑遺跡出土遺物観察表

探検 番号	図版 番号	出土位置	種別	器種	調整	色調	焼成	胎土	法眼				備考
									口径 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	器口 (cm)	
104	-1	地蔵畑遺跡 土師瓦土器	皿	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外) 10YR7/4 に近い黄橙 内) 10YR7/5 に近い黄橙	良	精良	-	(8.0)	-	-	回転系切	
-2		地蔵畑遺跡 須恵器	徳力瓦京方	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外) 2.5Y7/3 浅黄 内) 2.5Y7/3 浅黄	良	精良	-	-	-	-	肩から胴部が半目	
-3		地蔵畑遺跡 須恵器	甕	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外) 2.5Y6/1 黄灰 内) 5Y7/1 灰白	良好	1mm以下の砂粒 を含む	-	-	(14.0)	-	胴部に自然釉、唇首痕	
-4		地蔵畑遺跡 土師瓦土器	環方瓊方	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	外) 2.5Y6/1 黄灰 内) 5Y7/1 灰白	良好	2mm以下の砂粒 を含む	-	-	-	-	-	

(2) 一石五輪塔

碑口古墓の調査では、基壇1上面に集積された一石五輪塔が出土している。石材は石見東部の大田市温泉津町を中心に産出する火山礫凝灰岩「福光石」が用いられている。⁽¹⁾ 福光石製の一石五輪塔は石見銀山遺跡で数多くみられる。同遺跡では、紀年銘を有する一石五輪塔が天正5年(1577)から安永4年(1775)まで確認されている。造立の盛行期は16世紀末から17世紀にかけてである。本遺跡の資料も紀年銘はないが、おおむね同時期に位置づけられる。

今後、福光石製一石五輪塔についての型式学的研究が進展するなかで、あらためて本石塔の年代的な位置づけをする必要があるだろう。

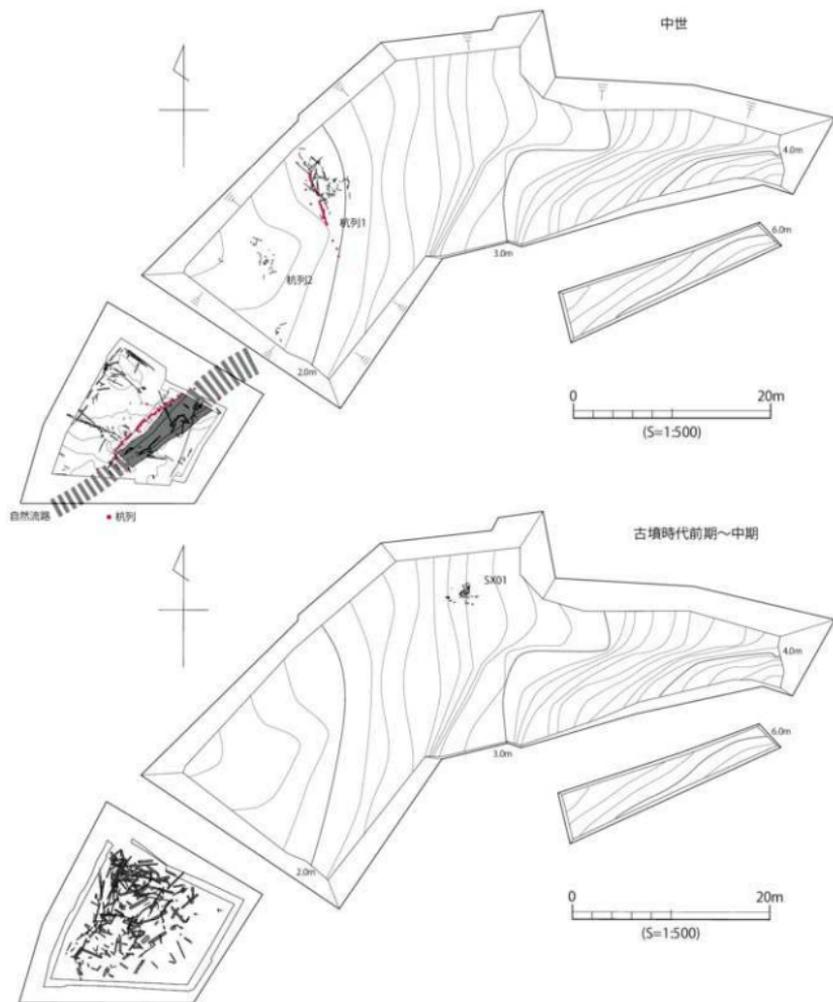
参考文献

- 伊藤徳広 2019 「地蔵畑遺跡の発掘調査」『季刊文化財』147 鳥根県文化財愛護協会
鳥根県教育委員会 1992 『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
間野大丞 1996 「三隅町の中世石造遺物」『八雲立つ風土記の丘』140 鳥根県立八雲立つ風土記の丘

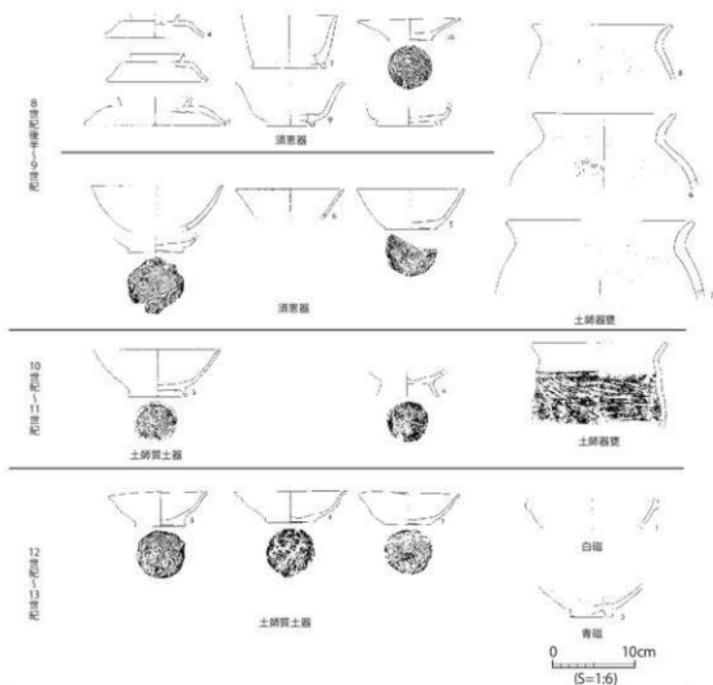
(1) 福光石系石造物は大田市から益田市東部の日本海岸を中心に分布している。浜田市内で28箇所あり、本遺跡の周辺でも廓英(かくえい)法師墓周辺墓(三隅町三隅)、寿仙寺跡(同湊浦)で一石五輪塔・一石宝篋印塔が確認されている(西尾克己・東山信治 2016 「石見東部・中部一石見銀山遺跡を中心として」『第7回中世葬送墓制研究会資料 山陰地域における中世墓終焉期の様相』中世葬送墓研究会)。

第2節 上古市遺跡の調査成果

上古市遺跡の調査は、平成27年度(2015)と29年度(2017)の2度にわたり約2000m²の発掘調査を行っている。小規模な調査であったわけであるが、三隅町内においては初めての面的な遺跡への



第105図 上古市遺跡遺構変遷図



第106図 上古市遺跡出土古代・中世土器

アプローチであった。ここでは、上古市遺跡の調査について簡単にまとめておきたい。遺物としては縄文時代から鎌倉時代にいたる各時代の土器と木器が出土している。点数としてはわずかであるが、想像以上に早い時期から連続して人の営みがあったことが確認された。この中でも中世鎌倉期と古墳時代前期における低地利用の一端が確認できたことが主な成果となる。

(1) 平安～鎌倉期

平成27年度調査(鳥根県2018)では、杭列が2か所で検出されている。遺物については9～12世紀の須恵器・土師質土器・陶磁器が出土している。平安末期以降は周辺には安定して集落が形成されていた可能性がある。こうした背景のもと、平成29年度の調査区で検出された、水田にかかわると見られる各遺構が形成されていったものと見られる。この調査区では自然流路と見られる溝状遺構とこれに沿う杭列や、木桶状遺構、畦畔の骨組みと見られる列状の木材集積などの遺構が検出された。それぞれの遺構は異なる層位にて検出されていることから、同時期の水田施設の組合わせではないが、12～13世紀の遺構と見られる。

(2) 弥生時代～古墳時代

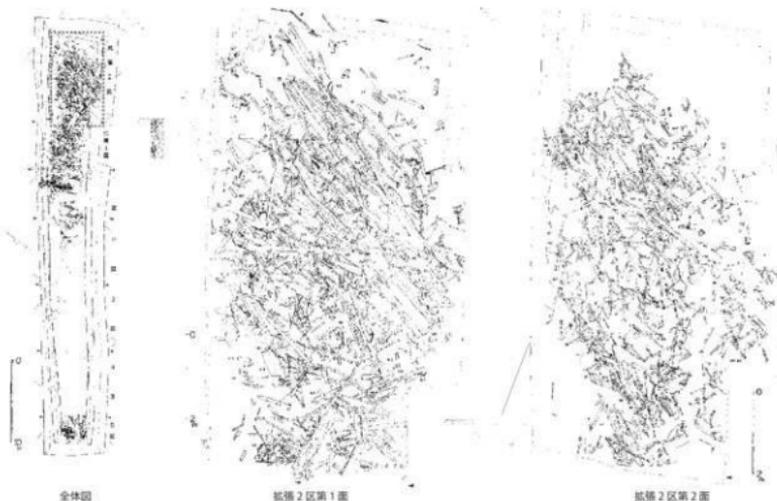
平成29年度調査(本書報告)にて弥生時代前期の杭列状の遺構と古墳時代前期の木製品群を検出したが、27年度調査では弥生時代後期から古墳時代中期にかけての土器が出土している。

遺構

大量の木製品群は、人為的盛土層と見られる単純層から出土している。木製品の大半は建築材と見られるが、隣接地には同時期の集落は確認できないことから、流れ込みや廃棄のために持ち込んだものとは考えにくい。繰り返しになるが盛土層の中にあることから、沈下防止のために意図的に埋め込まれたものと推測している。また、木製品の中には未成品と見られるものもあるが、未成品に運搬用の二次的加工のあるものが含まれることから、同様の目的で使用されたと推測する。

上古市遺跡での状況と共通する事例として、稗田遺跡(松江市鹿島町)での木製品出土事例があげられる。このうち下層木製品群は、弥生時代後期から古墳時代初頭頃と見られる通称オモカスと呼ばれる泥炭層中にあり農工具・準構造舟の部材・建築材などの多様なものが地面を被覆するかのように出土している。

こうした状況の説明として、調査者は、この遺跡の所在は、『出雲国風土記』秋鹿郡の条に「恵曇陵」と見える池の汀線付近にあたり、低湿地の軟弱な地盤であることから、『人が踏み込む際の足掛かりとして、また、当時としては利用度の低い地点に、集落で不要になった材を投入し、結果として、このように集積をみたものと考えられる。』(赤澤1994)としている。上古市遺跡の木製品出土地も稗田遺跡と共通の立地と土壌である。稗田遺跡は弥生時代中期後葉から後期前葉を中心とする時期に集積されたと見られるので、時期は異なるが、低地を利用するうえで沈下防止を行うために木製品を利用する点は大きくは変わらないと見られる。異なる点は、上古市遺跡においては木製品



第107図 松江市鹿島町稗田遺跡

を配置してだけでなく同時に盛り土も行っているところに違いがある。

稗田遺跡ではある程度の時間幅の中で累積した結果として大量の木製品の集積となった可能性があるが、上古市遺跡では木製品を用いながら、盛り土を一時期に連続して行っていると推測されることから、計画的に土地の改良が行われた可能性がある。その他には遺構は検出されていないが、背後の丘陵から斜面の崩壊とともに流れ込んだと見られる古墳時代中期の土器群であるSX01（高根県2018）がある。二次的な堆積ではあるがまとまりを保ったまま一気に流れ込んだと見られており、丘陵部にも遺跡が形成された見られると報告されている

木製品

今回の調査では、建築材と見られる木製品が大量に出土している。柄や孔などの加工がないものも多いことから、未成品段階のものもあると見られる。また、片側の端部に荒い加工で穿かれた孔を持つものが多くみられ、これらは運搬などのための二次的な加工とみられる。板材の孔に栓がはめ込まれた状態で出土したものもあったが、これも2次的に加工され孔にはめ込まれたいるため、本来の組み合わせではないと判断された。加工途中や2次的改変が加えられたものも多く、部材として特定できなものも多くはない。以下、部材項目をある程度特定できるものについて整理しておく。

板状の木製品には規格や厚さ、表面の加工状態から、いくつかに分類することが可能である。長さが200cm前後のものには、厚さが3cmほどのもの（第62図3など）と2cm程のもの（第62図1など）がある。厚みの薄いものは表面に切削痕がなく割肌を残すが、表面は比較的滑らかで、長さ・幅など規格や加工の状態などが共通する。床材などに利用できる強度は無いことから、壁ないしは屋根材として使用することは可能だと見られる。また、隅を2か所を落とすものがあり、妻壁材の可能性が考えられるものも含まれる。厚さが3cm前後のものは表面に切削痕が残り丁寧な仕上がりに加工されている。壁や床などの部材として使用することが可能だと見られる。

その他に幅12cm・厚さ2.5cm程の幅が狭く比較的薄いものがある。長さは170cm～300cmまでと幅があるものの、非常に長い材があることから屋根葺材の可能性が考えられる。

部材として特定できるものには、柱を受ける半円形の繰り込みがあることから、台輪の可能性が考えられるもの（第63図2）や、両端を凸と凹に加工した壁材と見られるもの（第61図1・2）がある。これらの部材と掘立柱建物遺構の規模とを簡単に比較しておきたい。

比較対象としたのは、近隣には調査事例がないため浜田市街地に位置する道休畑遺跡のものを参

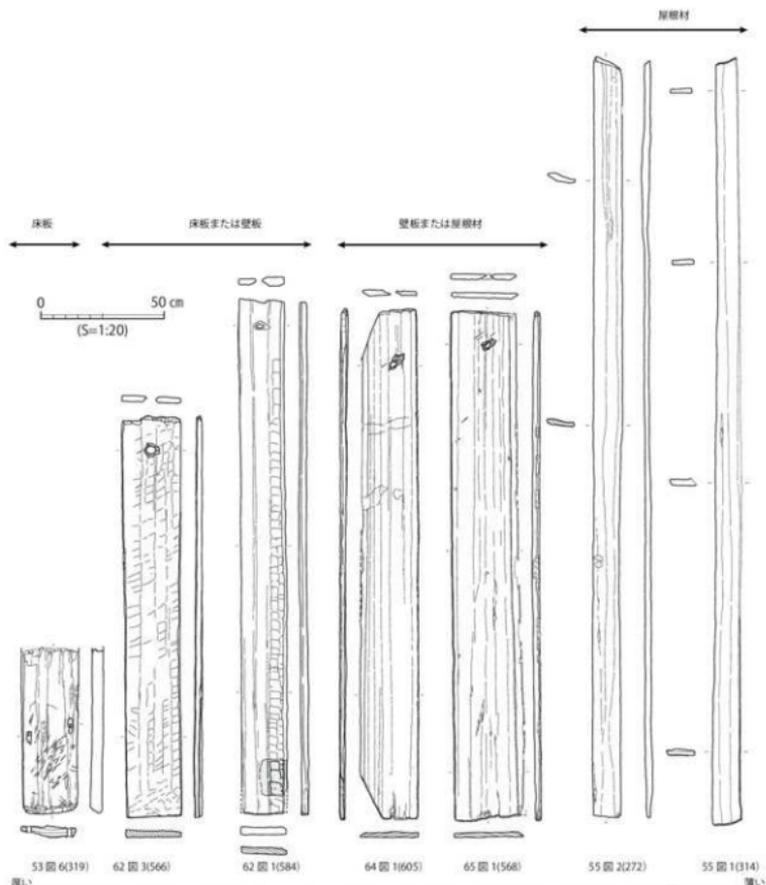


63-2[562]

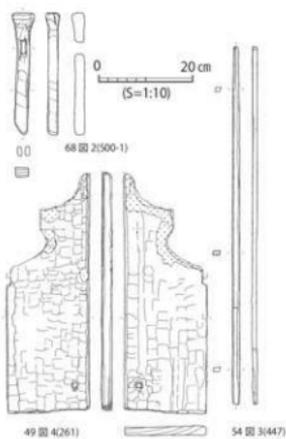
52-3[108]

写真9 2次加工

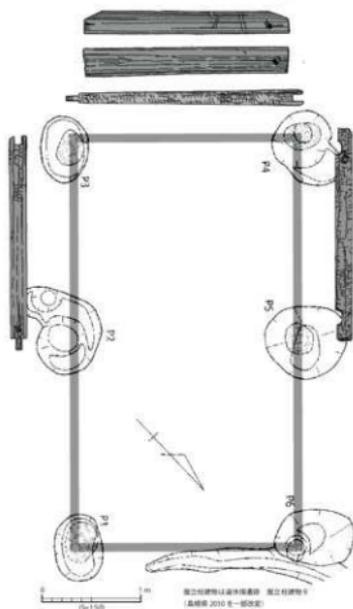
照した。この遺跡は弥生時代後期の集落遺跡で竪穴住居14棟、掘立柱建物10棟などがからなり、浜田市域では最大の集落遺跡である。このうち掘立柱建物9は1間×2間で梁間2.4m、桁行4.2mを測る。柱間は、桁行側では2.1m、梁間で平均2.3mである。柱穴6基のうち柱痕が5本残っており建物規模が正確に分かる資料である。時代に隔たりがあるが、出雲地域の例では、古墳中期の折原上堤東遺跡SB01（松江市八雲町）が、ほぼ同規模の掘立柱建物であることから、古墳時代前期にも存在する規模と考える。第111図は、この遺構図に同縮尺の部材を並べたものである。台輪と見られる部材は柱間よりやや短いが、その他の壁材は柱間に近い長さをしていることがわかる。浜田市三隅地区では弥生時代から古墳時代にかけての住居跡は未発見であるが、道休畑遺跡で検出された掘立柱建物と同規模のものが存在していた可能性がある。他に部材として特定が可能なものと



第108図 板材



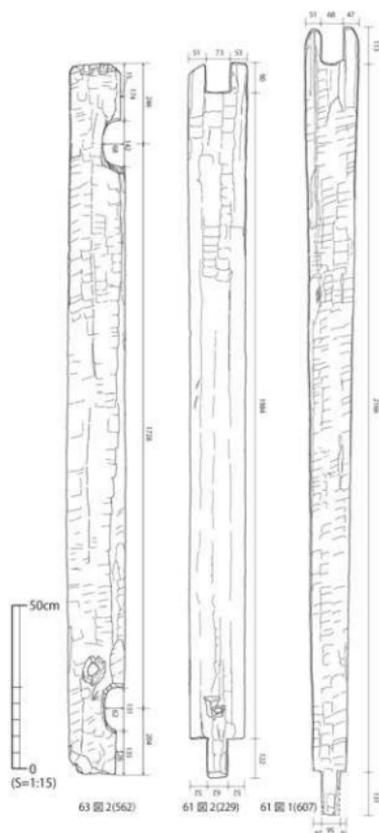
第109図 扉・柱・小舞



第110図 壁材と掘立柱建物との規模比較

しては、扉板・小舞・栓がある。

今回の調査で出土した木製品は、用途を特定できるものは少なかったが、この地域の建物構造やスギの大径木から製材されたと見られるものもあることから、森林資源の利用状況を考えるうえでも基礎的な資料になると思われる。また、建築材や農具には未成品もあるので、周辺では、貯木施設をそなえ木器を製作していた可能性も考えられる。



第110図 台輪・壁材 (1/15)

土器

土器としては弥生時代中期・後期や古墳時代前期・中期の土器が出土している。ここで、同時に調査された海石遺跡や海岸部の松原遺跡の出土品もあわせて、三隅地域の土器様相について見ておきたい。

三隅川下流域では、大きく見れば弥生前期から古墳時代中期にいたるまで連続して土器の存在が確認できる。現状の細別された土器編年に照らせば抜け落ちている段階は多いが、調査の規模からすれば、この地域に弥生時代以降の遺跡が連続して存在することが期待できる。各期の土器の様相は一見すると出雲地域の土器様相と違わない。後期前葉には石見地域に特徴的な頸部直下に刺突文様を持つ厚手の甕が見られるが、この時期を除けば、古墳時代になると布留系甕が山陰系の複合口縁甕とともに一定量存在することも、出雲平野から西方の地域で確認できる現象である。古墳時代中期には、単純口縁と坯部有段の高坏が主体となるシンプルな構成で須恵器も伴う。畿内地域に震源があり松江市意宇平野で見られる坯部椀形の高坏がないなど石見地域に共通した様相になる。

さらに、石見地域でも調査事例の多い、益田平野の土器様相と比較して、三隅地域の石見における特徴を考えておきたい。益田平野の資料としては、浜寄・地方遺跡の土器をその代表として、その様相を見ることとする。

益田平野では、弥生時代終末期の資料が少ないが、山陰系の複合口縁の甕が主体となることから、山陰系土器圏にあると見られるが、古墳時代に入るとこの様相は一変する。最も大きな変化としては、豊富な器種からなる粗製の土器群が出現し、地域の主要な土器となることである。この土器群は長門・周防地域に起源があると見られるが、山陰系土器と比べ器面は平滑にならずわずかに凹凸が全体に見られ、端部の処理などもシャープな直線的な仕上がりにならないものが多い。胎土に含まれる砂粒の量も少なく、色調も赤褐色のものが多い。一見して山陰系土器とは区別がつかない群である。また、山陰系土器にはない椀や鉢などの器種が含まれるのも特徴の一つである。

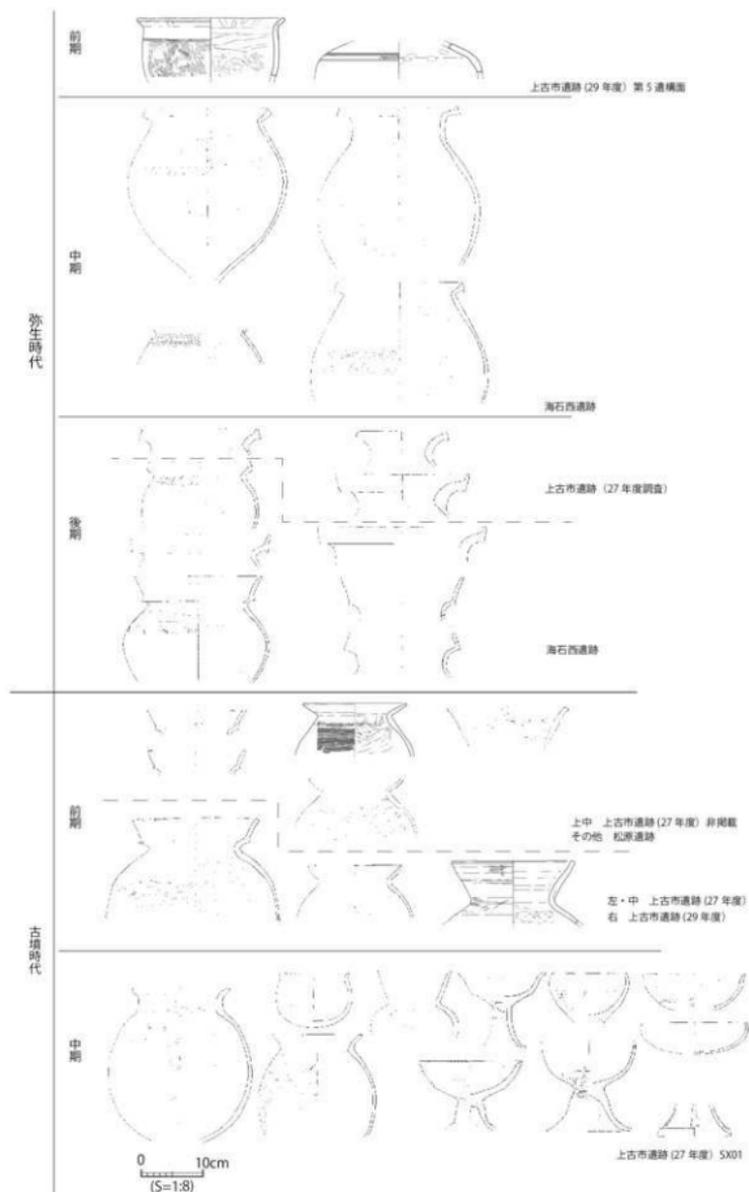
山陰系土器は、器種構成やそれぞれの型式の特徴は石見地域や出雲平野などと異なるところはない。しかしながら注意されるのは、胎土には2種類以上の異なるものがある。

A群としたものには、石見地域とみられる胎土のほかに、出雲平野で見られる5ミリ以下の白色の精製粘土塊のようなものを含む個体が少なからず存在する。色調も共通することから、出雲平野から搬入されたものと見られる。

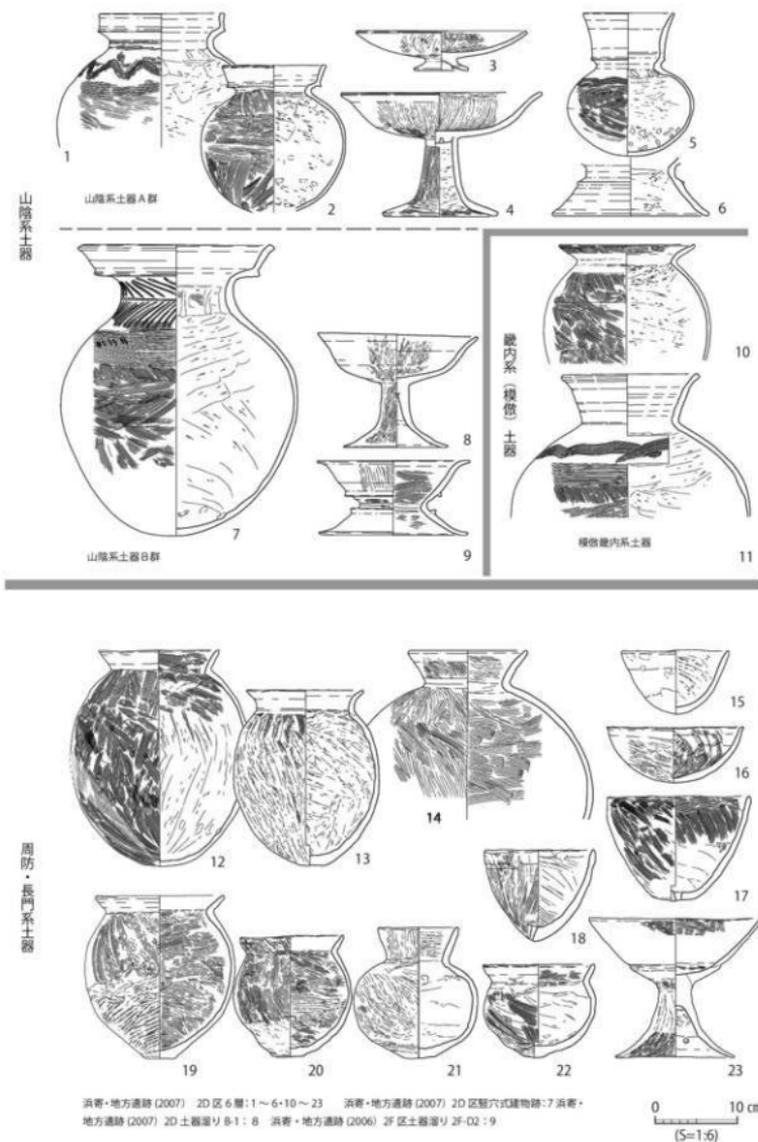
また、B群としたものは、石見・出雲地域とは胎土や色調が異なるものや、焼成の関係で断面が黒色を呈するもの、さらに形態の細部や製作技法などが異なるものである。山陰系土器の中にも製作地が異なるものが混在している。

これに加え、布留系の甕や一過性のもではあるが、近江や北陸地域などと関係があると見られる加飾二重口縁壺なども含まれる。益田平野の古墳時代前半期の土器様相は複数の系統と製作地からなる多様な土器群で構成される。

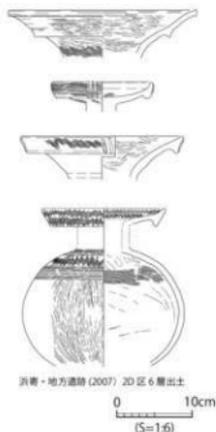
中期初頭の益田平野の首長墓で100mの前方後円墳である可能性を持つスクモ塚古墳築造の背景を、平野の開発史から説明した丹羽野 裕は『久城平野の開発にあたっては、力を貸す外部勢力もあったかもしれないが、主体は益田平野の人々であったことは間違いない。考古資料を見る限り、弥生時代中期以降、本質的文化の転換は認められないのである。』（丹羽野2010）と述べる。しかしながら古墳時代開始期の益田平野の土器様相からは、『益田平野の人』に対応する考古資料を見



第112図 浜田市三隅地区弥生・古墳時代土器集成



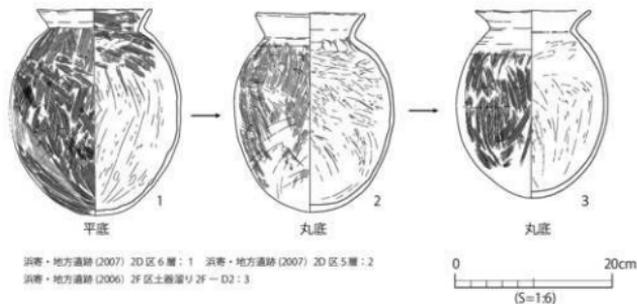
第113図 古墳時代前期の益田平野の土器様相



第114図 益田平野の北陸・近江地域系土器

出すことは簡単なことではないと実感するくらいに多様である。

長門・周防系の甕や鉢類については、平底のものから丸底のものへと型式変化が追えることや、山陰系土器も草田6～小谷3段階まで確認できることから、こうした複数の系統からなる様相は、一過性のものではないことが推定される。さらに、多系統の土器が存在するなかで、山陰系土器は器種や量が時間とともに減少する傾向にあり、小谷3段階には煮沸用の甕さえも見られなくなり、前期後半には山陰系土器は姿を消すと見られる。長門・周防系の土器群が定着していく中で、前期後半には長門・周防系の土器群のみが残り、古墳時代中期へと移行していくものと見られる。このような益田平野における古墳時代の土器の変遷は、すでに東山信二により丁寧な検討がなされており（東山2010）、今回の検討結果は、東山の設定した変遷の枠組みを追認したことになる。



第115図 周防・長門系甕形土器の型式変化

一方で、三隅地域では、こうした長門・周防系の土器はみられず、前期後半になっても山陰系の甕がみられることから、山陰系土器が最後まで主体となっていたものと推測される。海岸部の松原遺跡の報告では、SD01から単純口縁の甕のみが出土しており、周防地域の影響を受けたものとされているが、これらの土器は共伴の高環から中期まで下がる資料と見られる。古墳時代中期には、口縁の短い単純口縁の甕と有段の高環が主体となり、三隅地域も長門・周防地域、益田平野と同じ土器様相へと移行するものと見られる。これは伊甘神社周辺遺跡（石見国府推定地）などでも様相を同じくすることから、益田平野を除く石見地域は山陰系土器の終焉により、急激に西方の土器様相が浸透してくるものと見られる。最近注目される、須恵器模倣土師器（岩橋2019）などが石見の海岸部全域でみられることもその延長線上にあるものと想像する。古墳時代前期に限って言えば、三隅地域と益田平野の間に土器様相の違いが見てとれるということである。

(3) まとめ

上古市遺跡の調査成果を再度まとめておくと、古墳時代前期に水田開発を目的とした大掛かりな土地造成が行われていること。また、出土した建築材から高床式建物をもち、木製品の加工を行うような集落が付近に存在した可能性が推定されるなどである。

三隅川河口の状況を海石西遺跡などの調査成果もくわえてみると、弥生時代前期以降は集落遺跡が点在している可能性が推測される。古墳時代前期における水田開発は地域にとって大きな転機になった可能性もある。上古市遺跡では弥生時代前期に水田経営に乗り出したと見られるが、それは継続されなかった可能性があり、古墳時代前期の土地造成以降は水田が比較的安定して営まれたと推定される。

また、石見地域における土器の様相の検討から、古墳時代前期の石見地域においては、益田地域と三隅地域において土器様相の違いがあることについて指摘した。そして伊甘神社周辺遺跡の資料などから、この地域差は遅くとも5世紀には浜田市の東端までは解消され、益田平野と同じく周防・長門地域などの西方地域の土器様相が浸透することになる。こうした西方からの影響の背景には出雲地域の影響力の低下が関係しているのではないかと推測する。また、石見西部地域では土地開発による生産性の向上とともに西方地域との関係が浸透することを背景に、前方後円墳が築造されている可能性がある。

益田平野の大元1号墳やスクモ塚古墳は、前期後半から中期の初めの築造であり、浜田市の周布古墳も中期前半までには築造されたものと思われる。これらの前方後円墳には、壟形埴輪が伴うことから、福岡県や山口県などの西方地域との関係性がみられることが指摘されている(岩本2014)。古墳・集落の動向について、厳密な時期の対応など課題は多いが、古墳時代には西方地域との関係が深まることは確からしい。それが地域独自の交流であったのか、時代の変化の渦に取り込まれたものなのか、興味はつきない。

出雲と九州の間にあるこの地域の動向の解明は、古墳時代社会を考えるうえで興味深い材料になるであろう。上古市遺跡や海石西遺跡の調査は谷筋における小さなものであったが、今回の成果がその追及に役立つことを願いたい。

参考文献

- 赤澤秀則1994 『Ⅵ. 小結 2. 稗田遺跡』『下谷遺跡・稗田遺跡』鹿島町教育委員会
- 浅川滋男・出雲古代文化センター編2010 『出雲大社の建築考古学』同成社
- 飯塚武司2001 「農耕社会成立期の木工技術の伝播と変容」『古代学研究』155 古代学研究会
- 岩橋孝典2019 「古墳時代後期の炊爨文化から見た地域相—出雲西部地域と石見東部地域を事例として—」『島根県古代文化センター研究論集 第22集 国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター

- 岩本 崇 2014 「前方後円墳の広域展開と日本海を媒介とした交流の諸相」『鳥根県立古代出雲歴史博物館
企画展 倭の五王と出雲の豪族—ヤマト王権を支えた出雲』鳥根県立古代出雲歴史博物館
- 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『浜寄・地方遺跡—1A・1B・1C・1D・1F・2A・2C・2F・2G区
の調査—』鳥根県教育委員会
- 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『浜寄・地方遺跡—1H・11・2B・2D・2F各区の調査—』鳥根県
教育委員会
- 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 『道休畑遺跡』鳥根県教育委員会
- 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2018 『一般国道(三隅益田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調
査報告書1 海石西遺跡 角落し遺跡 廻り田遺跡近世山陰
道(馬橋地区) 神出西遺跡』鳥根県教育委員会
- 田畑直彦 2018 「山陽西部」『前期古墳編年を再考する』中四国前方後円墳研究会
- 茶谷 満・家塚英詞 2008 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告3 建築部材(資料編) 鳥取県埋蔵文化財セン
ター調査報告24』鳥取県埋蔵文化財センター
- 茶谷 満・家塚英詞 2009 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告4 建築部材(考察編) 鳥取県埋蔵文化財セン
ター調査報告25』鳥取県埋蔵文化財センター
- 中川 寧 2008 「山陰」『季刊考古学』104 雄山閣
- 中川 寧 2000 「出雲における木製耕起具の変遷について」『鳥根考古学会誌 第17集』鳥根考古学会
- 中川 寧 2013 「山陰の古墳出現期における土器研究—近年の動向と課題」『古墳出現期土器研究会 第11号』
古墳出現期土器研究会
- 奈良国立文化財研究所 2010 『出土建築部材における調査方法についての研究報告』
- 丹羽野裕 2010 「第8章第3節 益田平野の開発と久城台地の動向」『久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西Ⅰ遺跡・
久城西Ⅱ遺跡・原浜遺跡』鳥根県教育委員会
- 浜田市教育委員会 2014 『松原遺跡 市道松原2号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 東山信二 2010 「第8章第1節 益田平野の古墳時代の土器について」『久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西Ⅰ遺跡・
久城西Ⅱ遺跡・原浜遺跡』鳥根県教育委員会
- 松山智弘 2018 『山陰』『前期古墳編年を再考する』中四国前方後円墳研究会
- 八雲村教育委員会 1994 『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』
- 山田昌久 2018 「日本原始・古代の木工技術—伐採・製材技術と減少・増加加工技術—」『モノと技術の古代史
木器編』吉川弘文館

写真図版

嶧口古墓写真图版

遺跡遠景
(北西から)



遺跡遠景
(南東から)



調査前
(西から)



図版 2
輝口古墓



基壇 1 調査前



近景調査後



調査区中央土層 (1)

調査区中央土層 (2)



調査区中央土層 (3)



加工段 4 (西部)



図版 4
輝口古墓



加工段 4 (東部)



基壇 1 上層



基壇 1 中層

基壇 1 下層



基壇 1 セクション



基壇 2 遺存状況



図版 6
輝口古墓



基壇 2 セクション



基壇 3 上層



基壇 3 下層

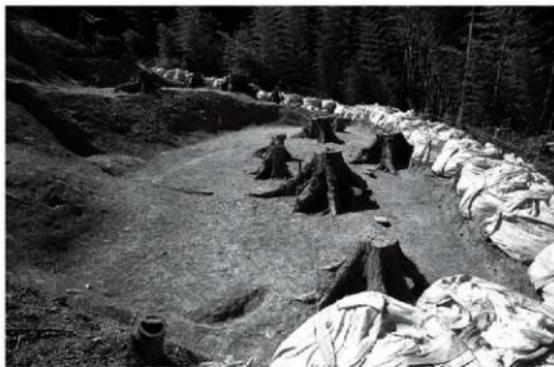
基壇 3 セクション



加工段 1・2



加工段 1・礎石
検出状況



図版 8
輝口古墓



SX1



加工段 2 完掘状況



加工段 3 完掘状況



出土遺物 (1)



15-5



15-6



15-7



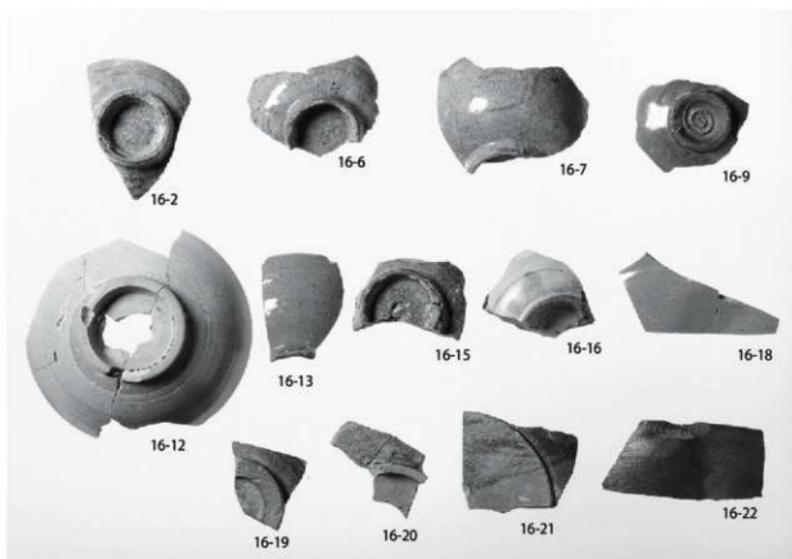
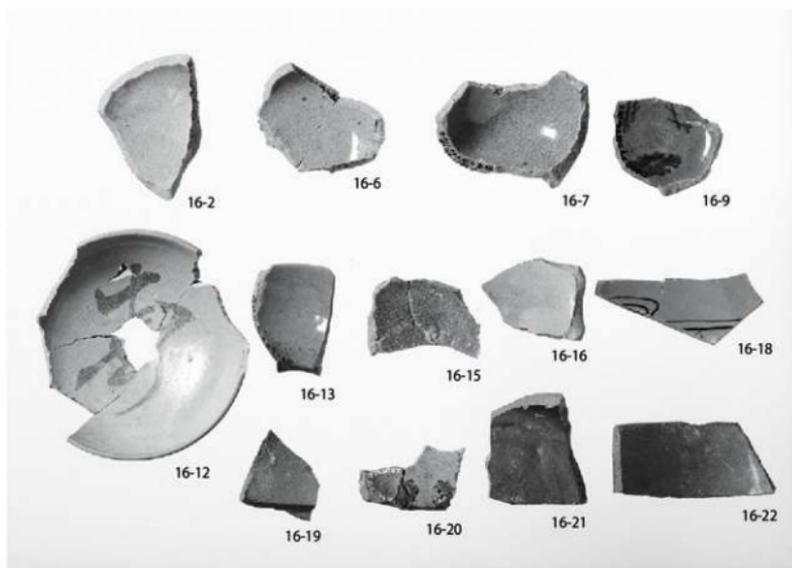
15-8



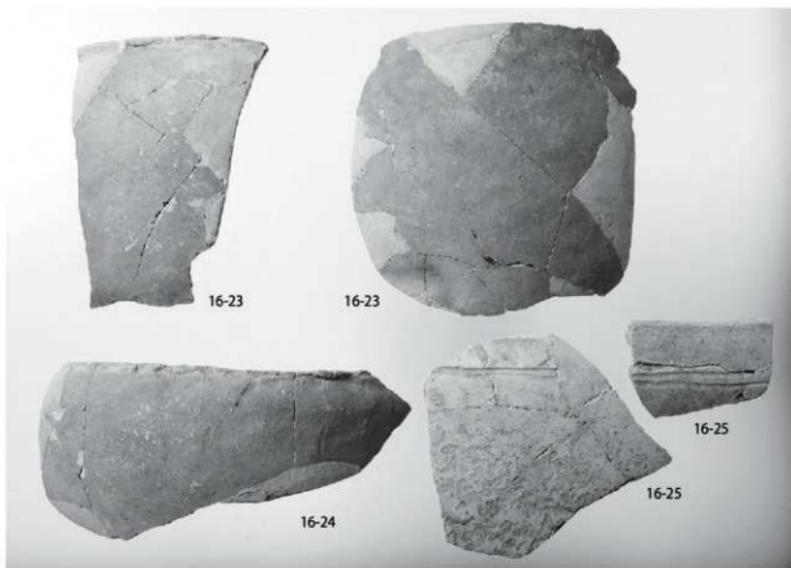
15-9

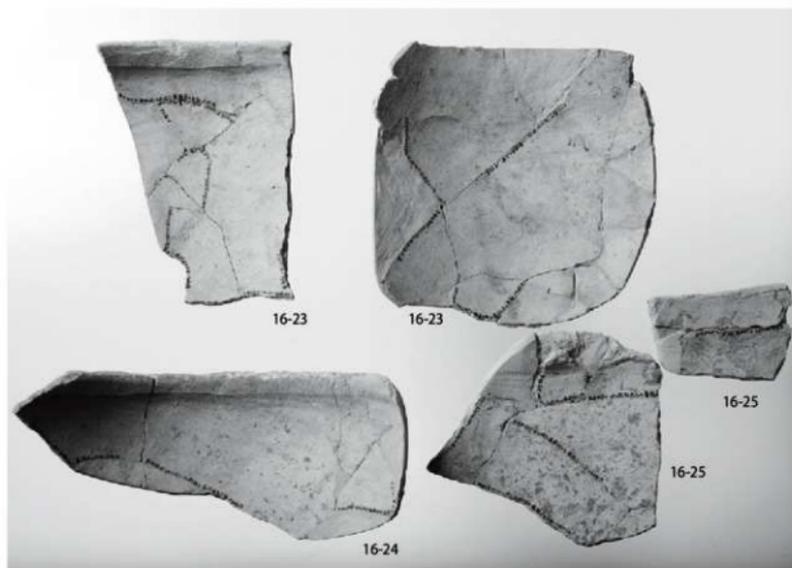


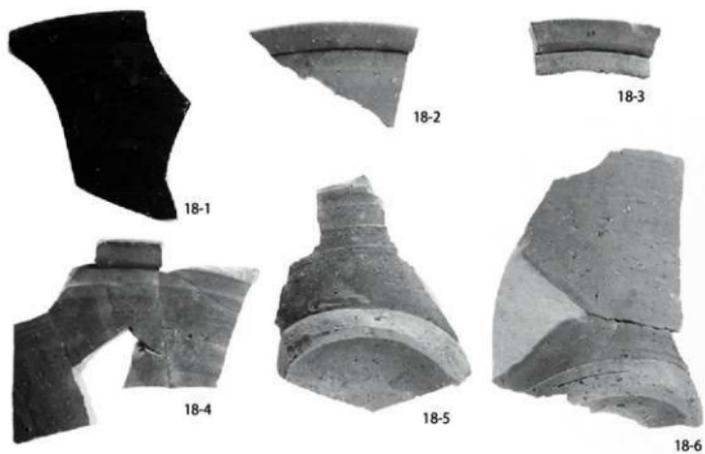
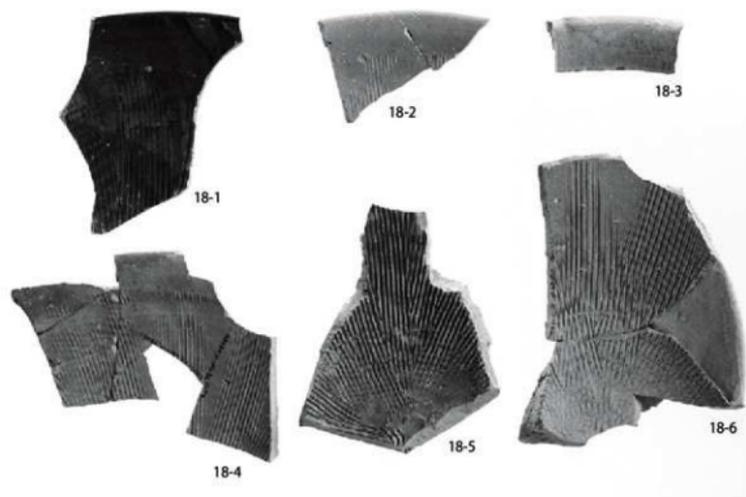
15-10













18-7



18-8



18-10



18-11



18-12



18-13



18-7



18-8



18-10



18-11

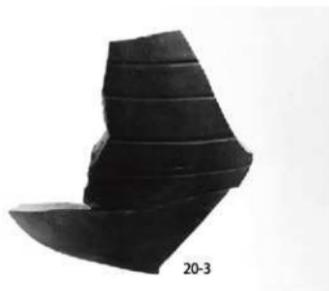


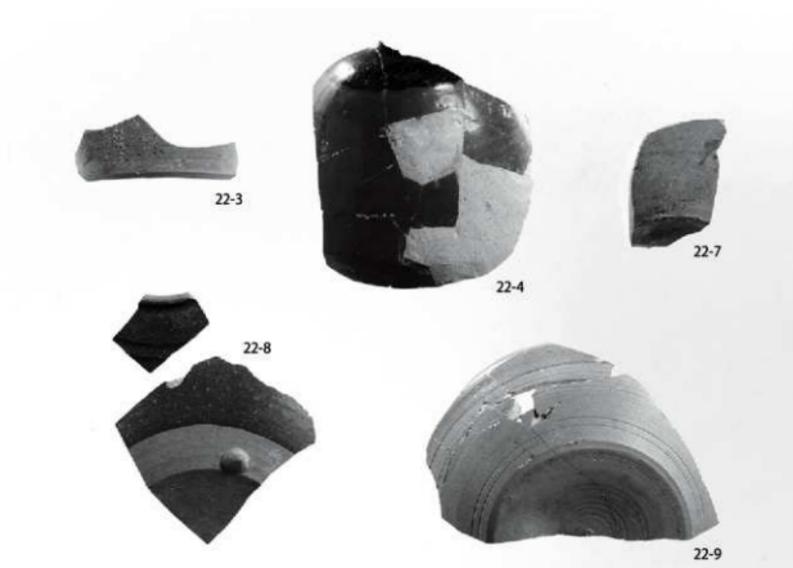
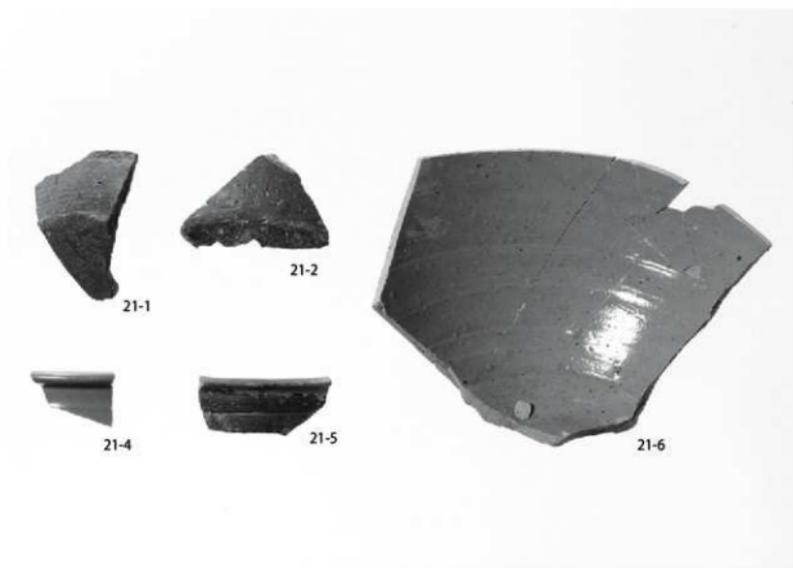
18-12



18-13

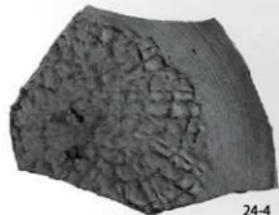
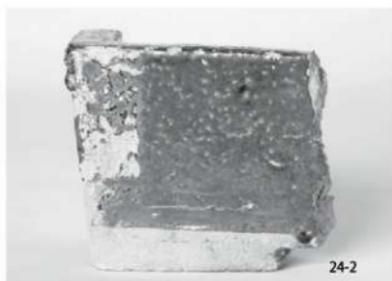
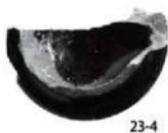






出土遺物 (11)







25-2



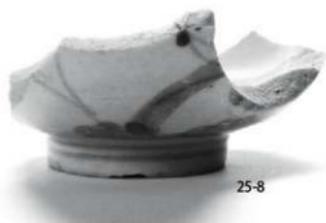
25-3



25-4



25-5



25-8



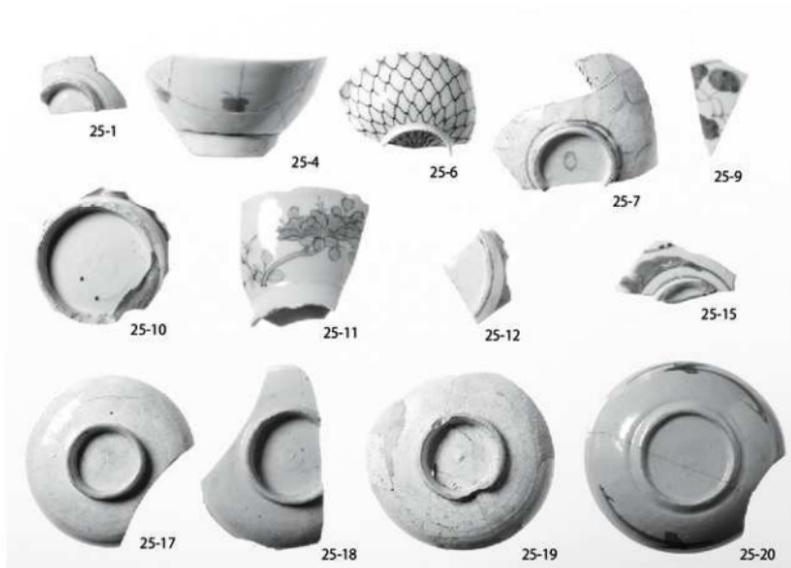
25-13



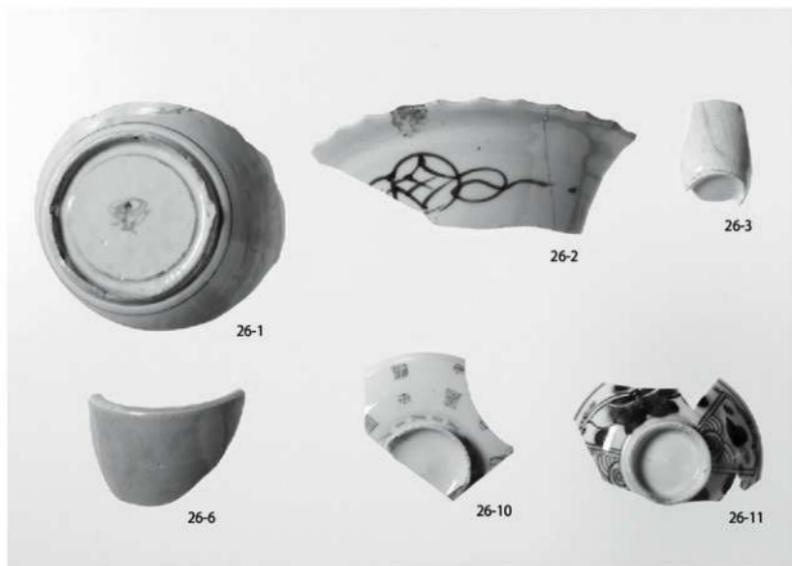
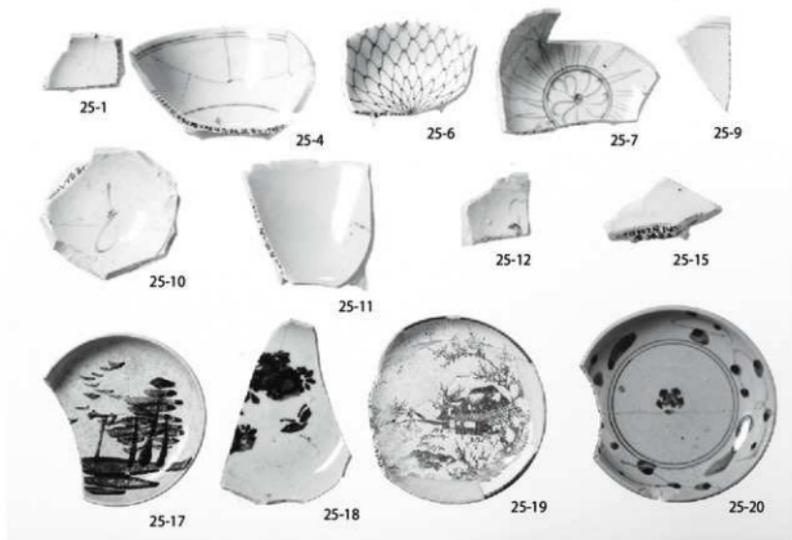
25-14

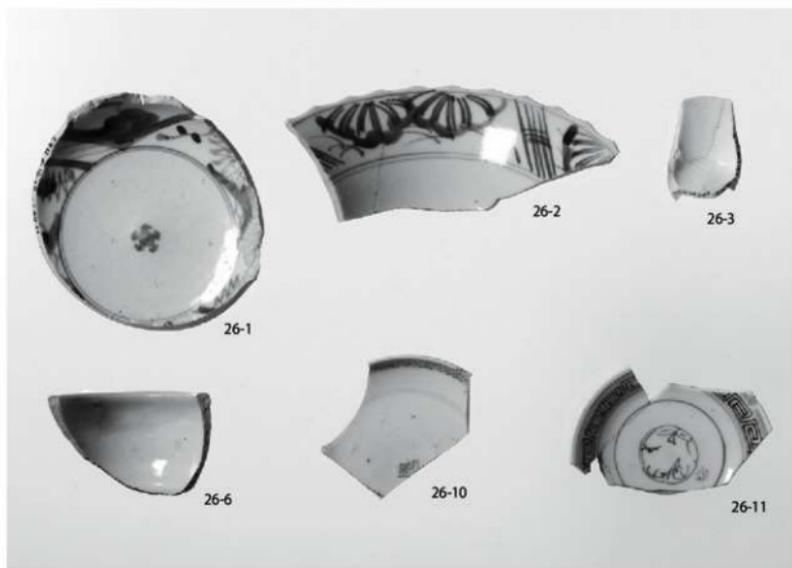


25-16



出土遺物 (15)







27-1



27-2



27-3



27-4



27-5



27-8



28-1



28-2



28-3

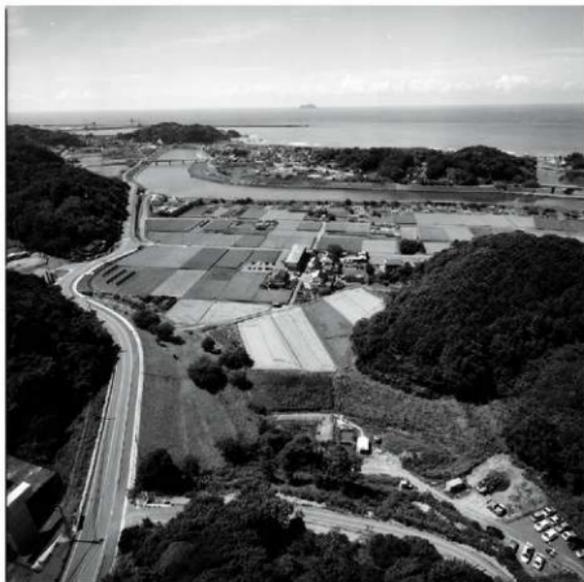


28-5

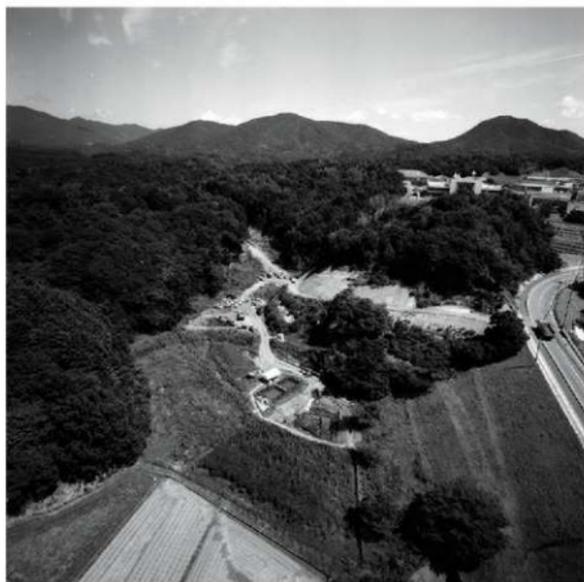


写真のみ

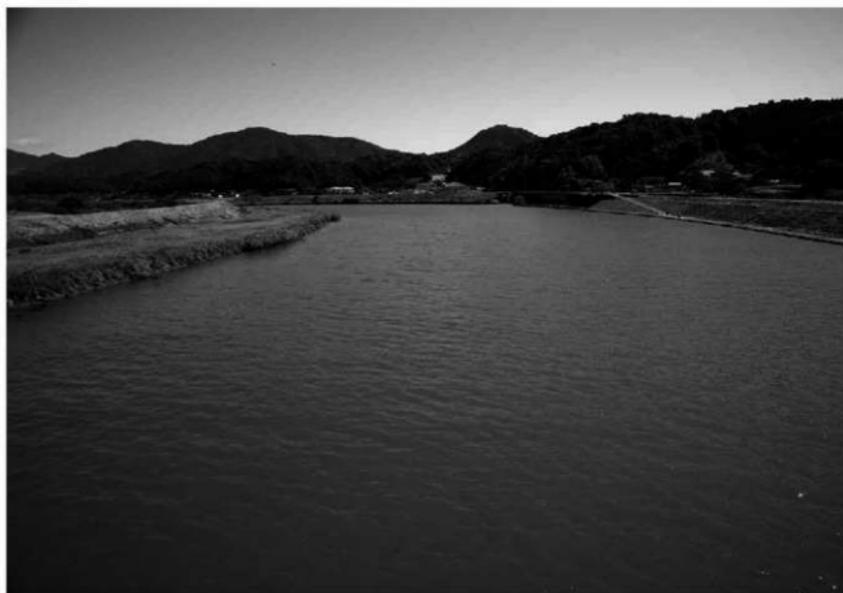
上古市遺跡写真図版



遺跡と周辺（上空東から）



遺跡と周辺（上空西から）



遺跡遠景 (三隅川河口付近から)



遺跡周辺 (道跡から三隅川河口方向)



調査区西壁土層



西壁土層部分-1



西壁土層部分-2



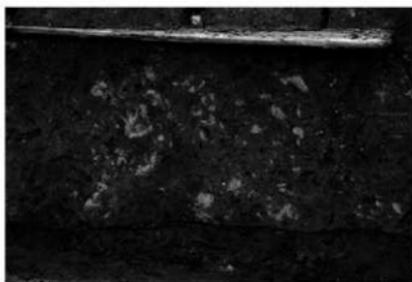
南壁土層作業状況



調査区南壁土層



南壁土層部分



南壁土層 (5 層)



南壁土層 (8 層)



第 1 遺構面全景 (南から)



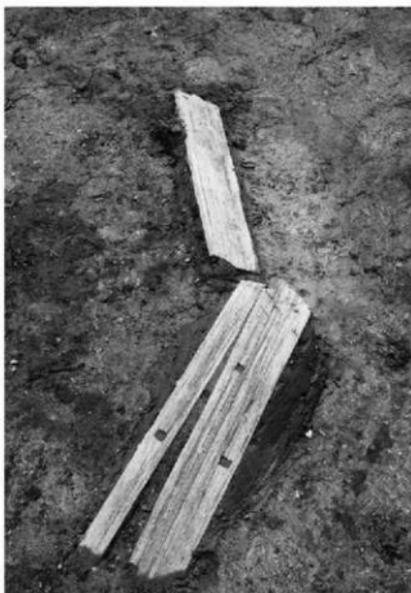
第 1 遺構面全景 (東から)



第 1 遺構面 (東部分)



第 1 遺構面（北から）



第 1 遺構面田下駄出土状況



第 1 遺構面杭列



第 1 遺構面木桶状遺構



第2・3遺構面全景（南から）



第 2・3 遺構面上面検出状況 (西側)



第 2・3 遺構面北西隅



第 2・3 遺構面木製品検出状況 (西側)



第 2・3 遺構面北西隅 (北西から)



第 2・3 遺構面中央の木製品



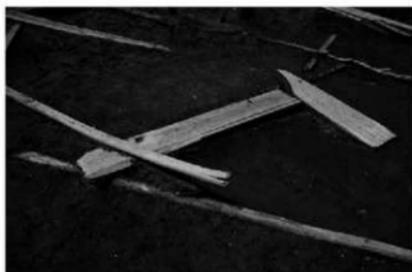
第 2・3 遺構面北西隅 (南東から)



第 2・3 遺構面北側-1



第 2・3 遺構面北西隅 (北から)



第 2・3 遺構面北側-2



第 2・3 遺構面土器出土状況 (調査区北壁付近)



第 2・3 遺構面北西隅 (北西から)



第 2・3 遺構面西側



第 2・3 遺構面北西隅作業状況



第 3 遺構面西側



調査区内東西方向土層 (5 層の上下での木製品出土状況)



調査区内東西方向土層 (5層)



第 4 遺構面作業状況



第 4 遺構面作業状況 (北西隅)



第 4 遺構面田舟出土状況



第 4 遺構面北西隅作業状況 (北から)



第 4 遺構面北西隅木製品 (北西から)



第 4 遺構面作業状況



第 4 遺構面北西隅作業状況 (西から)



第4遺構面北西隅木製品（北から）-1



第4遺構面北西隅木製品（南東から）



第4遺構面北西隅木製品（東から）



第4遺構面北西隅木製品（北から）-2



第4遺構面北西隅作業状況



第4遺構面北西隅木製品（西から）



第 4 遺構面木製品 (52-1)



第 3 遺構面木製品 (56-3)



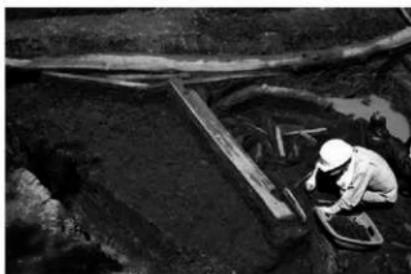
第 4 遺構面木製品 (63-3)



第 4 遺構面木製品 (非掲載)



第 4 遺構面木製品 (63-2)



第 4 遺構面作業状況 (東から)



第 4 遺構面作業状況 (南から)



第 4 遺構面木製品 (北壁付近)



第 4 遺構面作業状況 (手前は作業用の道板)



第 4 遺構面調査区北壁内木製品 (左端は 59-1)



第 4 遺構面北壁付近木製品



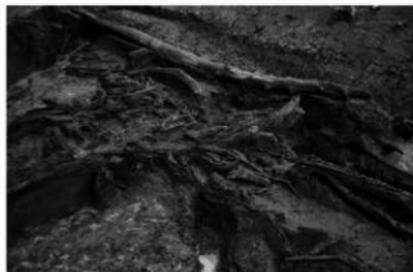
第 4 遺構面北壁付近木製品 (南から)



第 4 遺構面北壁内木製品 (61-1)



第 5 遺構面全景 (南から)



第 4～5 遺構面間の自然木 (奥は 814)



第 4～5 遺構面間の自然木 (奥は 729)



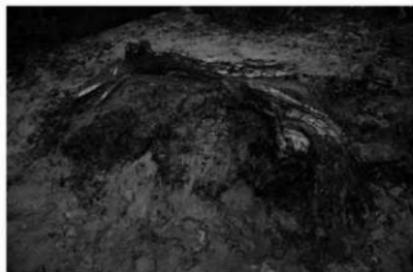
第 4～5 遺構面間の自然木 (根張り) -1



第 4～5 遺構面間の自然木 (根張り) -2



第 4～5 遺構面間の自然木 (根張り) -3



第 4～5 遺構面間の自然木 (根張り) 除去後



第 4～5 遺構面間の自然木 (根張り) 下面の木製品



第 5 遺構面作業状況



第 5 遺構面杭・板列（北から）



第 5 遺構面全景（南から）



第5遺構面杭・板列(南から)



第5遺構面杭・板列(東から)



第5遺構面 板列・倒木(根)(東から)



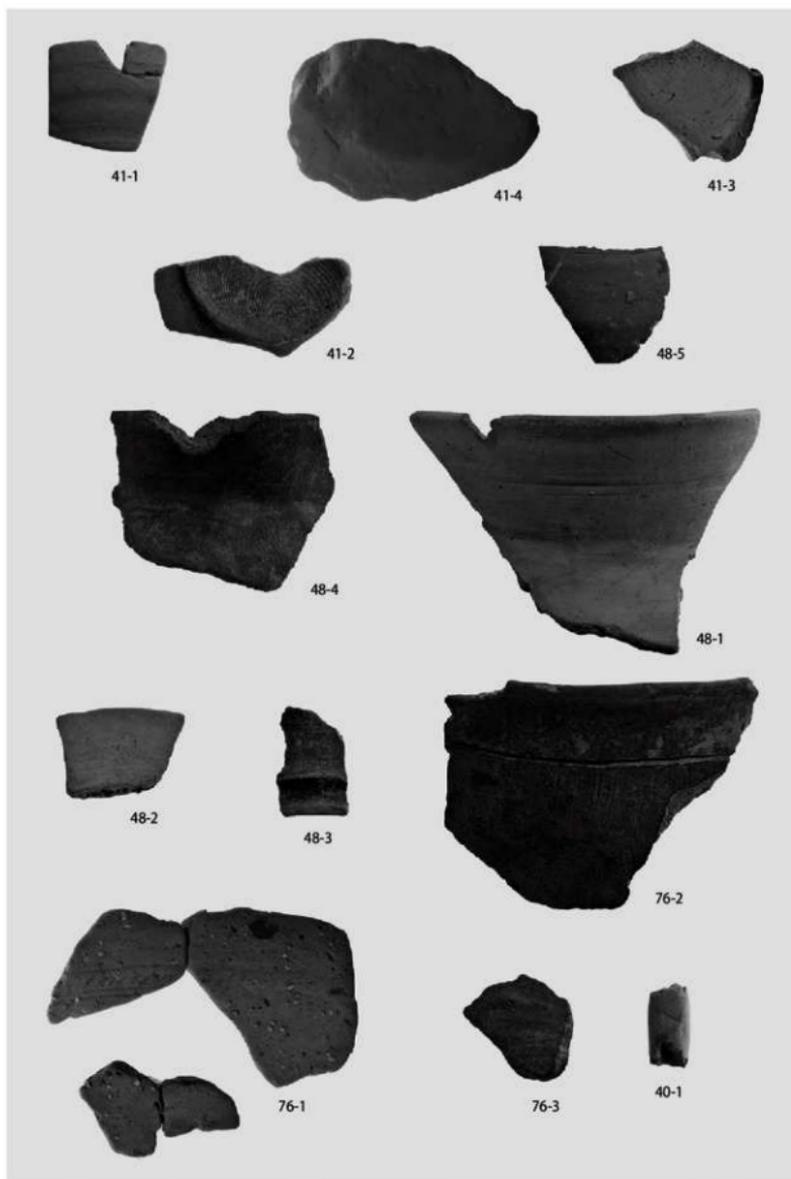
完掘状況（東から）-1



完掘状況（東から）-2



現在の沈下防止材



第 1 ~ 4 遺構面・3 層・第 5 遺構面・9 層出土土器



38-1(1)



38-2(217)



38-3(33)



38-4(52)



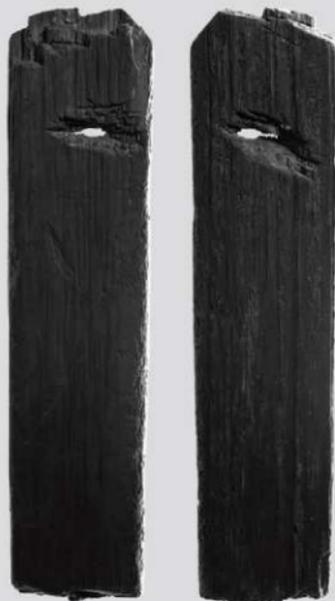
第 1 遺構面出土木製品 (2)



第 2 遺構面出土木製品 (1)



50-1(225)



50-2(262)



50-3(266)



51-1(352)



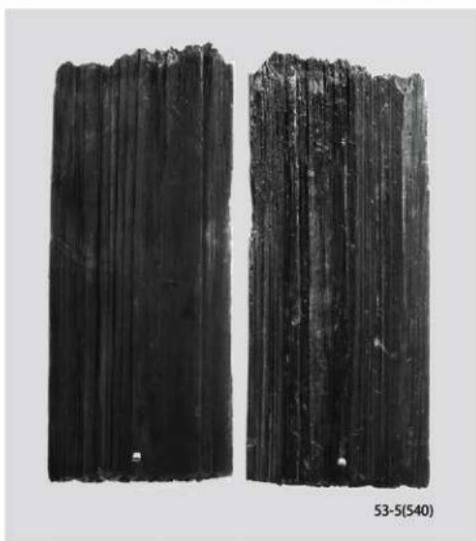
51-4(277)

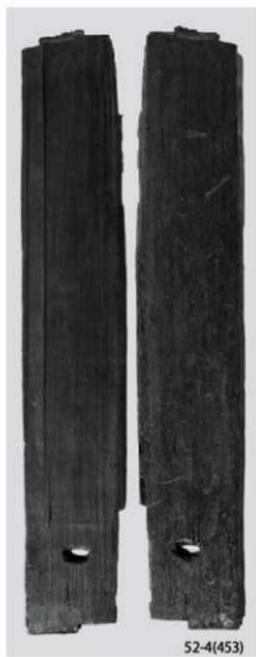


51-3(375)

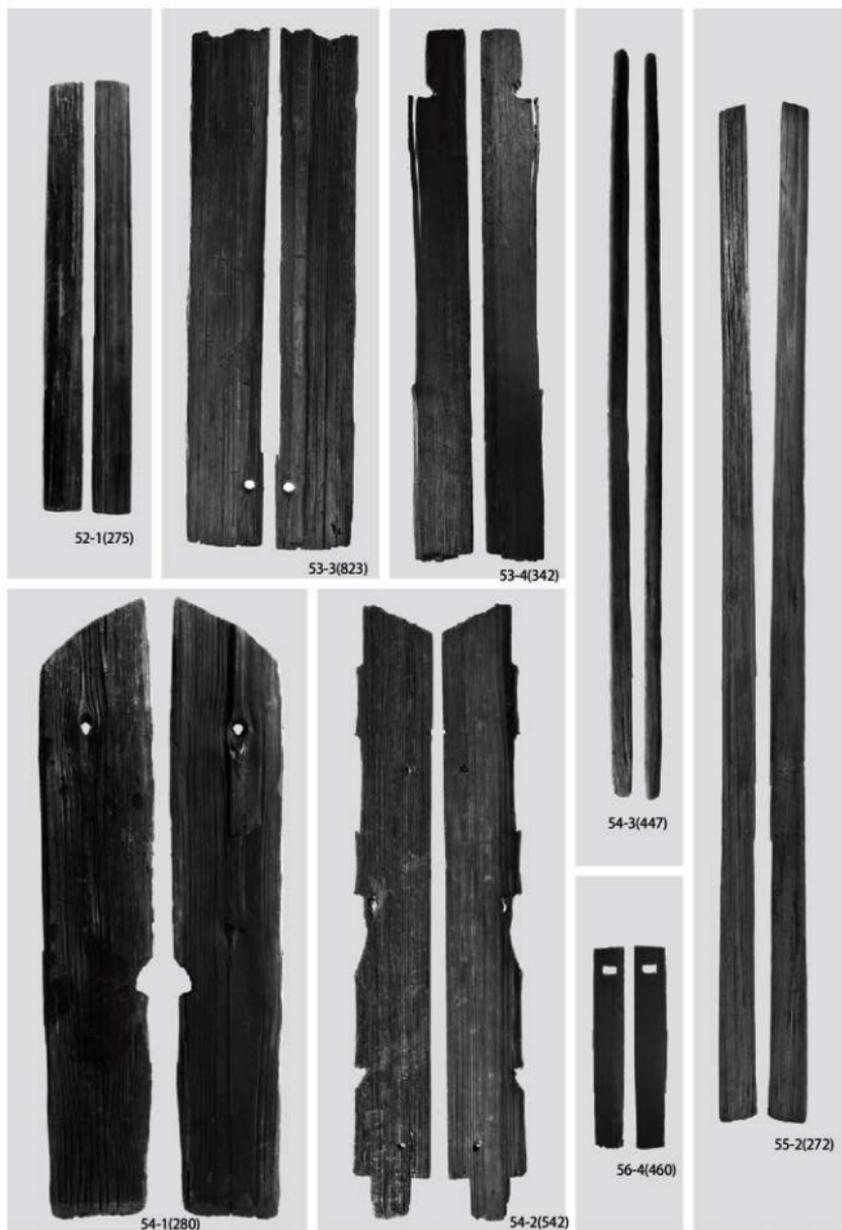


51-2(467)

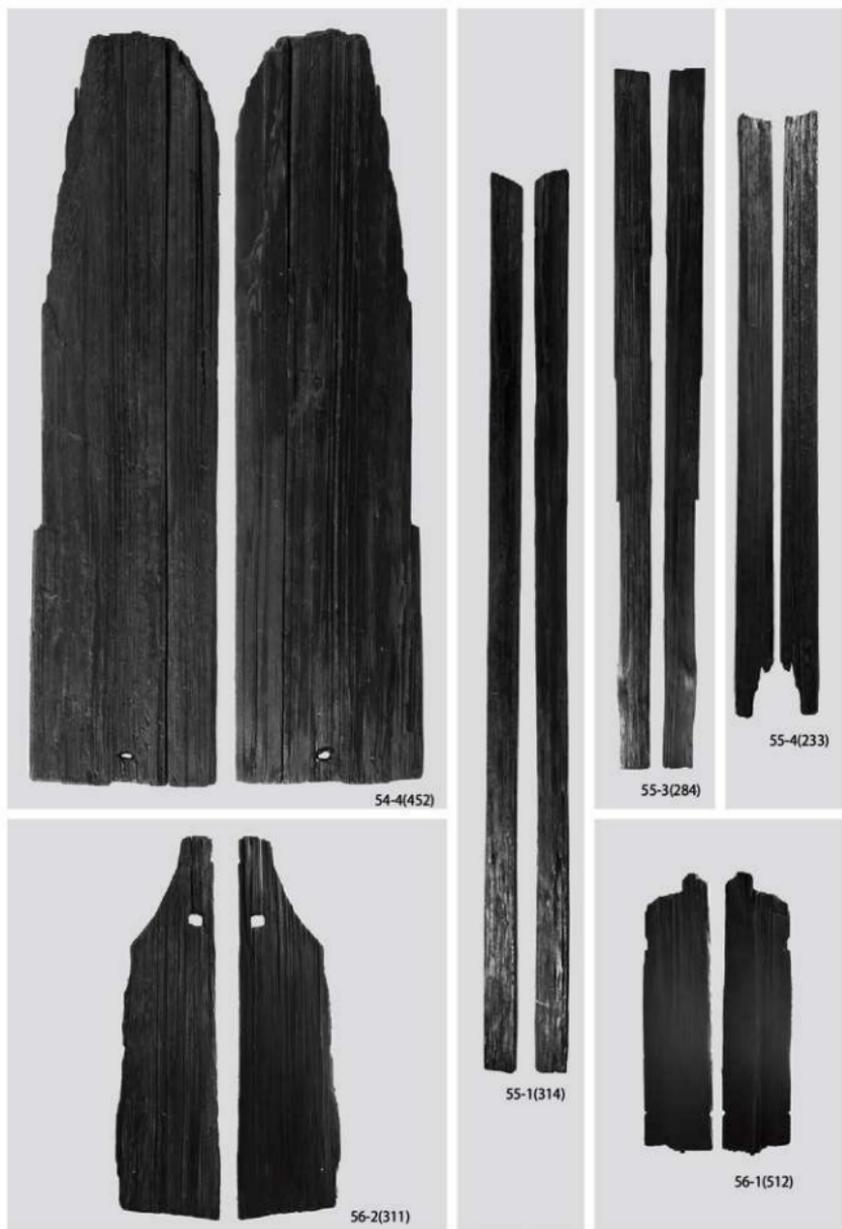




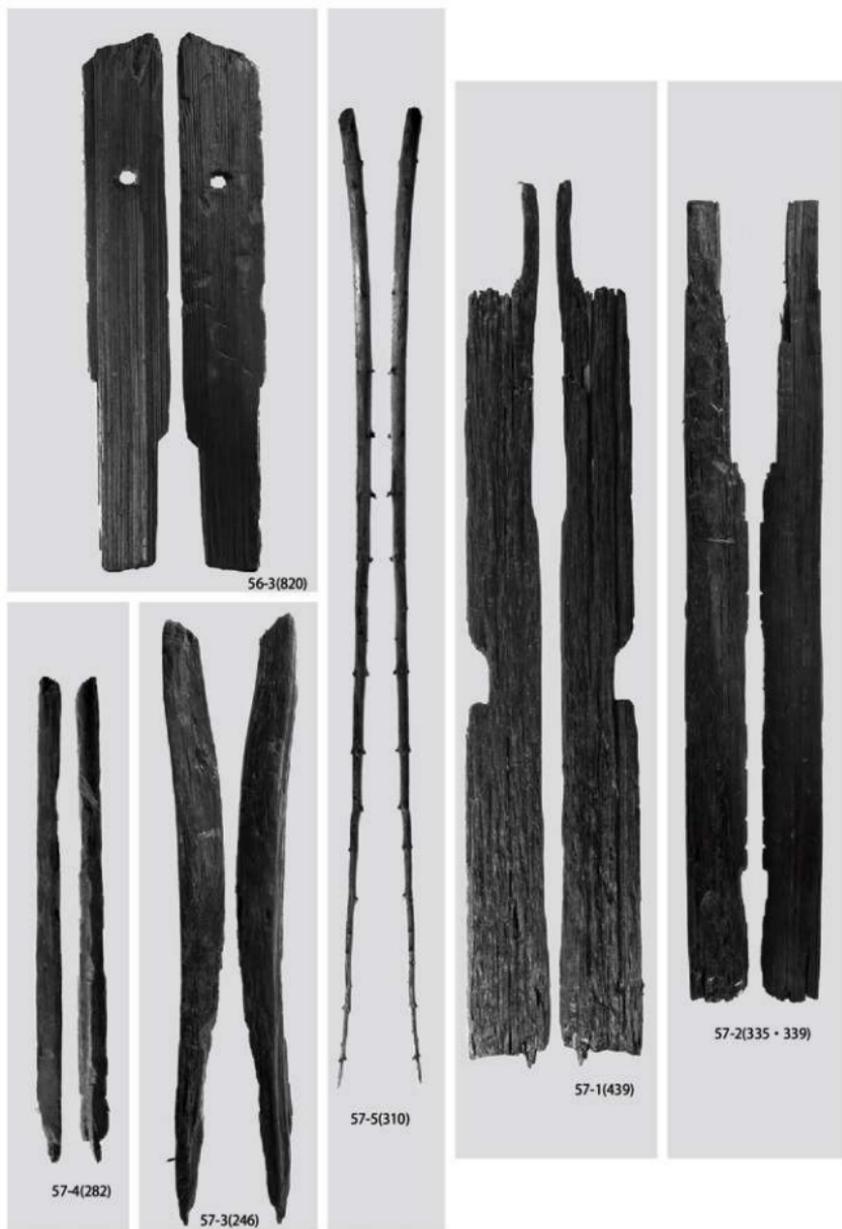
第 3 遺構面出土木製品 (3)



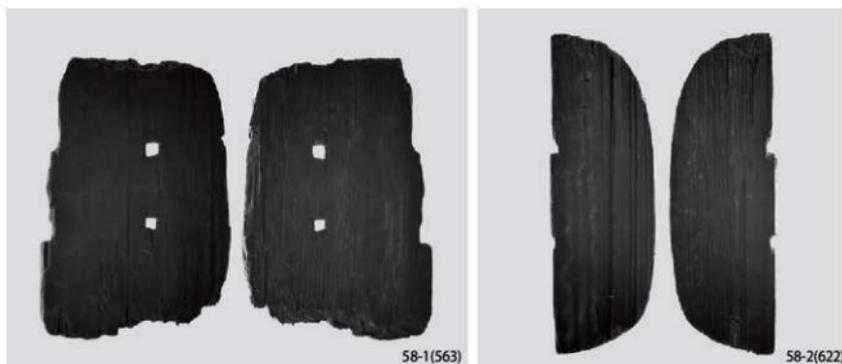
第 3 遺構面出土木製品 (4)



第 3 遺構面出土木製品 (5)



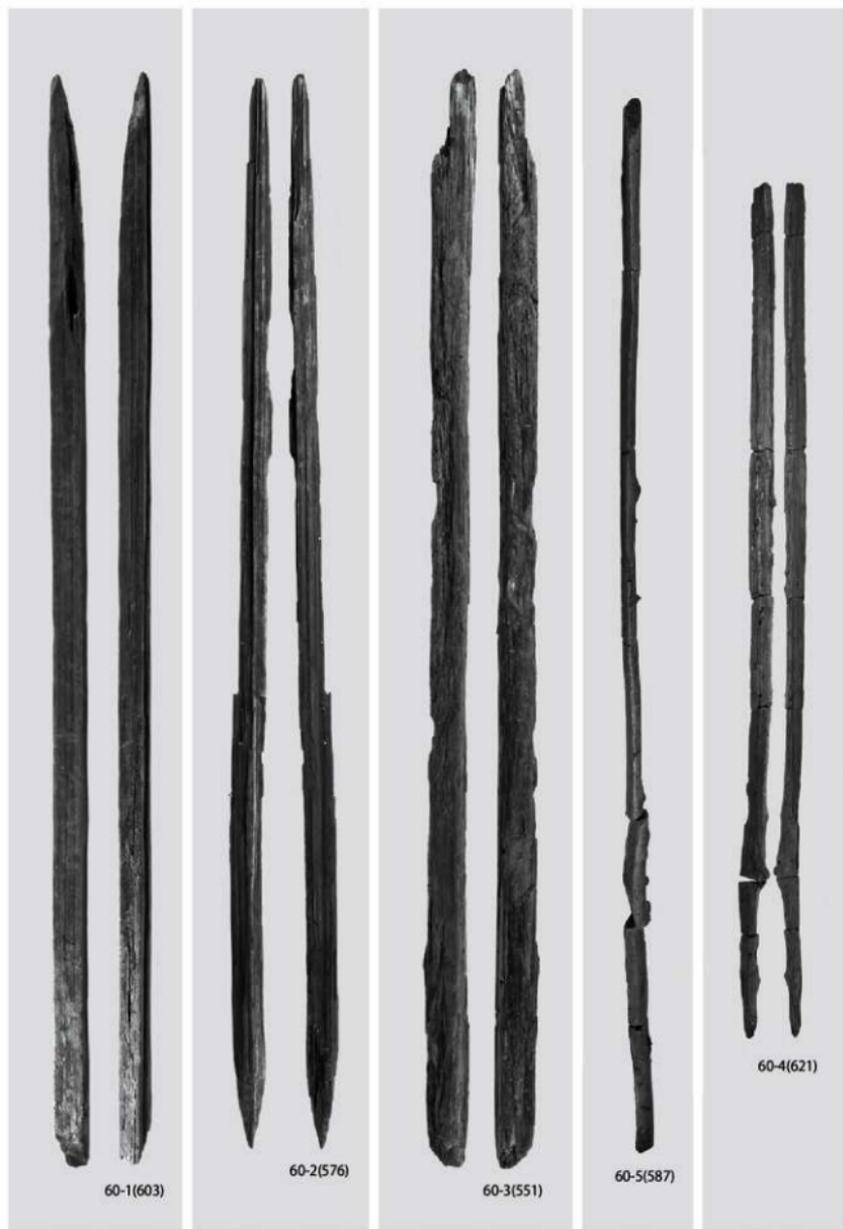
第 3 遺構面出土木製品 (6)



第 4 遺構面出土木製品 (1)



第 4 遺構面出土木製品 (2)



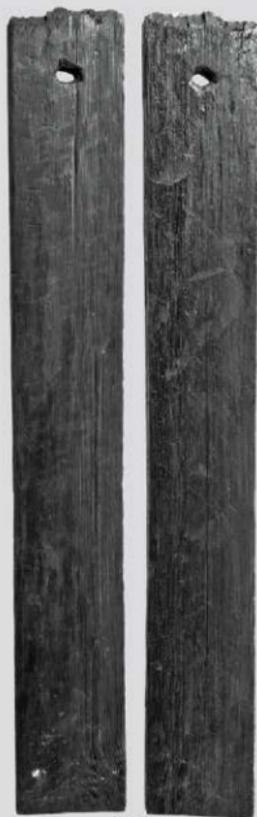
第 4 遺構面出土木製品 (3)



62-1(584)



62-2(574)



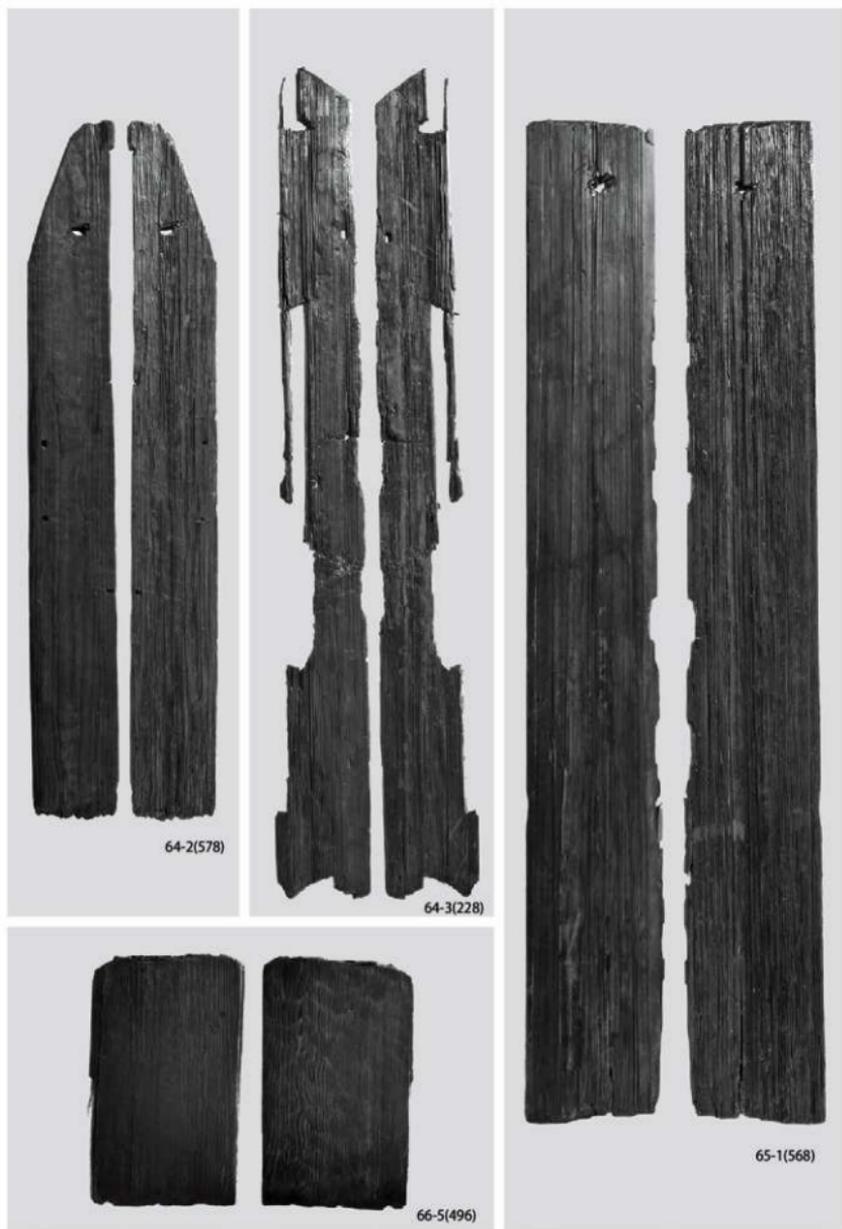
62-3(566)



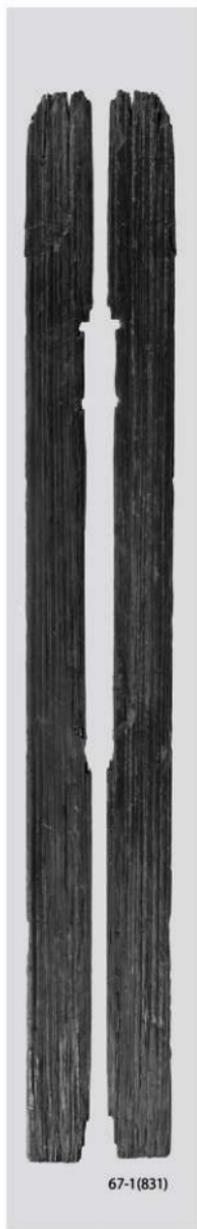
67-3(582)



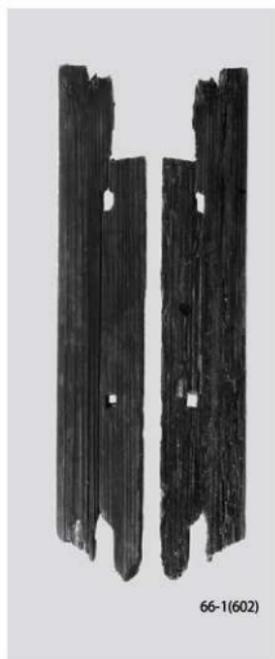
第 4 遺構面出土木製品 (5)

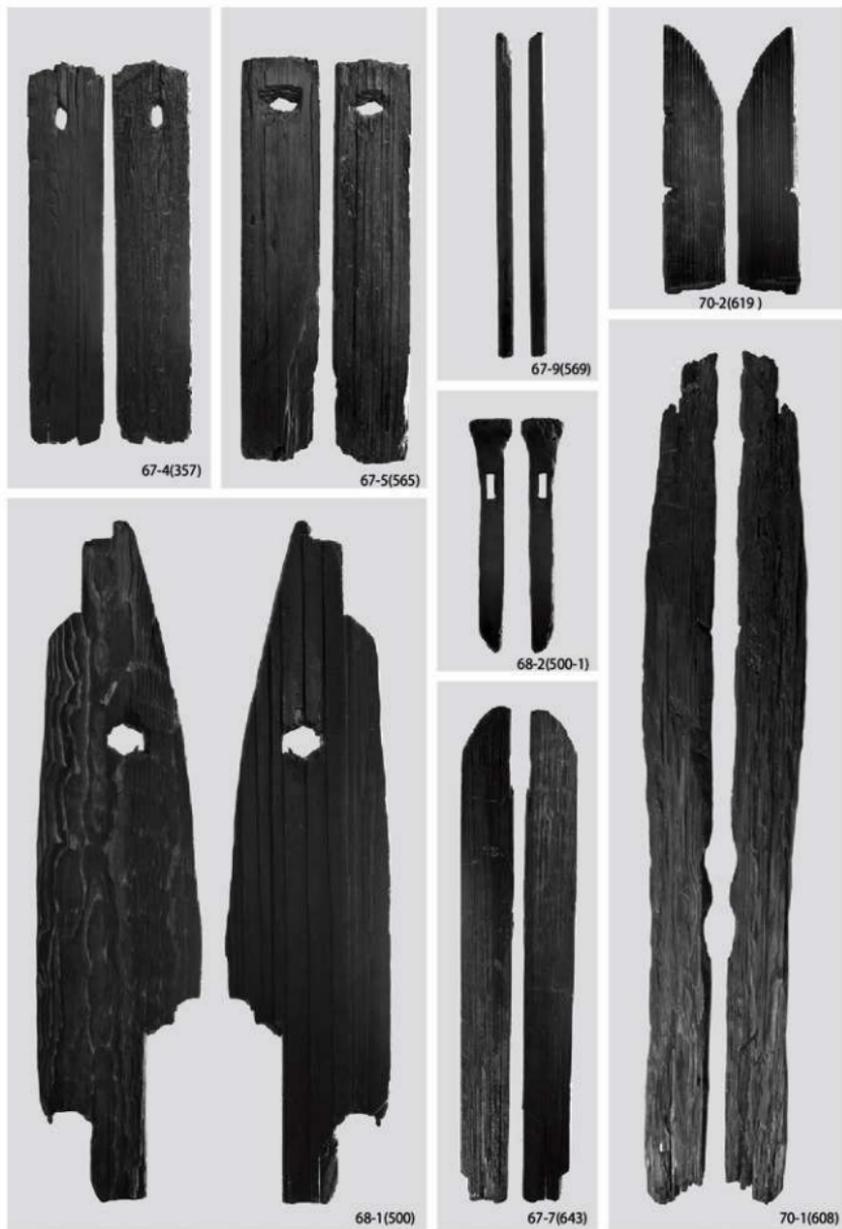


第 4 遺構面出土木製品 (6)

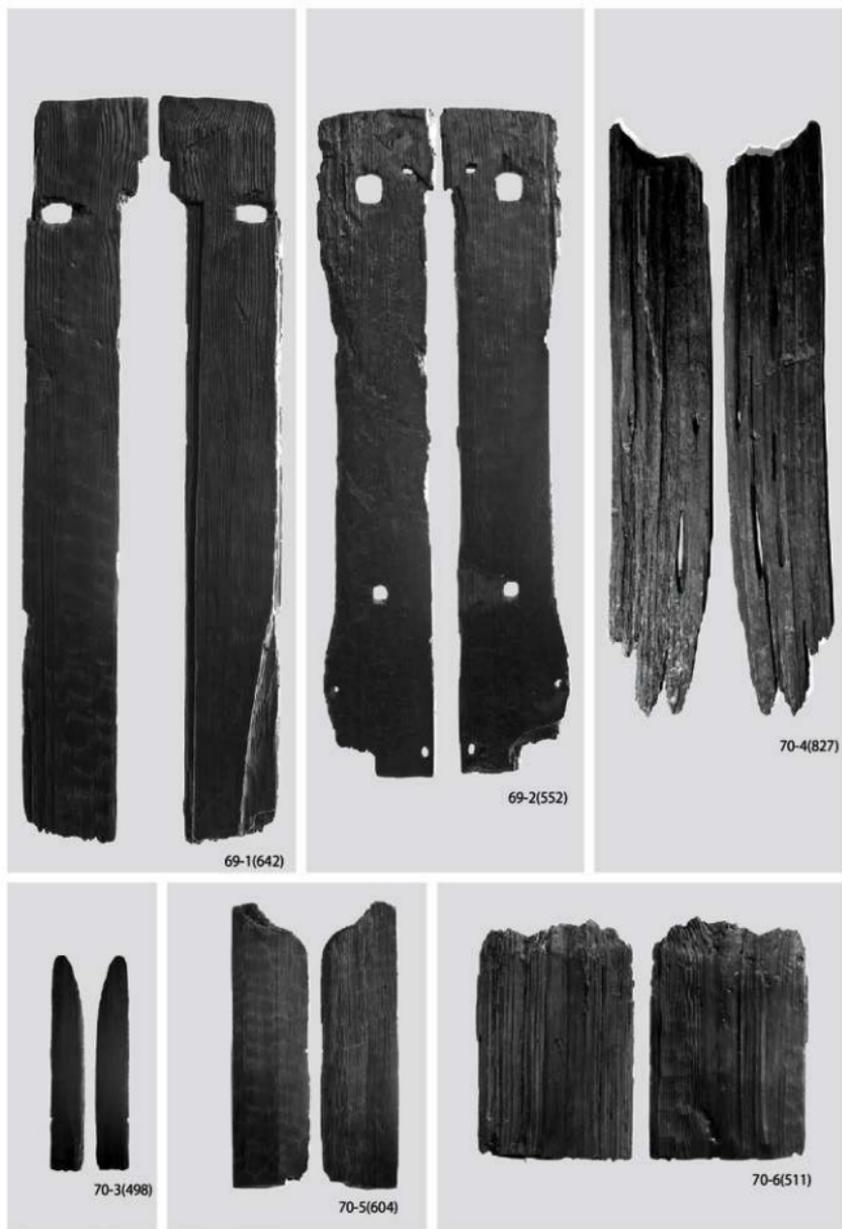


第 4 遺構面出土木製品 (7)

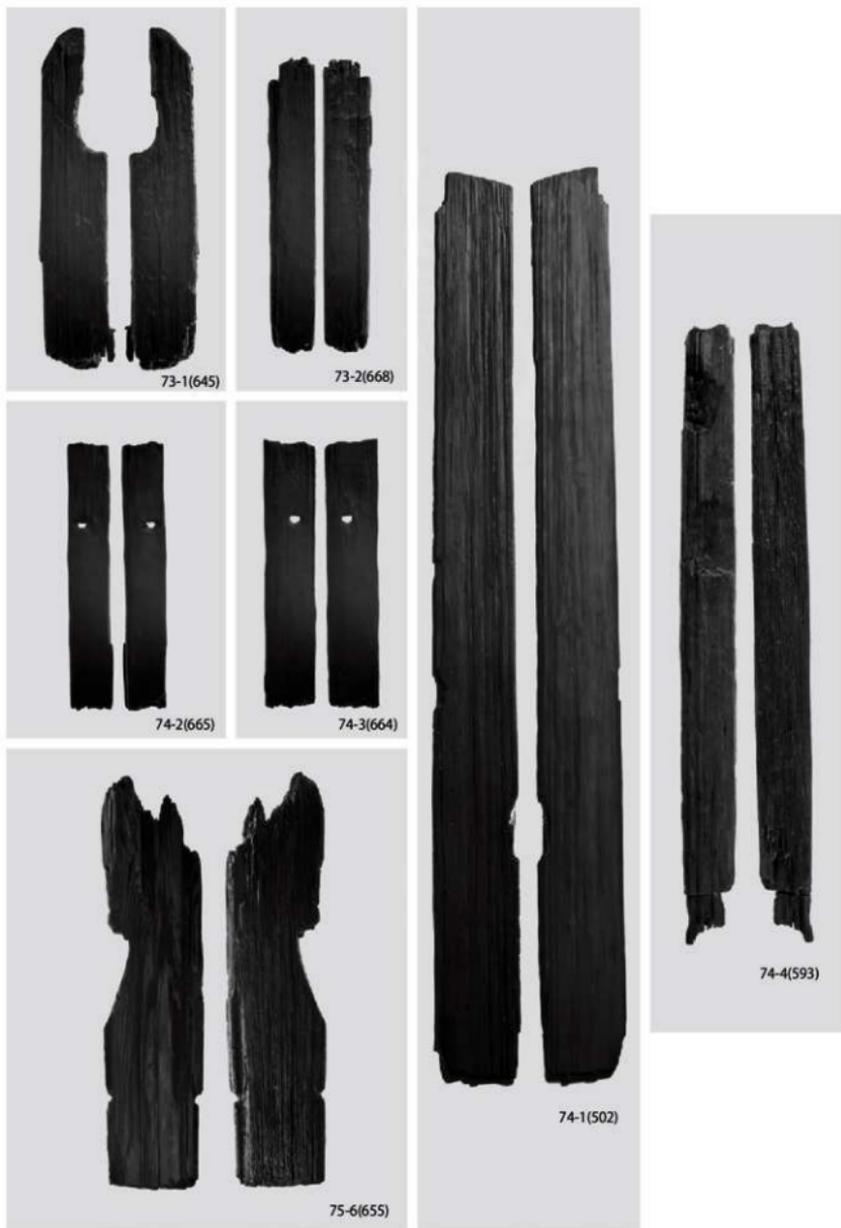




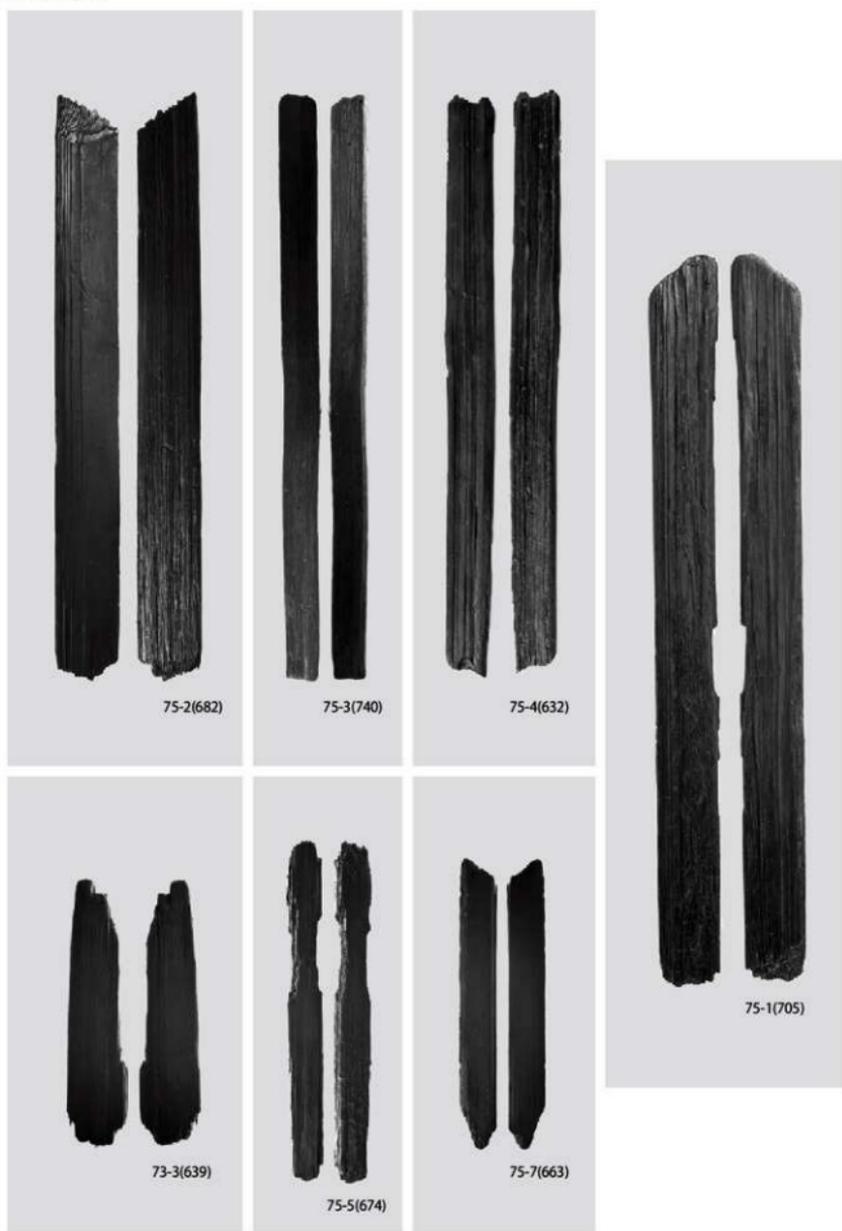
第 4 遺構面出土木製品 (9)



第 4 遺構面出土木製品 (10)



第 4 遺構面出土木製品 (11)



第 5 遺構面出土木製品 (1)



第 5 遺構面出土木製品 (2)

報告書抄録

フリガナ	エキグチコボ カミフルイチセイキ							
書名	碑口古墓 上古市道跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	3							
編著者名	久保田一郎、関野大丞、松山智弘、渡辺正巳、古野 毅							
編集機関	鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-0131 鳥根県松江市打出町 33 番地 TEL：0852-36-8608 FAX：0852-36-8025 E-mail：maibun@pref.shimane.lg.jp http：//www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/							
発行年月日	2020(令和2年)2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
えきぐちこぼ 碑口古墓	しまねけん 鳥根県 はまだし 浜田市 みすみちやう 三隅町	32202	098	34° 47' 11"	131° 57' 12"	20170801) 20170929	789	一般国道9号 (三隅益田道 路) 改築工事
かみふるい 上古市道跡	しまねけん 鳥根県 はまだし 浜田市 みすみちやう 三隅町	32202	096	34° 47' 07"	131° 57' 04"	20170508) 20170921	500	一般国道9号 (三隅益田道 路) 改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
碑口古墓	古墓	中世 近世	古墓 加工段	備前系陶磁器、在地系 陶磁器、一石五輪塔		陶磁器の年代は、18世紀～19 世紀が中心		
上古市道跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 中世	杭列 木桶状遺構	木製品		弥生時代から中世にわたる多様 な木製品が層位的に出土		
要約	<p>浜田市西部に所在する2遺跡の報告書である。</p> <p>碑口古墓では中世～近世の古墓を確認した。中世末期～近世前半にさかのぼる一石五輪塔が出土している。加工段の造成など居住域としての利用は近代以後とみられる。</p> <p>上古市道跡では弥生時代から中世にわたる木製品が層位的に出土した。中世の層では、杭列、木桶状遺構などが確認されている。出土木製品の器種は、弥生、古墳時代は部材が中心で、中世は農具が多い傾向がみられる。</p>							

印刷仕様

紙 質	表 紙	レザック四六判	175.0kg
	本 文	上質紙A判	57.5kg
	写 真 版	上質コート紙A判	70.5kg
D T P	Windows 10		
	Adobe InDesign CC	PhotoShop CS5・CC	
	Illustrator CS5・CC		
画像原稿	階調画像線数	175 線 (AM スクリーン)	

嶺口遺跡 上古市遺跡

一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書3

発 行 2020（令和2年）年2月

発行者 国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所

島根県教育委員会

編 集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒690-0131 島根県松江市打出町33番地

電話 0852-36-8608

印 刷 島根印刷株式会社